
独立行政法人 国立健康・栄養研究所

研究報告

第62号(平成25年度)

独立行政法人
国立健康・栄養研究所

序

ここに平成 25 年度（2013 年度）独立行政法人国立健康・栄養研究所研究報告書第 62 号として、当研究所の調査研究業務内容についてまとめましたのでお届けいたします。

当研究所は、大正 9 年（1920 年）9 月に内務省所管の栄養研究所（初代所長 佐伯矩）として創設され、昭和 13 年（1938 年）に厚生省所管の研究所となりました。昭和 23 年（1948 年）には「国立栄養研究所」として、現在の新宿区戸山に移設され、平成元年（1989 年）に、身体活動・運動に関する研究部門を加え、「国立健康・栄養研究所」となり、平成 13 年（2001 年）に独立行政法人化されました。これまで第 1 期中期計画、第 2 期中期計画を終え、平成 23 年度（2011 年度）より第 3 期中期計画に入っています。平成 25 年度（2013 年度）は、第 3 期中期計画の 3 年度目です。

第 3 期中期計画では、「生活習慣病予防のための運動と食事の併用効果に関する研究」、「日本人の食生活の多様化と健康への影響、及び食生活の改善施策に関する栄養疫学的研究」、「健康食品を対象とした食品成分の有効性評価及び健康影響評価に関する調査研究」、「研究所の研究能力を向上させるための基礎的・独創的・萌芽的研究」および「小児から高齢者までの生涯にわたるライフステージに応じた間断ない食育をより効果的に推進するための調査研究」を重点調査研究項目として位置づけ、調査研究業務を行っています。

身体活動・運動、食生活と栄養および食品をキーワードとして、一貫して国民の健康づくり、生活習慣病の予防、食の安全・安心、QOL の向上、生活の豊かさの確保に資する調査・研究を行い、国内外の学会、アカデミアならびに専門職へ情報を発信しています。また、厚生労働省をはじめ、内閣府、消費者庁など、国の公共政策をサポートする業務を実施しています。厚生労働省とともに「国民健康・栄養調査」を行い、食事・栄養摂取状況、身体活動・運動状況、生活習慣状況を調べ、その動向と推移を報告しています。「国民健康・栄養調査」は 60 年以上にわたりわが国の栄養の状況を記録した世界的に貴重な研究資産になっています。それは、日本人の食事摂取基準および運動基準・指針の策定に活かされ、学校、病院、各種施設の給食・調理の基準となり、食品添加物、農薬や放射性物質などの摂取量・曝露量の把握といった食品の安全性評価・リスク管理に活用され、「健康日本 21」及び「特定健康診査・特定保健指導」の根拠となり、国民の健康状態を計るものさしになっています。また、当研究所は健康食品の許可試験・収去試験を行い、国民および専門職に対して、食品の有効性と安全性に関する情報を発信しています。平成 26 年 3 月には栄養と身体活動の分野で WHO 協力センターの指定を受けました。

私どもの調査研究業務に対しては、常に自己点検・自己評価を行いつつ、外部評価委員会をはじめ、厚生労働省独立行政法人評価委員会、総務省政策評価・独立行政法人評価委員会などの評価と助言を受け、調査研究業務を遂行しているところでありますが、皆様には、本報告書をご高覧のうえ、ご意見、ご助言をいただければ幸いです。

今後とも一層のご支援とご指導を賜りますよう、お願い申し上げます。

平成 26 年（2014 年）3 月 31 日

独立行政法人 国立健康・栄養研究所
理事長 古野 純典

目次

I 研究所概要

1. 平成 25 年度研究・業務の概況	5
2. 評価委員会	6
3. 研究所主催・共催セミナー	6
4. 意見交換会	6
5. 研究倫理審査委員会	7
6. 栄養情報担当者（NR）の養成	8
7. 連携大学院	8
8. 他の研究機関等との連携	8
9. 主務大臣等の視察	8

II 研究・業務の進捗及び成果の概要

栄養疫学研究部

1. 研究部／研究室の概要	9
2. 年度計画	9
3. 進捗状況（成果）	10

健康増進研究部

1. 研究部／研究室の概要	11
2. 年度計画	12
3. 進捗状況（成果）	12

臨床栄養研究部

1. 研究部／研究室の概要	13
2. 年度計画	14
3. 進捗状況（成果）	14

栄養教育研究部

1. 研究部／研究室の概要	16
2. 年度計画	16
3. 進捗状況（成果）	16

基礎栄養研究部

1. 研究部／研究室の概要	18
2. 年度計画	18
3. 進捗状況（成果）	19

食品保健機能研究部

1. 研究部／研究室の概要	20
2. 年度計画	20
3. 進捗状況（成果）	21

情報センター

1. センター／研究室の概要	23
2. 年度計画	23
3. 進捗状況（成果）	24

国際産学連携センター

1. センター／研究室の概要	26
2. 年度計画	26

3. 進捗状況（成果）	27
III 研究成果等の公表	
1. 業績目録	
著書	29
原著論文	29
総説	35
解説等	36
研究報告書	38
国際学会等	40
国内学会等	43
2. 公的資金による研究	
厚生労働科学研究費補助金	51
文部科学研究費補助金	52
その他の公的研究費	53
3. 民間企業等の共同研究等	53
4. 研究所外での講義、講演等	53
5. 政府関係機関審議会、委員会等	60
6. 関連学術団体等への貢献	61
7. 併任、非常勤講師等	62
8. 国際貢献	62
9. 知的財産権等	63
IV 資 料	
1. 独立行政法人国立健康・栄養研究所中期目標	64
2. 独立行政法人国立健康・栄養研究所中期計画	67
3. 独立行政法人国立健康・栄養研究所年度計画	76
4. 予算	87
5. 所内研究セミナー	88
6. 食品分析リスト	90
7. 海外出張	91
8. 人事異動	95
9. 特別研究員	96
10. 名誉所員	97
11. 客員研究員	98
12. 協力研究員	103

I 研究所概要

1. 平成 25 年度研究・業務の概況

当研究所は、平成 13(2001)年度より独立行政法人となり、平成 25 年度は第 3 期中期計画(～平成 27 年度)の 3 年目に当たる。人々の栄養・食生活、運動と健康との関わりについて、基礎から応用に至るまでの調査及び研究を包括的かつ国際的な水準で行い得る試験研究機関として、「特にヒトを対象とした研究に関して、わが国の大学・研究機関の中心的存在として、総合的・統合的な研究を推進するとともに、研究者を育成する役割を果たす。厚生労働行政上の重要な健康・栄養施策を推進する上で不可欠な科学的根拠を質の高い研究によって示し、それらを専門的立場から要約して発信するとともに、健康科学・栄養学領域において、アジア地域への貢献を含め、国際的なリーダーシップを担う」(中期目標)ことが、当研究所に求められる役割である。

こうした目標を達成するために、国の生活習慣病対策等の施策としてより効果的な反映が見込まれる次の研究業務を重点的に行っている。

- ・生活習慣病予防のための運動と食事の併用効果に関する研究
- ・日本人の食生活の多様化と健康への影響、及び食生活の改善施策に関する栄養疫学的研究
- ・「健康食品」を対象とした食品成分の有効性評価及び健康影響評価に関する調査研究

その他にも、外部の競争的研究資金を獲得して、関連領域の基礎から応用、開発型の研究を行っている。また、今後の新たな研究展開につながるような萌芽的研究を若手研究者を中心に活発に行っている。(下表)

(表) 外部研究費の獲得状況 (単位: 千円)

		競争的研究費		受託研究費			計
		補助金	助成金	受託契約	共同契約	寄付金	
		(件数) 金額	(件数) 金額	(件数) 金額	(件数) 金額	(件数) 金額	
公的機関	主任	(32) 132,509		(4) 11,940	(-) -	(-) -	(36) 144,449
	分担	(24) 28,223					(24) 28,223
民間企業等	主任		(9) 9,240	(2) 6,210	(7) 11,835	(-) -	(18) 27,285
	分担						
計		(56) 160,732	(9) 9,240	(6) 18,150	(7) 11,835	(-) -	(78) 199,957

個々の研究内容及び研究成果の発表については、各研究部/センターからの報告及び、研究成果の発表を参照されたい。研究成果の公表実績の一部を下表にまとめた。

(表) 研究成果の公表実績

原著論文		学会発表(招待講演)		学会発表(一般演題)	
英文	和文	国際学会	国内学会	国際学会	国内学会
81	23	2	10	41	130

また、研究の成果を社会に還元し、国民の健康づく

りに役立てていただけるよう、情報センター(情報部門)及び国際産学連携センター(対外部門)、並びに事務部業務課が中心となって、ホームページ等を介した情報提供、NR(栄養情報担当者)事業、セミナー(一般及び専門家向け)、研究所の公開(オープンハウス)等を行った。NR事業としては、有資格者へのフォローアップ研修を行った。

なお、平成 22 年に厚生労働省が行った省内事業仕分けの結果を踏まえ、第三者機関への移管先を一般社団法人日本臨床栄養協会に決定し、移管先と協議を行い、平成 27 年 7 月までに移管を終えることを合意し、平成 24 年 4 月より、順次 NR からの移籍手続を開始している。

若手研究者の育成という観点からは、お茶の水女子大学、東京農業大学、女子栄養大学、早稲田大学等との連携大学院や、全国の管理栄養士を養成する大学・大学院での特別講義等を通じて、ネットワーク型の人材育成を着実に進めてきた。

国際協力においてはアジア太平洋諸国との間で栄養調査、栄養改善及び健康づくり等に関する共同研究の中心的な役割を果たすよう取り組んでいる。まず WHO の GEMS/Food プログラム協力機関として食品安全に関連する食品摂取量の集計データを提出した。また、申請中であった WHO 協力センターの審査が完了し、平成 26 年 3 月に「栄養と身体活動に関する WHO 協力センター(WHO Collaborating Centre for Nutrition and Physical Activity)」として正式に承認された。「若手外国人研究者招へい事業」では、マレーシアとベトナムの研究者を受け入れるとともに、フォローアップ共同研究事業として平成 23 年度に受け入れたマレーシアの研究者と共同研究を実施した。JICA の地域別研修では、「アジア・太平洋地域問題解決型の保健専門職人材育成(平成 23 年度より)」および「アフリカ地域 女性指導者のための健康と栄養改善(平成 17 年度より)」において国際栄養の専門家として講師対応を行っている。外来特別セミナーを 2 回開催し、台湾よりアジア太平洋地域の臨床栄養、米国より機能性食品の専門家を招いて意見交換を行った。さらに、平成 26 年 3 月には第 6 回アジア栄養ネットワークシンポジウムを開催し、WHO 西太平洋事務局およびマレーシア、ベトナム、中国、日本における健康的な食生活を目指した社会環境整備に向けた取り組みについて議論を深めた。本シンポジウムと連動して、日本学術会議 IUNS 分科会、日本栄養・食糧学会、日本栄養改善学会との共催による「IUNS(国際栄養科学連合)栄養学リーダーシップ育成国際ワークショップ」を開催した。

2. 評価委員会

(1) 外部評価委員会

下記の 9 名の委員で構成される国立健康・栄養研究所外部評価委員会については、平成 26 年 3 月 7 日(金)に平成 25 年度業務実績事後評価及び平成 26 年度計画事前評価を行った。

【委員】

- 五十嵐脩 (神奈川県工科大学教授) (委員長)
 伊藤 裕 (慶應義塾大学医学部教授)
 逢坂哲彌 (早稲田大学理工学術院 ナノ理工学研究機構長)
 加藤則子 (国立保健医療科学院統括研究官)
 川島由起子 (聖マリアンナ医科大学病院栄養部長)
 下光輝一 (公益財団法人健康・体力づくり事業財団 理事長)
 大谷敏郎 ((独)農業・食品産業技術総合研究機構 食品総合研究所長)
 豊田正武 (国立医薬品食品衛生研究所 名誉所員)
 三保谷智子 (女子栄養大学出版部香川昇三・綾記念展示室)

(2) 内部評価委員会

下記により構成される国立健康・栄養研究所内部研究業務評価委員会については、平成 25 年 11 月 22 日(金)に研究部/センター中間報告会を、平成 26 年 3 月 7 日(金)には平成 25 年度事後評価を行った。

【委員】

- 丸山 浩 (理事)
 岡山 明 (監事)
 石見佳子 (研究企画評価主幹)
 瀧本秀美 (栄養疫学研究部長)
 宮地元彦 (健康増進研究部長)
 窪田直人 (臨床栄養研究部長)
 田中茂徳 (基礎栄養研究部長)
 石見佳子 (食品保健機能研究部長)
 梅垣敬三 (情報センター長)
 西 信雄 (国際産学連携センター長)
 藤村陽一 (事務部長)

3. 研究所主催・共催セミナー

(1) 第 15 回一般公開セミナー

主 題: 健康と栄養をとりまく最新の話
 日 時: 平成 26 年 2 月 15 日(土)
 場 所: よみうりホール(東京都千代田区)
 主 催: 独立行政法人国立健康・栄養研究所
 後 援: 厚生労働省/文部科学省/消費者庁/東京都/千代田区/国立保健医療科学院/独立行政法人国立国際医療研究センター/独立行政法人国民生活センター/公益社団法人日本医師会/公益社団法人日本フィットネス協会/公益社団法人日本栄養士会/公益財団法人健康・体力づくり事業財団/特定非営利活動法人日本健康運動指導士会

賛助企業: アサヒ飲料株式会社/味の素ゼネラルフーズ株式会社/株式会社伊藤園/株式会社イトーキ/オムロンヘルスケア株式会社/花王株式会社/キッコーマン株式会社/協和発酵バイオ株式会社/キリン株式会社/サントリーウエルネス株式会社/株式会社 J-オイルミルズ/一般社団法人全日本コーヒー協会/第一出版株式会社/一般社団法人日本植物油協会/日本豆乳協会/ネスレ日本株式会社/不二製油株式会社/フジッコ株式会社/株式会社明治/株式会社ヤクルト本社/株式会社リコム/株式会社ルネサンス

プログラム:

- 研究所の活動報告(石見佳子)
 (基調講演) 食が支える腸の健康
 (東京大学大学院特任教授 清水誠)
 (講演 1) 健康づくりのための身体活動基準 2013 とアクティブガイド
 (宮地元彦)
 (講演 2) 新しい栄養表示制度とその活用!
 (山内淳)
 (講演 3) 国民健康・栄養調査の意義について
 (瀧本秀美)

コーディネーター: 瀧本秀美

4. 意見交換会

【関係団体】

- (1) 公益財団法人健康・体力づくり事業財団
 日時: 平成 25 年 8 月 7 日(水)
 議題: 健康づくりのための身体活動基準 2013・身体活動基準(アクティブガイド)の普及と啓発について
 健康日本 2 1 (第二次)、特定保健指導等の厚生労働省の施策における協力について
 各種共同事業について
- (2) 国立保健医療科学院国際協力研究部
 日時: 平成 25 年 10 月 3 日(木)
 議題: 国立保健医療科学院と WHO 西太平洋事務局が主催する非感染性疾患対策に関するワークショップ(平成 25 年 12 月開催予定)への協力について
- (3) 独立行政法人国民生活センター
 日時: 平成 25 年 11 月 12 日(火)
 議題: 国民生活センターにおける健康食品関連の業務等について
 国立健康・栄養研究所における健康食品関連の業務等について

(4) 独立行政法人医薬基盤研究所

日時：平成 25 年 11 月 14 日（木）

議題：平成 25 年度の国立健康・栄養研究所の動向について

平成 25 年度の医薬基盤研究所の動向について

(5) 独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構食品総合研究所

日時：平成 25 年 12 月 4 日（水）

議題：平成 25 年度の国立健康・栄養研究所の動向について

平成 25 年度の食品総合研究所の動向について

(6) 公益社団法人日本栄養士会

日時：平成 25 年 12 月 13 日（金）

議題：アクティブガイド 2013 について
健康食品に関する情報提供について
栄養指導のエビデンスについて
日本栄養士会の生涯教育制度の見直しについて
一般公開セミナーの生涯学習認定に関して

【行政機関】

(1) 消費者庁食品表示課

議題：来年度の業務協力の内容について
消費者庁事業の結果と今後について
栄養表示の分析精度管理について
栄養表示基準に係る栄養成分の分析法の改訂について
特別用途食品の情報提供について

(2) 内閣府食育推進室

議題：政府の食育施策推進方針について
食育推進全国大会について

(3) 厚生労働省医薬食品局食品安全部

議題：健康食品の安全性確保について

(4) 厚生労働省健康局がん対策・健康増進課

議題：平成 24 年国民健康・栄養調査の集計について
平成 25 年国民健康・栄養調査の実施について

(5) 厚生労働省大臣官房国際課国際協力室

議題：WHO 指定研究協力センター指定後の行動計画について

5. 研究倫理審査委員会

研究倫理審査委員会の各部会において、以下の課題について、研究計画の倫理的妥当性等を審査した。

(1) 実験動物研究審査委員会

- ・食品中の栄養素等の生理機能の評価並びに表示との関係に関する基礎的調査研究
- ・疾病モデル動物における植物性エストロゲンの有効性・安全性評価
- ・閉経期女性の骨の健康に対する日本とニュージーランドの機能性食品の併用効果
- ・健康食品素材に関する有効性と安全性の検討
- ・特定栄養素欠乏による脳血管障害への影響およびそのメカニズムの解明
- ・視床下部腹内側核破壊動物の肥満病態に関する研究
- ・熱産生における脳および消化管ペプチドの役割
- ・睡眠とエネルギー代謝調節の脳機構の研究
- ・血管内皮細胞と膵β細胞における IRS-2 の役割について
- ・肝臓、視床下部とマクロファージにおけるインスリン受容体基質(Irs)の役割について
- ・肝臓における脂質代謝・合成の制御による生活習慣病予防法の開発
- ・抗酸化物質大量摂取時の安全性評価：運動の有用作用に及ぼす影響

(2) 研究倫理審査委員会

- ・現在の健康状態に及ぼす出生時体重と出生後の生活習慣の影響
- ・特定保健用食品の利用に関する調査
- ・体力および身体活動と生活習慣病罹患に関する観察研究
- ・ヒト褐色脂肪の機能とエネルギー代謝の日内・季節変動に関する研究
- ・陸上長距離選手の通常トレーニング期における活動記録法および加速度計法を用いて評価した総エネルギー消費量の妥当性の検討
- ・大学生アスリートへの栄養・食教育のための食行動、セルフエフィカシーの評価指標の検討
- ・アクティブビデオゲームが健康および肥満の中学生の内分泌ホルモンに及ぼす影響
- ・現在の健康状態と出生時の体重に関する研究
- ・スマートフォンアプリを用いた食生活介入研究
- ・1 食毎に異なる栄養素組成が基質利用および食欲に及ぼす影響
- ・通所系介護サービスにおける口腔機能向上及び栄養改善サービスの効果
- ・閉経期女性における骨代謝回転、ホルモンレベル、血中脂質と糞便中腸内細菌叢に対するグリーンキウイフルーツと大豆イソフラボンの併用効果
- ・スタンディングワークの健康増進効果に関する介入研究
- ・介護予防通所リハビリテーションにおける口腔機能向上及び栄養改善サービス提供のあり方
- ・2 型糖尿病患者を対象としたアクティブビデオゲームによる介入が血糖コントロールや日常身体活動レ

ベルに及ぼす影響

- ・不活動を活動的に促進させるための新たなスクリーン基盤テクノロジー（アクティブビデオゲーム・スマートフォンアプリ）を用いた介入研究
- ・「健康づくりのための身体活動基準 2013」における身体活動量と体力の基準値と生活習慣病罹患・生命予後との関係：日本人労働者を対象にしたコホート研究
- ・国民健康・栄養調査における歩数調査手法に関する研究
- ・閉経後における肥満・サルコペニア予防のための運動がエネルギー基質選択に与える影響
- ・各種年代・活動レベルの対象における身体活動量の把握及び簡易な身体活動量調査方法の評価に関する研究
- ・運動機能障害児におけるエネルギー必要量の算出方法に関する研究
- ・死亡小票を利用した「静岡県における高齢者の生活実態調査」対象者の追跡
- ・2 型糖尿病患者におけるエネルギー必要量、基礎代謝量、身体活動量、基質酸化適応能に関する研究
- ・食事摂取基準の活用に向けた有疾患小児および健康児におけるエネルギー必要量の評価
- ・身体活動識別および強度推定のためのアルゴリズムを用いた新たな活動量計の開発、および既存の活動量計による身体活動強度推定の妥当性
- ・九州大学福岡コホート研究における栄養と生活習慣病に関する研究

【研究倫理審査委員会委員名簿】

伊藤洋志	(田賀法律事務所 弁護士)
稲葉 裕	(実践女子大学教授：委員長)
大前和幸	(慶應義塾大学教授)
後藤田貴也	(東京大学医学部付属病院准教授)
辻 誠治	(日本女子大学附属豊明小学校教諭)
窪田直人	(臨床栄養研究部長)
佐藤陽子	(情報センター 研究員)
丸山 浩	(理事：副委員長)
高田和子	(栄養教育研究部栄養ケア・マネジメント研究室長)
瀧本秀美	(栄養疫学研究部長)
東泉裕子	(食品保健機能研究部 研究員)
田中茂徳	(基礎栄養研究部長)
石見佳子	(研究企画評価主幹)
西 信雄	(国際産学連携センター長)
澤田 亨	(健康増進研究部 身体活動評価研究室長)

【実験動物研究審査委員会委員名簿】

窪田直人	(臨床栄養研究部長：委員長)
大坂寿雅	(基礎栄養研究部上級研究員)
竹林 純	(食品保健機能研究部 研究員)
山崎聖美	(基礎栄養研究部 主要栄養素研究室長)

6. 栄養情報担当者(NR)の研修

- アドバイザリースタッフ研修会の開催
- 東京会場：平成 25 年 10 月 6 日(日)
 - 大阪会場：平成 25 年 10 月 26 日(土)
 - 岡山会場：平成 25 年 11 月 2 日(土)
 - 名古屋会場：平成 25 年 11 月 10 日(日)
 - 仙台会場：平成 25 年 11 月 24 日(日)
 - 福岡会場：平成 25 年 12 月 1 日(日)

7. 連携大学院

- (1) 国立大学法人お茶の水女子大学
- (2) 東京農業大学大学院
- (3) 女子栄養大学大学院
- (4) 早稲田大学スポーツ科学学術院
- (5) 名古屋市立大学大学院
- (6) 福岡女子大学
- (7) 東京農工大学
- (8) 聖徳大学
- (9) 静岡県公立大学法人静岡県立大学
- (10) 国立大学法人岐阜大学

8. 他の研究機関等との連携

- (1) 国民生活センター
- (2) 宇宙航空研究開発機構 (JAXA)
- (3) 国立医薬品食品衛生研究所
- (4) 国立極地研究所
- (5) 国立保健医療科学院
- (6) 独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構食品総合研究所

9. 主務大臣等の視察

- (1) 平成 25 年 8 月 13 日
厚生労働省 秋葉賢也 副大臣
- (2) 平成 26 年 1 月 20 日
厚生労働省 赤坂清美 大臣政務官

II 研究・業務の進捗及び成果の概要

栄養疫学研究部

1. 研究部／研究室の概要

(1) 研究部の概要

栄養疫学に関する基礎ならびに応用研究を行い、日本人の食生活の多様化と健康への影響を明らかにするとともに、わが国の公衆栄養行政に不可欠な科学的根拠を提供する。具体的には、国民健康・栄養調査の集計業務を担当するとともに、結果の質の向上をめざした環境整備や基礎研究を行う。また、食事摂取基準の改定において必要とされる学術的資料を作成するとともに、そのための基礎研究を行う。

(2) 研究室の概要

a. 国民健康・栄養調査研究室

- ・当研究所の法定業務である国民健康・栄養調査の集計業務を担当する。
- ・国民健康・栄養調査等における調査精度の向上や技術的・学術的なレベルアップに寄与する調査・研究等を実施する。
- ・都道府県、政令市、中核市、特別区等に勤務する行政栄養士を中心に関連する事柄を中心に研修や情報提供等の支援業務を行う。

b. 食事摂取基準研究室

- ・5年ごとに改定されている「日本人の食事摂取基準」の策定に必要な栄養学的知見を系統的、かつ、網羅的に収集、蓄積、解読し、策定の効率化と質の向上の一助とする。
- ・日本人の食事摂取基準の策定に資する基礎資料を得るための、ヒトを対象とした栄養疫学研究を実施する。

(3) 構成メンバー

研究部長：

瀧本秀美（栄養教育研究部長併任）

研究室長：

奥田奈賀子（国民健康・栄養調査）

笠岡（坪山）宣代（食事摂取基準）

研究員：

坪田（宇津木）恵（国際産学連携センター併任）

中出麻紀子

今井絵理（1月～）

特別研究員：

今井絵理（～12月）

吉澤剛士

客員研究員：

徳留信寛

佐々木敏（東京大学）

矢島哲也（2月～）

協力研究員：

細川裕子（目白大学）

菊池有利子（ミネソタ大学）

技術補助員：

中山真樹（～10月）、大和田美佳（～11月）、堀江早喜（～1月）、小川綾子、高瀬晶子、横田真理子、斉藤由紀子、坂本陽子、近藤明子、瀧沢あす香、吉田和枝、河村由香

研修生：

江田有沙（8月～）、原田萌香（8月～）、平野美由紀（8月～）、廣野りえ（5月～）、前澤友美、米山ひかる

2. 年度計画

a. 国民健康・栄養調査研究室

- ・【国民健康・栄養調査の機能強化及びデータ活用に関する検討】
血圧測定方法の検討、過去データの解析により世帯按分法による栄養調査の特徴について検討する。
- ・【健康・栄養調査の効率的実施】
国民健康・栄養調査の集計業務については、引き続き、正確かつ効率的な集計を通して、結果発表までの期間の迅速化を図る。また、データ収集に携わる行政の担当者等に対して、技術講習、情報提供、研修教材等の提供、標準的な調査ツールの提供などを通じて、積極的な技術支援を行う。さらに、健康・栄養調査の効率化を目指した専用ソフト（名称：食事しらべ）をアップデートして自治体へ配布し、調査の全体の効率化も目指す。

b. 食事摂取基準研究室

- ・【食事摂取基準のエビデンスに基づいた改定とさらなる活用を目指した研究の実施】
・策定に不足している日本人のエビデンスを重点的に補足するため、エビデンスが不足している対象集団および栄養素について、国民健康・栄養調査データ等を用いて、栄養素等摂取量と生体指標の関連について検討する。
・災害時等の特殊環境における食事摂取状況についても検討する。食事摂取基準を活用する際に障害となっている事項を整理・分類し、これらを取り除くための方策について調査研究を実施する。
- ・【日本人の食事摂取基準2015年版策定に向けた業務】
平成25年度は、5年に1度の食事摂取基準の改定のため、作業ワーキングのエビデンス強化をサポートし、合理的かつ科学的信頼性の高いレビュー実施に向け、レビューの標準化システムの構築、エビデンスデータベースの更新作業を行う。

3. 進捗状況 (成果)

a. 国民健康・栄養調査研究室

●【国民健康・栄養調査の機能強化及びデータ活用に関する検討】

- ・国民健康・栄養調査結果を用いて、若年層で総エネルギー摂取量の減少傾向が血液検査実施率の低下傾向と相関があることを示した。また、年次推移の検討が困難となっていた穀類（米・米加工品、小麦加工品）について摂取量の年次推移を示した。総エネルギー摂取量および三大栄養素摂取量を用いてアルコール摂取量を性・年齢階級別に推定計算した。腹囲の値が自己申告かどうかで BMI、腹囲に差がみられることを示し、また国民健康・栄養調査で現在使われている水銀血圧計から自動血圧計に移行した場合に考慮すべき事項を文献等により整理した。
- ・厚生労働省からの依頼により、食事摂取基準研究室と協力し、食事摂取基準値策定の根拠となる日本人の参照体位（身長および体重）を決定するため、国民健康・栄養調査の複数年プールデータを用いて種々のパターンでの基準体位（案）を算出した。また、同様に、目安量（AI）および目標量（DG）策定の根拠を決定するため、エネルギーおよび各栄養素の摂取量についても、国民健康・栄養調査の複数年プールデータを用いて種々のパターンでの摂取量根拠（案）を算出した。今後、これらの資料をもとに基準値の策定が行われる予定であるため、年度末までに根拠の系統的な整理を進める。

●【健康・栄養調査の効率的実施】

- ・H24 年国民健康・栄養調査（拡大調査）の集計を実施し、12 月 19 日の概要発表に必要な集計・解析をすべて実施した。また、H24 年報告書作成に必要な集計表（計 96 表）の提出も完了した。
- ・H25 年度調査の準備のために 9 月に計三回、総勢 157 名の調査担当者（行政栄養士）を対象に「健康・栄養調査技術セミナー」を実施した。セミナーで使用した資料は、研究室の HP（健康・栄養調査情報のページ）を通じ調査担当者への情報提供を行った。
- ・食物摂取状況調査結果入力用専用ソフト「食事しらべ」を 2013 年版にアップデートし、入力エラーを減らすための改良を行った。「食事しらべ」に関する技術的な情報交換の場として専用メーリングリストを開設し、これを運用した。

b. 食事摂取基準研究室

●【食事摂取基準のエビデンスに基づいた改定とさらなる活用を目指した研究の実施】

- ・日本人の食事摂取基準改定に資する研究として、1) n-6 系脂肪酸および炭水化物の目標量については、2015 年版で策定根拠を明示する（再レビュー）必要があること、2) 目安量（AI）策定に使われている現行方法（国民健康・栄養調査の 2 年間プールデータを用いた中央値）が妥当であること、3) 日本人のヨウ素摂取量は耐容上限量を超えている者が一定割合で存在する事を明らかにした。全ての研究は、室員が筆頭著者の

英文論文として公表した。

- ・国民健康・栄養調査の直近データ（2010-2011）については、厚生労働省からの特別集計として解析し、日本人の参照体位（身長および体重）および目安量、目標とする BMI 等策定の根拠となった。
- ・日本人で不足している高齢者のエビデンスを創出するため、国民健康・栄養調査プールデータを用いた再解析を実施し、高齢者においては、男女ともに加齢に伴いエネルギーおよびたんぱく質等の栄養素の摂取量が減少すること、貧血の頻度は加齢とともに増加し、男性では魚介類・肉類の高摂取、女性では肉類の高摂取は貧血のリスクを低下させることと関連があることを明らかにした。
- ・食事摂取基準の活用例として、東日本大震災後に発出した「避難所における栄養参照量」の認知率、活用率について被災 3 県の栄養士会会員を対象に調査した。避難所支援を行った者では約 6 割活用していた。

●【日本人の食事摂取基準 2015 年版策定に向けた業務】

- ・合理的かつ科学的信頼性の高いレビュー実施に向け、諸外国のレビューシステムを調査し、1) 策定を標準化するためのレビューシステム素案、2) エビデンスフォーム素案等を作成し、策定関連会議に提出した。
- ・過去に引用されたエビデンスのデータベース（食事摂取基準文献情報データベース）を改良し、2015 年版の策定をエビデンス部分で支えた。

●【日本人の食事摂取基準の普及啓発・活用促進業務】

- ・世界へ向けた「日本人の食事摂取基準」（2010 年版）の発信を目的として、英語完全版（研究事務局として企画・編集を担当し JNSV 誌にて公表）を HP にて公開した（5 月）。

健康増進研究部

1. 研究部／研究室の概要

(1) 研究部概要

健康増進研究部は、(独)国立健康・栄養研究所第三期中期計画に示された、生活習慣病予防のための運動と食事の併用効果に関する研究を行う。

これは、運動・身体活動や適切な食事による生活習慣病等の一次予防、身体活動や食事といった環境因子と遺伝的因子の相互作用の解明、並びに運動と食事とによるテーラーメイド予防法に関して、ヒトや集団を対象とした調査・実験を行うものである。

特に、a. 運動基準・指針の改定あるいは国民健康・栄養調査の問診票や実施・分析方法の改善のための科学的根拠を提示する、b. 遺伝因子と各栄養素摂取量、身体活動量等の環境因子との関係を明らかにし、生活習慣病等の発症に対する、遺伝と環境の相互作用を解明することを目的とする。

(2) 研究室の概要

a. 運動ガイドライン研究室

厚生労働省の「健康づくりのための運動基準 2006」や「健康づくりのための運動指針 (エクササイズガイド) 2006」の策定・改定及びその普及・啓発に資する研究・調査並びに、それらを活用した生活習慣病予防の方策に関する以下の研究・調査を実施する。

- ・「健康づくりのための運動基準ならびに運動指針」作成・改定のための文献収集並びに検討 (システムティックレビュー) とそれらから抽出したデータの統計分析 (メタ解析) を行う。この作業を通じて、基準値の改定や提案に必要なエビデンスを提供する。
- ・「健康づくりのための運動基準 2006」に示された生活習慣病予防のために必要な身体活動量・運動量・体力の基準の妥当性を検討するための大規模無作為割付介入研究を行う。
- ・身体活動量の多寡に関連する遺伝要因の解明と、環境要因との相互作用について検討する。
- ・肉体疲労あるいは精神疲労を、早期発見あるいは回復経過を明らかに出来るようにし、適切な「休養」を取る事で「運動」による継続的な健康増進が可能となるような研究を行う。

b. 身体活動評価研究室

身体活動量ならびに体力の評価法の開発と、それらを活用した身体活動疫学研究を実施することを目的に以下の研究・調査を実施する。

- ・国民健康・栄養調査での身体活動・運動調査や健康づくりのための運動基準や運動指針の策定に必要な、さまざまな身体活動量の評価法の開発・検討を行う。
- ・正確かつ簡便な身体活動の定量法ならびに体力測定法の確立のための研究を行う。
- ・生活習慣病やがん発症と身体活動・運動習慣との関連を明らかにするコホート研究を地域や職域で実施し、国

民の健康増進に寄与するエビデンスを構築する。

(3) 構成メンバー

研究部長：

宮地元彦

研究室長：

宮地元彦 (運動ガイドライン研究室長併任)

澤田亨 (身体活動評価研究室)

上級研究員：

山田晃一

研究員：

村上晴香

流動研究員：

Julien Tripette (日本学術振興会外国人特別研究員)

鎌田真光 (日本学術振興会海外特別研究員)

川上諒子 (日本学術振興会特別研究員)

客員研究員：

田畑泉 (立命館大学)

大森豊緑 (名古屋市立大学)

吉武裕 (鹿屋体育大学)

真田樹義 (立命館大学)

家光素行 (立命館大学)

山元健太 (南テキサス大学)

福典之 (東京都健康長寿医療センター研究所)

森田明美 (甲子園大学)

熊江隆 (帝京平成大学)

塚本浩二 (東京ガス株式会社)

岡本隆史 (東京ガス株式会社)

中田由夫 (筑波大学)

岡浩一朗 (早稲田大学)

井上茂 (東京医科大学)

安藤大輔 (防衛省 防衛大学校)

加藤公則 (新潟県労働衛生医学協会)

田村好史 (順天堂大学)

山本直史 (愛媛大学)

協力研究員：

安田剛 ((株) ティップネス)

河野寛 (国士舘大学)

片山利恵 (NPO 法人健康早稲田の杜)

高山光尚 (日本事務器株式会社)

島田美恵子 (千葉県立保健医療大学)

大森由実 (国立精神・神経医療研究センター)

高崎尚樹 ((株) ルネサンス)

荒尾裕子 ((株) クレメンティア)

森本友紀恵 (NPO 法人健康早稲田の杜)

丸藤祐子 (早稲田大学)

小柳えり (吉備国際大学)

田中憲子 (花王株式会社 パーソナルヘルスケア研

究所)

埴智史 (立命館大学)

岡田真平 (公益財団法人身体教育医学研究所)

難波秀行 (和洋女子大学)

菊賀信雅 (株式会社プロフィットジャパン)

竹澤純

技術補助員：

佐々木梓、吉池秀之、久保絵里子、林美由紀、吉

田美紀、栗田智史、松下宗洋、中瀧崇、久保田恵

理

研修生：

原秀美 (聖徳大学)

2. 年度計画

a. 運動ガイドライン研究室

- ・健康づくりのための身体活動基準 2013 とアクティブガイドの普及・活用のための研究を実施する。
- ・運動基準 2006 や身体活動基準 2013 で示された運動・身体活動量の妥当性を検討するための大規模前向き研究において、介入および観察を継続すると同時に、ベースラインデータと縦断データを分析し、成果を公表する。
- ・健康日本 21 の最終評価の結果を次期国民健康づくり運動のプラン策定に活かすために、個人の身体活動量に影響する要因を遺伝と環境の両面から検討する。

b. 身体活動評価研究室

- ・「国民健康・栄養調査」での身体活動・運動調査に必要な、さまざまな身体活動量の評価法の開発・検討を行う。
- ・生活習慣病やがん発症と身体活動・運動習慣との関連を明らかにするコホート研究を地域や職域で実施し、国民の健康増進に寄与するエビデンスを構築する。

3. 進捗状況 (成果)

a. 運動ガイドライン研究室

- ・健康づくりのための身体活動基準 2013・アクティブガイドの 2013 年 3 月 18 日の公表に向けての学術的研究成果の整理と検討会報告書の執筆を行った。また新しい基準・アクティブガイドの普及のための総説や著書の執筆、学術講演、一般講演に加えて、ソーシャルネットワークを使った普及・啓発活動を実施している。また、普及・啓発効果も検討している。
- ・運動基準 2006 で示された運動・身体活動量 23Ex の妥当性を検討するための大規模前向き研究において、平成 24 年 9 月 30 日の時点で約 1071 名の割り付けが終了し、介入・観察を継続している。ベースラインデータを用いた横断的研究の成果として、身体活動・運動と栄養摂取状況の関連、サルコペニアの代替指標の検討、新しい動脈機能評価法の検討などを実施した。また、観察期間 1 年目までのデータを用いた縦断的研究として、身体活動の増加と腰痛有訴の抑制効果を検討した。
- ・長野県佐久総合病院でのコホート研究の参加者が平成 24 年 10 月 20 日の時点で 4,454 人に達し、登録を完了した。そのうち活動量計による身体活動量の客観的デ

ータと BDHQ による習慣的食事・栄養摂取頻度のデータの両方が得られたのが 3,606 名であった。

- ・食行動や身体活動に関連する遺伝的要因を検討した結果、グレリン受容体やドーパミン受容体の遺伝子多型との関連が明らかとなった。また、GWAS による網羅的分析も 506 名のインビューテーション作業を実施し、身体活動の多寡と関連する遺伝子多型候補が複数探索された。

b. 身体活動評価研究室

- ・「国民健康・栄養調査」の歩数の測定法および集計法に関して過去 3 年間の調査を実施し、各調査年の歩数計非装着状況が約 8% で等しく、歩数の経年的な評価には装着状況の影響が少ないことを確認した。一方で、歩数の分布から歩数の集計においては中央値の方が妥当であることや顕著な外れ値が存在することを確認したことから集計のための歩数採用のためのカットオフ値を定めることが望ましいことが示唆された。これらの結果を参考に、平成 24 年度の国調の拡大調査ではカットオフ値を定めた。
- ・近年、身体活動と独立して身体不活動が生活習慣病罹患や早世と関係があることが示され、身体不活動と健康の関係に注目が集まっている。身体不活動の代表である座位習慣とメンタルヘルスの関係を横断的に調査し、座位習慣が多い群はメンタルヘルス不調が多いことが明らかになった。
- ・身体活動基準 2013 における全身持久力の基準値と 2 型糖尿病罹患およびがん死亡について日本人男性を対象としたコホート研究を実施し、基準値未達成者と比較して達成者の 2 型糖尿病罹患およびがん死亡の相対危険度が低いことが確認され、基準値の妥当性が日本人を対象に確認された。
- ・日本人男性を対象としたコホート研究により、BMI が低い群においても高い群においても全身持久力が高い群のがん死亡の相対危険度が低い傾向にあることが確認された。
- ・身体活動奨励のためのポピュレーションアプローチの効果を評価するためにクラスターランダム化比較試験を実施した。また、座位習慣とメンタルヘルスに関する調査を実施するなど新たな研究に取り組んでいる。

臨床栄養研究部

1. 研究部／研究室の概要

(1) 研究部の概要

臨床栄養研究部は、「重点調査研究に関する事項」の「生活習慣病予防のための運動と食事の併用効果に関する研究」に対応し、運動・身体活動による生活習慣病の一次予防、食事と遺伝的因子の相互作用の解明並びに運動と食事とによるテーラーメイド予防法に関して、ヒトを対象とした試験、動物や細胞等を用いた研究を行う。近年、我が国において糖尿病患者は増加の一途をたどり、罹患者数は約 890 万人を数えるに到っている。糖尿病は高齢者における主要な疾患の 1 つであり、糖尿病に肥満・高脂血症・高血圧が合併するメタボリックシンドロームは動脈硬化を促進し、心筋梗塞・脳卒中のリスク増大を介して日本人の健康寿命を短縮する最大の原因となっている。糖尿病などの生活習慣病は、複数の遺伝因子に加えて環境要因が組み合わさって発症する多因子病であり、その 1 つ 1 つの因子は単独では生活習慣病を発症させる効果は弱い、複数の因子が組み合わさって生活習慣病を発症させると考えられている。また近年の我が国における糖尿病患者数の急増については、日本人が欧米人に比べ、膵β細胞のインスリン分泌能が低い(遺伝的素因)ために、高脂肪食などの食事内容の欧米化や運動量の低下といった変化(生活習慣要因)による肥満・インスリン抵抗性状態に対して、膵β細胞がこれを十分に代償できないことがその一因と考えられている。このような生活習慣病の特性を踏まえて、本プログラムでは糖尿病や動脈硬化症の発症・進展の遺伝的要因、環境要因並びにその分子メカニズムを解明する。

(2) 研究室の概要

a. メタボリックシンドローム研究室

生活習慣病を効果的に予防するためには、生活習慣病の根本的な分子病態の解明とそれに立脚した生活習慣への介入が必須である。現在急増している 2 型糖尿病は、複数の遺伝因子に加えて環境要因が組み合わさって発症する多因子病である。そこで本プロジェクトは、2 型糖尿病を発症しやすくする遺伝子多型を同定し、その機能が未知のものに対しては、動物モデルを用いて解析する。また半定量食品摂取頻度調査に基づいた個々人の各栄養素摂取量並びに身体活動量と、これまでに同定した 2 型糖尿病を発症しやすくする遺伝子多型の組み合わせが、肥満度や血糖値などの臨床指標にどのように影響を及ぼしているか、コホート集団を対象に調査・解析する。

b. 栄養療法研究室

近年の我が国における糖尿病患者数の急増については、高脂肪食に代表される食習慣の欧米化や車の普及などによる運動不足といった生活習慣に基因する肥満・インスリン抵抗性に対して、膵β細胞がこれを十分に代償できないことがその一因と考えられている。そこで、本プロジェクトでは高脂肪食負荷に伴うインスリン抵抗性と代

償性のインスリン分泌増加の分子メカニズムについてモデル動物を用いて詳細に検討する。

(3) 構成メンバー

研究部長：

窪田直人

室長：

原 一雄 (メタボリックシンドローム研究室)

井上真理子 (栄養療法研究室) (8 月から)

研究員：

井上真理子 (7 月まで)

客員研究員：

門脇 孝 (東京大学医学系研究科糖尿病・代謝内科)

門脇弘子 (国際医療福祉大学臨床医学研究センター教授)

野田光彦 (国立国際医療研究センター病院糖尿病病研究部長)

協力研究員：

眞鍋一郎 (東京大学医学系研究科循環器内科)

松下由実 (国立国際医療研究センター臨床研究センター臨床研究支援部臨床研究推進室長)

窪田哲也 (理化学研究所横浜研究所統合生命医学化学研究センター代謝恒常性研究チーム)

流動研究員：

高本偉碩 (東京大学医学系研究科糖尿病・代謝内科)

諏訪内浩紹 (東京大学医学系研究科糖尿病・代謝内科)

技術補助員：

高木真奈美、溝口ゆう子、高安雅嗣 (7 月から)

研修生：

泉 和生 (医薬品医療機器総合機構 (PMDA) 新薬審査第一部主任専門員)

加藤昌之 (フィオーレ健診クリニック)

小島敏弥 (東京大学医学系研究科循環器内科)

浅野智子 (東京大学医学系研究科糖尿病・代謝内科) (5 月まで)

合田彩美 (東京大学医学系研究科糖尿病・代謝内科) (5 月から)

林 高則 (東京大学医学系研究科糖尿病・代謝内科)

桜井賛孝 (東京大学医学系研究科糖尿病・代謝内科)

岩本真彦 (東京大学医学系研究科糖尿病・代謝内科)

梶原栄二 (東京大学医学系研究科糖尿病・代謝内科)

佐藤寛之 (東京大学医学系研究科糖尿病・代謝

	内科)
相原允一	(東京大学医学系研究科糖尿病・代謝内科)
横田光祐	(東京大学医学系研究科糖尿病・代謝内科) (11 月まで)
佐藤直子	(国立成育医療センター小児思春期発育研究部)

2. 年度計画

a. メタボリックシンドローム研究室

●新規の 2 型糖尿病感受性遺伝子の同定

これまで 2 型糖尿病感受性遺伝子を同定するにあたり、2 型糖尿病のようなありふれた疾患・形質というものは、その遺伝素因の頻度も高いはずであるという common disease-common variant 仮説にのっとり、全ゲノムによるハップマップを用いた解析あるいは GWAS による解析が行われ、アジア人特有の領域を含めこれまでに約 60 もの領域が 2 型糖尿病感受性領域として同定されている。我々も 12 個の 2 型糖尿病感受性遺伝子を同定した。しかし、これら同定された多型では 2 型糖尿病の遺伝素因の約 20%しか説明ができないことが報告されている。これは common disease の遺伝素因に common variant が寄与する割合は低く、common disease の遺伝素因は common variant のみならず、低頻度の variant も担っている可能性を示唆する。また次世代シーケンサーの開発により、これまでの GWAS ではカバーされない新規の多型が同定されてきており、これらの多型についても 2 型糖尿病との関連を調べることで、新規の 2 型糖尿病感受性遺伝子を同定できる可能性がある。しかしすべての遺伝子をタイピングするには膨大なサンプル数と費用が必要となるため、今回 Imputation 法を用いて、2 つのジェノタイプングアレイ間で共通していないマーカーのジェノタイプを補完することで、新規の 2 型糖尿病感受性遺伝子の探索を行う。

●各栄養素摂取量と遺伝子多型の相互作用の検討

糖尿病をはじめとする生活習慣病は遺伝素因に環境因子の影響が組み合わさって発症する多因子病であり、個々人の易罹患性を予測するためには、個々の遺伝素因と環境因子に加えて遺伝素因・環境因子の相互作用を考慮に入れた解析を行いそのデータに立脚した易罹患性予測式を構築する必要がある。これまでアディポネクチン遺伝子多型は肥満者でより強く血中アディポネクチン値に影響を与えていることを明らかにしているが、本研究室では、これまでに明らかにしたインスリン抵抗性やインスリン分泌、1 型糖尿病に関与する遺伝子多型、各栄養素摂取量、身体活動量、それらの相互作用項を説明因子として、肥満度、血糖値、糖尿病の有無などの従属変数をどのように説明しうるかをロジスティック解析によって検討する。本年度はコホートの対象者について PPAR γ 遺伝子、アディポネクチン遺伝子、PGC-1 遺伝子、AMPK α 2 サブユニット遺伝子、HNF4 α 遺伝子、TCF7L2 遺伝子、HHEX 遺伝子、KCNQ1 遺伝子に加えて、平成 22 年度に明らかにした 2 型糖尿病感受性遺伝子である UBE2E2 遺伝子、C2CD4A/B 遺伝子のタイピングを行い、ロジスティック解析によってインスリン抵抗性、2 型糖尿病発症に関与する遺伝素因と環境因子の組み合わせを抽出する。

b. 栄養療法研究室

●糖尿病の研究 (インスリン分泌を中心に)

欧米人と同様、日本人においても 2 型糖尿病感受性遺伝子であると同定された TCF7L2 遺伝子は、欧米などの解析から、インスリン分泌能の低下と関連していることが報告され、これが糖尿病の発症要因であると考えられている。しかしその機能については全く不明である。これまでに、TCF7L2 の機能を膵 β 細胞で低下させた遺伝子改変モデル動物を作製し解析したところ、出生直後から膵 β 細胞量の減少に伴うインスリン分泌低下により耐糖能異常を呈していることが明らかとなった。そこで本年度はそのメカニズムを明らかにするために、単離膵島を用いてインスリン分泌に関わる遺伝子や細胞増殖に関わる遺伝子らについて検討する。

●メタボリックシンドロームの研究 (インスリン抵抗性を中心に)

過栄養や運動不足に伴う肥満は、炎症やアディポカイン異常を引き起こし、肝臓や骨格筋における異所性脂肪沈着や、ミトコンドリア機能異常の原因となり、インスリン抵抗性を惹起する。そしてこのインスリン抵抗性に伴う高インスリン血症は、我々のこれまでの研究から、肝臓や血管内皮細胞においてインスリンシグナルの主要な基質であるインスリン受容体基質 (IRS)-2 の発現低下によりインスリン作用不足を引き起こし、肝臓では糖産生亢進にともなう高血糖を、骨格筋では糖取り込み障害を来し、さらにインスリン抵抗性が増悪するという悪循環を形成している可能性を提唱してきた。そこで本研究では、この肥満・インスリン抵抗性に伴う高インスリン血症が IRS-2 の発現調節を介して、最近注目されている慢性炎症や炎症増悪に寄与しているのかどうかについて検討する。

3. 進捗状況 (成果)

a. メタボリックシンドローム研究室

●新規の 2 型糖尿病感受性遺伝子の同定と各栄養素摂取量と遺伝子多型の相互作用の検討

まず日本人 2 型糖尿病 5976 人、非糖尿病 20829 人に対して約 49 万 SNP を直接ジェノタイプした。さらに 1000 ゲノムプロジェクトの最新の参照パネルを利用し Imputation 法を用いて 572 人の東アジア人の 10,811,164SNP を解析した。この直接ジェノタイプした 489,369SNP と Imputation 法を用いて解析した 10,811,164SNP から、quality control 基準を満たした 6,209,637SNP について GWAS を行ったところ、39 の遺伝子領域で 2 型糖尿病との関連を見出した。しかし 19 領域はすでに既知の領域であったため除外し、2 型糖尿病との関連が知られていない 20 領域に対して、計 5 万人強の東アジア民族のサンプルを用いて follow up 解析を行った。その結果 2 型糖尿病との関連が疑われる 4 つの新しい領域を見出した。そこでこの 4 つの領域について別の集団 (合計 14,695) でタイピングを行って検証した結果、2 型糖尿病の発症に関わる 3 つの新たな遺伝子 MIR129-LEP、GPSM1、SLC16A13 を同定した。さらにこの 3 つの遺伝子について欧米人 47,117 人を対象に 2 型糖尿病との関連について調べたところ、3 つは明確な関連が

認められず、東アジア人に特有の 2 型糖尿病関連遺伝子であることが明らかとなった (Hum Mol Genet 201423 : 239-46)。また、これまでに明らかにしてきた 2 型糖尿病感受性遺伝子による遺伝素因と環境因子の相互作用を考慮に入れて解析を行い、現在同定した肥満や 2 型糖尿病関連遺伝子だけでは、検出力が低く、栄養・運動や食習慣との相互作用を明らかにすることは難しいことが明らかとなった。

b. 栄養療法研究室

●糖尿病の研究 (インスリン分泌を中心に)

TCF7L2 の機能を膵β細胞で低下させた遺伝子改変モデル動物では、野生型マウスと比較して、体重・インスリン感受性は同程度であったが、インスリン分泌低下を伴う耐糖能異常を呈した。一方、外来性のインクレチン作用は保たれていた。また、単離膵島実験でのグルコース応答性インスリン分泌率は良好であった。しかしこのマウスでは、膵臓インスリン含量の減少と膵β細胞量の減少を認めた。このことから、個体としてのインスリン分泌量は低下していたが、膵β細胞のインスリン分泌機構は保たれていると推定された。また出生直後から随時インスリン値はやや低下し、高血糖を呈していた。この時膵β細胞のインスリン含量を測定したところ有意に低下しており、Tcf7l2 は膵β細胞の発生・分化の段階から膵β細胞量の調節に関与している可能性が示唆された。そこで本年度は、そのメカニズムを明らかにするために、単離膵島を用いてインスリン分泌に関わる遺伝子や細胞増殖に関わる遺伝子について解析を行った。インスリン分泌機構に関与する遺伝子の発現に変化はなかったが、インスリン合成に関与する遺伝子の発現は低下していた。さらに膵β細胞の増殖に関与する遺伝子の発現は低下していた。成体で膵β細胞のアポトーシスには差を認めなかったが、増殖能は低下傾向を示し、この現象は出生直後から認められた。このことから、Tcf7l2 は膵β細胞の発生の段階から細胞増殖を介して膵β細胞量を調節することが明らかとなった (Diabetologia 2014 in press)。

●メタボリックシンドロームの研究 (インスリン抵抗性を中心に)

肥満インスリン抵抗性モデル動物である高脂肪食負荷マウスと ob/ob マウスの肝臓のマクロファージで、IRS-2 の発現について検討すると有意に低下していた。そこで、この IRS-2 の発現低下が高インスリン血症によって起こりうるのかを検討するために、primary マクロファージを用いて解析した結果、インスリン刺激によりその発現は有意に低下した。さらにこれがインスリン-Foxo1 の経路によって調節されているかどうかを検討するために、インスリン刺激前後で Foxo1 の蛍光免疫染色を行ったところ、インスリン刺激前では核内に局在していた Foxo1 が、インスリン刺激後核内から核外に移行し、Foxo1 を primary マクロファージでノックダウンすると、IRS-2 の発現が低下した。このことから肥満モデルマウスのマクロファージにおける IRS-2 の発現低下は、高インスリン血症がその 1 つの原因となっていることが明らかとなった。そこで次に、マクロファージの IRS-2 が個体の糖・代謝調節にどのような役割をしているかを明らかにするために、マクロファージ特異的 IRS-2 欠損マウ

スを樹立し、高脂肪食を 20 週間負荷し解析した。この時体重には差を認めなかったが、グルコース負荷試験にて耐糖能異常を呈していた。次にグルコースクランプを行ったところ、肝臓の糖産生が有意に亢進しており、肝臓のインスリン抵抗性を呈したが、骨格筋の糖取り込みには差を認めなかった。グルコースクランプの結果と一致して、マクロファージ特異的 IRS-2 欠損マウスでは、ピルビン酸負荷後の血糖の高値を認め、さらに糖新生系の酵素発現が有意に上昇していた。また、マクロファージ特異的 IRS-2 欠損マウスでは HE 染色にて脂肪の沈着が増大し、実際肝臓の TG 含量は有意に上昇していた。これと一致して、脂肪肝の病態形成に重要な PPAR γ 、FSP27、CD36 といった遺伝子発現は、有意に上昇していた。さらに肝臓において MCP-1、TNF α 、CCR2 といった炎症性サイトカインが上昇していた。以上の結果から、肥満に伴うインスリン抵抗性による高インスリン血症は、肝臓におけるマクロファージの IRS-2 の発現を低下させ、その結果肝臓では炎症性サイトカイン、糖産生亢進、脂肪肝を誘導し、これがさらに高インスリン血症を増悪させ、最終的に 2 型糖尿病、メタボリックシンドロームを発症させるのではないかと考えられた。

栄養教育研究部

1. 研究部／研究室の概要

(1) 研究部の概要

生活習慣病予防のための運動と食事の併用効果に関する研究に関して、運動・身体活動や適切な食事による生活習慣病予防、運動と食事指導の併用効果等について、特にライフステージ別の課題を実験的、疫学的、文献的な調査及び研究を行う。

また、小児から高齢者までの生涯にわたるライフステージに応じた間断ない食育をより効果的に推進するための調査研究を行い、その成果を専門家（管理栄養士等）のみならず広く国民に情報提供し、行政機関等と協調して食育を推進する。

(2) 研究部の概要

a. 栄養ケア・マネジメント研究室

食事摂取基準や運動基準の策定において、ライフステージ別の目標量策定及びライフステージ別あるいは有疾患者を対象とする場合の活用を推進するための基礎的な研究を行う。また、それぞれのライフステージに応じた適切な栄養ケア・マネジメントを推進するための調査研究を行い、その成果を専門家等に情報提供する。あわせて、介護保険における栄養改善の推進のための調査研究と普及のための専門家の支援を行う。

b. 食育研究室

2011 年度からの 5 年間にむけて策定された第 2 次食育推進計画に基づいて、各種団体（国、地方自治体、地域ボランティア、生産者、企業など）が展開している食育の実践活動を支援する為の調査研究を行う。また、食育活動展開の為の科学的基盤を得るための調査研究を実施する。その成果を専門家（管理栄養士等）のみならず広く国民に情報提供し、行政機関等と協調して食育を推進する。

(3) 構成メンバー

研究部長：

瀧本秀美

研究室長：

高田和子（栄養ケア・マネジメント研究室）

瀧本秀美（食育研究室 2013 年 7 月 31 日まで）

高田和子（食育研究室 2013 年 8 月 1 日より）

研究員：

猿倉薫子（食育研究室）

客員研究員

朴鍾薫（建国大学（韓国））

吉村英一（熊本県立大学）

長谷川祐子（くらしき作陽大学）

メリッサ・メルビー（デラウェア大学）

協力研究員：

別所京子（聖徳大学）

上野（目加田）優子（文教大学）

技術補助員：

坂田晶子、山本久子、吉田美代子、魚住佳代、
神山麻子、吉田明日美、長谷川祐子、河村由香

研修生：

阿部瑞恵、田中祥子

2. 年度計画

a. 栄養ケア・マネジメント研究室

- ・有疾患やライフステージに特有なエネルギーの必要量設定のための根拠となるデータを蓄積する。
- ・介護保険における効果的な栄養改善を行うための課題の検討、及び効果的な介入方法に関する調査研究を実施する。
- ・栄養改善の介入方法に関する文献検索及び環境等の影響要因などの基礎的な研究を開始する。
- ・被災地で実施した事調査及び被災地の栄養士を対象とした調査のフォローを行う。

b. 食育研究室

- ・長野で 6 月に実施される大会参加に向けて、ポスターやパネル作成を行う。
- ・研究所ブースの来場者に対し、食育に関するアンケート調査を実施する。
- ・食と健康状態に関する国内外の論文を収集し、系統的レビューを行う。
- ・栄養教育を用いた効果的な介入手法についての文献レビューを行う。

3. 進捗状況（成果）

a. 栄養ケア・マネジメント研究室

①【高齢者の低栄養のリスクを高める背景要因に関する調査】

地域在住高齢者の 3 コホートについて調査研究を継続している。1 か所は 9 年後調査まで終了し自立度と生活習慣等の関係について投稿準備中である。また、1 か所は 2 年目調査を終了し、データのクリーニング中である。1 か所は初回調査のデータのクリーニングまで終了し、今後、解析を行う。

②【高齢者における食支援のニーズや課題についての調査】

通所系介護サービスにおける口腔機能向上サービス及び栄養改善サービスの提供のあり方についての調査を平成 25 年度老人保健事業により実施した。これまでに口腔機能向上加算、栄養改善加算のいずれかを取得している事業所を対象に行った調査においても 9 月の加算状況は、回答のあった 550 施設中 55 事業所（10.0%）、口腔機能向上加算で 285 事業所（51.8%）と少なかった。算定の少ない理由としては、「それらのサービスが必要な利用者がいない」、「必要な専門職が配置できない」が多かった。また

9 施設の協力を得て、口腔機能向上、栄養改善の一方または両方を実施した際の効果について検討した。その結果、単独での実施と複数実施による差はあまりないか、単独実施の方が効果が見られる傾向にあった。一方で、複数実施では利用者の状態を総合的に把握することに繋がり、単独実施では介入していないサービスに関連する機能が低下する例もみられた。

③【有患者、高齢者、小児などのエネルギー必要量に関するデータを蓄積】

都市部の中学生について、二重標識水法で身体活動量を測定し、体育の授業以外で運動を行っているもので身体活動レベル（総消費エネルギー/基礎代謝量）は 1.85、運動を行っていない者で 1.74 であることを示した論文を公表した。小学生については、肥満の有無とエネルギー消費量に関する論文投稿見込みである。有患者については、人工呼吸器導入前の ALS 患者におけるエネルギー必要量についてはエネルギー代謝の亢進を認め、エネルギー必要量の推定方法を提案する学会発表を行った。

④【東日本大震災の被災地の栄養士・管理栄養士の調査の結果の解析】

食事摂取基準研究室、国際栄養研究室と共同で被災地の栄養士・管理栄養士への調査を実施し、3 食提供している施設における食料の供給状況は、連絡がとれた機関や連絡方法により異なることを示す論文がアクセプトされた。また、研究所で東日本大震災時に作成したツールの認知度について検討し、ツールの認知度は個人宅や避難所で活動した栄養士で高く、特に支援マニュアルの認知度、利用が高いことが明らかになった。しかし、認知度はいずれも 45%以下、使用度は 20%以下であり、認知度を増していく努力も必要と考えられた。

b. 食育研究室

①【妊婦への食生活指導介入結果】

妊娠中に産科外来で助産師や栄養士による食生活指導を受けた女性 212 名から、出産後に指導内容等についての回答を得た。74.5%が妊娠中の食生活に概ね満足しており、外来での食生活指導に「満足した」と回答した者が 206 名とほとんどを占めた。

②【食育推進全国大会を通じた一般国民編情報提供】

食育推進全国大会(広島)に参加し、研究所の活動の紹介、身体活動基準 2013 の紹介、情報センター作成のサプリメントの資料の紹介とともに、「エネルギー測れるよ」のテーマで近赤外線を使用したエネルギー測定器、スマートフォンアプリによるエネルギー量評価の体験を行った。

③【食育と健康状態に関する文献レビュー】

- ・ 供食と健康状態に関するレビューについては、Google scholar, CiNii、医学中央学雑誌により検索をし、タイトルと抄録から 69 編の論文を抽出した。そのうち供食頻度に関する論文は 14 編、供食者に関する論文 47 編をレビューした。いずれも、小中学生を対象とした論文が多かったが、成人、高齢者を対象とした論文も数編みられた。
- ・ 栄養教育を用いた効果的な介入手法の文献レビュー

は、レビューまで終了したので次年度とりまとめを行う。

基礎栄養研究部

1. 研究部／研究室の概要

(1) 研究部の概要

基礎栄養研究部は、エネルギー代謝や、たんぱく質、脂質、炭水化物などの主要栄養素の適切な摂取に関する調査研究を行う。それにより、厚生労働省が5年ごとに行っている「日本人の食事摂取基準」の改定作業に積極的に関与すると同時に、それらの改定のための科学的根拠の提示を行う。

また、エネルギーや主要栄養素の過剰、過少摂取で生じる肥満や生活習慣病の発症機序と、それらの予防法に関する研究を行う。

(2) 研究室の概要

a. 主要栄養素研究室

生活習慣病や肥満予防のため、たんぱく質、脂質、炭水化物等の主要栄養素の過剰、あるいは過少摂取で生じる生活習慣病発症機序を解明し、食事摂取基準策定に資する研究を行う。

b. エネルギー代謝研究室

厚生労働省の「日本人の食事摂取基準」における推定エネルギー必要量、および「健康づくりのための運動基準」と「健康づくりのための運動指針(エクササイズガイド)」における身体活動量・運動量の把握に資する研究として、以下の調査・研究を行う。

- ・様々な特性（職業、運動習慣、生活環境、年齢など）を有する成人および小児を対象に、二重標識水法を用いて、1日当たりの身体活動レベルおよび総エネルギー消費量のデータを蓄積する。
- ・ヒューマンカロリーメーターや活動量計などを用いて、エネルギー消費量や摂取量、エネルギーバランスの変動要因を検討することにより、生活習慣病の予防や解消に寄与する知見を獲得する。
- ・実験動物を用い、エネルギー消費と肥満を制御する脳機構を明らかにする。

(3) 構成メンバー

部長：

田中茂徳

室長：

山崎聖美（主要栄養素研究室）

田中茂徳（エネルギー代謝研究室）

上級研究員：

大坂寿雅

特別研究員：

中江悟司（エネルギー代謝研究室）

安藤貴史（エネルギー代謝研究室）

流動研究員：

薄井澄誉子（日本学術振興会特別研究員）

青山友子（日本学術振興会特別研究員）

客員研究員：

江崎治（昭和女子大学）

亀井康富（京都府立大学）

高橋真由美（大阪女子短期大学）

狩野理延（東京医科歯科大学）

二見 順（東日本国際大学）

田中千晶（桜美林大学）

引原有輝（千葉工業大学）

緑川泰史（桜美林大学）

大島秀武（流通科学大学）

稲山貴代（首都大学東京）

大河原一憲（電気通信大学）

角田伸代（国立長寿医療研究センター）

古泉佳代（日本女子体育大学）

西牟田守（千葉県立保健医療大学）

矢野友啓（東洋大学）

太田昌子（東洋大学）

協力研究員：

笠原知美（東京医科歯科大学）

田村江梨奈（東京医科歯科大学）

畑澤幸乃（東京医科歯科大学）

三宅理江子（千葉県立保健医療大学）

鈴木洋子（株式会社ウエル・ビーイング）

技術補助員：

小暮寛子、上條悦子、大川すみれ

研修生：

なし

2. 年度計画

a. 主要栄養素研究室

- ・たんぱく質、脂質、炭水化物等の主要栄養素の過剰、過少摂取で生じる肥満、生活習慣病に関して、脂肪食摂取後に血中脂質濃度が増加するマウスや培養細胞を用いて発症機序解明を行う。さらに、予防・治療法に関する研究を行う。

b. エネルギー代謝研究室

- ・日本人の知見が不足している高齢者および小児を主な対象として、二重標識水法を用いて、1日当たりの身体活動レベルおよび総エネルギー消費量のデータを蓄積する。さらに、活動量計などを用いて、成人の身体活動の特性（強度や時間帯、活動内容など）を明らかにする。
- ・ヒューマンカロリーメーターを用いて、朝食の栄養素組成がエネルギー基質に与える影響を検討することにより、肥満の予防や解消に寄与する知見を獲得する。
- ・褐色脂肪の有無がエネルギー代謝の季節変動に与える影響を検討する。
- ・ラット及びマウスを用い、エネルギー代謝調節および肥満制御の脳機構を明らかにする。

3. 進捗状況（成果）

a. 主要栄養素研究室

- ・炭水化物過少、脂質過剰で生じる肥満、脂肪肝等について検討を行った。肥満マウスに対しては、初期において肥満改善効果がみられたが長期では効果はなく、脂肪肝増悪化など安全性に問題があった。一方、脂質過少食は同様の肥満改善効果があり脂肪肝も改善された。標準体重マウスでは、体重増加が抑制されたが脂肪肝を発症した。肥満マウス、標準体重マウスとも各組織において糖や脂質代謝に関わる遺伝子発現変化がみられた。

b. エネルギー代謝研究室

- ・ほぼ自立した生活を送っている高齢者において、二重標識水法による総エネルギー消費量・身体活動レベル、および IAAO 法によるたんぱく質必要量のデータを収集するための調査を昨年度から進めている（今年度までにそれぞれ 55 名、25 名の測定を実施）。現時点では、高齢者でも、従来考えられていた値より高めの身体活動レベルが得られている。また、3～6 歳の幼児においても、二重標識水法による総エネルギー消費量の測定を実施している。
- ・ヒューマンカロリメーターを用いて、3 種類の朝食の栄養素組成によって 1 日の基質利用が異なるか検討し（2 泊の入室×3 回×10 人）、朝食の栄養素組成が 1 日の基質利用と関連するという結果が得られた。
- ・褐色脂肪の有無が日常生活におけるエネルギー代謝の季節変動（夏⇄冬）に与える影響を検討するために、36 名の測定を終了し、分析を進めている。
- ・低酸素環境下でのエネルギー消費の抑制と体温低下の脳機構として、延髄の傍錐体路領域での GABA 放出による交感神経プレモータニューロンの抑制が重要であることを明らかにした。
- ・視床下部で産生され摂食抑制作用があるガラニン様ペプチドは脳室周囲のグリア細胞に作用してプロスタグランジン E2 産生を介することでエネルギー消費が促進されることを明らかにした。

食品保健機能研究部

1. 研究部／研究室の概要

(1) 研究部の概要

中期目標は、健康増進法に基づく業務及び「健康食品」を対象とした食品成分の有効性評価及び健康影響評価に関する調査研究を行う。

○健康増進法に基づく業務

- ・健康増進法第 27 条に基づき収去された特別用途食品、栄養表示された食品の試験業務を的確かつ迅速に実施する。
- ・特別用途食品の許可に係る試験業務について、分析技術が確立している食品成分の試験業務は、検体の受理から試験の回答までを 2 ヶ月以内に行うことを目指す。
- ・分析技術の確立していない特定保健用食品の関与成分等の新たな食品成分技術的対応については、他登録試験機関での応用も可能な分析技術の規格化及び当該食品成分の標準品の開発の実現を図る。

○健康食品を対象とした食品成分の有効性及び健康影響評価に関する調査研究

- ・「健康食品」等の健康志向に基づく食品の使用実態等の情報を収集・把握し、食品表示並びに食品成分の健康影響に関する調査研究を実施する。
- ・「健康食品」摂取の安全性に関しては、動物実験及び細胞実験等による健康影響評価研究を実施し、これらに関する情報発信を行う。

(2) 研究室の概要

a. 食品分析研究室

- ・特別用途食品（病者用食品、乳児用調製粉乳、えん下困難者用食品、特定保健用食品など）許可申請時の食品成分分析を行う。
- ・収去食品の分析を行う。
- ・一般栄養成分及び特定保健用食品関与成分の分析方法の改良を行う。
- ・特定保健用食品の審査において、消費者庁に関与成分分析法について専門的観点から情報を提供する。

b. 食品栄養・表示研究室

- ・食品中の栄養素等の生理機能の評価並びに表示との関係に関する基礎的調査研究を行う。そのうち特に、ビタミン A やビタミン D 等の微量栄養素を中心に、栄養生理学上の研究を行うとともに、健康維持における新しい有用性に関する試験研究を進める。
- ・これらの研究成果をもとに、食品表示のあり方について調査研究を行う。

c. 食品機能研究室

- ・機能性を有する食品の有用性と安全性の評価に関する調査研究を行う。特に、機能性食品の安全な利用

のための評価研究と新規機能性成分の有効性、健康影響評価及び食品素材利用に関する研究を行う。

(3) 構成メンバー

研究部長：

石見佳子

研究室長：

松本輝樹（食品分析研究室）
山内 淳（食品栄養・表示研究室）
石見佳子（食品機能研究室）

研究員：

竹林 純（精度管理担当（主任））
東泉裕子

特別研究員：

只石 幹

流動研究員：

西出依子

客員研究員：

山田和彦（女子栄養大学）
太田篤胤（城西国際大学）
呉 堅（日清オイリオ株式会社）
王 新祥（北京中医薬科大学）
山本祐司（東京農業大学）

協力研究員：

千葉大成（神奈川工科大学）
小坂谷典子（相模女子大学他）
永田純一（福岡工業大学）
谷中かおる（早稲田大学）

技術補助員：

白井智美、加藤美智子、市田尚子、山田麻未（平成 25 年 4 月～10 月）、松本雄宇（12 月～）

研修生：

山田有紀（文教大学）
待寺真波（文教大学）

2. 年度計画

a. 食品分析研究室

- ・消費者庁の特別用途表示の許可等に関わる申請に基づく試験業務を期間内に実施するとともに、そのヒアリングに適切に対応する。
- ・健康増進法第 27 条第 5 項の規定により収去した特別用途食品及び栄養表示がなされた食品の分析業務を、期間内に実施する。
- ・栄養表示基準における栄養成分の分析法について、より適切な分析手法の検討を行う。また、試験検査機器の有効利用及び整備の充実を図る。
- ・登録試験機関間の協力体制を維持し、分析精度管理試験を実施し、分析精度の維持・向上に努める。
- ・分析の難易度が高い微量栄養成分（ビタミン・ミネラル）または分析頻度の高い特定保健用食品の関与成分

について、標準品の開発を検討する。

- ・測定成分の曖昧さにより分析法が確立されていない栄養成分に関して検討を行う。また、カラムスイッチング HPLC を用いたビタミン D 分析法の開発を行う。
- ・抗酸化物質摂取の健康影響を明らかにするための疫学研究の基礎データとするため、種々の食品の抗酸化能を測定し、データを蓄積する。
- ・「健康食品」の原材料の安全性評価として、ミネラル酵母に関する試験を実施する。

b. 食品栄養・表示研究室

- ・「健康食品」の表示並びに「健康食品」に含まれる微量栄養成分の栄養生理学上の調査研究を行う。
- ・食品に含まれる微量栄養素の生理機能の評価を行う。
- ・力価の高い RBP4 抗体を作成する。また、RBP4 が新規のサイトカインとしての機能を評価する。
- ・ β カロテン-ビタミン A 転換酵素の遺伝子発現制御機構を分子レベルで明らかにする。特に RAR/RXR の結合状態と転写制御の関連について調べる。

c. 食品機能研究室

- ・疾病モデル動物における「健康食品」素材の健康影響評価及び医薬品との相互作用について、植物性エストロゲン作用を示す素材を中心に検討する。
- ・閉経後女性の骨の健康を目的とした、日本とニュージーランド (NZ) の機能性食品の併用効果に関する研究を実施する。

3. 進捗状況(成果)

a. 食品分析研究室

- ・消費者庁の特別用途表示の許可等に関わる申請に基づく試験業務を期間内に実施した (特定保健用食品 2 検体、特別用途食品 4 検体)。また、表示許可のヒアリングに適切に対応した (許可試験, 6 件; ヒアリング, 0 回; 調査会・部会, 6 回)。
- ・本年度の収去試験依頼はなかった。
- ・ICP-AES (誘導結合プラズマ発光分光分析装置) を導入し、消費者庁事業であるモリブデン分析法の標準化について検討を行った。また、それに付随し、ビタミン K の標準化についても検討を行い、メナキノン-7 への対応を可能とした。
- ・平成 25 年 6 月 28 日に公布された食品表示法において、収去食品の栄養表示に係る試験を食品衛生法における登録検査機関が受託可能となったことから、登録検査機関との協体制を構築し、栄養成分分析に関する実態調査を実施した。全 98 機関に対し質問票調査を実施し、54 機関に対し栄養成分 (熱量、たんぱく質、脂質、炭水化物、ナトリウム) の実測調査を実施した。質問票調査の結果、登録検査機関の 6 割以上で栄養分析が行われていたが、分析可能な成分は限られており、栄養表示基準に定められた全ての成分に対応可能な機関は 5 機関程度であった。実測調査の結果、熱量、たんぱく質、脂質、炭水化物、ナトリウムに関しては 8 割以上の機関で、適切な精度で分析されていると考え

られた。

- ・標準品開発の一環として、消費者庁事業における室間共同試験用の食品検体について調製を行い、均質性確認試験の結果、配付可能であることが明らかとなった。
- ・カラムスイッチング HPLC を用いたビタミン D 分析法の開発については、前処理カラムとしてフェニルカラム、分析カラムとして ODS カラムを用いることにより、実サンプル (粉ミルク、マルチビタミンタ、鮭、きくらげ) において、ビタミン D が分離・定量可能であることを見出したが、添加・回収試験における回収率が約 60% であり、さらなる改良を要する。
- ・食品の抗酸化能 (ORAC 値) について実測および文献調査により、215 品目に関するデータを得た。しかし、得られたデータは野菜、果実、調味料及び香辛料 (ハーブ) 類に関するものが多く、肉・魚・卵・乳類は少ない。食事全体の抗酸化能を把握するためには、食品としての抗酸化能は高くなくても摂取頻度の高い食品について、さらにデータを蓄積する必要があると考えられた。
- ・健康食品に含まれるミネラルの形態確認手法について検討を行い、セレンを対象とした検討では、陽イオン交換樹脂を用いることにより、無機セレンと有機セレンを分画可能であることが示唆された。

b. 食品栄養・表示研究室

- ・力価の高いビタミン A 結合タンパク質 (RBP4) の *in vitro* 大量調整法を確立した。高い力価の抗 RBP4 抗体を作成し、血中 RBP 測定系の構築をめざした。その結果 RBP4 精製法は確立出来たが、市販に比べて高い力価を持つ抗体は作成できなかった。RBP4 遺伝子発現を制御する新規の転写因子である PSMB1 の核内移行による転写調節機構の一部を明らかにした。
- ・ β カロテン-ビタミン A 転換酵素 (BCMO1) がレチノイン酸によって発現誘導されない分子メカニズムを解析した。その結果、BCMO1 遺伝子プロモーターにはビタミン A 受容体である RAR/RXR がビタミン A 依存的に結合するが、その結合が極めて弱いことが明らかとなった。
- ・特定保健用食品の許可表示に関して、消費者委員会及び消費者庁食品表示課への助言等を行った (調査会・部会事前打ち合わせ 5 回/年、諮問資料確認 18 件/年、審査結果報告 29 件/年、指摘事項回答確認 8 件/年、新開発食品調査会 6 回/年、新開発食品調査部会 4 回/年、審議品目数 38 件/年、平成 26 年 2 月末日現在)。

c. 食品機能研究室

- ・閉経後骨粗鬆症モデル動物を用い、健康食品素材であるレスベラトロール (RS) の健康影響評価を行った。モデル動物では肝臓の薬物代謝酵素の遺伝子発現が亢進しており、RS はこれを抑制した。抗コレステロール薬であるスタチンと RS は、肝臓の病理組織学的検査において大滴性脂肪滴を減少させたが、両者の相互作用は認められなかった。
- ・日本と NZ の機能性食品成分 (イソフラボンならびにカロテノイド) について、破骨細胞形成及び骨芽細胞

の分化に対する併用効果を検討した。大豆イソフラボンであるゲニステインおよびエクオールは破骨前駆細胞の増殖を抑制することで破骨細胞形成を抑制することを明らかにした。骨芽細胞系では、イソフラボン及びβカロテンはアルカリフォスファターゼ活性を促進し、骨形成に関連する遺伝子発現を亢進した。両者の併用により、骨芽細胞の分化は相乗的に促進された。また、NZで実施している閉経後女性を対象とした介入試験の生体試料の解析を行った。

- 大豆イソフラボン代謝産物の機能性評価及び安全性評価に関する研究を実施した。
- 大豆イソフラボン代謝産物の産生を高める食物繊維素材の開発に関する研究を実施した。
- FAO/WHO コーデックス委員会栄養・特殊用途食品部会に出席し、国際食品規格の策定プロセスに関する研究を実施した。

情報センター

1. センター／研究室の概要

(1) センターの概要

情報センターは、当研究所の情報発信の中核としての役割を担っており、健康と運動・栄養に関する研究所内の成果、ならびに研究所外から公開されている関連情報を収集・分析し、国民の健康づくりに役立つ情報としてホームページやニュースレターを通じて発信する。また、保健機能食品や特別用途食品に関する基礎的情報、いわゆる健康食品が関連した被害情報など、国の健康や食品・栄養に係わる制度等を効果的に普及させるための取り組みを行う。さらに、インターネット上の種々の仕組みの活用により、国民や専門職等からの意見・要望等の把握、研究所の諸規程や職員の公募等の必要な情報提供を行い、業務の効率化と情報システムに係る情報のセキュリティの確保に努める。

(2) 室の概要

a. 健康食品情報研究室

健康食品に関する正しい知識の普及と健康被害の未然防止ならびに拡大防止を目的に、公正で科学的な健康食品の情報を継続的に収集・蓄積し、国民ならびに保健医療の専門職に効果的に情報提供する。その情報提供サイトとなる「健康食品」の安全性・有効性情報 (<https://hfnet.nih.go.jp/>) は厚生労働省等と連携、特別用途食品・栄養療法エビデンス情報 (<http://fosdu.nih.go.jp/>) は(公社)日本栄養士会等と連携して維持・管理し、それらを現場の専門家や関係機関との連携が促進できるシステムに充実させる。さらに健康食品の危害防止に関する調査研究を行い、健康食品に関する外部からの電話やメールの問い合わせに適宜対応する。

b. 栄養情報技術研究室

研究所内の他の部・センターとの連携等により、所内の研究成果ならびに国内外の健康・栄養に関連した情報を収集・蓄積し、ホームページ等を通じて国民に継続発信するとともに、必要な情報の更新に努める。また、国民の要望や意見、健康・栄養分野の専門家が必要とする情報について、各種セミナー・シンポジウム等の機会や情報技術を用いて把握する。さらに、ホームページ等を介した業務の効率的な推進に努め、情報システムに係る情報のセキュリティを確保する。健康や栄養に関する外部からの電話やメールの問い合わせに適宜対応する。

(3) 構成メンバー

センター長：

梅垣敬三

室長：

千葉 剛 (健康食品情報研究室)

廣田晃一 (栄養情報技術研究室)

研究員：

佐藤陽子 (健康食品情報研究室)

客員研究員：

三浦進司 (静岡県立大学)

橋本洋子 (秋草学園短期大学)

梅國智子 (人間総合科学大学)

協力研究員

千葉一敏 (アドバイザースタッフ研究会)

技術補助員：

鈴木順子、中西朋子、横谷馨倫、狩野照誉、古池

直子、細井俊克、亀本佳世子(～8月)、マサハ

ート由華、鈴木祥菜

研修生：

関根有希 (共立女子大学)

安達春香 (東京家政大学)

北澤千裕 (東京家政大学)

北村智恵 (東京家政大学)

2. 年度計画

a. 健康食品情報研究室

- 「健康食品」の安全性・有効性情報(hfnet)サイトに関して、厚生労働省等と連携して継続的な掲載情報の更新をするとともに、それらの情報の効果的な発信等に関連した調査研究を行う。また、消費者が必要な情報を得られやすい様にサイトの改修を行う。
- 特別用途食品・栄養療法エビデンス情報(fosdu)のサイトに関して、継続的な掲載情報の更新に努める。
- ハイリスクグループによる健康食品の利用実態調査を行い、問題点を明らかにした上で、適切な情報提供に活用する。
- 厚生労働省、国民生活センター、企業で収集されている健康食品との因果関係が疑われる健康被害情報(苦情を含む)の特徴をさらに精査し、それぞれの情報が集約しやすい方法の考案、ならびに健康被害との因果関係を調べるアルゴリズムの開発を進める。
- 健康食品素材(天然・自然を標榜したハーブなど)による薬物代謝酵素への影響ならびに肝臓における抗炎症作用について検討する。

b. 栄養情報技術研究室

- 外部からの意見、要望、情報等を広くまた効率的に把握し、速やかに業務に反映するとともに効率的に情報を外部に発信していくためのインターネット、イントラネットの整備改善を進める。
- 研究所の最新の研究成果やトピックス等を紹介したニュースレター(4回)を発行し、ホームページ上での公開と電子メディアでの配信、研究所ホームページ等

を活用した諸規程、職員の公募等、必要な情報開示を継続的に実施する。

- ・ 図書の整備等の作業を行う。
- ・ 年 1 回オープンハウスとして研究所の活動を紹介する。
- ・ 情報システムに係る情報のセキュリティの確保に努める。

3. 進捗状況 (成果)

a. 健康食品情報研究室

- ・ 『健康食品』の安全性・有効性情報 (hfnet) サイトに関して、厚生労働省等と連携して、ニーズ把握及びデータ追加を行った。特に安全性・被害関連情報については積極的に情報収集して迅速な提供に努めた。25 年度に作成した情報の内訳は、新規情報が 358 件、更新・追記情報が 411 件であり、情報が検索しやすい様に検索システムを追加した。登録会員への更新情報メールの配信 (毎月)、健康食品に関するメールや電話での問い合わせ、新聞などの取材に適宜対応した。サイトへのアクセス数は約 14,000 件/日であった。
- ・ (公社) 日本栄養士会と連携して運営している「特別用途食品・栄養療法エビデンス情報」サイトに適宜情報を追加した。作成した情報の内訳は、新規情報が 8 件、更新・追加情報が 19 件であった。サイト全体を見直し、リンク切れ等の修正、サイトの利用環境に関して適宜対応した。アクセス数は約 600 件/日であった。
- ・ いわゆる健康食品による健康被害情報の因果関係解析法と報告手法に関する調査研究として、厚生労働省、国民生活センター、企業の協力を得て、現時点で収集されている有害事象 (苦情) の特徴を調査し、同時に健康食品の摂取と健康被害の因果関係を調べるためのアルゴリズムを試作し、保健所担当者、企業担当者、消費者センターの相談員にアンケート調査を行った。
- ・ 病者における特定保健用食品の利用実態アンケート調査をインターネットで実施し、病者の約 1 割が治療目的に特定保健用食品を利用し、さらに、その 9 割が特定保健用食品の利用を主治医に相談していないことが明らかとなった。
- ・ 小児におけるサプリメントの利用実態アンケート調査をインターネットで実施し、サプリメント利用率は 8%であったが、実際に、どこの何という製品か意識せずに子供に与えている母親が約 3 割いることが明らかとなった。
- ・ ダイエットサプリメントに多用されている植物エキスの一つであるコレウス・フォルスコリの安全性をマウスの実験系で検討し、ヒトで想定される摂取量で医薬品 (トルブタミド) の作用を減弱することを明らかにした。
- ・ 抗炎症作用を有する健康食品素材の有効性・安全性をマウスの実験系で検討し、レスベラトロールは長期摂取において肝臓の薬物代謝酵素活性を誘導する可能性を明らかにした。また、クルクミンは肝臓における薬物代謝酵素 (CYP) の遺伝子発現および活性に影響を与えないこと、さらに非アルコール性脂肪肝炎に対しても影響しないことを認めた。
- ・ 外部からの電話やメールの問い合わせ、講演の依頼に

適宜対応した。

以上、予定している情報提供ならびに調査研究は、概ね達成できた。

b. 栄養情報技術研究室

- ・ 公式サイト維持管理に努めた。サイトの平均アクセス (ページビュー) 数は、栄養研全体 (hfnet を除く) で平均約 10,300 件/日 (2011 年度 9,000、2012 年度 9,100)、新着情報のデータ更新数は 72 件、マンスリーレポートのデータ登録数は、913 件であった (なお一部集計方法に変更があったので前年度前々年度の数字を参考に附す)。
- ・ 一般ユーザと研究所職員のコミュニティサイト「健康・栄養フォーラム」を運用した。アクセス数は、平均 3,800 件/日 (2011 年度 4,200、2012 年度 4,200) であった。
- ・ 最新健康・栄養情報の収集を行い、インターネットを通じて発信に努めた。①世界の最新論文を日本語に翻訳し紹介するサイト「リンク DE ダイエット：世界の最新健康・栄養ニュース」へのデータ登録数は、3,914 件であった。「リンク DE ダイエット」サーバへのアクセス数は平均約 3,100 件/日 (2011 年度 1,500、2012 年度 2,900) であった。②最新健康食品文献リスト (EBIS) へのデータ登録数は 30,243 件であった。③日本人の食事摂取基準についての各種情報を掲載する「日本人のための食事摂取基準」、④「日本人のための食事摂取基準 2010 年版策定者向け引用文献データベース」⑤全国の自治体の食育活動を収集・公開する「健康づくりに向けた食育取組データベース」、⑥小学生向け健康・栄養情報「えいようきつず」のサイトを運用した。
- ・ 公式サイトをはじめとした当研究所で運用する上記の様々なサイトの最新情報を発信するため、ソーシャルネットワークサービス「twitter」「facebook」を積極的に活用した。記事の投稿総数は twitter、facebook 各々 775 件であり、facebook の栄養研ページへのアクセス (ページビュー) 数は平均約 3,300 件/日であった (twitter はカウント機能無しのため不明)。
- ・ 公式サイトへの問い合わせに適宜対応した。メールによる問い合わせは、270 件、また「健康・栄養フォーラム」での質問は 47 件であった。
- ・ 機関誌「健康・栄養ニュース」(年 4 回) 発行に努めた。「健康・栄養ニュース」メールマガジン登録者数は 2,806 名 (3/31 現在) であった。
- ・ 世界の最新健康・栄養ニュースを紹介するメールマガジンを週 1-2 回発行 (52 回)、登録者数は 1,296 人であった。
- ・ 当研究所に必要な健康・栄養関連の図書等の情報を調査し適宜整理した。また、図書業務 (契約雑誌の整理・オンラインの閲覧設定、文献取り寄せ (527 件)、図書検索システム LIMEDIO の整備など) を遂行した。
- ・ 情報セキュリティ確保のために、クラウド型ウェブファイアウォールを新規に導入して監視体制の強化を継続するとともに、年 6 回 (今年度予定) のセキュリティ講習会を開催 (感染研と共同で 6 回) し、年 2 回のセキ

セキュリティ監査を実施した。

- 平成 25 年 10 月 12 日（土曜日）にオープンハウス（研究所公開）を実施し 420 名（2012 年度 290 名）の来場者があった。食生活診断、健康体力診断、骨密度測定、健康フィットネス体験、講演、所内見学、健康食品相談等を実施した。
 - 研究所内セミナー等の予定を調整した。
- 以上、栄養研の公式サイトへのアクセス数は、2010 年度以降低下していたが、本年は facebook、twitter による新たな情報発信がアクセス数を増やし、またオープンハウスの来場者数も向上した。従って予定している情報提供等の業務は、概ね達成できた。

国際産学連携センター

1. センター／研究室の概要

(1) センターの概要

国際産学連携センターは、当研究所の対外部門として、アジア地域をはじめとする国際的な研究ネットワークの構築、海外との学術交流や若手外国人研究者の受け入れ、大学や企業等との連携による研究開発、国際シンポジウムやセミナーの開催など、当研究所が国内外の関係機関等と連携して行うさまざまなプログラムの調整役を担っている。また、WHO の GEMS/Food (地球環境モニタリングシステム／食品汚染モニタリングシステム) プログラム協力機関として、国民健康・栄養調査の結果等、わが国の食事調査データを発信している。

(2) 研究室の概要

a. 国際栄養研究室

国際栄養研究室は国際的な学術交流(招へい事業、セミナー開催等)、情報提供及び国際機関との協力を行う。具体的には、海外からの研修生の受け入れ(「若手外国人研究者招へい事業」等)、国際シンポジウムの開催、アジア各国との共同研究、WHO など国際機関への協力・連携、海外向け情報発信等を通じて、国際的な研究ネットワーク構築を図ることを目指している。

b. 生物統計研究室

産学官連携による共同研究・事業の展開を見据えた基礎的・応用的研究を行うとともに、健康・栄養に関するエビデンスを活用して施策の評価に役立てる研究を実施している。具体的には、健康日本 2 1 (第二次) の策定を受け、国民健康・栄養調査及び特定健康診査等のデータを活用して日本人の健康・栄養状態をモニタリングする手法を確立するための検討を行う。また、国民健康・栄養調査等のデータをもとに、生活習慣病の罹患及び死亡の将来予測を行うシミュレーションモデルを構築するための検討を行う。

c. 研修・連携推進室

「対外部門」としての国際産学連携センターの中で、講演会・セミナー等を通じた人材育成、栄養情報担当者(NR)の学術的基盤づくり、行政部門との各種調整等を行っている。

栄養情報担当者(NR)事業の学術面(試験、研修等)への対応を行う。NR 制度のあり方や研究所の関わりについて検討を行う。

研究の成果を社会に還元するため、一般向けセミナーを開催する。また、管理栄養士等の専門家を対象としたセミナーの企画・運営、外部団体・機関と連携した各種人材育成プログラムの企画等を、中長期的な視点から行う。社会的ニーズを把握するため関連機関等と定期的な情報

交換の場を設け、社会的・行政ニーズを把握する。

d. WHO-CC 推進プロジェクトチーム

WHO 協力センターとして、アジア・太平洋諸国における栄養、身体活動分野の調査研究の中心的役割を担うことを目指している。

(3) 構成メンバー

センター長:

西 信雄

室長:

三好美紀 (国際栄養研究室)

西 信雄 (生物統計研究室) (併任)

西 信雄 (研修・連携推進室) (併任)

西 信雄 (WHO-CC 推進プロジェクトチーム) (併任)

上級研究員:

笠岡 (坪山) 宣代 (研修・連携推進室併任)

研究員:

野末みほ (国際栄養研究室)

池田奈由 (生物統計研究室) (平成 25 年 12 月～)

坪田 (宇津木) 恵 (WHO-CC 推進プロジェクトチーム)

客員研究員:

水野正一 (公益財団法人放射線影響協会)

溝上哲也((独)国立国際医療研究センター)

中谷友樹 (立命館大学)

協力研究員:

南里明子、黒谷佳代、杉山雄大((独)国立国際医療研究センター)

Leng Huat Foo (Universiti Sains Malaysia)

武田和歌子 (オーストラリア国立大学)

技術補助員:

當間奈月、角倉知子

2. 年度計画

a. 国際栄養研究室

「国際栄養協力若手外国人研究者招へい事業」で 2 名 (マレーシア、ベトナム) の研究者を受け入れる。また、フォローアップ共同研究助成事業により、過去の招へい研究者と受入研究者との共同研究 1 件を実施する。「第 6 回アジア栄養ネットワークシンポジウム」を開催し、アジアの栄養研究所とのネットワークづくりを進める。WHO 等との連携・協力関係を強化し、国際協力、支援を推進する。WHO の GEMS/Food プログラム協力機関として、国民健康・栄養調査の結果等、わが国の食事調査データの発信に努める。アジア諸国における栄養士制度・栄養士養成の現状について調査・検討を行う。研究所の研究成果、わが国の栄養・運動施策上の重要なガイドライン等について、英語版ホームページを通じて情報

発信を行うとともに、データ提供等の支援を行い、海外からのニーズに的確かつタイムリーに対応する。

b. 生物統計研究室

国民健康・栄養調査及び特定健診等のデータを活用して、日本人の健康・栄養状態をモニタリングする手法を確立するための検討を行う。また、国民健康・栄養調査等のデータをもとに、生活習慣病による死亡等の将来予測を行うシミュレーションモデルを構築するための検討を行う。

研究所内関連部署との協力を図りつつ産学連携を推進し、生物統計の手法を用いた研究成果等の社会還元に貢献する。具体的には、健康・栄養や食品開発等に関連する研究機関、民間企業等との共同研究や受託研究、特許等の実用化等により、当研究所の研究成果やノウハウを具体的な商品開発やサービスを通じて、社会に還元できるよう努める。

c. 研修・連携推進室

一般向けの公開セミナー(第15回)を、平成26年2月に東京で開催する。研究所が所有する知的財産の活用、又は所有する情報等を用いた共同研究を民間企業及び大学等と積極的に行うこととし、年間に12件以上を目標とする。

健康・栄養に関連する団体、大学、民間企業等他機関との連携、およびニーズ把握のための意見交換会を年6回程度開催する。行政ニーズを適時把握するために、内閣府食育推進室、消費者庁食品表示課、厚生労働省医薬食品局食品安全部、同健康局がん対策・健康増進課等と情報・意見交換を1回以上行い、研究・業務等に公正中立な立場で適正に反映させる。

知的財産権取得に適した研究について、学会及び論文発表の前に掘り起こしを行い、年間4件程度の特許等の出願を行う。

NR認定制度については、NRの移籍手続きを順次実施する。また、第三者機関に移管を行うまでの間、有資格者の不利益とならないよう、NRのアドバイザリースタッフとしての質を維持向上するための研修会を実施するとともに、移管に係る情報提供を適切に行う。

d. WHO-CC 推進プロジェクトチーム

WHO協力センター(申請中)としての体制を整え、アジア・太平洋諸国における栄養、身体活動分野での調査・研究ニーズの把握に努める。その一環として、WHO等との協力関係を強化し、関連する国際会議に研究者を派遣する。

3. 進捗状況(成果)

a. 国際栄養研究室

●海外からの訪問・研修受入

「若手外国人研究者招へい事業」により、マレーシアとベトナムから各1名の若手研究者を受け入れ、受入研究者との共同研究を進めた。また、平成23年度に受け入れた招へい研究者(マレーシア)との共同研

究をフォローアップ共同研究事業(1件)により実施した。さらに、来年度の招へい研究者として決定した2名については、現在、受入および来日に係る準備手続きを進めている。

他機関からの依頼による研修を要請に応じて受け入れており、本年度はJICAより2件を受け入れ、講義対応を行った。海外からの視察訪問も随時、要請に応じて受け入れており、本年度はカナダ、台湾、タイ、フランス等からの研究者の訪問を受け入れ(6件)、意見交換を開催した。

●国際シンポジウム・セミナー

研究所が主催する代表的なシンポジウムである「アジア栄養ネットワークシンポジウム」を、平成15年度から隔年で開催している。本年度は、「第6回アジア栄養ネットワークシンポジウム(平成26年3月12日)」を開催し、「健康的な食生活を目指した社会環境整備」をテーマとして、WHO西太平洋地域の行動計画に係る基調講演に続いて、アジア地域各国の現状および今後の方向性について議論を深めることができた。本シンポジウムと連動して、日本学術会議IUNS分科会、日本栄養・食糧学会および日本栄養改善学会との共催による「IUNS栄養学リーダーシップ育成国際ワークショップ(平成26年3月11日~13日)」を開催し、栄養分野(特に、食品開発、教育・行動変容、社会環境整備)の国際的リーダーを育成した。(IUNS=国際栄養科学連合)

また、(独)国立国際医療研究センター及び(独)国立精神・神経医療研究センターとの共催により、「第1回国際栄養精神医学研究コンソーシアム(平成25年6月21日)」を開催した。さらに、台湾と米国からそれぞれ専門家を招いた外来セミナー「アジア太平洋地域における臨床栄養・公衆栄養の展望について(平成25年6月14日)」、「健康づくりのための機能性食品について(平成25年8月30日)」を開催した。

●国際機関の活動への対応

WHO西太平洋地域事務局と国立保健医療科学院が主催した非感染性疾病対策に関するワークショップの講師を務め協力した。

WHOのGEMS/Foodプログラム協力機関として、果物及び野菜の残留農薬の暴露評価に関わる食品摂取量の推定のため、厚生労働省医薬食品局食品安全部基準審査課にデータを提供した。

●広報・情報発信

英語版ホームページを通して、研究所の研究成果、栄養行政の情報を発信している。また、研究所のニュースレター「Health and Nutrition News」および食事摂取基準(英語版)の掲載をはじめ、当研究所の研究成果を英語版ホームページより発信している。さらに、英語版ホームページに問い合わせ用メールアドレスを掲載し、海外からの問い合わせに対応している。

b. 生物統計研究室

日本人の健康・栄養状態をモニタリングする手法を確立するための基礎データを得る目的で、厚生労働省保

険局から特定健診結果を集計表により提供を受け、身体測定値に関して国民健康・栄養調査の結果と比較検討を行った。また、生活習慣病による死亡等の将来予測を行うシミュレーションモデルについては、米国の同様のモデルを参考に、日本版のモデルを検討中である。これに関連して、産業大分類別の死亡に関するシミュレーションモデルを作成し、2020年までの死亡数の変化について予測を行った。

民間企業と秘密保持契約を締結し、商品開発のための介入試験について助言を行った。

c. 研修・連携推進室

●セミナー

第 15 回一般向け公開セミナー(テーマ:健康と栄養をとりまく最新的话题)を平成 26 年 2 月 15 日(土)に開催した。

●社会ニーズ、意見交換会

健康・栄養に関する機関との「意見交換会」を 6 回((独)農業・食品産業技術総合研究機構食品総合研究所、(独)国民生活センター、公益社団法人日本栄養士会、国立保健医療科学院国際協力研究部、公益財団法人健康・体力づくり事業財団、(独)医薬基盤研究所)実施した。また、内閣府食育推進室、消費者庁食品表示課、厚生労働省医薬食品局食品安全部、同健康局がん対策・健康増進課、同大臣官房国際課国際協力室との間で、実務者レベルでの情報・意見交換会を行い、行政ニーズに適宜対応した業務体制を整えた。

●知的財産権

費用対効果を勘案し、本年度は知的財産に係る申請を見送ることとした。

●NR認定制度についての検討など

一般社団法人日本臨床栄養協会と連携して、NR から NR・サプリメントアドバイザーへの移籍手続きを順次実施した。また、アドバイザースタッフ研修会を全国 6 か所(東京、大阪、岡山、名古屋、仙台、福岡)で開催し、健康食品を取り巻く最新の情報やトピックなど NR のスキルアップのための支援を行った。

d. WHO-CC 推進プロジェクトチーム

申請中であった WHO 協力センターの審査が完了し、平成 26 年 3 月に「栄養と身体活動に関する WHO 協力センター(Who Collaborating Centre for Nutrition and Physical Activity)」として正式に指定された。今後の行動計画について、WHO 西太平洋事務局栄養担当官と具体的な協議を進めた。

III 研究成果等の公表

1. 業績目録

【著書】

a. 英文

- 1) Yamada S, Taki Y, Misaka S, Okura T, Deguchi Y, Umegaki K, Watanabe H, Watanabe Y, Skinner M: Bioactives in Fruit: Health Benefits and Functional Foods. Pharmacokinetic and Pharmacodynamic Interaction of Functional Foods with Medicines (Skinner M, Hunter D eds). 2013; 59-79, John Wiley & Sons, Ltd

b. 和文

- 1) 宮地元彦: 「健康づくりのための身体活動基準2013」及び「健康づくりのための身体活動指針(アクティブガイド)」。公益財団法人健康・体力づくり事業財団編, 健康運動指導士基礎講座テキスト. 2013; 39-184
- 2) 鈴木志保子, 宮地元彦: Q&Aでわかる 食事・運動指導のエビデンス50. . 2013; 1-145, 中央法規(東京)
- 3) 宮地元彦: 一生いきいき! 健康ダイアリー2014年版. . 2013; 164-165, 主婦と生活社(東京)
- 4) 澤田亨: 健康づくりのための身体活動の方法. 産業保健・産業栄養指導者専門研修. 2013; 3-14, 中央労働災害防止協会
- 5) 宮地元彦: 健康づくりのための身体活動基準2013とアクティブガイド. 健康づくりのための実践指導、運動と栄養. 2013; 148-157, 講談社サイエンティフィック(東京)
- 6) 大江隆, 宮地元彦, 新開省二: 100歳まで元気に歩ける体づくり 75のコツ. 2013; 1-143, 主婦と生活社(東京)
- 7) 田中茂穂: 身体活動量の定量法とその実際. 健康・体力づくり事業財団 健康運動指導士養成講習会テキスト(下). 2014; 725-730, 南江堂(東京)
- 8) 石見佳子: 機能性食品. 化学便覧 応用化学編第7版. 2014; , 丸善出版
- 9) 石見佳子: 第15章-1. 食生活と健康運動. 公益財団法人健康・体力づくり事業財団編, 健康運動指導士基礎講座テキスト. 2014; 699-706
- 10) 梅垣敬三: III栄養ケアプランの実施「特別用途食品、保健機能食品」の箇所を分担. 新臨床栄養学 栄養ケアマネジメント第2版. 2013; 94-100, 本田佳子編 医歯薬出版
- 11) 三好美紀, 吉池信男: 栄養・食生活. 小川哲平, 猿田享男, 田村政紀編. 健診・人間ハンドブック 改訂5版. 2013; 71-79, 中外医学社
- 12) 三好美紀, 西田美佐: 第2章F. 諸外国の健康・栄養問題の現状 2. 開発途上国. 田中平三, 徳留信寛, 伊達ちぐさ編. 公衆栄養学 改訂第4版.

2013; 56-62, 南江堂

- 13) 三好美紀: 第2章F. 諸外国の健康・栄養問題の現状 3. 地域間格差. 田中平三, 徳留信寛, 伊達ちぐさ編. 公衆栄養学改訂第4版. 2013; 62-63, 南江堂
- 14) 三好美紀: 第3章G. 諸外国の健康・栄養政策 1. 公衆栄養活動に関する国際的な栄養行政組織. 田中平三, 徳留信寛, 伊達ちぐさ編. 公衆栄養学 改訂第4版. 2013; 129-132, 南江堂
- 15) 西信雄, 猿倉薫子, 野末みほ: 国民健康・栄養調査. 田中平三, 徳留信寛, 伊達ちぐさ編, 公衆栄養学. 2013; , 南江堂
- 16) 三好美紀, 石川みどり: 第III部国際保健医療の実際 3. 栄養. 日本国際保健医療学会編 国際保健医療学 第3版. 2013; 120-125, 杏林書院

【原著論文】

a. 英文

- 1) Sukehiro N, Kida N, Umezawa M, Murakami T, Arai N, Jinnai T, Inagaki S, Tsuchiya H, Maruyama H, Tsuda Y: First Report on Invasion of Yellow Fever Mosquito, *Aedes aegypti*, at Narita International Airport, Japan in August 2012. Jpn J Infect Dis. 2013; 66(3):189-194
- 2) Wang Z, Ohnaka K, Morita M, Toyomura K, Kono S, Ueki T, Tanaka M, Kakeji Y, Maehara Y, Okamura T, Ikejiri K, Futami K, Maekawa T, Yasunami Y, Takenaka K, Ichimiya H, Terasaka R: Dietary polyphenols and colorectal cancer risk: The Fukuoka Colorectal Cancer Study. World J Gastroenterol . 2013; 19(17):2683-2690
- 3) Hiramatsu T, Tajima O, Uezono K, Tabata S, Abe H, Ohnaka K, Kono S: Coffee consumption, serum gamma-glutamyltransferase, and glucose tolerance status in middle-aged Japanese men. Clin Chem Lab Med . 2013; 51(6):1233-1239
- 4) Tajima O, Uezono K, Tabata S, Abe H, Ohnaka K, Kono S: CYP1A1, GSTM1, GSTT1 and NQO1 polymorphisms and colorectal adenomas in Japanese men. World J Gastroenterol . 2013; 19(25):4023-4030
- 5) Nishi N, Yoshimura E, Ishikawa-Takata K, Tsuboyama-Kasaoka N, Kubota T, Miyachi M, Tokudome S, Yokoyama Y, Sakata K, Kobayashi S, Ogawa A: Relationship of living conditions with dietary patterns among survivors of the Great East Japan Earthquake. J Epidemiol. 2013; 23(5):376-

- 381
- 6) Tanaka M, Budhathoki S, Hirata A, Morita M, Kono S, Adachi M, Kawate H, Ohnaka K, Takayanagi R: Behavioral and clinical correlates of serum bilirubin concentrations in Japanese men and women. *BMC Endocr Disord.* 2013; 13(1):39
 - 7) Morita M, Yin G, Yoshimitsu S, Ohnaka K, Toyomura K, Kono S, Ueki T, Tanaka M, Kakeji Y, Maehara Y, Okamura T, Ikejiri K, Futami K, Maekawa T, Yasunami Y, Takenaka K, Ichimiya H, Terasaka R: Folate-related nutrients, genetic polymorphisms, and colorectal cancer risk: the Fukuoka Colorectal Cancer Study. *Asian Pac J Cancer Prev.* 2013; 14(11):6249-6256
 - 8) Kahyo T, Tao H, Shinmura K, Yamada H, Mori H, Funai K, Kurabe N, Suzuki M, Tanahashi M, Niwa H, Ogawa H, Tanioka F, Yin G, Morita M, Matsuo K, Kono S, Sugimura H: Identification and association study with lung cancer for novel insertion polymorphisms of human endogenous retrovirus. *Carcinogenesis.* 2013; 34(11):2531-2538
 - 9) Kohno M, Tajima O, Uezono K, Tabata S, Abe H, Adachi M, Kawate H, Nomura M, Ohnaka K, Kono S, Takayanagi R: Cytochrome P450 1A2 polymorphisms, coffee consumption and impaired glucose metabolism in Japanese men. *Endocrinol Metab Syndr.* 2013; 2(3):119
 - 10) Hirata A, Ohnaka K, Tanaka M, Wang Z, Morita M, Toyomura K, Kono S, Takayanagi R: A dietary pattern characterized by a high consumption of vegetables and fruits is related to lower concentrations of serum bilirubin in Japanese women. *J Endocrinol Diabetes Obes.* 2014; 2(1):1013
 - 11) Shinmura K, Goto M, Tao H, Kato H, Suzuki R, Nakamura S, Matsuda T, Yin G, Morita M, Kono S, Sugimura H: Impaired 8-hydroxyguanine repair activity of MUTYH variant p.Arg109Trp found in a Japanese patient with early-onset colorectal cancer. *Oxidative Medicine and Cellular Longevity.* 2014; 2014:1-12
 - 12) Tsuboyama-Kasaoka N, Yuko Hoshi, Kazue Onodera, Shoichi Mizuno, Kazuko Sako: What factors were important for dietary improvement in emergency shelters after the Great East Japan Earthquake?. *Asia Pacific J Clinical Nutr.* In press. 2013;
 - 13) Nozue M, Ishikawa-Takata K, Sarukura N, Sako K, Tsuboyama-Kasaoka N: Stockpiles and food availability in feeding facilities after the Great East Japan Earthquake. *Asia Pacific J Clinical Nutr.* In press. 2013;
 - 14) Nakamura Y, Okamura T, Inohara T, Kohsaka S, Watanabe M, Higashiyama A, Kadota A, Okuda N, Ohkubo T, Nagasawa SY, Miura K, Okayama A, Ueshima H: Prognostic values of bundle branch blocks for cardiovascular mortality in Japanese (24year follow-up of NIPPON DATA80). *J Electrocardiol.* 2013; 46(4):360-365
 - 15) Stamler J, Brown IJ, Daviglus ML, Chan Q, Miura K, Okuda N, Ueshima H, Zhao L, Elliott P: Dietary glycine and blood pressure: the International Study on Macro/Micronutrients and Blood Pressure. *Am J Clin Nutr.* 2013; 98(1):36-45
 - 16) Hisamatsu T, Miura K, Ohkubo T, Yamamoto T, Fujiyoshi A, Miyagawa N, Kadota A, Takashima N, Okuda N, Matasumura Y, Yoshita K, Kita Y, Murakami Y, Nakamura Y, Okamura T, Horie M, Okayama A, Ueshima H: Interaction between dietary marine-derived n-3 fatty acids intake and J-point elevation on the risk of cardiac death: a 24-year follow-up of Japanese men. *Heart.* 2013; 99(14):1024-1029
 - 17) Tsuboyama-Kasaoka N, Takizawa A, T. Utsugi M, Nakade M, Imai E, Kondo A, Yoshida K, Okuda N, Nishi N, Takimoto H: Dietary intake of nutrients with Adequate Intake values in the Dietary Reference Intakes for Japanese. *J Nutr Sci Vitaminol.* 2013; 59(6):584-595
 - 18) T. Utsugi M, Nakade M, Imai E, Tsuboyama-Kasaoka N, Nozue M, Umegaki K, Yoshizawa T, Okuda N, Nishi N, Takimoto H: Distribution of vitamin E intake among Japanese dietary supplement and fortified food users: a secondary analysis from the National Health and Nutrition Survey, 2003-2009. *J Nutr Sci Vitaminol.* 2013; 59(6):576-583
 - 19) T. Utsugi M, Imai E, Nakade M, Matsumoto T, Tsuboyama-Kasaoka N, Nishi N, Tsubono Y: Evaluation of the prevalence of iodine intakes above the tolerable upper intake level from four 3-day dietary records in a Japanese population. *J Nutr Sci Vitaminol.* 2013; 59(4):310-316
 - 20) Inohara T, Kohsaka S, Okamura T, Watanabe M, Nakamura Y, Higashiyama A, Kadota A, Okuda N, Murakami Y, Ohkubo T, Miura K, Okayama A, Ueshima H: Cumulative impact of axial, structural, and repolarization ECG findings on long-term cardiovascular mortality among healthy individuals in Japan: National Integrated Project for Prospective Observation of Non-Communicable Disease and its Trends in the Aged, 1980 and 1990.

- European journal of preventive cardiology. 2013;
- 21) Okuda N, Nishi N, Ishikawa-Takata K, Yoshimura E, Horie S, Nakanishi T, Sato Y, Takimoto H: Understanding of sodium content labeled on food packages by Japanese people [Epub ahead of print]. *Hypertension Research*. 2013;
- 22) Inohara T, Kohsaka S, Okamura T, Watanabe M, Nakamura Y, Higashiyama A, Kadota A, Okuda N, Ohkubo T, Miura K, Okayama A, Ueshima H, the NIPPON DATA 80/90 Research Group: Long-Term Outcome of Healthy Participants with Atrial Premature Complex: A 15-Year Follow-Up of the NIPPON DATA 90 Cohort.. *PLoS One*. 2013; 8(11):
- 23) Nakamura Y, Ueshima H, Okuda N, Miura K, Kita Y, Okamura T, Okayama A, Choudhury SR, Rodriguez B, Masaki KH, Stamler J: Relation of Serum Leptin and Adiponectin Level to Serum C-Reactive Protein: The INTERLIPID Study. *International Journal of Vascular Medicine*. 2013;
- 24) Nakade M, Imai E, T. Utsugi M, Tsuboyama-Kasaoka N, Takimoto H: Systematic classification of evidence for dietary reference intakes for Japanese 2010 (DRIs-J 2010) in adults and future prospects of DRIs in Asian countries. *Asia Pacific J Clin Nutr*. 2013; 22(4):474-489
- 25) Hisamatsu T, Miura K, Ohkubo T, Yamamoto T, Fujiyoshi A, Miyagawa N, Kadota A, Takashima N, Okuda N, Yoshita K, Kita Y, Murakami Y, Nakamura Y, Okamura T, Horie M, Okayama A, Ueshima H, NIPPON DATA80 Research Group: A Higher Dietary Long-chain n-3 Fatty Acids Intake Attenuates the Effect of a Higher Resting Heart Rate on the Risk of Cardiovascular Mortality: A 24-Year Follow-up of the Japanese General Population. *Journal of Cardiology*. 2014;
- 26) Miyagawa N, Miura K, Okuda N, Kadowaki T, Takashima N, Nagasawa S, Nakamura Y, Matsumura Y, Hozawa A, Fujiyoshi A, Hisamatsu T, Yoshita K, Sekikawa A, Ohkubo T, Abbott RD, Okamura T, Okayama A, Ueshima H: Long-chain n-3 polyunsaturated fatty acids intake and cardiovascular disease mortality risk in Japanese: A 24-year follow-up of NIPPON DATA80. *Atherosclerosis*. 2014; 232(2):384-389
- 27) Hisamatsu T, Miura K, Ohkubo T, Yamamoto T, Fujiyoshi A, Miyagawa N, Kadota A, Takashima N, Okuda N, Yoshita K, Kita Y, Murakami Y, Okamura T, Horie M, Okayama A, Ueshima H, for the NIPPON DATA Research Group: High long-chain n-3 fatty acid intake attenuates the effect of high resting heart rate on cardiovascular mortality risk: A 24-year follow-up of Japanese general population (Epub ahead of print). *J Cardiol*. 2014;
- 28) Takezawa J, Yamada K, Miyachi M, Morita A, Aiba N, Sasaki S, Watanabe S, SCOP Study Group : Preproghrelin gene polymorphisms in obese Japanese women: Minor homozygotes are light eaters, do not prefer protein or fat, and apparently have a poor appetite. *Appetite*. 2013; 63:105-111
- 29) Kamada M, Kitayuguchi J, Inoue S, Ishikawa Y, Nishiuchi H, Okada S, Harada K, Kamioka H, Shiwaku K: A community-wide campaign to promote physical activity in middle-aged and elderly people: a cluster randomized controlled trial. *Int J Behav Nutr Phys Act*. 2013; 10:44
- 30) Fukunaka Y, Sawada SS, Nishiura C, Noguchi J, Tsukamoto K, Otsuji Y, Marui E: Susceptibility to Upper Respiratory Tract Infection and Touching of the Eyes or Nose: A Cross-sectional Study of Japanese Workers. *Journal of Occupational Health*. 2013; 55(2):66-73
- 31) Wang G, Mikami E, Chiu LL, DE Perini A, Deason M, Fuku N, Miyachi M, Kaneoka K, Murakami H, Tanaka M, 他15名, Pitsiladis YP: Association analysis of ACE and ACTN3 in elite Caucasian and East Asian swimmers. *Med Sci Sports Exerc*. 2013; 45(5):892-900
- 32) Fujie S, Iemitsu M, Murakami H, Sanada K, Kawano H, Gando Y, Kawakami R, Miyachi M: Higher cardiorespiratory fitness attenuates arterial stiffening associated with the Ala54Thr polymorphism in FABP2. *Physiol Genomics*. 2013; 45(6):237-242
- 33) Goto A, Morita A, Goto M, Sasaki S, Miyachi M, Aiba N, Kato M, Terauchi Y, Noda M, Watanabe S: Validity of Diabetes Self-Reports in the Saku Diabetes Study. *J Epidemiology*. 2013; 23(4):295-300
- 34) Goto M, Goto A, Morita A, Deura K, Sasaki S, Aiba N, Shimbo T, Terauchi Y, Miyachi M, Noda M, Watanabe S: Low-molecular-weight adiponectin and high-molecular-weight adiponectin levels in relation to diabetes. *Obesity*. 2013; Epub ahead of print:
- 35) Uchida M, Oyanagi E, Miyachi M, Yamauchi A, Yano H: Relationship between macrophage differentiation and the chemotactic activity toward damaged myoblast cells. *J Immunol Methods*. 2013; 393(1-2):61-69
- 36) Sloan RA, Sawada SS, Girdano D, Liu YT,

- Biddle SJ, Blair SN: Associations of sedentary behavior and physical activity with psychological distress: a cross-sectional study from Singapore. *BMC Public Health*. 2013; 13(1):885
- 37) Aoyama T, Tsuishita K, Miyatake N, Numata T, Miyachi M, Tabata I, Cao ZB, Skamoto S, Higuchi M: Does Cardiorespiratory Fitness Modify the Association between Birth Weight and Insulin Resistance in Adult Life?. *PLOS ONE*. 2013; 0073967:
- 38) Mikami E, Fuku N, Kong QP, Takahashi H, Ohiwa N, Murakami H, Miyachi M, Higuchi M, Tanaka M, Pitsiladis Y, Kawahara T: Comprehensive analysis of common and rare mitochondrial DNA variants in elite Japanese athletes: a case–control study. *Journal of Human Genetics*. 2013; 58(12):780-787
- 39) Kawano H, Yamamoto K, Gando Y, Tanimoto M, Murakami H, Ohmori Y, Sanada K, Tabata I, Higuchi M, Miyachi M: Lack of Age-Related Increase in Carotid Artery Wall Viscosity in Cardiorespiratory Fit Men. *Journal of Hypertension*. 2013; 31(12):2370-2379
- 40) Kawakami R, Sawada SS, Matsuishita M, Okamoto T, Tsukamoto K, Higuchi M, Miyachi M: Reference Values for Cardiorespiratory Fitness and Incidence of Type 2 Diabetes. *J Epidemiology*. 2013; Epub ahead of print:
- 41) Oda K, Miyatake N, Saito T, Miyachi M, Izumi T, Numata T: Serum Interleukin-18 Levels Are Associated with Physical Activity in Japanese Men. *PLOS ONE*. 2013; 8(12):e81497
- 42) Miyatake N, Wada J, Nakatsuka A, Sakano N, Teshigawara S, Miyachi M, Tabata I, Numata T: Serum vaspin levels are associated with physical activity or physical fitness in Japanese: a pilot study. *Environ Health Prev Med*. 2014; Epub ahead of print:
- 43) Uchida M, Oyanagi E, Kawanishi N, Imitsu M, Miyachi M, Kremenik M, Onodera S, Yano H: Exhaustive exercise increases the TNF- α production in response to flagellin via the upregulation of toll-like receptor 5 in the large intestine in mice. *Immunol Lett*. 2014; Epub ahead of print:
- 44) Mikami E, Fuku N, Murakami H, Tsuchie H, Takahashi H, Ohiwa N, Tanaka H, Pitsiladis YP, Higuchi M, Miyachi M, Kawahara T, Tanaka M: ACTN3 R577X Genotype is Associated with Sprinting in Elite Japanese Athletes. *Int J Sports Med*. 2014; 35(2):172-177
- 45) Garatachea N, Emanuele E2, Calero M, Fuku N, Arai Y, Abe Y, Murakami H, Miyachi M, Yvert T, Verde Z, Zea MA, Venturini L, Santiago C, Santos-Lozano A, Rodríguez G, Ricevuti G, Hirose N, Rábano A, Lucia A: ApoE gene and exceptional longevity: Insights from three independent cohorts. *Exp Gerontol*. 2014; Epub ahead of print:
- 46) Gando Y, Murakami H, Kawano H, Tanaka N, Sanada K, Tabata I, Higuchi M, Miyachi M: Light-Intensity Physical Activity is Associated with Insulin Resistance in Elderly Japanese Women Independent of Moderate-to Vigorous-Intensity Physical Activity. *J Phys Act Health*. 2014; 11(2):266-271
- 47) Murakami H, Iemitsu M, Fuku N, Sanada K, Gando Y, Kawakami R, Tanaka N, Miyachi M: The Q223R Polymorphism in the Leptin Receptor Associates With Objectively Measured Light Physical Activity in Free-living Japanese. *Physiol Behav*. 2014; Epub ahead of print:
- 48) Koitaya N, Sekiguchi M, Tousen Y, Nishide Y, Morita A, Yamauchi J, Gando Y, Miyachi M, Aoki M, Komatsu M, Watanabe F, Morishita K, Ishimi Y: Low-dose vitamin K2 (MK-4) supplementation for 12 months improves bone metabolism and prevents forearm bone loss in postmenopausal Japanese women. *J Bone Miner Metab*. 2014; 32(2):142-150
- 49) Tripette J, Murakami H, Gando Y, Kawakami R, Sasaki A, Hanawa S, Hirisako A, Miyachi M: Home-Based Active Video Games to Promote Weight Loss during the Postpartum Period. *Med Sci Sports Exerc*. 2014; 46(3):472-478
- 50) Pinos T, Fuku N, Camera Y, Arai Y, Abe Y, Roderiguez-Romo G, Garatachea N, Santos-Lozano A, Miro-Casas E, Ruiz-Meana M, Otaegui I, Murakami H, Miyachi M, Garcia-Dorado D, Hinohara K, Andreu AL, Kimura A, Hirose N, Lucia A: The rs1333049 polymorphism on locus 9p21.3 and extreme longevity in Spanish and Japanese cohorts. *Age*. 2014; 36(2):933-943
- 51) Yamada T, Hara K, Umematsu H, Kadowaki T: Male pattern baldness and its association with coronary heart disease: a meta-analysis. *BMJ Open*. 2013; 3(4):e002537
- 52) Iwasaki Y, Shimomura K, Kohno D, Dezaki K, Ayush EA, Nakabayashi H, Kubota N, Kadowaki T, Kakei M, Nakata M, Yada T: Insulin Activates Vagal Afferent Neurons Including those Innervating Pancreas via Insulin Cascade and Ca²⁺ Influx: Its Dysfunction in IRS2-KO Mice with Hyperphagic Obesity. *PLoS One*. 2013; 8(6):e67198

- 53) Kubota T, Kubota N, Kadowaki T: The role of endothelial insulin signaling in the regulation of glucose metabolism. *Rev Endocr Metab Disord.* 2013; 14(2):207-216
- 54) Nakaya K, Kubota N, Takamoto I, Kubota T, Katsuyama H, Sato H, Tokuyama K, Hashimoto S, Goto M, Jomori T, Ueki K, Kadowaki T: Dipeptidyl peptidase-4 inhibitor anagliptin ameliorates diabetes in mice with haploinsufficiency of glucokinase on a high-fat diet. *Metabolism.* 2013; 62(7):939-951
- 55) Wang J, Zhou Y, Koizumi N, Kubota N, Asano T, Yuhashi K, Mitake T, Itani K, Takahashi T, Takeishi S, Sasaki S, Kadowaki T, Sakuma I, Liao H: Automatic distance measurement of abdominal aorta for ultrasonography-based visceral fat estimation. *Conf Proc IEEE Eng Med Biol Soc.* 2013; 6486-6489
- 56) Yamada T, Hara K, Kadowaki T: Chewing betel quid and the risk of metabolic disease, cardiovascular disease, and all-cause mortality: a meta-analysis. *PLoS One.* 2013; 8(8):e70679
- 57) Yamada T, Hara K, Kadowaki T: Comment on: Lin et al. Long-Term Changes in Adiposity and Glycemic Control Are Associated With Past Adenovirus Infection. *Diabetes Care* 2013;36:701-707. *Diabetes Care.* 2013; 36(9):e161
- 58) Shirakawa J, Togashi Y, Sakamoto E, Kaji M, Tajima K, Orime K, Inoue H, Kubota N, Kadowaki T, Terauchi Y: Glucokinase activation ameliorates ER stress-induced apoptosis in pancreatic β -cells. *Diabetes.* 2013; 62(10):3448-3458
- 59) Kumagai H, Kubota N, Kubota T, Takahashi T, Inoue M, Kawai T, Iwayama K, Moroi M, Sugi K, Kadowaki T: Combined treatment with low-dose pioglitazone and beraprost sodium improves glucose intolerance without causing body weight gain. *Diabetology International.* 2013; 4(4):226-232
- 60) Hara K, Fujita H, Johnson TA, Yamauchi T, Yasuda K, Horikoshi M, Peng C, Hu C, Ma RC, Imamura M, Iwata M, Tsunoda T, Morizono T, Shojima N, So WY, Leung TF, Kwan P, Zhang R, Wang J, Kadowaki T: Genome-wide association study identifies three novel loci for type 2 diabetes. *Hum Mol Genet.* 2014; 23(1):239-246
- 61) Takamoto I, Kubota N, Nakaya K, Kumagai K, Hashimoto S, Kubota T, Inoue M, Kajiwarra E, Katsuyama H, Obata A, Sakurai Y, Iwamoto M, Kitamura T, Ueki K, Kadowaki T: TCF7L2 in pancreatic beta cells plays crucial roles in glucose homeostasis by regulating beta-cell mass. *Diabetologia.* 2014; 57(3):542-553
- 62) Kaneko K, Ito C, Koizumi K, Watanabe S, Umeda Y, Ishikawa-Takata K: Resting energy expenditure (REE) in six- to seventeen-year-old Japanese children and adolescents. *J Nutr Sci Vitaminiol.* 2013; 59(4):299-309
- 63) Ishikawa-Takata K, Kaneko K, Koizumi K, Ito C: Comparison of physical activity energy expenditure in Japanese adolescents assessed by EW4800P triaxial accelerometry and the doubly labeled water method. *Br J Nutr.* 2013; 110(7):1347-1355
- 64) Park J, Ishikawa-Takata K, Tanaka S, Hikiyama Y, Ohkawara K, Watanabe S, Miyashi M, Morita A, Aiba N, Tabata I: The relationship of body composition to daily physical activity in free-living Japanese adult men. *Br J Nutr.* 2014; 111(1):182-188
- 65) Ishii S, Tanaka T, Shibasaki K, Ouchi Y, Kikutani T, Higashiguchi T, Obuchi S, Ishikawa-Takata K, Hirano H, Kawai H, Tsuji T, Iijima K: Development of a simple screening test for sarcopenia in older adults. *Geriatr Gerontol Int.* 2014; 14(Suppl 1):93-101
- 66) Kageyama H, Endo K, Osaka T, Watanabe J, Wang LH, Ito K, Suzuki M, Sakagami J, Takenoya F, Shioda S: Galanin-like peptide (GALP) facilitates thermogenesis via synthesis of prostaglandin E2 by astrocytes in the periventricular zone of the third ventricle. *J Mol Neurosci.* 2013; 50:443-452
- 67) Ando T, Usui C, Ohkawara K, Miyake R, Miyashita M, Park JH, Ezaki O, Higuchi M, Tanaka S: Effects of intermittent physical activity on fat utilization over a whole day. *Med Sci Sports Exerc.* 2013; 45(7):1410-1418
- 68) Tanaka C, Tanaka S: Objectively-measured physical activity and body weight in Japanese pre-schoolers. *Ann Hum Biol.* 2013;
- 69) Tanaka C, Fujiwara Y, Sakurai R, Fukaya T, Yasunaga M, Tanaka S: Locomotive and non-locomotive activities evaluated with a triaxial accelerometer in adults and elderly individuals. *Aging Clin Exp Res.* 2013; 25(6):637-643
- 70) Yamauchi J, Sekiguchi M, Shirai M, Ymada M, Ishimi Y: Role of Nuclear Localization of PSM1 in Transcriptional Activation. *Bioscience, Biotechnology, and Biochemistry.* 2013; 77(8):1785-1787
- 71) Watanabe J, Oki T, Takebayashi J, Yamasaki

- K, Takano-Ishikawa Y, Hino A, Yasui A: Improvement of the lipophilic-oxygen radical absorbance capacity (L-ORAC) method and single-laboratory validation. *Bioscience, Biotechnology, and Biochemistry*. 2013; 77(4):857-859
- 72) Nishide Y, Tadaishi M, Kobori M, Tousen Y, Kato M, Inada M, Miyaura C, Ishimi Y: Possible role of S-equol on bone loss via amelioration of inflammatory indices in ovariectomized mice. *J Clin Biochem Nutr*. 2013; 53(1):41-48
- 73) Miura S, Kai Y, Tadaishi M, Tokutake Y, Sakamoto K, Bruce CR, Febbraio MA, Kita K, Chohnan S, Ezaki O: Marked phenotypic differences of endurance performance and exercise-induced oxygen consumption between AMPK and LKB1 deficiency in mouse skeletal muscle: changes occurring in the diaphragm. *Am J Physiol Endocrinol Metab*. 2013; 305(2):E213-E229
- 74) Tousen Y, Uehara M, Abe F, Kimira Y, Ishimi Y: Effects of short-term fructooligosaccharide intake on equol production in Japanese postmenopausal women consuming soy isoflavone supplements: a pilot study. *Nutr J*. 2013; 12(1):127
- 75) Sun X, Cao ZB, Zhang Y, Ishimi Y, Tabata I, Higuchi M: Association between serum 25-hydroxyvitamin D and inflammatory cytokines in healthy adults. *Nutrients*. 2014; 6:221-230
- 76) Chiba T, Kim H, Matsumoto A, Ishimi Y, Suzuki K, Uehara M: Hesperidin prevents androgen deficiency-induced bone loss in male mice. *Phytother Res*. 2014; 28(2):289-295
- 77) Tadaishi M, Nishide Y, Tousen Y, Kruger M, Ishimi Y: Cooperative effects of soy isoflavones and carotenoids on osteoclast formation. *J Clin Biochem Nutr*. 2014; 54:109-115
- 78) Miyauchi S, Wakuda H, Taki Y, Maruyama K, Kagota S, Umegaki K, Yamada S, Shinozuka K: Determination of the effects of green tea extract and fruit extracts on P-glycoprotein activity in Caco-2 cells by using a new method involving confocal laser scanning microscopy. *Pharmacometrics*. 2013; 84(1/2):7-12
- 79) Virgona N, Taki Y, Yamada S, Umegaki K: Dietary *Coleus forskohlii* extract generates dose-related hepatotoxicity in mice. *J Appl Toxicol*. 2013; 33(9):924-32
- 80) Shinozaki S, Chiba T, Kokame K, Miyata T, Kaneko E, Shimokado K: A Deficiency of Herp, an Endoplasmic Reticulum Stress Protein, Suppresses Atherosclerosis in ApoE Knockout Mice by Attenuating Inflammatory Responses. *PLOS ONE*. 2013; 8(10):e75249
- 81) Ikeda N, Sapienza D, Guerrero R, Aekplakorn W, Naghavi M, Mokdad AH, Lozano R, Murray CJL, Lim SS: Control of hypertension with medication: a comparative analysis of national surveys in 20 countries. *Bulletin of the World Health Organization*. 2014; 92(1):10-19C
- ### b. 和 文
- 1) 村上晴香, 吉村英一, 高田和子, 長谷川祐子, 窪田哲也, 笠岡(坪山)宜代, 西信雄, 横山由香里, 八重樫由美, 坂田清美, 小林誠一郎, 宮地元彦, 徳留信寛: 東日本大震災被災者健康調査の質問票における身体活動関連項目の妥当性および再現性の検討. *日本公衆衛生雑誌*. 2013; 60(4):222-230
 - 2) 藤井誠, 鈴木裕子, 日原隆, 富澤啓一, 中野泰之, 實吉佐知子, 本馬恭子, 岡田誠治, 丸山浩: 成田空港検疫所における健康相談室来室の「きっかけ」に関する分析. *日本検疫医学会誌*. 2013; 15(1):2-7
 - 3) 網谷有希子, 須藤紀子, 笠岡(坪山)宜代, 石川文子, 迫和子: 首都圏B市における東日本大震災を踏まえた保育所の食事に関する災害対策の再構築. *日本栄養士会雑誌*, 印刷中. 2013;
 - 4) 迫和子, 網谷有希子, 須藤紀子, 笠岡(坪山)宜代, 石川文子: 保育所における災害時の栄養・給食対応に関する研究. *保育科学研究*. 2013; 3:33-41
 - 5) 孫田みなみ, 笠岡(坪山)宜代, 瀧沢あす香, 坪田(宇津木)恵, 今井絵理, 岡純: 政府が策定する食事指針・ガイドにおける食事摂取基準の活用状況. *栄養学雑誌*. 2013; 71(Supplement):S56-S63
 - 6) 吉澤剛士, 奥田奈賀子, 西信雄: 国民健康・栄養調査の身体状況調査における自己申告値の検討. *日循予防誌*. 2013; 48(3):173-181
 - 7) 岡山明, 奥田奈賀子, 中村幸志, 三浦克之, 安村誠司, 坂田清美, 日高秀樹, 岡村智教, 西村邦宏: 特定保健指導の効果評価と対照設定の方法に関する研究 (in press). *総合健診*. 2014;
 - 8) 村上晴香, 吉村英一, 高田和子, 西信雄, 笠岡(坪山)宜代, 横山由香里, 八重樫由美, 坂田清美, 小林誠一郎, 宮地元彦: 仮設住宅に居住する東日本大震災被災者における身体活動量の1年間の変化. *日本公衆衛生雑誌*. 2014; 61(2):86-92
 - 9) 星裕子, 小野寺和恵, 岩渕香菜, 泉明那, 斉藤長徳, 西村一弘, 石川祐一, 梶忍, 下浦佳之, 迫和子: 東日本大震災の避難所で食事提供に影響した要因の事例解析. *日本災害食学会誌* 印刷中. 2014;

- 10) 吉村英一, 高田和子, 長谷川祐子, 村上晴香, 野末みほ, 猿倉薫子, 中出麻紀子, 窪田哲也, 三好美紀, 坪田(宇津木)恵, 井上真理子, 由田克士, 奥田奈賀子, 宮地元彦, 笠岡(坪山)宜代, 西信雄, 横山由香里, 八重樫由美, 坂田清美, 小林誠一郎, 徳留信寛: 釜石市の仮設住宅に居住している東日本大震災被災者の食物摂取状況. 岩手公衆衛生学会誌. 2014; 25(2):7-14
- 11) 松下宗洋, 宮地元彦, 川上諒子, 岡本隆史, 塚本浩二, 中田由夫, 荒尾孝, 澤田亨: 全身持久力および飲酒習慣が全がん死亡率に与える影響: 日本人男性を対象としたコホート研究. 体力科学. 2013; 62(5):375-381
- 12) 吉田明日美, 高田和子, 藤井瑞恵, 戸谷誠之: 女性陸上短距離選手における自意識と食事記録法によるエネルギー摂取量の評価誤差との関連. 日栄食誌. 2013; 66(2):101-107
- 13) 村田浩子, 高田和子, 夏井裕明, 田口素子: 柔道女子重量級競技者における身体組成の特徴とメタボリックシンドロームのリスク. 日本臨床スポーツ医学会誌. 2013; 21(3):623-631
- 14) 細山田康恵, 金子佳代子, 高田和子, 山口蒼生子: 幼児の皮下脂肪厚と体密度、体脂肪率並びに体格に関する研究. 日本食生活学会誌. 2014; 24(4):246-253
- 15) 西本裕紀子, 位田忍, 恵谷ゆり, 海老根直之, 中江悟司, 宮谷秀一, 吉田幸恵: 二重標識水法と呼気ガス分析法による低身長児の総エネルギー消費量についての検討. 日本栄養・食糧学会誌. 2013; 66(3):133-139
- 16) 中江悟司, 山田陽介, 木村みさか, 鈴木和弘, 小澤治夫, 平川和文, 石井好二郎: 児童の日常生活中におけるエネルギー消費量と体格・体力との連関 - 二重標識水法および加速度計法を用いた検討 -. 体力科学. 2013; 62(5):353-360
- 17) 大島秀武, 中江悟司, 山田陽介, 木村みさか, 小澤治夫, 鈴木和弘, 平川和文, 石井好二郎: 子どもの各種身体活動従事時間と身体活動レベルとの関係. 体力科学. 2013; 62(5):391-397
- 18) 佐藤陽子, 中西朋子, 横谷馨倫, 千葉剛, 梅垣敬三: 葉酸およびそのサプリメント摂取に対する妊婦, 管理栄養士・栄養士, 管理栄養士・看護師養成校の学生の認識. 栄養学雑誌. 2013; 71(4):204-212
- 19) 梅垣敬三, 山田浩, 千葉剛, 中西朋子, 佐藤陽子, 福山哲: 健康食品に関する健康被害事例の情報源およびその有用性評価. 食衛誌. 2013; 54(4):282-289
- 20) 一丸佳代, 井出和希, 小野彩奈, 北川護, 成島大智, 松本圭司, 梅垣敬三, 山田浩: 健康食品の摂取に伴う有害事象の因果関係評価のための樹枝状アルゴリズムの改変. 臨床薬理. 2013; 44(5):405-410
- 21) 西信雄: 国家レベルの減塩に関するシミュレーションモデル. システムダイナミクス. 2013; 12:33-40
- 22) 野末みほ, 三好美紀, 石川みどり: 国際栄養分野の研修・教材のニーズに関するキャリアの段階別による検討. 国際保健医療. 2013; 28(2):81-91
- 23) 野末みほ, 三好美紀, 石川みどり, 草間かおる, 水元芳, 吉池信男: 青年海外協力隊栄養士の帰国後の就業, 社会活動, コンピテンシー到達度, 及び基本コンピテンシーと関連する因子について. 栄養学雑誌. 2013; 71(4):213-224

【総説】

a. 英文

該当無し

b. 和文

- 1) 澤田亨, 村上晴香, 川上諒子, 宮地元彦: 健康日本21(第二次)・身体活動基準2013およびアクティブガイド. 日本食生活学会誌. 2013; 24(3):139-142
- 2) 宮地元彦, 村上晴香, 澤田亨, 川上諒子, 田中憲子, 田中茂穂, 高田和子, 宮武伸行, 小熊祐子, 種田行男, 田畑泉: 健康づくりのための身体活動基準・指針2013の概要. 日本栄養士会雑誌. 2013; 56(3):4-13
- 3) 渡邊昌, 宮地元彦, 平川あずさ, 日本抗加齢学会食事運動がドライン策定部会: 健康高齢者向け食事運動指針(1). 医と食. 2013; 5(2):76-80, (公財)生命科学振興会(東京)
- 4) 渡邊昌, 森田明美, 宮地元彦, 平川あずさ, 日本抗加齢医学会食事運動療法ガイドライン策定部会: 有病者向け食事運動療法指針(2). 医と食. 2013; 5(2):81-84, (公財)生命科学振興会(東京)
- 5) 澤田亨: 糖尿病に関する運動疫学研究. Diabetes Frontier. 2013; 24(2):150-154
- 6) 澤田亨: 運動基準策定のエビデンス. 日本臨床スポーツ医学会誌. 2013; 21(2):323-326
- 7) 澤田亨, 村上晴香, 川上諒子, 宮地元彦: 健康づくりのための体力の基準値の考え方と活用. 臨床栄養. 2013; 123(1):36-43
- 8) 村上晴香, 川上諒子, 田中憲子, 宮地元彦: 高齢者における目標値の設定法と考え方. 臨床栄養. 2013; 123(1):31-35
- 9) 宮地元彦, 村上晴香, 川上諒子, 田中憲子, 田中茂穂, 高田和子, 宮武伸行, 小熊裕子, 澤田亨, 種田行男, 田畑泉: 健康づくりのための身体活動基準2013とアクティブガイドの策定手順と概要. 臨床栄養. 2013; 123(1):24-30
- 10) 中田由夫, 宮地元彦: 特定保健指導における運動指導(ポイント, 効果). 肥満研究. 2013; 19(2):89-94
- 11) 鎌田真光: 身体活動を促進するポピュレーション戦略のエビデンスをいかに作るか?. 運動疫学研究. 2013; 15(2):61-70
- 12) 澤田亨, 村上晴香, 川上諒子, 宮地元彦: わが国の疫学的知見からみた身体活動基準. 体育の

- 科学. 2013; 63(12):944-949
- 13) 村上晴香, 川上諒子, 宮地元彦: 身体活動と運動のそれぞれの意義. 体育の科学. 2013; 63(12):950-955
- 14) 宮地元彦: 身体活動基準・指針策定の意義. 運動基準・指針から身体活動基準・指針へ. 体育の科学. 2013; 63(12):928-932, 杏林書院(東京)
- 15) 宮地元彦, 村上晴香: 健康づくりのための身体活動指針(アクティブガイド)の概要. 特集「新しい身体活動基準・アクティブガイドをめぐって」、臨床スポーツ医学. 2014; 31(1):18-24, 文光堂(東京)
- 16) 宮地元彦: 次期改定に向けての課題と必要なエビデンス. 特集「新しい身体活動基準・アクティブガイドをめぐって」、臨床スポーツ医学. 2014; 31(1):74-77, 文光堂(東京)
- 17) 笠岡(坪山)宜代: いざ!という災害時に、食で命を守る専門職を育てるために!. 日本栄養士会 礎. 2013;
- 18) 奥田奈賀子, 上島弘嗣: 海外における食塩摂取量の推移と現状 -24時間蓄尿用いた推定食塩摂取量より-. カレントセラピー. 2013; 31(10):14-19
- 19) 奥田奈賀子: 国民健康・栄養調査の現状. 公衆衛生. 2013; 77(10):857-859
- 20) 笠岡(坪山)宜代: アミノ酸の機能 ~タウリンを中心として~. New Diet therapy. 2014;
- 21) 脇裕典, 窪田直人, 窪田哲也, 門脇孝: 血管内皮のインスリン抵抗性と老化. Heart View. 2013; 17(4):385-392
- 22) 窪田直人, 門脇孝: ピオグリタゾンとロシグリタゾンの相違(安全性). 期待されるチアゾリジン薬. 2013;
- 23) 窪田直人, 門脇孝: チアゾリジン薬. 糖尿病の分子標的と治療薬辞典. 2013; 263-265
- 24) 窪田直人, 門脇孝: 膵β細胞維持におけるインスリンシグナルの役割. 腎と透析. 2013; 75(2):178-182
- 25) 窪田哲也, 窪田直人, 門脇孝: 見る脂質のページ 最先端可視化技術がもたらすサイエンスへのインパクト Visualization does not need legends 血管と細胞の組織間隙の可視化. The Lipid. 2013; 24(4):316-321
- 26) 小畑淳史, 窪田直人, 門脇孝: SGLT・レッシン SGLT2阻害薬の開発とその作用機序. Diabetes Update. 2013; 2(4):244-248
- 27) 窪田直人, 門脇孝: 小腸を標的とした糖尿病治療について インクレチン. Medical Science Digest. 2013; 39(14):668-671
- 28) 窪田直人, 門脇孝: インクレチン関連薬に関する疑問に答える DPP-4阻害薬の血糖降下以外の作用. 内科. 2014; 113(1):93-96
- 29) 山内淳: トコトリエノール研究: 過去から現在へ. 栄養学レビュー(翻訳). 2013; 21(3):
- 30) 山内淳: 食品保健制度の現状と課題 -特に食品表示について-. 日本食生活学会誌. 2013; 24(1):3-6
- 31) 千葉剛, 梅垣敬三: 健康食品の国際比較. 公衆衛生. 2013; 77(9):772-775, 医学書院
- 32) 梅垣敬三: いわゆる健康食品の安全性確保. 食品衛生学雑誌. 2013; 54(6):J-408-412

【解説等】

a. 英文

該当無し

b. 和文

- 1) 古野純典: コーヒー飲用と2型糖尿病. イルシー. 2013; 1-6
- 2) 古野純典: 巻頭言 「食と運動」の健康研究. 公衆衛生情報. 2013; 43(4):1
- 3) 古野純典: コーヒー飲用と肝臓病・糖尿病の予防. 月刊基金. 2013; 54(8):2-4
- 4) 古野純典: 提言 食品衛生についての懸念. 食品衛生研究. 2013; 63(8):1
- 5) 古野純典: 健康・栄養研究所と国民栄養調査. 日本疫学会ニュースレター. 2013; 1-2
- 6) 佐藤陽子, 古野純典: ニンニクの血清脂質に対する効果: 最新版メタ解析. 栄養学レビュー(翻訳). 2014; 22(2):111-131
- 7) 宮地元彦: ストレッチを生活に取り入れよう. NHKきょうの健康 一生いきいき! 健康ダイアリー-2014年度版. 2013;
- 8) 岡浩一朗, 井上茂, 柴田愛, 江川賢一, 鎌田真光, 澤田亨, 志村広子, 内藤義彦: 「非感染性疾患予防: 身体活動への有効な投資」日本語版の紹介. 運動疫学研究. 2013; 15(1):17-30
- 9) 宮地元彦: 健康日本21(第2次)と運動基準・運動指針の改定. 日本臨床スポーツ医学会誌. 2013; 21(2):317-319
- 10) 宮地元彦: 身体活動・運動を活発にする技術. 保健の科学. 2013; 55(5):304-307, 杏林書院
- 11) 澤田亨: 健康づくりQ&A 効果的な身体活動量について. 健康づくり. 2013; 422(6):26-26
- 12) 宮地元彦: 70歳以上の身体活動量の目安-健康づくりのための身体活動基準2013から. 日本医事新報. 2013; 56-57
- 13) 宮地元彦: 宮地元彦さんのカラダ若返り30秒ストレッチ 第3回 おなかと脇腹. NHKためしてガッテン. 2013; 32-33
- 14) 宮地元彦: マスルトレーニングの是非: 非. ANTI-AGING MEDICINE. 2013; 9(3):420-423, メディカルレビュー
- 15) 重松良祐, 鎌田真光: 実験室と実社会を繋ぐ「橋渡し研究」の方法: RE-AIMモデルを中心として. 体育学研究. 2013; 58:373-378
- 16) 宮地元彦: 身体活動・運動とアンチエイジング. Geriatric Medicine(老年医学). 2013; 51(7):677-680, ライフ・サイエンス
- 17) 澤田亨: フィットネスレベルと糖尿病, がん. DITN(Diabetes in the news). 2013; 4

- 18) 宮地元彦: 運動で健康しなやかな筋肉をめざせ. NHKテレビテキスト きょうの健康. 2013; 28-33, 東京都渋谷区宇田川町41-1
- 19) 宮地元彦: 運動からみた高齢期の健康増進: 身体活動基準2013とアクティブガイド. Geriatric Medicine. 2013; 51(9):901-905, ライフ・サイエンス
- 20) 宮地元彦: 健康づくりのための身体活動指針: アクティブガイド. 日本栄養士会雑誌. 2013; 56(9):10-12, 公益社団法人 日本栄養士会
- 21) 宮地元彦: メタボとロコモを予防・改善する身体活動・運動. 「健康りづくえを考える」県民のための健康推進活動情報誌 PREVE74. 2013; 6-6
- 22) 宮地元彦: 健康づくりのための身体活動・運動と栄養—新しい身体活動指針とロコモティブシンドロームの予防—. ヘルシスト221. 2013; 37(5):30-31
- 23) 宮地元彦: 国民一人ひとりの健康寿命延伸を目指して「健康づくりのための身体活動基準2013」と「アクティブガイド」まとまる. Nursing BUSINESS. 2013; 7(9):54-55
- 24) 宮地元彦: 宮地元彦さんのカラダ若返り30秒ストレッチ 第4回 お尻・股関節. NHKためしてガッテン. 2013; 80-81
- 25) 宮地元彦: 100歳まで歩ける体づくり. NHKきょうの健康 一生きいき!健康ダイアリー2014年度版. 2013; 136-137
- 26) 宮地元彦: 健康づくりのための身体活動基準2013とアクティブガイド. 公衆衛生情報. 2013; 43(7):4-5
- 27) 宮地元彦: 健康づくりのための身体活動基準2013・身体活動指針〜アクティブガイド〜. 健康づくり. 2013; 6-6
- 28) 鷹羽智子: Duchenne型筋ジストロフィー患者の栄養管理. 神経内科. 2013; 79(2):204-210, 科学評論社
- 29) 高田和子: 高齢者の身体活動基準値策定のためのエビデンス. 臨床スポーツ医学. 2014; 31(1):30-35, 文光堂
- 30) 田中茂穂: 健康づくりQ & A「基礎代謝量を増やすためには」. 健康づくり. 2013; 25, 健康・体力づくり事業財団(東京)
- 31) 竹林純, 沖智之, 渡辺純, 山崎光司, 陳健斌, 古川(佐藤)麻紀, 坪田(宇津木)恵, 卓興鋼, 後藤一寿, 松本輝樹, 石見佳子: 日本において一般的に食されている野菜・果物の親水性抗酸化能およびこれらの食品からの親水性抗酸化物質一日摂取量の推算. ビタミン. 2013; 87:274-276
- 32) 山内淳: 特別企画 基礎から制度改革まで「食品表示」をおさえる. 月刊 糖尿病ライフさかえ. 2013; 53(8):17-23, (公社)日本糖尿病協会
- 33) 中西朋子, 佐藤陽子, 千葉剛, 梅垣敬三: ハーブ系の健康食品素材に関する有効性と安全性の最新情報 プエラリア・ミリフィカ. 医と食. 2013; 5(2):102-104
- 34) 梅垣敬三: ハーブサプリメントと医薬品の相互作用. Medical Herb. 2013; 25:18-21
- 35) 梅垣敬三: 健康リテラシーを身につけよう—トクホでメタボを解消する法. ヘルスアップ21. 2013; 19-19, 法研
- 36) 梅垣敬三: 健康リテラシーを身につけよう—常識は変わることがある. ヘルスアップ21. 2013; 21-21, 法研
- 37) 中西朋子, 佐藤陽子, 千葉剛, 梅垣敬三: ハーブ系の健康食品素材に関する有効性と安全性の最新情報 ヒメツルニチニチソウ. 医と食. 2013; 5(3):151-153
- 38) 梅垣敬三: 健康食品を正しく理解しよう!. 国民生活. 2013; 1-5, 国民生活センター
- 39) 梅垣敬三: 健康リテラシーを身につけよう—テレビCMの受け止め方. ヘルスアップ21. 2013; 19-19, 法研
- 40) 梅垣敬三: 健康リテラシーを身につけよう—健康被害ニュースの読み方. ヘルスアップ21. 2013; 19-19, 法研
- 41) 佐藤陽子, 中西朋子, 千葉剛, 梅垣敬三: ハーブ系の健康食品素材に関する有効性と安全性の最新情報 サラシア. 医と食. 2013; 5(4):212-214
- 42) 梅垣敬三: 健康リテラシーを身につけよう—妊婦はいつ、葉酸サプリを摂取すべきか?. ヘルスアップ21. 2013; 19-19, 法研
- 43) 梅垣敬三: 健康リテラシーを身につけよう—言葉が生み出すイメージ. ヘルスアップ21. 2013; 19-19, 法研
- 44) 梅垣敬三: 健康リテラシーを身につけよう—「天然」[自然]由来なら安全か. ヘルスアップ21. 2013; 21-21, 法研
- 45) 佐藤陽子, 中西朋子, 千葉剛, 梅垣敬三: ハーブ系の健康食品素材に関する有効性と安全性の最新情報 バレリアン. 医と食. 2013; 5(5):268-270
- 46) 梅垣敬三: 健康食品の問題点と規制について. 消費者法ニュース シリーズ11/食の安全. 2013; 173-174, 消費者法ニュース発行会議
- 47) 梅垣敬三: 健康リテラシーを身につけよう—食物アレルギーが心配な人へ—. ヘルスアップ21. 2013; 19-19, 法研
- 48) 千葉剛: 健康食品・サプリメントの機能とリスク. 現代 消費者法. 2013; 29-35, 民事法研究会
- 49) 中西朋子, 佐藤陽子, 千葉剛, 梅垣敬三: ハーブ系の健康食品素材に関する有効性と安全性の最新情報 ノニ(ヤエヤマアオキ). 医と食. 2013; 5(6):318-320
- 50) 梅垣敬三: 健康リテラシーを身につけよう—健康食品のグルコサミンやコンドロイチン硫酸は膝に効くの?. ヘルスアップ21. 2013; 19-19
- 51) 梅垣敬三: 健康食品との上手な付き合い方につ

- いて、せたがや消費者センターだより、2013; 2-3
- 52) 梅垣敬三: 健康リテラシーを身につけよう-食品添加物は全て悪者か-食品添加物の正しい理解、正しい表示の見方-。ヘルスアップ 21。2014; 19-19, 法研
- 53) 梅垣敬三: わが国のサプリメント事情。調剤と情報。2014; 20(1):79-81
- 54) 梅垣敬三: 健康リテラシーを身につけよう-幼児にサプリメントは必要か?。ヘルスアップ 21。2014; 19-19, 法研
- 55) 梅垣敬三: サプリメントと医薬品の相互作用における留意点。調剤と情報。2014; 20(2):83-85, じほう
- 56) 佐藤陽子, 中西朋子, 千葉剛, 梅垣敬三: ハーブ系の健康食品素材に関する有効性と安全性の最新情報 サジー。医と食。2014; 6(1):33-35
- 57) 梅垣敬三: 健康リテラシーを身につけよう-信頼できる健康情報の判断-情報の提供者と具体的な事項のチェックが重要。ヘルスアップ 21。2014; 19-19, 法研
- 58) 梅垣敬三: サプリメントプロファイル-葉酸。調剤と情報。2014; 20(3):85-88, じほう
- 59) 西信雄: 健康日本 2 1 (第 2 次) の取組み。食と健康。2013; 57(6):8-17, 公益社団法人日本食品衛生協会
- 学研究費, 長寿科学総合研究事業
- 8) 宮地元彦: 生活習慣病予防のための運動を阻害する要因としてのロコモティブシンドロームの評価と対策に関する研究, 平成25年度分担研究報告書, 厚生労働省厚生労働科学研究費, 循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業
- 9) 宮地元彦: 健康日本 2 1 (第二次) の推進に関する研究, 平成25年度分担研究報告書, 厚生労働省厚生労働科学研究費, 循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業
- 10) 宮地元彦: 標準的な健診・保健指導プログラム(改訂版)及び健康づくりのための身体活動基準2013に基づく保健事業の研修手法と評価に関する研究, 平成25年度分担研究報告書, 厚生労働省厚生労働科学研究費, 循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業
- 11) 宮地元彦: 日本人の身体活動量に関する環境・遺伝要因とその相互作用に関する網羅的研究, 平成25年度研究実績報告書, 文部科学省科学研究費, 基盤研究(A)
- 12) 山田晃一、宮地元彦: 食行動と食嗜好を規定するグレリン遺伝子多型に於ける、食欲発現機構の疫学解析。平成25年度研究実績報告書, 文部科学省科学研究費, 基盤研究(C)
- 13) 宮地元彦: 肥満者の運動リハビリツールとしての新世代アクティブテレビゲームの利用。平成25年度研究実績報告書, 文部科学省科学研究費, 特別研究員奨励費(外国人)
- 14) 鎌田真光: 身体活動促進のポピュレーション戦略に関する地域介入研究。平成25年度研究実績報告書, 特別研究員奨励費
- 15) 村上晴香: 自発的身体活動・運動行動誘発におけるドーパミンシステム系遺伝子多型の関連。平成25年度研究実績報告書, 文部科学省科学研究費, 基盤研究(B)
- 16) 瀧本秀美: 特定健診制度を利用したDOHaD仮説検証研究, 平成25年度研究実施状況報告書, 文部科学省科学研究費, 基盤研究(C)
- 17) 高田和子: 虚弱・サルコペニアモデルを踏まえた高齢者食生活支援の枠組みと包括的介護予防プログラムの考案および検証を目的とした調査研究, 平成25年度分担研究報告書, 厚生労働省厚生労働科学研究費, 長寿科学総合研究事業
- 18) 瀧本秀美: 児童虐待事例の家族再統合等にあたっての親支援プログラムの開発と運用に関する研究, 平成25年度分担研究報告書, 厚生労働省厚生労働科学研究費, 政策科学推進研究事業
- 19) 瀧本秀美: 低出生体重児の予後及び保健的介入並びに妊婦及び乳幼児の体格の疫学的調査手法に関する研究, 平成25年度分担研究報告書, 厚生労働省厚生労働科学研究費, 成育疾患克服等次世代育成基盤研究事業
- 20) 瀧本秀美: 日本人の食事摂取基準の策定に資する代謝性疾患の栄養評価に関する研究, 平成25年度分担研究報告書, 厚生労働省厚生労働科学研究費, 循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策

【研究報告書】

- 1) 古野純典, 石見佳子, 松本輝樹, 竹林純: ビタミンK及びモリブデンの分析方法の標準化並びに栄養成分等の収去試験に関する調査事業。消費者庁請負事業。2014;
- 2) 瀧本秀美: 小児期からの生活習慣病対策及び生涯の健診等データの蓄積・伝達の在り方等に関する研究, 平成25年度分担研究報告書, 厚生労働省厚生労働科学研究費, 循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業
- 3) 瀧本秀美: スマートフォンと画像を利用した食生活モニタリングシステムの開発・実践・検証, 平成24年度研究実績報告書, 文部科学省科学研究費, 基盤研究(A)
- 4) 中出麻紀子: 幼少期における食を通じた親との関わりが若年成人の朝食欠食に及ぼす影響, 平成25年度研究実施状況報告書, 文部科学省科学研究費, 若手研究(B)
- 5) 中出麻紀子: 幼少期における食を通じた親との関わりが若年成人の朝食欠食に及ぼす影響, 平成24~平成25年度研究成果報告書, 文部科学省科学研究費, 若手研究(B)
- 6) 笠岡(坪山)宜代: 肥満・生活習慣病に対する魚介類含有アミノ酸の新規機能の解明, 平成25年度研究実施状況報告書, 文部科学省科学研究費, 若手研究(C)
- 7) 宮地元彦: 齢による運動器への影響に関する研究-サルコペニアに関する包括的検討-, 平成25年度分担研究報告書, 厚生労働省厚生労働科

- 総合研究事業
- 21) 田中茂穂, 高田和子: 生活習慣病予防や身体機能維持のためのエネルギー・たんぱく質必要量の推定法に関する基盤的研究, 平成25年度総括・分担研究報告書, 厚生労働省厚生労働科学研究費, 循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業
 - 22) 田中茂穂, 高田和子: エネルギー代謝における個人内変動の要因および肥満との関連, 平成25年度研究実績報告書, 文部科学省科学研究費, 基盤研究(A)
 - 23) 薄井澄子: 閉経後における肥満・サルコペニア予防のための運動がエネルギー基質選択に与える影響, 平成25年度研究実績報告書, 文部科学省科学研究費, 特別研究員奨励費
 - 24) 宮本(青山)友子: 子どもの生活習慣病リスクに及ぼす出生時体重と身体活動の影響, 平成25年度研究実績報告書, 文部科学省科学研究費, 特別研究員奨励費
 - 25) 安藤貴史: 個人の代謝特性と食事摂取パターンが基質酸化量に及ぼす影響, 平成25年度研究実績報告書, 文部科学省科学研究費, 研究活動スタート支援
 - 26) 中江悟司: 食事摂取基準の活用に向けた障がい児および有疾患児におけるエネルギー必要量の評価, 平成25年度研究実績報告書, 文部科学省科学研究費, 若手研究(B)
 - 27) 山崎聖美: 脂肪肝における肝細胞と免疫担当細胞の相互作用解析, 平成25年度研究実績報告書, 文部科学省科学研究費, 基盤研究(C)
 - 28) 大坂寿雅: アナパイレキシア(能動的な低体温)の神経機構, 平成25年度研究実績報告書, 文部科学省科学研究費, 基盤研究(C)
 - 29) 石見佳子, 笠岡(坪山)宣代, 瀧沢あす香: 栄養・特殊用途食品部会における検討プロセスの開発に関する研究. 国際食品規格策定に係る効果的な検討プロセスの開発に関する研究. 平成25年度分担研究報告書, 厚生労働省厚生労働科学研究費補助金, 食品の安全確保推進研究事業
 - 30) 石見佳子, 笠岡(坪山)宣代, 瀧沢あす香: 栄養・特殊用途食品部会における検討プロセスの開発に関する研究. 国際食品規格策定に係る効果的な検討プロセスの開発に関する研究. 平成23~平成25年度総合研究報告書, 厚生労働省厚生労働科学研究費補助金, 食品の安全確保推進研究事業
 - 31) 石見佳子, 石見幸男, 東泉裕子: 大豆イソフラボン代謝産物の機能性及び安全性評価に関する研究, 平成25年度報告書, 文部科学省科学研究費 基盤研究(C)
 - 32) 石見佳子, 竹林純: ケルセチン・イソフラボンの生活習慣病予防機能の科学的エビデンス強化と高含有農作物の作出. 農林水産物・食品の機能性等を解析・評価するための基盤技術の開発. 2013, 平成25年度農林水産省委託研究事業分担研究報告書
 - 33) 石見佳子, 竹林純: ケルセチン・イソフラボンの生活習慣病予防機能の科学的エビデンス強化と高含有農作物の作出. 農林水産物・食品の機能性等を解析・評価するための基盤技術の開発. 2013, 農林水産省委託プロジェクト平成23~平成25年度研究成果シリーズ
 - 34) 石見佳子, 山内淳, 東泉裕子, 只石幹, 西出依子: 閉経後女性の骨の健康に対する日本とニュージーランドの機能性食品の併用効果. JST(戦略的国際科学技術協力推進事業)日本-ニュージーランド研究交流平成25年度研究成果報告書
 - 35) 石見佳子, 山内淳, 東泉裕子, 只石幹, 西出依子: 閉経後女性の骨の健康に対する日本とニュージーランドの機能性食品の併用効果. JST(戦略的国際科学技術協力推進事業)日本-ニュージーランド研究交流終了報告書
 - 36) 上西一弘, 石見佳子, 竹谷豊, 伊藤早苗: 日本人の食事摂取基準の策定に資する代謝性疾患の栄養評価に関する研究. 厚生労働科学研究費補助金(循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業)平成25年分担研究報告書
 - 37) 石見佳子, 小林 敏也: 非荷重による骨量減少に対する大豆イソフラボンと乳塩基性タンパク質の併用作用に関する研究. 文部科学省 平成25年度地球観測技術等調査研究委託事業業務成果報告書
 - 38) 松本輝樹: 金属元素を指標とした栄養機能成分の基原判別法の開発と評価. 平成25年度研究実績報告書, 文部科学省科学研究費, 基盤研究(B)
 - 39) 山内淳: インスリン抵抗性とビタミンA代謝のクロストーク, 平成25年度研究実施状況報告書, 文部科学省科学研究費, 基盤研究(C)
 - 40) 山内淳: インスリン抵抗性とビタミンA代謝のクロストーク, 平成23~平成25年度研究成果状況報告書, 文部科学省科学研究費, 基盤研究(C)
 - 41) 梅垣敬三, 石見佳子, 千葉剛: いわゆる健康食品による健康被害情報の因果関係解析法と報告手法に関する調査研究, 平成25年度総括・分担研究報告書, 厚生労働省厚生労働科学研究費、食品の安全確保推進研究事業
 - 42) 梅垣敬三, 千葉剛: いわゆる健康食品の安全性情報の収集及び伝達手法の開発に関する研究, 平成25年度総括・分担研究報告書, 厚生労働省厚生労働科学研究費、食品の安全確保推進研究事業
 - 43) 梅垣敬三: ダイエット関連植物素材の安全性における主要栄養素の影響評価, 平成25年度研究実施状況報告書, 文部科学省科学研究費, 基盤研究(C)
 - 44) 梅垣敬三: ダイエット関連植物素材の安全性における主要栄養素の影響評価, 平成23~平成25年度研究成果状況報告書, 文部科学省科学研究費, 基盤研究(C)
 - 45) 千葉剛: 非アルコール性脂肪性肝炎に対する健康食品素材の有効性・安全性の検討. 平成25年度研究実施状況報告書, 文部科学省科学研究費.

基盤研究 (C)

- 46) 廣田晃一：科学的根拠に基づく栄養学の脆弱性に関する理論的研究，平成25年度研究実施状況報告書，文部科学省科学研究費，挑戦的萌芽研究
- 47) 西信雄、奥田奈賀子：日本人の健康・栄養状態のモニタリングを目的とした国民健康・栄養調査のあり方に関する研究，平成25年度総括・分担研究報告書，厚生労働省厚生労働科学研究費，循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業
- 48) 西信雄：岩手県における東日本大震災被災者の支援を目的とした大規模コホート研究，平成25年度分担研究報告書，厚生労働省厚生労働科学研究費，健康安全・危機管理対策総合研究事業
- 49) 西信雄、奥田奈賀子：社会的要因を含む生活習慣病リスク要因の解明を目指した国民代表集団の大規模コホート研究：NIPPON DATA80/90/2010，平成25年度分担研究報告書，厚生労働省厚生労働科学研究費，循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業
- 50) 西信雄、奥田奈賀子：地域別の有効な減塩施策のシミュレーションモデルの開発，平成25年度研究実施状況報告書，文部科学省科学研究費，基盤研究 (C)
- 51) 西信雄：日本人の食生活の内容を規定する社会経済的要因に関する実証的研究，平成25年度分担研究報告書，厚生労働省厚生労働科学研究費，循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業
- 52) 西信雄：人口構成、社会経済状況、生活習慣の変化を考慮した疾病構造と経済的負担の将来予測，平成25年度分担研究報告書，厚生労働省厚生労働科学研究費，循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業
- 53) 西信雄：内臓脂肪蓄積を簡便に推定できる評価モデル式の開発とそのリスク評価に関する縦断研究，平成25年度分担研究報告書，厚生労働省厚生労働科学研究費，循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業
- 54) 池田奈由：我が国の疾病負担 (Burden of Disease) に関する包括的研究，平成25年度研究実績報告書，文部科学省科学研究費，基盤研究 (A)
- 55) 坪田 (宇津木) 恵：パーソナリティが食行動、および将来の身体的健康にどのような影響を及ぼすのか，平成25年度研究実施状況報告書，文部科学省科学研究費，若手研究 (B)
- 56) 坪田 (宇津木) 恵：パーソナリティが食行動、および将来の身体的健康にどのような影響を及ぼすのか，平成23～平成25年度研究成果状況報告書，文部科学省科学研究費，若手研究 (B)
- 57) 池田奈由：保健システム評価指標を用いた疾病の治療管理実態に関する研究，平成25年度研究実績報告書，文部科学省科学研究費，基盤研究 (C)

- 58) 横山徹爾、中川夕美、小林真琴、野末みほ、石川みどり：国民健康・栄養調査の1日間調査結果から習慣的摂取量の分布を推定する方法の検討，平成25年度分担研究報告書，厚生労働省厚生労働科学研究費，循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業
- 59) 石田裕美、裕野佐也香、野末みほ、中西明美：世帯の社会経済状態と子どもの食生活・栄養状態との関連 児童の食生活，平成25年度分担研究報告書，厚生労働省厚生労働科学研究費，循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業

【国際学会等】

a. 特別講演

- 1) Tsuboyama-Kasaoka N: Concept and Evidence of Dietary Reference Intakes for Japanese (DRIs-J). The 11th China Conference of Nutrition Science and International DRIs summit. 2013.05.16, China
- 2) Takimoto H: Current situation of clinical managements for non-communicable diseases (NCDs) among APMF physicians. The 5th Scientific Meeting of the Asia Pacific Menopause Federation. 2013.10.18, Tokyo

b. シンポジウム等

- 1) Tsuboyama-Kasaoka N, Kazuko Sako: What factors were important for dietary improvement after the Great East Japan Earthquake?. 8th Asia Pacific Conference on Clinical Nutrition. 2013.06.10, Maihama
- 2) Amitani Y, Sudo N, Tsuboyama-Kasaoka N, Ishikawa F, Sako K: A Group Interview about Meal Services during Disaster at Nursery School in a Metropolitan Area. 8th Asia Pacific Conference on Clinical Nutrition. 2013.06.10, Maihama
- 3) Kubota N, Kubota T, Inoue M, Takamoto I, Sasako T, Ueki K, Kadowaki T: Molecular mechanisms of type 2 diabetes and insulin resistance. THE 36th NAITO CONFERENCE ON Molecular Aspects of Energy Balance and Feeding Behavior Lecturers. 2013.09.10, Sapporo, Japan
- 4) Takafumi H, Takata K, Sakata S, Kawasaki T, Okabayashi S, Ishikawa-Takata K: Isotope signature for elemental metabolism of Fe from human blood cell samples. International Franco-Japanese Workshop on Metallomics. 2013.07.07, Pau, France
- 5) Ishimi Y: Assessment of efficacy and safety of isoflavone and its regulation in Japan. The 11th China Nutrition Science Congress & International DRIs Summit Evolution of DRIs. 2013.05.17, China
- 6) Ishimi Y: Relationship between soy intake

- and health benefits. The 80th Annual Meeting of Korean Society of Food Science and Technology. 2013.08.29, Korea
- 7) Ishimi Y: Isoflavones/equol and human health. SFRR12014 Satellite Symposium, Flavoids from palnts to human health. 2014.03.23, 京都国際会議場
- 8) Nishi N: Social gradients of health as seen from the National Health and Nutrition Survey, Japan. The International Conference on Social Stratification and Health 2013. 2013.09.01, Tokyo
- c. 一般講演等
- 1) Nakade M, Imai E, T.Utsugi M, Tsuboyama-Kasaoka N: Systematic classification of evidence for Dietary Reference Intakes for Japanese 2010 (DRIs-J 2010) and future prospects of DRIs in Asian countries. 8th Asia Pacific Conference on Clinical Nutrition . 2013.06.10, Maihama
- 2) Matsubara C, Nozue M, Miyoshi M, Nanri A, Murakami H, Imai K, Miyoshi C, Akashi H, Nakasa T, Mizoue T: Association between suspected depression and suspected posttraumatic stress disorder (PTSD) and food intake frequency among resident victims after the Great East Japan Earthquake. Inaugural Meeting of the International Society for Nutritional Psychiatry Research. 2013.06.21, Tokyo
- 3) Nakade M, T.Utsugi M, Aiba N: Individual characteristics and environmental factors are associated with skipping breakfast in Japanese male university students.. 20th International Congress of Nutrition. 2013.09.16, Granada
- 4) Nozue M, Ishikawa-Takata K, Sarukura N, Tsuboyama-Kasaoka N: Stockpiles and food supply after Great East Japan Earthquake in feeding facilities. 20th International Congress of Nutrition. 2013.09.17, Granada
- 5) T.Utsugi M: Characteristics of solo-eating among young Japanese: Differences in meal occasions and contexts. 20TH INTERNATIONAL CONGRESS OF NUTRITION. 2013.09.19, SPAIN
- 6) Takebayashi J, Oki T, Watanabe J, Yamasaki K, Chen J, Sato-Furukawa M, T.Utsugi M, Taku K, Goto K, Matsumoto T, Ishimi Y: Hydrophilic antioxidant capacities of vegetables and fruits commonly consumed in Japan and estimation of daily intake. 20th International Congress of Nutrition (ICN). 2013.09.19, Granada, Spain
- 7) Okuda N, Miura K, Yasumura S, Sakata K, Okamura T, Hidaka H, Nakamura K, Nishimura K, Miyagawa N, Torii S, Nishi N, Okayama A: A health education program applied for patients on hypertension treatment in a trial evaluating medical cost saving effect in Japan. 10th Asian Pacific Congress of Hypertension . 2014.02.13, Cebu, Phillippines
- 8) Tsuboyama-Kasaoka N, Hosokawa Y: Dose-dependent Effect Of Taurine Supplementation On Obesity And Hyperleptinemia In Mice. 12th International Congress on Obesity. 2014.03.17, Kuala Lumpur
- 9) Oude Griep LM, Posma J, Stamler J, Chan Q, van Horn L, Steffen LM, Miura K, Ueshima H, Okuda N, Zhao L, Daviglus M, Ebbels T, Nicholson JK, Holmes E, Elliott P, for the INTERMAP Research group: Urinary hippurate and proline betaine excretion relative to fruit intake and blood pressure: The INTERMAP Study. Epidemiology and prevention, nutrition, physical activity and metabolism 2014 scientific sessions. 2014.03.20, San Francisco, USA
- 10) Kitano N, Miura K, Okayama A, Nakagawa H, Sakata K, Saitoh S, Takeshita T, Okuda N, Yoshita K, Miyagawa N, Rodriguez B, Stamler J, Ueshima H, for the INTERMAP Japan Research group: Relation of Body Mass Index to Creatinine Clearance and Glomerular Filtration Rate in Japanese Population Samples in Japan and Hawaii. Epidemiology and prevention, nutrition, physical activity and metabolism 2014 scientific sessions. 2014.03.20, San Francisco, USA
- 11) Nakamura Y, Okuda N, Okamura T, Kadota A, Miyagawa N, Hayakawa T, Kita Y, Takashima N, Ohkubo T, Miura K, Okayama A, Ueshima H: Low-Carbohydrate-Diets and Cardiovascular and Total Mortality in Japanese. A 29-year Follow-up of NIPPON DATA80. Epidemiology and prevention, nutrition, physical activity and metabolism 2014 scientific sessions. 2014.03.20, San Francisco, USA
- 12) Okayama A, Okuda N, Ueshima H: Turning in the motality trends from coronary heart disease in Japan: age-specific analysis of the regional difference in Japan from 1969 to 2007. Epidemiology and prevention, nutrition, physical activity and metabolism 2014 scientific sessions. 2014.03.21, San Francisco, USA
- 13) Murakami H, Iemitsu M, Sanada K, Fuku N, Kawakami R, Gando Y, Miyachi M: Effects of dopamine D2 receptor gene polymorphism on physical activity level in humans. 60th American College of Sports Medicine.

- 2013.05.29, USA, Indianapolis
- 14) Sawada SS, Kawakami R, Okamoto T, Tsukamoto K, Lee I-Min, Blair SN, Miyachi M: Cardiorespiratory Fitness and Incidence of Urolithiasis: Retrospective Cohort Study of Japanese men.. American College of Sports Medicine 60th Annual Meeting. 2013.05.30, Indianapolis, IN, USA
- 15) Kawakami R, Sawada SS, Okamoto T, Tsukamoto K, Tanaka N, Lee I-Min, Blair SN, Miyachi M: Hand-Grip Strength and Prevalence of Diabetes, Hypertension, and Dyslipidemia: A Cross-Sectional Study among Japanese Males. American College of Sports Medicine 60th Annual Meeting. 2013.05.30, Indianapolis, IN, USA
- 16) Miyachi M, Murakami H, Kawakami R, Miyatake N, Numata T, Tabata I: Effects of accelerometer-based intervention to go beyond Physical Activity References for Japanese on the prevalence of low-back pain: a randomized control trial.. 60th American College of Sports Medicine. 2013.05.30, USA, Indianapolis
- 17) Yamamoto N, Shimada M, Nakagawa N, Kimura Y, Nishimuta M, Sawada SS, Asai H, Yoshitake Y: Stability Of Pedometer-determined Physical Activity In 2-, 4-, And 9-year Follow-up Studies Of Healthy Elderly Japanese.. American College of Sports Medicine 60th Annual Meeting. 2013.05.31, Indianapolis, IN, USA
- 18) Koitaya N, Sekiguchi, Tousen Y, Nishide N, Morita A, Yamauchi J, Gando Y, Miyachi M, Aoki M, Komatsu M, Watanabe F, Morishita K, Ishimi Y: Low-dose vitamin K2 (MK-4) supplementation for 12 months improves bone metabolism and prevents forearm bone loss in postmenopausal Japanese women. The 2nd Joint Meeting of International Bone Mineral Society and Japanese Society for Bone and Mineral Research . 2013.06.01, Kobe
- 19) Kono S, Iemitsu M, Murakami H, Fujie S, Sanada K, Kawano H, Gando Y, Kawakami R, Tanaka N, Miyachi M: Ghrelin Leu72Met polymorphism affects a relationship between HDL cholesterol and cardiorespiratory fitness level in middle and older adults. 18th Annual Congress European College of Sport Science . 2013.06.27, Spain, Barcelona
- 20) Obata A, Kubota N, Kubota T, Sato H, Sakurai Y, Fukazawa M, Suzuki M, Honda K, Suzuki Y, Ikeda S, Ueki K, Kadowaki T: Tofogliflozin improves insulin resistance as well as glucose tolerance by ameliorating fatty liver and obesity. 73th American Diabetes Association's Scientific Sessions. 2013.06.21, Chicago, USA
- 21) Iwabu M, Yamauchi T, Iwabu M, Kubota T, Kubota N, Kadowaki T: AdipoR1 in Hematopoietic Cells via Anti-Inflammation and AdipoR2 in Endothelial Cells via PPARgamma/SOD Play the Protective Roles against Cardiovascular Diseases in vivo. 73th American Diabetes Association's Scientific Sessions. 2013.06.21, Chicago, USA
- 22) Yoshida A, Ishikawa-Takata K, Taguchi M, Nakae S, Tanaka S, Higuchi M: Physical activity level is dependent on exercise amount in female athletes. European College of Sport Science. 2013.06.27, Barcelona, Spain
- 23) Shimizu T, Nagaoka U, Ishikawa-Takata K, Ichihara N, Ishida I, Nobukuni K, Nishizawa M: Daily energy expenditure assessed by doubly-labeled water method in Japanese patients with amyotrophic lateral sclerosis. International Symposium on ALS/MND. 2013.12.06, Brussels, Belgium
- 24) Tanaka S, Nakae S, Ando T: Accuracy of activity monitors for assessing low intensity physical activity: a systematic review. 2013 International Conference on Ambulatory Monitoring of Physical Activity and Movement (ICAMPAM 2013). 2013.06.17, University of Massachusetts Amherst (Amherst, Massachusetts, USA)
- 25) Tanaka C, Hikiyama Y, Inoue S, Tanaka S: Choice of pedometer impacts upon daily step counts in Japanese primary school children. 2013 International Conference on Ambulatory Monitoring of Physical Activity and Movement (ICAMPAM 2013). 2013.06.18, University of Massachusetts Amherst (Amherst, Massachusetts, USA)
- 26) Ando T, Park JH, Miyashita M, Ohkawara K, Usui C, Miyake R, Ezaki O, Higuchi M, Tanaka S: Appetite scores in the morning are associated with subsequent sedentary behavior. 2013 International Conference on Ambulatory Monitoring of Physical Activity and Movement (ICAMPAM 2013). 2013.06.18, University of Massachusetts Amherst (Amherst, Massachusetts, USA)
- 27) Tanaka C, Hikiyama Y, Inoue S, tanaka: Choice of pedometer impacts upon daily step counts in Japanese primary school children. 2013 International Conference on Ambulatory Monitoring of Physical Activity and Movement (ICAMPAM 2013). 2013.07.17,

- University of Massachusetts Amherst
(Amherst, Massachusetts, USA)
- 28) Yamazaki T: Effects of a low-carbohydrate and a low-fat diet on weight loss in obese mice. 12th International Congress on Obesity. 2014.03.19, Kuala Lumpur, Malaysia
- 29) Appukutty M, Tanaka C, Tanaka S: Physical Activity Measurements By Different Epoch Lengths Using a triaxial accelerometer among elementary school children in Japan. 12th International Congress on Obesity. 2014.03.19, Kuala Lumpur (Malaysia)
- 30) Koitaya N, Sekiguchi, Tousen Y, Nishide N, Morita A, Yamauchi J, Gando Y, Miyachi M, Aoki M, Komatsu M, Watanabe F, Morishita K, Ishimi Y: Low-dose vitamin K2 (MK-4) supplementation for 12 months improves bone metabolism and prevents forearm bone loss in postmenopausal Japanese women. The 2nd Joint Meeting of International Bone Mineral Society and Japanese Society for Bone and Mineral Research . 2013.06.01, Kobe
- 31) Tousen Y, Wolber FM , Chua W-H , Tadaishi M, Nishide Y, Ishimi Y, Kruger MC: The synergic effect of daidzein and kiwifruit on bone loss and equol production in ovariectomized rats.. IUN 20th International Congress of Nutrition. 2013.09.19, Granada Exhibitions Centre (Spain)
- 32) Ueno T, Tousen Y, Uchiyama S, Ishimi Y: Effects of fermented soy food containing S-equol (SE5-OH) on bone loss, blood flow, and mammary estradiol levels in ovariectomized rats. IUN 20th International Congress of Nutrition. 2013.09.19, Granada Exhibitions Centre (Spain)
- 33) Tadaishi M, Nishide Y, Tousen Y, Kruger MC, Ishimi Y: COOPERATIVE EFFECTS OF SOY ISOFLAVONES AND CAROTENOIDS ON OSTEOCLAST FORMATION.. IUN 20th International Congress of Nutrition. 2013.09.19, Granada Exhibitions Centre (Spain)
- 34) Takebayashi J, Oki T, Watanabe J, Yamasaki K, Chen J, Sato-Furukawa M, T.Utsugi M, Taku K, Goto K, Matsumoto T, Ishimi Y: Hydrophilic antioxidant capacities of vegetables and fruits commonly consumed in Japan and estimation of daily intake. 20th International Congress of Nutrition (ICN). 2013.09.19, Granada, Spain
- 35) Nakazawa T, Chiba T, Itoh T, Tabuchi M, Satou T: Increased systemic interleukin-1beta accelerates the onset of stroke in stroke-prone spontaneously hypertensive rats. XXIV Congress of the International Society on Thrombosis and Haemostasis. 2013.07.01, Amsterdam
- 36) Chiba T, Yokotani K, Yamazaki Y, Shimura F, Yamada S, Shinozuka K, Sato Y, Umegaki K: Coleus forskohlii extract attenuates the anti-coagulation activity of warfarin. XXIV Congress of the International Society on Thrombosis and Haemostasis. 2013.07.04, Amsterdam
- 37) Nishi N: Living circumstances and dietary patterns of Great East Japan Earthquake victims. Inaugural Meeting of the International Society for Nutritional Psychiatry Research. 2013.06.21, National Institute of Health and Nutrition, Tokyo
- 38) Nishi N: A System Dynamics Model of Salt Reduction at National Level. The 31st International Conference of the System Dynamics Society. 2013.07.21, Cambridge, Massachusetts, USA
- 39) Miyoshi M, Hawap J, Nishi N, Yoshiike N: Nutritional status of children and their mothers, and its determinants in urban capital and rural highland in Papua New Guinea. IUNS 20th International Congress of Nutrition. 2013.09.16, Granada, Spain
- 40) Miyoshi M: Feeding practices and nutritional status of children in rural Lao PDR. The 7th National Health Research Forum. 2013.10.15, Vientiane, Lao PDR
- 41) Nishi N, Sugiyama T: A simulation model of deaths in Japanese working men by major groups of industry. The First Asia-Pacific System Dynamics Conference. 2014.02.23, Tokyo

【国内学会等】

a. 特別講演

- 1) 古野純典: 世界の大規模がん予防試験に学ぶ. 第20回日本がん予防学会. 2013.07., 東京
- 2) 瀧本秀美: 妊娠期・子育て期女性の栄養摂取制限の課題. 第2回日本DOHaD研究会年会. 2013.06.07, 東京
- 3) 瀧本秀美: 母乳育児に対する国の考え方と基本施策. 第28回日本母乳哺乳学会. 2013.09.14, 長野県
- 4) 澤田亨: 健康づくりのための身体活動基準・指針: 運動基準・指針2006の改定. 第7回日本スポーツ栄養研究会 総会・学術集会. 2013.07.07, 横須賀
- 5) 澤田亨: 健康日本21 (第二次) ・身体活動基準2013およびアクティブガイド. 日本食生活学会第46回研究集会 特別講演. 2013.09.07, 松戸
- 6) 宮地元彦: 身体活動基準2013とアクティブガイド策定の経緯と概要、特別講演1: 身体活動基準2013の活用について. 第68回日本体力医学会

- 大会. 2013.09.22, 東京都日本教育会館他
- 7) 澤田亨: 健康づくりのための身体活動基準2013～エビデンスから栄養指導への活用まで～. 第38回神奈川県栄養改善学会. 2014.02.21, 横浜市
 - 8) 田中茂穂: 子どもにおける身体活動の実態と課題. 第24回日本臨床スポーツ医学会ランチョンセミナー. 2013.10.26, 熊本
 - 9) 山内淳: 食品表示について. 第17回日本病態栄養学会年次学術集会. 2014.01.12, 大阪国際会議場
 - 10) 梅垣敬三: いわゆる健康食品の安全性確保. 第105回日本食品衛生学会. 2013.05.16, 東京
- b. シンポジウム等**
- 1) 田尻下怜子, 瀧本秀美, 猿倉薫子, 角倉和子, 鈴木洋子, 横山徹爾, 仁平光彦, 松原舞, 金子均, 久保田俊郎: 妊婦への食事調査および食生活指導についての検討. 第37回日本産科婦人科栄養・代謝研究会. 2013.08.29, 埼玉
 - 2) 瀧本秀美: 妊娠中の栄養のありかた. 第54回日本母性衛生学会総会. 2013.10.04, 大宮
 - 3) 奥田奈賀子: 食塩摂取量10g時代の減塩指導のポイント. 第35回日本臨床栄養学会総会. 2013.10.05, 京都
 - 4) 笠岡(坪山)宜代: アミノ酸の機能～タウリンを中心として～. 日本臨床栄養学会サブリエントフォーラム. 2013.10.06, 京都
 - 5) 村上晴香: 新しい「健康づくりのための身体活動基準2013」「健康づくりのための身体活動指針2013(アクティブガイド)」のご紹介. 第86回日本産業衛生学会 職域身体活動研究会. 2013.05.15, 愛媛(松山)
 - 6) 澤田亨: 運動療法の今後の展望 疫学研究成績: Tokyo Gas Studyを中心として. 第56回日本糖尿病学会年次学術集会 シンポジウム. 2013.05.17, 熊本市
 - 7) 宮地元彦: 生活習慣病予防のための運動身体活動の理論と疫学、保健指導レベルアップセミナー、～生活習慣病予防のための運動・身体活動の理論と実際～. 第49回日本循環器病予防学会. 2013.06.15, 石川県金沢市金沢市文化ホール
 - 8) 澤田亨: 東京ガス・スタディ: 職域における運動疫学研究. 第36回日本がん疫学・分子疫学研究会 シンポジウム. 2013.06.20, 岐阜市
 - 9) 澤田亨: 職域における身体活動促進の現状と課題. 第22回日本健康教育学会 ミニシンポジウム. 2013.06.23, 千葉市
 - 10) 澤田亨: 身体活動とがんに関する運動疫学研究. 日本体育学会第64回大会 シンポジウム. 2013.08.28, 立命館大学(滋賀県草津市)
 - 11) 宮地元彦: 身体活動基準2013・アクティブガイド、ランチョンセミナー4. 日本体育学会第64回大会. 2013.08.29, 滋賀県草津市立命館大学びわこ・くさつキャンパス
 - 12) 宮地元彦: 新しい身体活動基準2013身体活動指針(アクティブガイド)に基づいた保健指導、シンポジウムⅡ、第二期特定健診特定保健指導への取り組み. 日本人間ドック学会第54回学術大会. 2013.08.30, 静岡県浜松市アクロシティ浜松
 - 13) 宮地元彦: 新しい身体活動指針(アクティブガイド) +10から始めよう!、ランチョンセミナー⑩. 第60回日本栄養改善学会学術総会. 2013.09.14, 兵庫県神戸市、神戸国際会議場
 - 14) 澤田亨: 健康づくりのための身体活動基準2013.九州体育・スポーツ学会第62回大会 シンポジウム. 2013.09.15, 北九州市
 - 15) 宮地元彦: 身体活動基準2013とアクティブガイドについて、ランチョンセミナー4: 最近の厚生労働行政～健康運動指導士養成大学全国連絡協議会～. 第68回日本体力医学会大会. 2013.09.21, 東京都日本教育会館他
 - 16) 松下宗洋, 荒尾孝, 宮地元彦, 川上諒子, 岡本隆史, 塚本浩二, 中田由夫, 澤田亨: 飲酒習慣と全身持久力ががん死亡率に与える影響: 日本人男性を対象としたコホート研究. 第68回日本体力医学会 ワークショップ. 2013.09.21, 東京
 - 17) 澤田亨: コホート研究の読み方、やり方、利用の仕方. 第68回日本体力医学会大会 ワークショップ. 2013.09.22, 東京都千代田区
 - 18) 澤田亨: 運動疫学研究. 第68回日本体力医学会大会 ランチョンセミナー. 2013.09.23, 東京都千代田区
 - 19) 宮地元彦: 健康づくりのための身体活動基準2013とアクティブガイド、シンポジウム1: 運動療法～スポーツフィールドにおける栄養管理～. 第35回日本臨床栄養学会総会. 2013.10.04, 京都市、京都テルサ
 - 20) 宮地元彦: 運動器と健康づくりのための身体活動基準2013・アクティブガイド、日本学術会議運動器分科会・日本公衆衛生学会合同シンポジウム. 第72回日本公衆衛生学会総会. 2013.10.24, 三重県総合文化センター、津市、三重県
 - 21) 澤田亨: 健康支援のための最新疫学研究. 第15回日本健康支援学会年次学術大会 教育講演. 2014.03.09, 東京
 - 22) 窪田直人, 窪田哲也, 門脇孝: インスリン作用研究の進化と展望「インスリン受容体基質(IRS)-1、IRS-2の生理的・病態生理的役割の解明」. 第56回日本糖尿病学会年次学術集会. 2013.05.17, 熊本
 - 23) 高田和子: 地域の栄養システムの現状と課題—高齢者を対象とした配食サービスの状況と過大. 第13回日本健康・栄養システム学会大会. 2013.05.19, 名古屋
 - 24) 田中茂穂: 幼児の運動指針. 日本体育学会第64回大会 大会組織委員会企画 地域連携企画2 シンポジウム幼少期・児童期における運動・健康の在り方を考える. 2013.08.30, 立命館大学

- びわこ・くさつキャンパス (滋賀県草津市)
- 25) 田中茂穂: 食事摂取基準における 推定エネルギー必要量の改定 に資する研究. 第68回日本体力医学会大会 ランチョンセミナー. 2013. 09. 23, 東京
 - 26) 田中茂穂: 食事誘発性体熱産生 (DIT). 第11回大連合大会: 第35回日本臨床栄養学会総会・第34回日本臨床栄養協会総会ワークショップ1: 食べ方と血糖管理. 2013. 10. 04, 京都
 - 27) 田中茂穂: 基調講演「一子どもの身体活動・運動の現状と課題一」. 第17回千葉県学校保健学会シンポジウム「子どもの食と身体活動・運動の現状・課題・取り組み」. 2013. 12. 07, 東京
 - 28) 石見佳子: 大豆イソフラボンの新しい可能性. 第67回日本栄養・食糧学会スポンサーシンポジウム. 2013. 05. 25, 名古屋
 - 29) 石見佳子: 女性の健康と大豆. 更年期と加齢のヘルスケア学会. 2013. 10. 27, 東京
 - 30) 石見佳子: 大豆イソフラボン代謝産物の有用性と安全性. 第11回機能性食品医用学会シンポジウム. 2013. 12. 07, 東京
- c. 一般講演等
- 1) 助廣那由, 木田中, 梅澤昌弘, 村上隆行, 荒井直子, 神内恒貞, 稲垣俊一, 土屋英俊, 丸山浩, 津田良夫: 成田国際空港におけるネッタイシマカの侵入事例について. 第65回日本衛生動物学会. 2013. 04. 06, 酪農学園大学 江別市
 - 2) 瀧本秀美, 田尻下怜子, 猿倉薫子, 加藤則子, 横山徹爾, 久保田俊郎: 2004~10年出生児における出生体重に対する影響要因について. 第65回日本産科婦人科学会学術講演会. 2013. 05. 10, 北海道
 - 3) 田尻下怜子, 瀧本秀美, 猿倉薫子, 横山徹爾, 仁平光彦, 金子均, 久保田俊郎: 肥満女性の妊娠中の体重増加量についての検討. 第65回日本産科婦人科学会学術講演会. 2013. 05. 11, 北海道
 - 4) 孫田みなみ, 笠岡(坪山)宣代, 瀧沢あす香, 坪田(宇津木)恵, 今井絵理, 岡純: 国が策定する食事指針・基準における食事摂取基準の適用状況. 日本栄養・食糧学会. 2013. 05. 25, 名古屋大学 愛知県
 - 5) 奥田奈賀子, 高田和子, 吉村英一, 堀江早喜, 中西朋子, 佐藤陽子, 西信雄, 瀧本秀美: 市販加工食品の塩分(ナトリウム)表示の理解について. 第49回日循協総会. 2013. 06. 14, 金沢
 - 6) 吉澤剛士, 奥田奈賀子, 西信雄: 国民健康・栄養調査の身体測定値に差を及ぼす要因一調査員による測定値と自己申告値の差に関して一. 第49回日循協総会. 2013. 06. 14, 金沢
 - 7) 永井雅人, 藤吉朗, 大久保孝義, 三浦克之, 奥田奈賀子, 早川岳人, 由田克士, 荒井裕介, 中川秀昭, 宮川尚子, 高島直敬, 門田文, 村上義孝, 岡村智教, 岡山明, 上島弘嗣, NIPPON DATA80研究グループ: 1日のエネルギー摂取量と死亡リスクとの関連: NIPPON DATA80. 第49回日循協総会. 2013. 06. 14, 金沢
 - 8) 辻恵子, 川村勝弘, 村松康志, 菊池由紀, 浅沼圭美, 立花泰子, 小原朋子, 藤井実加子, 藤沢のり江, 遠藤訓子, 宮一隆, 加藤礼子, 菅野朋, 奥田奈賀子, 板井一好, 岡山明: 民間健診機関における総合プログラムの導入と科学的な評価. 第49回日循協総会. 2013. 06. 15, 金沢
 - 9) 栗原綾子, 岡村智教, 杉山大典, 東山 綾, 渡辺至, 奥田奈賀子, 岡山明, 三浦克之, 上島弘嗣: 植物性タンパク質摂取量と循環器死亡の関連: NIPPON DATA90. 第45回日本動脈硬化学会総会. 2013. 07. 18, 東京
 - 10) 吉村英一, 高田和子, 中出麻紀子, 坪田(宇津木)恵, 吉嶋和子, 笠岡(坪山)宣代, 西信雄: 仮設住宅に居住する東日本大震災被災者の食環境状況. 第60回日本栄養改善学会. 2013. 09., 兵庫県
 - 11) 伊藤聖来, 須藤紀子, 笠岡(坪山)宣代, 下浦佳之, 小松龍史: 東日本大震災後に日本栄養士会から派遣された災害支援管理栄養士・栄養士が提出した活動報告書の分析. 第60回日本栄養改善学会. 2013. 09. 12, 神戸
 - 12) 水尾和雅, 長谷川沙織, 善方美千子, 笠岡(坪山)宣代, 宮下朋子: 東日本大震災時における避難所の食事について ~石巻市立湊中学校における食事からの検討(第2報)~. 第60回日本栄養改善学会. 2013. 09. 12, 神戸
 - 13) 網谷有希子, 須藤紀子, 笠岡(坪山)宣代, 石川文子, 迫和子: 災害時の給食対応に関する津波被害地域保育所を対象としたグループインタビュー. 第60回日本栄養改善学会. 2013. 09. 13, 神戸
 - 14) 廣野りえ, 笠岡(坪山)宣代, 高田和子, 瀧沢あす香, 須藤紀子, 下浦佳之, 迫和子: 東日本大震災において被災地に派遣された管理栄養士・栄養士の活動に対する調査研究. 第60回日本栄養改善学会. 2013. 09. 14, 神戸
 - 15) 瀧沢あす香, 笠岡(坪山)宣代, 西信雄, 細川裕子, 佐々木敏, 岡純: 肥満・メタボリックシンドローム改善を目指した実食型フードモデルの有効性の検討. 第60回日本栄養改善学会. 2013. 09. 14, 神戸
 - 16) 網谷有希子, 須藤紀子, 笠岡(坪山)宣代, 石川文子, 迫和子: 災害時の給食対応に関する津波被害地域保育所を対象としたグループインタビュー. 第60回日本小児保健協会学術集会. 2013. 09. 26, 東京
 - 17) 岡山明, 奥田奈賀子, 三浦克之, 安村誠司, 坂田清美, 岡村智教, 日高秀樹, 西村邦宏, 中村幸志: 飲酒習慣と医療費一高血圧治療の有無別に見た関連. 第36回日本高血圧学会総会. 2013. 10. 23, 大阪
 - 18) 中出麻紀子, 坪田(宇津木)恵, 饗場直美: 男子大学生における朝食欠食の特徴. 第72回日本公衆衛生学会. 2013. 10. 23, 三重県

- 19) 門田文, 永井雅人, 大久保孝義, 松下邦洋, 村上義孝, 高島直敬, 宮川尚子, 奥田奈賀子, 西信雄, 岡村智教, 上島弘嗣, 岡山明, 三浦克之: 国民代表集団における慢性腎臓病有病率の推定: NIPPON DATA2010. 第36回日本高血圧学会総会. 2013. 10. 24, 大阪
- 20) 岡山明, 三浦克之, 中川秀昭, 岡村智教, 西村邦洋, 安村誠司, 坂田清美, 中村幸志, 奥田奈賀子: 20歳からの体重増加はメタボリックシンドロームのリスクを高める. 第72回日本公衆衛生学会総会. 2013. 10. 24, 津
- 21) 奥田奈賀子, 三浦克之, 斎藤重幸, 坂田清美, 中川秀昭, 由田克士, 岡山明, 上島弘嗣, INTERMAP日本研究グループ: 日本人は何かからカリウムを摂取しているか. 第72回日本公衆衛生学会総会. 2013. 10. 24, 津
- 22) 西信雄, 吉村英一, 高田和子, 中出麻紀子, 坪田(宇津木)恵, 笠岡(坪山)宜代, 横山由香里, 坂田清美: 仮設住宅に居住する東日本大震災被災世帯の野菜購入頻度に関連する要因. 第72回日本公衆衛生学会. 2013. 10. 24, 三重県
- 23) 北野尚美, 三浦克之, 岡山明, 中川秀昭, 坂田清美, 斎藤重幸, 竹下達也, 奥田奈賀子, 由田克士, 宮川尚子, Beatriz R, Stamler J, 上島弘嗣: 健常集団における24時間蓄尿によるクレアチニンクリアランス測定と血清クレアチニン値を用いた換算式によるGFR値の検討—INTERMAP日本研究—. 第36回日本高血圧学会総会. 2013. 10. 25, 大阪
- 24) 永井雅人, 大久保孝義, 斎藤重幸, 高島直敬, 宮川尚子, 村上義孝, 門田文, 斎藤祥乃, 奥田奈賀子, 西信雄, 岡村智教, 岡山明, 上島弘嗣, 三浦克之, NIPPON DATA70/90/2010 研究グループ: 国民の血圧水準および高血圧有病率・治療率・管理率の過去50年間/30年間の推移: 循環器疾患基礎調査データに基づく検討. 第36回日本高血圧学会総会. 2013. 10. 25, 大阪
- 25) 三好美紀, 石川みどり, 草間かおる, 水元芳, 野末みほ: 栄養部門の国際保健協力人材のキャリアパスを形成する要素と今後の課題について. 第28回日本国際保健医療学会. 2013. 11. 12, 沖縄
- 26) 笠岡(坪山)宜代, 野末みほ, 星裕子, 小野寺和恵, 猿倉薫子, 水野正一, 迫和子, 高田和子: 東日本大震災の後、食・栄養改善には何が重要だったのか?—今後の食支援システム構築を目指して—. 第1回日本災害食学会. 2013. 12. 14, 東京
- 27) 網谷有希子, 須藤紀子, 笠岡(坪山)宜代, 石川文子, 迫和子: 東日本大震災による津波被害地域の保育所と行政の災害対応に関する事例. 第1回日本災害食学会. 2013. 12. 14, 東京
- 28) 伊藤聖來, 尾崎文子, 須藤紀子, 笠岡(坪山)宜代, 下浦佳之, 小松龍史: 東日本大震災後に日本栄養士会から派遣された災害支援管理栄養士・栄養士が使用した活動報告書の書式の検討. 第1回日本災害食学会. 2013. 12. 14, 東京
- 29) 中村保幸, 奥田奈賀子, 岡村智教, 門田文, 宮川尚子, 早川岳人, 喜多義邦, 藤吉朗, 永井雅人, 高嶋直敬, 大久保孝義, 三浦克之, 岡山明, 上島弘嗣: 低炭水化物食と心血管死、総死亡の関連: NIPPON DATA80, 29年追跡結果. 第24回日本疫学会総会. 2014. 01. 24, 仙台
- 30) 西信雄, 奥田奈賀子: 国民・健康栄養調査と特定健康診査の保険者別の身体計測値の比較. 第24回日本疫学会総会. 2014. 01. 24, 仙台
- 31) 小山達也, 由田克士, 奥田奈賀子, 斎藤重幸, 坂田清美, 中川秀昭, 岡山明, 三浦克之, 上島弘嗣: 栄養素および食品群別摂取量からみた適正脂肪エネルギー比率の検討: INTERLIPID日本研究. 第24回日本疫学会総会. 2014. 01. 24, 仙台
- 32) 奥田奈賀子, 三浦克之, 安村誠司, 坂田清美, 岡村智教, 日高秀樹, 中村幸志, 西村邦弘, 宮川尚子, 鳥居さゆ希, 西信雄, 岡山明: 特定保健指導階層化基準外の者の保健指導の有効性についての研究—保健指導開始1年後報告—. 第24回日本疫学会総会. 2014. 01. 25, 仙台
- 33) 宮地元彦, 村上晴香, 川上諒子, 沼田健之, 宮武伸行, 田畑泉: 運動基準2006の基準値23メッツ時/週を目指す介入が腰痛有訴に及ぼす影響: 無作為割付介入研究. 第23回日本疫学会. 2013. 01. 25, 大阪
- 34) 澤田亨, 鎌田真光, 松下宗洋, 川上諒子, 岡本隆史, 塚本浩二, 宮地元彦: 運動器の痛みと身体活動に関する横断研究. 第24回日本疫学会. 2013. 01. 25, 仙台
- 35) 三富美千代, 澤田亨, 川上諒子, 村上晴香, 宮地元彦, 井上茂, 岡本隆史, 塚本浩二: 首都圏在住労働者における歩数と生活習慣および健康状態の関係: 横断研究. 第86回日本産業衛生学会. 2013. 05. 16, 松山市
- 36) 川上諒子, 村上晴香, 真田樹義, 田畑泉, 澤田亨, 樋口満, 宮地元彦: 特定健診・特定保健指導の標準的な質問票による身体活動調査によるサルコペニアのスクリーニング. 日本体育学会第64回大会. 2013. 08. 29, 草津
- 37) 高野修平, 家光素行, 村上晴香, 真田樹義, 川上諒子, 田中憲子, 宮地元彦: 体力レベルと生活習慣病リスクファクターとの関係にグレリン遺伝子多型が及ぼす影響. 第64回日本体育学会. 2013. 08. 30, 志賀(南草津)
- 38) 川上諒子, 村上晴香, 真田樹義, 田畑泉, 樋口満, 宮地元彦: 特定健診・特定保健指導の標準的な質問票による身体活動調査によるサルコペニアのスクリーニング. 第64回日本体育学会. 2013. 08. 30, 滋賀(南草津)
- 39) 加藤公則, 田代稔, 小林篤子, 小林隆司, 佐藤幸示, 北川寛, 笹川力, 澤田亨: 体力測定における閉眼片足立ちと立位体前屈は5年後の糖尿病を予防できる. 第54回日本人間ドック学会学術大会. 2013. 08. 30, 浜松

- 40) 澤田亨, 鎌田真光, 松下宗洋, 川上諒子, 村上晴香, 宮地元彦: 大規模マラソン大会コホート研究デザイン. 第16回日本運動疫学研究会学術集会. 2013. 09. 20, 東京
- 41) 林貢一郎, 家光素行, 村上晴香, 真田樹義, 河野寛, 丸藤祐子, 田中憲子, 宮地元彦: 日本人女性におけるエストロゲン受容体 β 遺伝子多型と頸動脈コンプライアンスの関連. 第68回日本体力医学会. 2013. 09. 21, 東京
- 42) 菊池直樹, 宮本恵理, 村上晴香, 宮地元彦, 関石基, 中里浩一, 福典之: 日本人陸上競技における種目特性とACTN3遺伝子R577X多型との関連. 第68回日本体力医学会. 2013. 09. 21, 東京
- 43) 河野寛, 山元健太, 丸藤祐子, 村上晴香, 真田樹義, 樋口満, 宮地元彦: 加齢に伴う頸動脈壁の粘性増加は高心肺体力によって抑制される. 第68回日本体力医学会. 2013. 09. 21, 東京
- 44) 福典之, 宮本恵理, 村上晴香, 宮地元彦, 川原貴: 毛様体神経栄養因子受容体遺伝子多型と持久的運動能力との関連. 第68回日本体力医学会. 2013. 09. 21, 東京
- 45) Julien Triplette, Murakami H, Ando T, Kawakami R, Tanaka N, Tanaka S, Miyachi M: Active video games for health promotion: from METs evaluation to physical intervention in young adults. 第68回日本体力医学会. 2013. 09. 21, 東京
- 46) 村上晴香, 福典之, 川上諒子, 丸藤祐子, 埜智史, 宮地元彦: 身体活動増大を目的とした介入による身体活動量の変化とドーパミン遺伝子多型との関連. 第68回日本体力医学会. 2013. 09. 22, 東京
- 47) 原秀美, 村上晴香, 佐々木梓, 川上諒子, 丸藤祐子, 池本真二, 宮地元彦: 身体活動基準の達成状況と食事摂取基準の達成状況との関連. 第68回日本体力医学会. 2013. 09. 22, 東京
- 48) 井上真理子, 窪田直人, 窪田哲也, 佐藤寛之, 林高則, 山内敏正, 植木浩二郎, 門脇孝: 中枢のIRS-2は肝臓のインスリン感受性を調節する. 第50回日本臨床分子医学会学術集会. 2013. 04. 12, 東京
- 49) 窪田直人, 窪田哲也, 井上真理子, 高本偉碩, 山内敏正, 植木浩二郎, 門脇孝: インスリン受容体基質(IRS)に着目した肥満・2型糖尿病における肝臓の糖・脂質代謝調節機構. 第110回日本内科学会総会. 2013. 04. 12, 東京
- 50) 窪田哲也, 窪田直人, 井上真理子, 林高則, 高本偉碩, 山内敏正, 植木浩二郎, 門脇孝: チアゾリジン誘導体はアディポネクチン依存性・非依存性に動脈硬化を抑制する. 第110回日本内科学会総会. 2013. 04. 12, 東京
- 51) 窪田直人, 窪田哲也, 井上真理子, 高本偉碩, 山内敏正, 植木浩二郎, 門脇孝: インスリン受容体基質(IRS)に着目した肥満・2型糖尿病における肝臓の糖・脂質代謝調節機構. 第86回日本内分泌学会学術総会. 2013. 04. 25, 仙台
- 52) 窪田哲也, 窪田直人, 佐藤寛之, 井上真理子, 山内敏正, 植木浩二郎, 門脇孝: チアゾリジン誘導体はアディポネクチン依存性・非依存性に動脈硬化を抑制する. 第86回日本内分泌学会学術総会. 2013. 04. 25, 仙台
- 53) 高本偉碩, 窪田直人, 熊谷勝義, 小畑淳史, 桜井賛孝, 中屋恵三, 窪田哲也, 北村忠弘, 植木浩二郎, 門脇孝: 膵 β 細胞において2型糖尿病疾患感受性遺伝子Tcf712が担う役割の解明. 第86回日本内分泌学会学術総会. 2013. 04. 25, 仙台
- 54) 佐藤寛之, 窪田直人, 窪田哲也, 井上真理子, 高本偉碩, 橋本信嗣, 中屋恵三, 後藤守兄, 城森孝仁, 植木浩二郎, 門脇孝: DPP-4阻害薬(アナグリプチン)は骨格筋インスリン抵抗性を改善する. 第86回日本内分泌学会学術総会. 2013. 04. 25, 仙台
- 55) 小畑淳史, 窪田直人, 窪田哲也, 佐藤寛之, 桜井賛孝, 鈴木昌幸, 深澤正徳, 池田幸弥, 植木浩二郎, 門脇孝: 新規SGLT2阻害薬Tofogliflozinの抗糖尿病作用機序の解明. 第86回日本内分泌学会学術総会. 2013. 04. 25, 仙台
- 56) 庄嶋伸浩, 原一雄, 藤田逸人, 堀越桃子, 高橋倫子, 高本偉碩, 窪田直人, 山内敏正, 植木浩二郎, 門脇孝: HIPK3(homeodomain interacting protein kinase3)の糖代謝への影響. 第86回日本内分泌学会学術総会. 2013. 04. 25, 仙台
- 57) 小畑淳史, 窪田直人, 窪田哲也, 佐藤寛之, 桜井賛孝, 深澤正徳, 鈴木昌幸, 本田清史, 鈴木好幸, 池田幸弥, 植木浩二郎, 門脇孝: 新規SGLT2阻害薬Tofogliflozinのin vivoにおける抗糖尿病作用の解析. 第56回日本糖尿病学会年次学術集会. 2013. 05. 17, 熊本
- 58) 高本偉碩, 窪田直人, 熊谷勝義, 小畑淳史, 桜井賛孝, 中屋恵三, 窪田哲也, 北村忠弘, 植木浩二郎, 門脇孝: 膵 β 細胞において2型糖尿病疾患感受性遺伝子Tcf712が担う役割の解明. 第56回日本糖尿病学会年次学術集会. 2013. 05. 17, 熊本
- 59) 井上真理子, 窪田直人, 窪田哲也, 梶原栄二, 佐藤寛之, 林高則, 相原允一, 山内敏正, 植木浩二郎, 門脇孝: 中枢のIRS-2は肝臓のインスリン感受性を調節する. 第56回日本糖尿病学会年次学術集会. 2013. 05. 18, 熊本
- 60) 林高則, 窪田直人, 窪田哲也, 井上真理子, 佐藤寛之, 相原允一, 高本偉碩, 山内敏正, 植木浩二郎, 門脇孝: 中枢のIRS-1は成長に関与する. 第56回日本糖尿病学会年次学術集会. 2013. 05. 18, 熊本
- 61) 窪田哲也, 窪田直人, 佐藤寛之, 井上真理子, 林高則, 相原允一, 高本偉碩, 山内敏正, 植木浩二郎, 門脇孝: チアゾリジン誘導体はアディポネクチン依存性・非依存性にカフ誘導性の内臓肥厚を抑制する. 第56回日本糖尿病学会年次学術集会. 2013. 05. 18, 熊本
- 62) 相原允一, 窪田直人, 窪田哲也, 井上真理子, 佐藤寛之, 林高則, 高本偉碩, 山内敏正, 植木

- 浩二郎, 門脇孝: 運動時の血管内皮細胞のインスリンシグナルを介した骨格筋糖取り込み調節機構の解明. 第56回日本糖尿病学会年次学術集会. 2013. 05. 18, 熊本
- 63) 佐藤寛之, 窪田直人, 窪田哲也, 井上真理子, 高本偉碩, 橋本信嗣, 中屋恵三, 後藤守兄, 城森孝仁, 植木浩二郎, 門脇孝: DPP-4阻害薬(アナグリプチン)は骨格筋インスリン抵抗性を改善する. 第56回日本糖尿病学会年次学術集会. 2013. 05. 18, 熊本
- 64) 窪田直人, 勝山修行, 窪田哲也, 植木浩二郎, 門脇孝: PGI2誘導体ベラプロストのヒトインスリン抵抗性改善効果に関する検討. 第56回日本糖尿病学会年次学術集会. 2013. 05. 18, 熊本
- 65) 羽田裕亮, 窪田直人, 山内敏正, 植木浩二郎, 門脇孝: インピーダンス法を用いた短期間の減量時における内臓脂肪の変化について. 第56回日本糖尿病学会年次学術集会. 2013. 05. 18, 熊本
- 66) 桜井賛孝, 窪田直人, 高本偉碩, 小畑淳史, 植木浩二郎, 門脇孝: マウス肝化学発癌初期における変化とインスリンシグナル. 第56回日本糖尿病学会年次学術集会. 2013. 05. 18, 熊本
- 67) 柳田圭介, 窪田直人, 門脇孝, 清水孝雄, 石井聡: リゾリン脂質の新たな生理機能と病態内臓脂肪型肥満/インスリン抵抗性の進行におけるリゾホスファチジン酸受容体LPA4の関与. 第55回日本脂質生化学会. 2013. 06. 06, 宮城
- 68) 窪田直人, 勝山修行, 小畑淳史, 植木浩二郎, 門脇孝: 糖尿病合併歌舞伎症候群にDPP4阻害薬が奏功した1症例. 第597回日本内科学会関東地方会. 2013. 06. 08, 東京
- 69) 窪田直人, 窪田哲也, 原口美貴子, 勝山修行, 植木浩二郎, 門脇孝: PGI2誘導体ベラプロストのヒトインスリン抵抗性改善効果に関する検討. 第31回日本肥満症治療学会学術集会. 2013. 06. 28, 東京
- 70) 羽田裕亮, 山内敏正, 窪田直人, 植木浩二郎, 門脇孝: 東大病院における各科連携による肥満症治療への取り組み. 第31回日本肥満症治療学会学術集会. 2013. 06. 28, 東京
- 71) 岩部美紀, 山内敏正, 岩部真人, 窪田直人, 門脇孝: アディポネクチン経路の動脈硬化における病態生理的意義の解明と治療への応用の可能性. 第31回日本肥満症治療学会学術集会. 2013. 06. 28, 東京
- 72) 窪田直人, 小畑淳史, 原口美貴子, 羽田裕亮, 藤城緑, 植木浩二郎, 門脇孝: 複数回の転倒が原因で腸腰筋膿瘍を発症したと考えられた2型糖尿病の1例. 第598回日本内科学会関東地方会. 2013. 07. 21, 東京
- 73) 窪田直人, 小畑淳史, 原口美貴子, 羽田裕亮, 藤城緑, 植木浩二郎, 門脇孝: 複数回の転倒が原因で腸腰筋膿瘍を発症したと考えられた2型糖尿病の一例. 第28回日本糖尿病合併症学会. 2013. 09. 13, 北海道
- 74) 窪田直人: 2型糖尿病の病態と薬物治療 ~DPP4阻害薬を中心に~ (ランチョンセミナー). 第14回 日本内分泌学会関東甲信越支部学術集会. 2013. 09. 28, 横浜
- 75) 窪田直人, 窪田哲也, 井上真理子, 岩村智勝, 山内敏正, 植木浩二郎, 門脇孝: インスリン受容体基質(IRS)に着目した肥満・2型糖尿病における肝臓の糖・脂質代謝調節機構. 第63回日本体質医学会総会. 2013. 10. 05, 福岡
- 76) 相原允一, 窪田直人, 窪田哲也, 井上真理子, 佐藤寛之, 林高則, 高本偉碩, 山内敏正, 植木浩二郎, 門脇孝: 運動時の血管内皮細胞のインスリンシグナルを介した骨格筋糖取り込み調節機構の解明. 第34回日本肥満学会. 2013. 10. 11, 東京
- 77) 井上真理子, 窪田直人, 窪田哲也, 佐藤寛之, 林高則, 山内敏正, 植木浩二郎, 門脇孝: 中枢のIRS-2はレプチン感受性と肝臓のインスリン感受性を調節する. 第34回日本肥満学会. 2013. 10. 11, 東京
- 78) 窪田直人: メタボリックシンドロームの病態と内臓脂肪測定の意義 (ランチョンセミナー). 第34回日本肥満学会. 2013. 10. 11, 東京
- 79) 于静, 脇裕典, 山内敏正, 亀井望, 熊谷勝義, 羽田裕亮, 岩部真人, 岩部美紀, 窪田直人, 植木浩二郎, 堤修一, 油谷浩幸, 門脇孝: PPAR γ プロモーター領域のBivalentヒストン修飾は脂肪細胞分化ポテンシャルを規定する. 第34回日本肥満学会. 2013. 10. 11, 東京
- 80) 増井友里, 門野岳史, 佐藤伸一, 山内敏正, 窪田直人, 門脇孝: アディポネクチン及びその受容体の減少が全身性強皮症における皮膚硬化に関与する. 第34回日本肥満学会. 2013. 10. 11, 東京
- 81) 林高則, 窪田直人, 窪田哲也, 井上真理子, 佐藤寛之, 相原允一, 高本偉碩, 植木浩二郎, 門脇孝: 中枢のIRS-1は成長に関与する. 第34回日本肥満学会. 2013. 10. 11, 東京
- 82) 小島敏弥, 真鍋一郎, 大石由美子, 佐々木努, 窪田直人, 北村忠弘, 門脇孝, 永井良三, 小室一成: 転写因子KLF5はFoxO1によるAgRP活性を抑制し摂食を調節する. 第34回日本肥満学会. 2013. 10. 12, 東京
- 83) 窪田直人, 窪田哲也, 井上真理子, 林高則, 相原允一, 高本偉碩, 山内敏正, 植木浩二郎, 門脇孝: 肥満・2型糖尿病における肝臓の糖・脂質代謝調節破綻の分子機構. 第34回日本肥満学会. 2013. 10. 12, 東京
- 84) 佐々木崇晴, 茂呂和世, 窪田哲也, 窪田直人, 小安重夫: 肥満・インスリン抵抗性におけるナチュラルヘルパー細胞の機能解析. 第34回日本肥満学会. 2013. 10. 12, 東京
- 85) 小畑淳史, 窪田直人, 窪田哲也, 佐藤寛之, 桜井賛孝, 岩本真彦, 深澤正徳, 鈴木昌幸, 本田清史, 鈴木好幸, 池田幸弥, 植木浩二郎, 門脇孝: 新規SGLT2阻害薬Tofogliflozinの抗肥満・

- インスリン抵抗性改善作用機序の解明. 第34回日本肥満学会. 2013. 10. 12, 東京
- 86) 岩部美紀, 山内敏正, 岩部真人, 窪田直人, 門脇孝: アディポネクチン受容体の動脈硬化における生理的・病態生理的意義の解明. 第34回日本肥満学会. 2013. 10. 12, 東京
- 87) 岩崎有作, 下村健寿, 河野大輔, 出崎克也, Enkh-Amar Ayush, 中林肇, 窪田直人, 門脇孝, 加計正文, 中田正範, 矢田俊彦: 膵臓を支配する求心性迷走神経は膵臓から分泌されるインスリンを効率良く受容する. 第34回日本肥満学会. 2013. 10. 12, 東京
- 88) 窪田哲也, 窪田直人, 佐藤寛之, 井上真理子, 林高則, 相原允一, 高本偉碩, 山内敏正, 植木浩二郎, 門脇孝: チアゾリジン誘導体はアディポネクチン依存性・非依存性にカフ誘導性の内臓肥厚を抑制する. 第34回日本肥満学会. 2013. 10. 12, 東京
- 89) 佐藤寛之, 窪田直人, 窪田哲也, 井上真理子, 高本偉碩, 橋本信嗣, 中屋恵三, 後藤守兄, 城森孝仁, 植木浩二郎, 門脇孝: DPP-4阻害薬(アナグリプチン)は骨格筋インスリン抵抗性を改善する. 第34回日本肥満学会. 2013. 10. 12, 東京
- 90) 羽田裕亮, 窪田直人, 山内敏正, 植木浩二郎, 門脇孝: 短期間の減量時における内臓脂肪の変化のインピーダンス法を用いた評価. 第34回日本肥満学会. 2013. 10. 12, 東京
- 91) 山口一樹, 松井健太郎, 吉田真梨子, 橋本唯史, 窪田哲也, 窪田直人, 門脇孝, 若林朋子, 岩坪威: 2型糖尿病とアルツハイマー病を結ぶ分子機構の解明. 日本認知症学会学術集会. 2013. 11. 08, 長野
- 92) 清水俊夫, 高田和子, 市原典子, 長岡詩子, 石田千穂, 中野今治: 筋委縮性側索硬化症におけるエネルギー代謝亢進・総消費熱量推定のための回帰分析. 第54回日本神経学会学術集会大会. 2013. 05. 30, 東京
- 93) 飯島勝矢, 柴崎孝二, 鈴木政司, 大淵修一, 大内尉義, 菊谷武, 東口高志, 高田和子, 平野浩彦, 辻哲夫: 「高齢者の食力」から考え直す最上流からの虚弱予防: 千葉県柏市での大規模高齢者健康調査から見据える方向性. 第55回日本老年医学会学術集会. 2013. 06. 05, 大阪
- 94) 村田浩子, 高田和子, 田口素子: 柔道女子重量級競技者の減量前後における身体組成と安静時代謝量の変化. 第7回日本スポーツ栄養研究会. 2013. 07. 07, 神奈川
- 95) 角南祐子, 高田和子, 岡純: 栄養学科と児童学科の学生における性格特性と食習慣の関連性について. 日本栄養改善学会. 2013. 09. 13, 名古屋
- 96) 中田由夫, 井上茂, 大河原一憲, 岡浩一郎, 小熊祐子, 高田和子, 田中茂穂, 田中千晶, 萩裕美子, 齋藤義信, 村瀬訓生: 世界標準化身体活動質問票(GPAQ)第2版日本語版の作成. 第24回日本疫学会学術総会. 2014. 01. 24, 仙台
- 97) 中田由夫, 井上茂, 大河原一憲, 岡浩一郎, 小熊祐子, 高田和子, 田中茂穂, 田中千晶, 萩裕美子, 齋藤義信, 村瀬訓生: 世界標準化身体活動質問票(GPAQ)第2版日本語版の作成. 第24回日本疫学会学術総会. 2014. 01. 25, 仙台
- 98) 中江悟司, 海老根直之: 「日本人の食事摂取基準(2010年版)」における幼児の推定エネルギー必要量の妥当性に関する予備的検討. 第60回日本栄養改善学会学術総会. 2013. 09. 13, 兵庫県
- 99) Tripette J, Murakami H, Ando T, Kawakami R, Tanaka N, Tanaka S, Miyachi M: Active video games for health promotion: from METs evaluation to physical intervention in young adults. 第68回日本体力医学会. 2013. 09. 21, 東京
- 100) 安藤貴史, 薄井澄誉子, 大河原一憲, 三宅理江子, 朴鍾薫, 宮下政司, 江崎治, 樋口満, 田中茂穂: 高い有酸素性能力は高脂質摂取時において1日の脂質酸化量の増加をもたらす. 第68回日本体力医学会大会. 2013. 09. 21
- 101) 山崎聖美, 江崎治: 脂肪摂取により血中トリグリセリド濃度増加を示すマウス. 第34回日本肥満学会. 2013. 10. 11, 東京国際フォーラム(東京)
- 102) 石原達朗, 宮本明奈, 藤島将隆, 山本満, 中江悟司, 海老根直之: 代謝量評価における安静維持課題の検討. 日本生理人類学会第69回大会. 2013. 10. 27, 京都府
- 103) 増田耕大, 三宅理江子, 薄井澄誉子, 小金井恵, 中村健太郎, 在田創一, 上野興治, 時田佳代子, 時田純, 芦田欣也, 山地健人, 高橋毅, 田中茂穂, 楠木伊津美, 饗場直美: 介護施設高齢者の基礎代謝量および筋肉量との関係. 第17回日本病態栄養学会年次学術集会. 2014. 01. 12, 大阪
- 104) 小金井恵, 中村健太郎, 増田耕大, 在田創一, 上野興治, 時田佳代子, 時田純, 芦田欣也, 山地健人, 高橋毅, 三宅理江子, 薄井澄誉子, 田中茂穂, 楠木伊津美, 饗場直美: 福祉施設高齢者における血液検査値と筋肉量との関係. 第17回日本病態栄養学会年次学術集会. 2014. 01. 12, 大阪
- 105) 中田由夫, 井上茂, 大河原一憲, 岡浩一郎, 小熊祐子, 高田和子, 田中茂穂, 田中千晶, 萩裕美子, 齋藤義信, 村瀬訓生: 世界標準化身体活動質問票(GPAQ)第2版日本語版の作成. 第24回日本疫学会学術総会. 2014. 01. 24, 仙台
- 106) 中田由夫, 井上茂, 大河原一憲, 岡浩一郎, 小熊祐子, 高田和子, 田中茂穂, 田中千晶, 萩裕美子, 齋藤義信, 村瀬訓生: 世界標準化身体活動質問票(GPAQ)第2版日本語版の作成. 第24回日本疫学会学術総会. 2014. 01. 25, 仙台
- 107) 大坂寿雅: 低酸素刺激によって誘起される低体温反応の脳機構. 第9回環境生理学プレコンgres. 2014. 03. 15, 鹿児島
- 108) 田中真紀, 田中千晶, 田中茂穂: 児童の日常の

- 歩数と身体を動かす習慣に関する教員による主観的評価との関係。日本発育発達学会12回大会。2014.03.16, 大阪
- 109) Osaka T: Hypoxia-induced hypothermia mediated by the GABAergic transmission in the rostral ventromedial medulla in anesthetized rats.. J Physiol Sci (The 91st annual meeting of the Japan Physiological Society). 2014.03.18, Kagoshima
- 110) 竹林純, 加藤美智子, 松本輝樹, 石見佳子: ビタミンCの大量経口摂取が持久性トレーニングを行ったラットにおいて運動持久力および抗酸化酵素活性に及ぼす影響。第67回日本栄養・食糧学会大会。2013.05.25, 名古屋
- 111) 只石幹, 西出依子, 東泉裕子, Marlena Kruger, 石見佳子: 大豆イソフラボンとカロテノイドの併用が破骨細胞形成に与える影響。第67回日本栄養・食糧学会大会。2013.05.25, 名古屋
- 112) 西出依子, 只石幹, 小堀真珠子, 東泉裕子, 加藤美智子, 稲田全規, 宮浦千里, 石見佳子: 大豆イソフラボン代謝産物エクオールが閉経後骨粗鬆症モデルマウスの骨髄細胞中の遺伝子発現に及ぼす影響。第67回日本栄養・食糧学会大会。2013.05.25, 名古屋
- 113) 長池祐太, 只石幹, 佐藤友紀, 守田昭仁, 江崎治, 亀井康富, 三浦進司: PGC-1 α を介した骨格筋分岐鎖アミノ酸代謝酵素の発現変化。第67回日本栄養・食糧学会大会。2013.05.25, 名古屋
- 114) 関口真理子, 白井智美, 石見佳子, 山内淳: ビタミンDによるMAPキナーゼ活性化のメカニズム。第67回日本栄養・食糧学会大会。2013.05.25, 名古屋
- 115) 白井智美, 白鳥明日香, 石見佳子, 山内淳: BCMO1遺伝子のレチノイン酸による発現制御機構の解析。第67回日本栄養・食糧学会大会。2013.05.25, 名古屋
- 116) 市田尚子, 東泉裕子, 西出依子, 石見佳子: レスベラトロールの閉経後骨粗鬆症モデルマウスにおける安全性・有効性評価。第60回日本栄養改善学会学術総会。2013.09.13, 神戸国際会議場 (神戸)
- 117) 三浦進司, 只石幹, 江崎治: 運動持久力と骨格筋LKB1およびAMPK活性 —横隔膜の変化—。第68回日本体力医学会大会。2013.09.23, 日本教育会館(東京)
- 118) 只石幹, 西出依子, 東泉裕子, Kruger M, 石見佳子: 大豆イソフラボンとカロテノイドの併用が破骨細胞形成に及ぼす影響。第18回日本フードファクター学会。2013.11.09, 東京
- 119) 横谷馨倫, 千葉剛, 佐藤陽子, 中西朋子, 村田容常, 梅垣敬三: 3種のハーブエキスの肝シトクロムP450を介した医薬品との相互作用の可能性。第67回日本栄養・食糧学会大会。2013.05.26, 名古屋
- 120) 梅垣敬三, アルセニチ イエレナ, 山崎優子, 佐々木菜穂, 千葉剛, 横谷馨倫, 佐藤陽子, 志村二三夫: コレウス・フォルスコリエキス投与によるマウスの肝臓と消化管のCYP 誘導の違い。第67回日本栄養・食糧学会大会。2013.05.26, 名古屋
- 121) 一丸佳代, 小野彩奈, 井出和希, 北川護, 成島大智, 松本圭司, 小菅和仁, 梅垣敬三, 山田浩: 健康食品の摂取に伴う健康被害報告の因果関係評価のための樹枝状アルゴリズムの構築。第16回日本医薬品情報学会学術大会。2013.08.11, 名古屋
- 122) 横谷馨倫, 千葉剛, 佐藤陽子, 中西朋子, 梅垣敬三: 肝シトクロムP450を介したコレウス・フォルスコリエキスとワルファリンやトルブタミドとの相互作用の検証。第60回日本栄養改善学会学術総会。2013.09.13, 神戸
- 123) 中西朋子, 千葉剛, 佐藤陽子, 横谷馨倫, 梅垣敬三: 医療機関受診者における健康食品の利用実態調査。第60回日本栄養改善学会学術総会。2013.09.13, 神戸
- 124) 佐藤陽子, 中西朋子, 横谷馨倫, 千葉剛, 梅垣敬三: 幼児のサプリメント利用に関するインターネット調査。第60回日本栄養改善学会学術総会。2013.09.14, 神戸
- 125) 和久田浩, 宮内詩野, 丸山力日菜, 籠田智美, 中村一基, 梅垣敬三, 伊藤由彦, 山田静雄, 篠塚和正: 異物排出タンパク質のP-精タンパク質に対する過活動膀胱治療薬の影響。第20回日本排尿機能学会。2013.09.20
- 126) 細井俊克, 古池直子, マサハート由華, 廣田晃一: 健康・運動関連科学ニュースコーパスを利用した効果的な学習マテリアルの作成: 根拠に基づく特定領域英語(ESP)の効果的学習ストラテジー構築の一手段として。第33回医療情報学連合大会。2013.11.21, 兵庫県神戸市
- 127) 一丸佳代, 小野彩奈, 井出和希, 北川護, 武野佑磨, 成島大智, 千葉剛, 梅垣敬三, 山田浩: 健康食品の摂取に伴う有害事象の因果関係評価法—評価項目の重み付けによる信頼性の改善—。臨床薬理学会。2013.11.27, 東京
- 128) 北川護, 一丸佳代, 小野彩奈, 井出和希, 梅垣敬三, 山田浩: 健康食品による有害事象の因果関係評価 —評価者特性による評価結果の違いについての考察—。臨床薬理学会。2013.11.27, 東京
- 129) 西信雄: 国民健康・栄養調査における世帯の年間収入別にみた生鮮食品の摂取量。第60回日本栄養改善学会学術総会。2013.09.14, 神戸市
- 130) 池田奈由, 渋谷健司, 野田博之, 野田光彦: 日本における糖尿病管理の推移—平成17~22年国民健康・栄養調査を用いた分析。第24回日本疫学会学術総会。2014.01.24, 宮城県仙台市, 日立システムズホール仙台(仙台市青年文化センター)

2. 公的資金による研究

【厚生労働科学研究費補助金】

a. 研究代表者

- 1) 瀧本秀美: 小児期からの生活習慣病対策及び生涯の健診等データの蓄積・伝達の在り方等に関する研究。厚生労働省厚生労働科学研究費。循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業。
- 2) 田中茂穂: 生活習慣病予防や身体機能維持のためのエネルギー・たんぱく質必要量の推定法に関する基盤的研究。厚生労働省厚生労働科学研究費。循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業。
- 3) 梅垣敬三: いわゆる健康食品による健康被害情報の因果関係解析法と報告手法に関する調査研究。厚生労働省厚生労働科学研究費。食品の安全確保推進研究事業。
- 4) 梅垣敬三: いわゆる健康食品の安全性情報の収集及び伝達手法の開発に関する研究。厚生労働省厚生労働科学研究費。食品の安全確保推進研究事業。
- 5) 西信雄: 日本人の健康・栄養状態のモニタリングを目的とした国民健康・栄養調査のあり方に関する研究。厚生労働省厚生労働科学研究費。循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業。

b. 研究分担者

- 1) 宮地元彦: 加齢による運動器への影響に関する研究—サルコペニアに関する包括的検討—(研究代表者 原田 敦)。厚生労働省厚生労働科学研究費。長寿科学総合研究事業。
- 2) 宮地元彦: 生活習慣病予防のための運動を阻害する要因としてのロコモティブシンドロームの評価と対策に関する研究(研究代表者 中村 耕三)。厚生労働省厚生労働科学研究費。循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業。
- 3) 宮地元彦: 健康日本21(第二次)の推進に関する研究(研究代表者 辻 一郎)。厚生労働省厚生労働科学研究費。循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業。
- 4) 宮地元彦: 標準的な健診・保健指導プログラム(改訂版)及び健康づくりのための身体活動基準2013に基づく保健事業の研修手法と評価に関する研究(研究代表者 津下一代)。厚生労働省厚生労働科学研究費。循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業。
- 5) 奥田奈賀子: 日本人の健康・栄養状態のモニタリングを目的とした国民健康・栄養調査のあり方に関する研究(研究代表者 西信雄)。厚生労働省厚生労働科学研究費。循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業。
- 6) 奥田奈賀子: 社会的要因を含む生活習慣病リスク要因の解明を目指した国民代表集団の大規模コホート研究:NIPPON DATA80/90/2010(研究代表者 三浦克之)。厚生労働省厚生労働科学研究費。循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業。

合研究事業。

- 7) 高田和子: 生活習慣病予防や身体機能維持のためのエネルギー・たんぱく質必要量の推定法に関する基盤的研究(研究代表者 田中茂穂)。厚生労働省厚生労働科学研究費。循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業。
- 8) 高田和子: 虚弱・サルコペニアモデルを踏まえた高齢者食生活支援の枠組みと包括的介護予防プログラムの考案および検証を目的とした調査研究(研究代表者 飯島勝矢)。厚生労働省厚生労働科学研究費。長寿科学総合研究事業。
- 9) 瀧本秀美: 児童虐待事例の家族再統合等にわたる親支援プログラムの開発と運用に関する研究(研究代表者 加藤則子)。厚生労働省厚生労働科学研究費。政策科学推進研究事業。
- 10) 瀧本秀美: 低出生体重児の予後及び保健的介入並びに妊婦及び乳幼児の体格の疫学的調査手法に関する研究(研究代表者 横山徹爾)。厚生労働省厚生労働科学研究費。成育疾患克服等次世代育成基盤研究事業。
- 11) 瀧本秀美: 日本人の食事摂取基準の策定に資する代謝性疾患の栄養評価に関する研究(研究代表者 多田紀夫)。厚生労働省厚生労働科学研究費。循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業。
- 12) 石見佳子: 国際食品規格策定に係る効果的なプロセスの開発に関する研究(研究代表者 里村一成)。厚生労働省厚生労働科学研究費。食品の安全確保推進研究事業。
- 13) 石見佳子: いわゆる健康食品による健康被害情報の因果関係解析法と報告手法に関する調査研究—製品の品質と原材料の安全性に関する研究(研究代表者 梅垣敬三)。厚生労働省厚生労働科学研究費。食品の安全確保推進研究事業。
- 14) 千葉剛: いわゆる健康食品による健康被害情報の因果関係解析法と報告手法に関する調査研究—製品の品質と原材料の安全性に関する研究(研究代表者 梅垣敬三)。厚生労働省厚生労働科学研究費。食品の安全確保推進研究事業。
- 15) 千葉剛: いわゆる健康食品の安全性情報の収集及び伝達手法の開発に関する研究(研究代表者 梅垣敬三)。厚生労働省厚生労働科学研究費。食品の安全確保推進研究事業。
- 16) 西信雄: 日本人の食生活の内容を規定する社会経済的要因に関する実証的研究(研究代表者 村山伸子)。厚生労働省厚生労働科学研究費。循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業。
- 17) 西信雄: 社会的要因を含む生活習慣病リスク要因の解明を目指した国民代表集団の大規模コホート研究:NIPPON DATA80/90/2010(研究代表者 三浦克之)。厚生労働省厚生労働科学研究費。循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業。
- 18) 西信雄: 人口構成、社会経済状況、生活習慣の変化を考慮した疾病構造と経済的負担の将来予

測 (研究代表者 井上真奈美) . 厚生労働省厚生労働科学研究費. 循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業.

- 19) 西信雄: 内臓脂肪蓄積を簡便に推定できる評価モデルの開発とそのリスク評価に関する縦断研究 (研究代表者 松下由実) . 厚生労働省厚生労働科学研究費. 循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業.
- 20) 西信雄: 岩手県における東日本大震災被災者の支援を目的とした大規模コホート研究 (研究代表者 小林 誠) . 厚生労働省厚生労働科学研究費. 健康安全・危機管理対策総合研究事業.

【文部科学研究費補助金】

a. 研究代表者

- 1) 中出麻紀子: 幼少期における食を通じた親との関わりが若年成人の朝食欠食に及ぼす影響. 文部科学省科学研究費. 若手研究 (B)
- 2) 笠岡 (坪山) 宜代: 肥満・生活習慣病に対する魚介類含有アミノ酸の新規機能の解明. 文部科学省科学研究費. 基盤研究 (C)
- 3) 宮地元彦: 日本人の身体活動量に関する環境・遺伝要因とその相互作用に関する網羅的研究. 文部科学省科学研究費. 基盤研究 (A)
- 4) 宮地元彦: 肥満者の運動リハビリツールとしての新世代アクティブテレビゲームの利用. 文部科学省科学研究費. 特別研究員奨励費 (外国人)
- 5) 鎌田真光: 身体活動促進のポピュレーション戦略に関する地域介入研究. 特別研究員奨励費
- 6) 山田晃一: 食行動と食嗜好を規定するグレリン遺伝子多型に於ける、食欲発現機構の疫学解析. 文部科学省科学研究費. 基盤研究 (C)
- 7) 村上晴香: 自発的身体活動・運動行動誘発におけるドーパミンシステム系遺伝子多型の関連. 文部科学省科学研究費. 基盤研究 (B)
- 8) 瀧本秀美: 特定健診制度を利用したDOH a D 仮説検証研究. 文部科学省科学研究費. 基盤研究 (C)
- 9) 奥田奈賀子: 地域別の有効な減塩施策のシミュレーションモデルの開発 (西 信雄) . 文部科学省科学研究費. 基盤研究 (C)
- 10) 田中茂穂: エネルギー代謝における個人内変動の要因および肥満との関連. 文部科学省科学研究費. 基盤研究 (A)
- 11) 薄井澄誉子: 閉経後における肥満・サルコペニア予防のための運動がエネルギー基質選択に与える影響. 文部科学省科学研究費. 特別研究員奨励費
- 12) 宮本 (青山) 友子: 子どもの生活習慣病リスクに及ぼす出生時体重と身体活動の影響. 文部科学省科学研究費. 特別研究員奨励費
- 13) 安藤貴史: 個人の代謝特性と食事摂取パターンが基質酸化量に及ぼす影響. 文部科学省科学研究費. 研究活動スタート支援
- 14) 中江悟司: 食事摂取基準の活用に向けた障がい児および有疾患児におけるエネルギー必要量の評価. 文部科学省科学研究費. 若手研究 (B)
- 15) 山崎聖美: 脂肪肝における肝細胞と免疫担当細胞の相互作用解析. 文部科学省科学研究費. 基盤研究 (C)
- 16) 大坂寿雅: アナパイレキシア (能動的な低体温) の神経機構. 文部科学省科学研究費. 基盤研究 (C)
- 17) 石見佳子: 大豆イソフラボン代謝産物の機能性及び安全性評価に関する研究. 文部科学省科学研究費. 基盤研究 (C)
- 18) 松本輝樹: 金属元素を指標とした栄養機能成分の基原判別法の開発と評価. 文部科学省科学研究費. 基盤研究 (B)
- 19) 山内淳: インスリン抵抗性とビタミンA代謝のクロストーク. 文部科学省科学研究費. 基盤研究 (C)
- 20) 梅垣敬三: ダイエット関連植物素材の安全性における主要栄養素の影響評価. 文部科学省科学研究費. 基盤研究 (C)
- 21) 千葉剛: 非アルコール性脂肪性肝炎に対する健康食品素材の有効性・安全性の検討. 文部科学省科学研究費. 基盤研究 (C)
- 22) 廣田晃一: 科学的根拠に基づく栄養学の脆弱性に関する理論的研究. 文部科学省科学研究費. 挑戦的萌芽研究
- 23) 坪田 (宇津木) 恵: パーソナリティが食行動、および将来の身体的健康にどのような影響を及ぼすのか. 文部科学省科学研究費. 若手研究 (B)
- 24) 池田奈由: 保健システム評価指標を用いた疾病の治療管理実態に関する研究. 文部科学省科学研究費. 基盤研究 (C)
- 25) 西信雄: 地域別の有効な減塩施策のシミュレーションモデルの開発. 文部科学省科学研究費. 基盤研究 (C)

b. 研究分担者

- 1) 宮地元彦: サルコペニア予防・改善のためのテーラーメイド運動処方プログラムの開発 (研究代表者 真田樹義) . 文部科学省科学研究費. 基盤研究 (B)
- 2) 村上晴香: サルコペニア予防・改善のためのテーラーメイド運動処方プログラムの開発 (研究代表者 真田樹義) . 文部科学省科学研究費. 基盤研究 (B)
- 3) 宮地元彦: 食行動と食嗜好を規定するグレリン遺伝子多型に於ける、食欲発現機構の疫学解析 (研究代表者 山田晃一) . 文部科学省科学研究費. 基盤研究 (C)
- 4) 瀧本秀美: スマートフォンと画像を利用した食生活モニタリングシステムの開発・実践・検証 (研究代表者 相澤清晴) . 文部科学省科学研究費. 基盤研究 (B)
- 5) 高田和子: エネルギー代謝における個人内変動の要因および肥満との関連 (研究代表者 田中

- 茂穂) . 文部科学省科学研究費. 基盤研究 (A)
- 6) 高田和子: 看護学生のコミュニケーション能力を高めるコーチング学習プログラムと評価方法の開発 (研究代表者 井上清美) . 文部科学省科学研究費. 基盤研究 (C)
 - 7) 瀧本秀美: 多胎児のための親子関係改善介入プログラムの開発と評価に関する研究 (研究代表者 加藤則子) . 文部科学省科学研究費. 基盤研究 (C)
 - 8) 高田和子: アスリートの基礎代謝量の個人差は競技特性で説明できるか (研究代表者 田口素子) . 文部科学省科学研究費. 基盤研究 (C)
 - 9) 田中茂穂: 居住地域環境と家庭環境が小学生の日常の身体活動に及ぼす影響 (研究代表者 田中千晶) . 文部科学省科学研究費. 基盤研究 (C)
 - 10) 竹林純: 食事からの抗酸化物質摂取総量の推算を可能とする食品の抗酸化能データベースの構築. 文部科学省科学研究費. 若手研究 (B)
 - 11) 池田奈由: 我が国の疾病負担 (Burden of Disease) に関する包括的研究 (研究代表者 渋谷健司) . 文部科学省科学研究費. 基盤研究 (A)

【その他の公的研究費】

a. 研究代表者

- 1) 古野純典 (主任研究者), 石見佳子, 松本輝樹, 竹林純: ビタミンK及びモリブデンの分析法の標準化並びに栄養成分等の収去試験に関する調査事業. 消費者庁請負事業. 2013
- 2) 高田和子: 通所系介護サービスにおける口腔機能向上及び栄養改善サービス提供のあり方に関する調査研究事業. 老人保健健康増進等事業. 厚生労働省.
- 3) 石見佳子: 閉経期女性の骨の健康に対する日本とニュージーランドの機能性食品の併用効果. 戦略的国際科学技術協力推進事業 (JSPS).

b. 研究分担者

- 1) 高田和子: 筋ジストロフィーの治療拠点整備、包括的診療ガイドラインの研究. 精神・神経疾患研究開発事業. 2013
- 2) 石見佳子, 竹林 純: ダイズイソフラボンの骨粗鬆症予防効果に関する研究. 農林水産省委託事業「農林水産物・食品の機能性等を解析・評価するための基盤技術の開発」.
- 3) 梅垣敬三: 機能性食品データベース・栄養指導システムの開発. 機能性食品開発プロジェクト. 農林水産省委託事業. 2013
- 4) 三好美紀: 途上国における国レベルの栄養調査を用いた非感染性疾患 (NCDs) のモニタリング手法の検討. 国際医療研究開発費. 2013

3. 民間企業等の共同研究等

- 1) 笠岡 (坪山) 宜代, 高田和子, 野末みほ, 猿倉薫子: 東日本大震災にかかる栄養改善活動. 日本栄養改善学会. 2013
- 2) 笠岡 (坪山) 宜代: 災害時における食・栄養の改

善に関する研究. 花王健康科学研究. 2013

- 3) 澤田亨, 宮地元彦: 体力・身体活動と運動器障害に関する疫学研究. 上原記念生命科学財団. 2013
- 4) 山田晃一: 食行動、食嗜好を規定するグレリン遺伝子多型の研究. 花王健康科学研究助成. 2013
- 5) 山田晃一: 健康を損なわずに肥満が解消できる、遺伝子多型毎の食生活処方、運動処方を考える. タニタ健康体重基金研究助成. 2013
- 6) 山田晃一: 卵摂取でコレステロール値が上がる体質とは?. 旗影会研究助成. 2013
- 7) 田中茂穂: ヒトのエネルギー消費量測定と成分. 花王株式会社との研究指導契約. 2013
- 8) 田中茂穂: 生活習慣病予防・改善および健康増進のための新指標開発に関する研究. オムロンヘルスケア株式会社からの受託研究. 2013
- 9) 山崎聖美: 大豆タンパク質 β -コングリシニンの非アルコール性脂肪肝改善・NASH予防効果と作用機序の解明. 不二たん白質研究振興財団. 2013
- 10) 山崎聖美: 大豆たんぱく質 β -コングリシニンおよびその分解物の肝臓機能に及ぼす影響に関する研究. 不二製油株式会社. 2013
- 11) 石見佳子, 東泉裕子: エクオール産生を高める食物繊維素材の開発に関する研究. J-オイルミルズ受託研究. 2013

4. 研究所外での講義、講演等

【大学等における特別講義等】

- 1) 丸山浩: 医療の質の評価・検疫. 兵庫医科大学公衆衛生学講義. 2013. 06. 12, 兵庫医科大学西宮市
- 2) 丸山浩: 厚生労働行政とレギュラトリーサイエンス. 筑波大学医薬品・医療機器レギュラトリーサイエンス講座. 2014. 01. 15, 筑波大学
- 3) 村上晴香: 栄養・食事と健康. 現代人とヘルスケア, 立命館大学. 2013. 06. 26, 滋賀 (草津)
- 4) 宮地元彦: 公衆衛生学. 慶応義塾大学. 2013. 09. 27, 信濃町キャンパス (東京)
- 5) 澤田亨: 健康づくりのための身体活動基準・指針2013. 平成25年度人間ドック健診食生活改善指導者向け研修会、人間ドック学会. 2013. 11. 17, 東京
- 6) 宮地元彦: 特別講師. 静岡県立大学看護学部. 2013. 11. 21, 静岡県立大学 (静岡)
- 7) 村上晴香: 大学生の基礎体力とその測定. 基礎健康科学実習, 静岡県立大学看護学部. 2013. 11. 26, 静岡 (駿河)
- 8) 村上晴香: 身体活動基準2013. 運動処方論・演習, 國學院大學. 2013. 12. 13, 神奈川 (横浜)
- 9) 田中茂穂: “カロリー”の常識と科学的知見の不一致. 茨城大学教育学部後援会・記念講演. 2013. 09. 28, 茨城大学 (水戸)
- 10) Tanaka S: Physical activity measurement in human studies. Faculty of Sports Science

- and Recreation, Universiti Teknologi MARA. 2013.12.19, Shah Alam, Selangor, Malaysia
- 11) 石見佳子: 骨の健康と生活習慣. 慶応義塾大学薬学部公開講座. 2013.06.08, 東京
 - 12) 石見佳子: 国民健康・栄養調査と栄養管理の基礎. 東京理科大学薬学部医療安全学講義. 2013.06.15, 野田市
 - 13) 石見佳子: 栄養・健康強調表示について. 神奈川県立保健福祉大学. 2014.02.08, 横須賀
 - 14) 梅垣敬三: 保健予防創薬基礎学-健康食品の科学. 中部大学. 2013.05.21
 - 15) 梅垣敬三: オールジャパン「食と健康」シンポジウム-「健康食品」の安全性・有効性情報データベースの活用法. 北海道大学. 2013.06.17
 - 16) 梅垣敬三: 食の安全ゼミナールII・食の安全システム演習-食品はどうあるべきか-健康食品から考える-. 東京大学農学部. 2013.07.16
 - 17) 梅垣敬三: 農産物総合リスク論2. 茨城大学農学部. 2013.09.26
 - 18) 梅垣敬三: 卒後研修-医療人として持ってほしい健康食品の知識. 岩手医科大学薬学部. 2013.10.06
 - 19) 梅垣敬三: 公開講座C-ハーブの安全性・有効性. 慶応義塾大学薬学部. 2013.11.17
 - 20) 三好美紀: 栄養学概説「国際的な管理栄養士の役割」. 盛岡大学. 2013.07.06, 岩手県岩手郡滝沢村
 - 21) 三好美紀: 世界の栄養問題の現状と課題: 管理栄養士としてどのように貢献できるか?. 千葉県立保健医療大学. 2013.12.05, 千葉市
 - 22) 三好美紀: ラオスの母子の栄養状況と課題. プライマリーヘルスケアと国際保健 I I. 2013.12.14, 慶応義塾大学. 東京都新宿区
 - 23) 西信雄: システム・ダイナミックスの基礎. 愛媛大学医学部統計学特別講義. 2014.01.10
- に向けて (疫学・分子生物学編). 2013.10.18, 九州大学筑紫地区 (春日市)
- 5) 梅垣敬三: 植物成分を利用した健康食品の現状. 薬用植物フォーラム 2013. 2013.07.09, つくば
 - 6) 梅垣敬三: 健康食品の安全性確保. 平成 25 年度短期研修食品衛生危機管理研修会. 国立保健医療科学院. 2014.01.28
 - 7) 千葉剛: 健康食品素材の安全性の検討: 医薬品との相互作用を中心に. 第 2 回フィトケミカル研究会. 2014.03.15, 岐阜市
 - 8) 西信雄: メタアナリシスとマルチレベル分析. 第 26 回日本循環器病予防セミナー. 2013.08.03, 福島市
- 【地方自治体、栄養士会等主催の講演会等】**
- 1) 奥田奈賀子: 特定健診・特定保健指導の基本的考え方. 生活習慣病対策健診・保健指導に関する企画・運営・技術研修 (埼玉県国民健康保険団体連合会). 2013.07.02, さいたま市
 - 2) 奥田奈賀子: 行動変容に繋がる特定保健指導. 生活習慣病予防健診・保健指導に関する企画・運営・技術研修 (埼玉県国民健康保険団体連合会). 2013.07.02, さいたま市
 - 3) 奥田奈賀子: 減塩を習慣づけるために. 長野県栄養士会生涯学習研修会 (長野県栄養士会). 2013.07.06, 長野市
 - 4) 奥田奈賀子: なるほど! 健診活用法. 世田谷区. 2014.02.09, 烏山区民会館ホール
 - 5) 奥田奈賀子: 健康な食生活の要 これからも、やっぱり減塩. 健康たからづか 2 1 特別講演会. 2014.02.21, 宝塚市
 - 6) 笠岡(坪山)宣代: 災害支援における管理栄養士・栄養士の課題. (公社)日本栄養士会 研究教育事業部全国研修会. 2014.03.01
 - 7) 澤田亨: 身体活動基準2013及びアクティブガイドについて. 島根県栄養士会. 2013.05.25, 松江市
 - 8) 澤田亨: 健康づくりのための身体活動基準2013および健康づくりのための身体活動指針. 公益社団法人 島根県栄養士会. 2013.05.25, 島根県松江市
 - 9) 村上晴香: 身体活動基準および身体活動指針の概要並びに生活習慣病等に関する知識. 健康運動指導士登録更新講習会「基礎講座」, 公益財団法人健康・体力づくり事業財団. 2013.05.25, 大阪
 - 10) 宮地元彦: 健康ひょうご21県民運動推進フォーラム. 公益財団法人 兵庫県健康財団. 2013.06.06, 兵庫県看護協会 ハーモニーホール (神戸)
 - 11) 村上晴香: 身体活動基準および身体活動指針の概要並びに生活習慣病等に関する知識. 健康運動指導士登録更新講習会「基礎講座」, 公益財団法人健康・体力づくり事業財団. 2013.06.15, 愛知 (名古屋)
 - 12) 澤田亨: 新運動指針について. 福井県栄養士会
- 【大学・研究所における研究セミナー等】**
- 1) 瀧本秀美: 栄養科学、社会実装に向けて期待されること. 科学技術未来戦略ワークショップ「胎児～新生児期環境に着目した先制医療の化粧化、独立行政法人科学技術振興機構研究開発戦略センター. 2014.02.06, 東京
 - 2) 高田和子: 安定同位体を使用したヒトの栄養に関する研究. 平成 25 年度安定同位体利用技術研究会、公益社団法人日本アイソトープ協会. 2014.03.14, 東京大学 (東京都文京区)
 - 3) 田中茂穂: 身体活動と身体不活動の評価の確立に向けて. 九州大学 P&P タイプ A 研究チーム、リサーチコアチーム共同開催第 5 回公開講演会 身体活動・身体不活動の科学「疫学および分子生物学からの解明」. 2013.10.17, 九州大学医学部 (福岡市)
 - 4) 田中茂穂: 身体活動量および不活動量の主観的・客観的評価. 九州大学 P&P タイプ A 研究チーム、リサーチコアチーム共同開催第 1 回人材育成事業 身体活動・身体不活動の科学の構築

- 生涯学習研修会. 2013. 06. 29, 福井市
- 13) 宮地元彦: 公衆衛生関係栄養士研修会. 岡山県健康福祉部健康推進課. 2013. 07. 16, 三光荘パブリゾン (岡山)
- 14) 村上晴香: 身体活動基準および身体活動指針の概要並びに生活習慣病等に関する知識. 健康運動指導士登録更新講習会「基礎講座」, 公益財団法人健康・体力づくり事業財団. 2013. 07. 21, 東京
- 15) 澤田亨: “身体活動基準及び身体活動指針”の概要並びに生活習慣病等に関する知識. 健康運動指導士登録更新講習会「基礎講座」. 2013. 08. 03, 名古屋市
- 16) 宮地元彦: 青森県栄養士会生涯学習研修会. 公益財団法人 青森県栄養士会. 2013. 08. 03, リンクステーションホール青森 (青森)
- 17) 村上晴香: 演習「困難事例検討」. 第24回人間ドック健診情報管理指導士ブラッシュアップ研修会, 公益社団法人日本人間ドック学会. 2013. 08. 04, 東京
- 18) 宮地元彦: 2013年度長野県栄養士会生涯学習研修会. 公益財団法人 長野県栄養士会. 2013. 08. 10, 松本大学5号館 (長野)
- 19) 澤田亨: “身体活動基準及び身体活動指針”の概要並びに生活習慣病等に関する知識. 健康運動指導士登録更新講習会「基礎講座」. 2013. 08. 18, 東京
- 20) 村上晴香: 健康づくりのための身体活動指針 2013について. 平成25年度特定健診・保健指導実践者育成研修 (技術編), 宮城県保健福祉部健康増進課. 2013. 08. 19, 宮城 (仙台)
- 21) 村上晴香: 特定保健指導の効果的な実践～生活活動をどのように増やすか～. 特定保健指導実践者育成研修会, 健康保険組合連合会. 2013. 08. 30, 東京
- 22) 澤田亨: 生活習慣病予防と身体活動～プラス・テンで健康寿命を延ばそう～. 生活習慣病予防のための健診・保健指導研修会. 2013. 09. 01, 長野県上田市
- 23) 村上晴香: 身体活動基準および身体活動指針の概要並びに生活習慣病等に関する知識. 健康運動指導士登録更新講習会「基礎講座」, 公益財団法人健康・体力づくり事業財団. 2013. 09. 07, 大阪
- 24) 澤田亨: 適正体重を知って・保って健康に!. 地域健康学習支援事業「健康講座」. 2013. 09. 10, 東京都中野区
- 25) 村上晴香: 身体活動基準および身体活動指針の概要並びに生活習慣病等に関する知識. 健康運動指導士登録更新講習会「基礎講座」, 公益財団法人健康・体力づくり事業財団. 2013. 09. 14, 東京
- 26) 澤田亨: 身体活動・運動に関する保健指導. 平成25年度特定健診・保健指導実践者育成研修会. 2013. 09. 17, 富山市
- 27) 宮地元彦: 平成25年度特定保健指導実践者育成研修会. 秋田県保険者協議会. 2013. 09. 17, 秋田県市町村会館 (秋田)
- 28) 村上晴香: 事例における運動指導について. 第26回人間ドック健診情報管理指導士ブラッシュアップ研修会, 公益社団法人日本人間ドック学会. 2013. 10. 05, 東京
- 29) 澤田亨: 「身体活動基準及び身体活動指針」の概要並びに生活習慣病に関する知識. 平成25年度健康運動指導士登録更新講習会 (基礎講座), 健康・体力づくり事業財団. 2013. 10. 06, 名古屋
- 30) 村上晴香: 運動の基礎科学・運動と健康の関わり. 平成25年度認定歯科衛生士セミナー, 公益社団法人日本歯科衛生士会. 2013. 10. 12, 東京
- 31) 宮地元彦: 平成25年度健康づくり提唱のつどい. 公益財団法人 三重県栄養士会. 2013. 10. 19, 三重県労働福祉会館 (三重)
- 32) 宮地元彦: 市町国民健康保険運営協議会委員研修会. 静岡県国民健康保険団体連合会. 2013. 10. 22, クーポール (静岡)
- 33) 宮地元彦: 諏訪健康福祉事務所管内保健業務研究研修会. 諏訪健康福祉事務所管内保健業務研究会. 2013. 11. 08, 諏訪合同庁舎
- 34) 澤田亨: 「身体活動基準及び身体活動指針」の概要並びに生活習慣病に関する知識. 平成25年度健康運動指導士登録更新講習会 (基礎講座), 健康・体力づくり事業財団. 2013. 11. 17, 東京
- 35) 澤田亨: 生活習慣病予防のための運動について. 平成25年度健康教育、厚木市. 2013. 11. 28, 厚木
- 36) 村上晴香: 身体活動基準および身体活動指針の概要並びに生活習慣病等に関する知識. 健康運動指導士登録更新講習会「基礎講座」, 公益財団法人健康・体力づくり事業財団. 2013. 12. 01, 愛知 (名古屋)
- 37) 澤田亨: 「身体活動基準及び身体活動指針」の概要並びに生活習慣病に関する知識. 平成25年度健康運動指導士登録更新講習会 (基礎講座), 健康・体力づくり事業財団. 2013. 12. 01, 名古屋
- 38) 宮地元彦: 健やか山梨21推進大会. 山梨県福祉保健部健康増進課. 2013. 12. 01
- 39) 澤田亨: 身体活動基準2013の活用について. 平成25年度特定保健指導実践者スキルアップ研修会, 日本健康運動指導士会群馬県支部. 2013. 12. 02, 前橋
- 40) 宮地元彦: 平成25年度保健事業推進担当者研修会. 千葉県国民健康保険団体連合会. 2013. 12. 05, 千葉県国保会館 (千葉)
- 41) 村上晴香: 身体活動基準および身体活動指針の概要並びに生活習慣病等に関する知識. 健康運動指導士登録更新講習会「基礎講座」, 公益財団法人健康・体力づくり事業財団. 2013. 12. 21, 東京
- 42) 宮地元彦: 平成25年度障害学習研修会. 香川県栄養士会. 2014. 01. 25, 高松テレサ (香川)

- 43) 宮地元彦: 第14回 平成25年度千葉県栄養改善学会. 公益財団法人 千葉県栄養士会. 2014. 02. 08, 千葉県立保健医療大学 (千葉)
- 44) 澤田亨: 「身体活動基準及び身体活動指針」の概要並びに生活習慣病等に関する知識. 更新必修講座プレ講習会 (NPO法人日本健康運動指導士会). 2014. 02. 09, 高松
- 45) 宮地元彦: 横浜市国民健康保険特定保健指導事業者情報交換会. 横浜市健康福祉局. 2014. 02. 25, 神奈川県自治会館 (神奈川)
- 46) 宮地元彦: 保健師・看護師等全国研修会. 健康保険組合連合会. 2014. 02. 28, AP東京八重洲通り (東京)
- 47) 澤田亨: 健康づくりのための身体活動指針 (アクティブガイド). 平成25年度第20回日本健康運動指導士会奈良県支部研修会. 2014. 03. 16, 奈良市
- 48) 高田和子: 健康づくりのための身体活動基準・指針2013. 群馬県栄養士会. 2013. 09. 29, 群馬県前橋市
- 49) 田中茂穂: 天高く人肥えない秋 ~エネルギー消費についての誤解と正しい知識. 2013 健康づくり提唱のつどい in 盛岡. 2013. 10. 29, 盛岡
- 50) 田中茂穂: カロリーについての正しい知識に基づく身体活動の推進. 健康日本21あいち新計画推進研修会. 2013. 11. 01, 名古屋
- 51) 石見佳子: 生活習慣病予防と大豆. 山形県栄養士会. 2013. 09. 28, 鶴岡
- 52) 石見佳子: 機能性を有する食品の有用性と安全性について. 東京都福祉保健局一職種職務専門研修. 2013. 10. 04, 東京
- 53) 石見佳子: 生活習慣病予防と大豆. 岩手県栄養士会. 2014. 01. 25, 盛岡
- 54) 梅垣敬三: 消費生活講座-健康食品の賢い使い方~氾濫する健康食品と上手につきあいましょう~. 武蔵野市消費生活センター. 2013. 05. 23
- 55) 千葉剛: 最近の健康食品の実態と健康被害の特徴. 消費生活相談員研修. 2013. 05. 31, 国民生活センター (東京)
- 56) 梅垣敬三: すぎなみ地域大学「食育ボランティア講座」-健康食品について. 杉並区. 2013. 06. 05
- 57) 梅垣敬三: いわゆる健康食品の有害事象への対応. 平成25年度全国地方衛生研究所長会議・厚生労働省. 2013. 06. 06
- 58) 千葉剛: 健康食品について~正しい選び方とは~. 葛飾区消費生活センター. 2013. 06. 12, 葛飾区
- 59) 千葉剛: 最近の健康食品の実態と健康被害の特徴. 石川県消費生活支援センター. 2013. 08. 23, 石川県金沢市
- 60) 梅垣敬三: 健康食品について-安全性を中心として-. 平成25年度食品安全行政講習会・厚生労働省. 2013. 08. 27
- 61) 梅垣敬三: 食事バランスと健康食品. 平成25年度登録販売者研修会、東京都薬剤師会. 2013. 09. 08
- 62) 梅垣敬三: あなたは知っていますか?健康食品の真実. 北海道立消費生活センターくらしの教室. 2013. 09. 18
- 63) 梅垣敬三: 「トクホ」で安心!?~トクホ (特定保健用食品) の正しい知識と上手な利用法~. 市原市消費生活センター消費者講座. 2013. 09. 27
- 64) 千葉剛: 健康と食の安全. 地方消費者グループ・フォーラム 東北ブロック. 2013. 10. 04, 青森市
- 65) 梅垣敬三: 健康食品の安全性・有効性情報データベースの紹介. 「医福食農連携」事例発表会、農水省. 2013. 10. 15
- 66) 梅垣敬三: サプリメントと野菜の摂取を考える. 長野県栄養士会学習会. 2013. 10. 20
- 67) 千葉剛: 健康食品って効くの?医薬品とどう違うの?. 京丹後市消費生活セミナー. 2013. 10. 22, 京丹後市
- 68) 梅垣敬三: ちょっと待って!健康食品を過信しないで!~広告・宣伝・噂話に惑わされないために~. 横浜市消費生活総合センター「消費生活教室」. 2013. 10. 25
- 69) 梅垣敬三: 健康講座『食と健康』薬と健康. 千代田区高齢者大学、千代田区立高齢者センター. 2013. 11. 01
- 70) 千葉剛: 最近の健康食品の実態と健康被害の特徴. 東京都消費者啓発員再要請講座. 2013. 11. 05, 新宿区
- 71) 梅垣敬三: 健康食品の基礎知識. 健康食品の知識普及員養成研修会、茨城県栄養士会. 2013. 11. 06
- 72) 千葉剛: 最近の健康食品の実態と健康被害の特徴. 市町相談員研修会. 2013. 11. 08, 長崎市
- 73) 梅垣敬三: 健康講座『食と健康』-栄養バランスアップでますます健康に. 千代田区高齢者大学. 2013. 11. 08
- 74) 千葉剛: 健康食品のウソ・ホント. 消費生活相談員の会. 2013. 11. 09, 長崎市
- 75) 梅垣敬三: 健康講座『食と健康』-栄養食品を賢く使おう. 千代田区高齢者大学. 2013. 11. 15
- 76) 梅垣敬三: 薬とサプリメントの相互作用・サプリメントの最新情報. 宮崎県栄養士会研修会. 2013. 11. 23
- 77) 梅垣敬三: きちんと理解できていますか?健康食品の正しい知識と付き合い方. 平成25年度在宅栄養士研修会、東京都多摩小平保健所. 2013. 12. 02
- 78) 千葉剛: 健康食品を正しく知ろう!!~健康食品って効果があるの?~. 米子市消費生活セミナー. 2013. 12. 07, 米子市
- 79) 梅垣敬三: 健康食品の賢い使い方. 新宿区平成25年度消費者講演会. 2013. 12. 12
- 80) 梅垣敬三: 身につけよう健康食品利用術~もっと賢い消費者になろう~. 平成25年度宮崎県市

- 町村国民健康保険運営協議会委員研修会。
2014.02.10
- 81) 梅垣敬三：健康食品の実態と安全性・有効性。「健康食品」に関するリスクコミュニケーション、消費者庁・厚生労働省主催。2014.02.18, 千代田区
- 82) 千葉剛：最近の健康食品の実態と健康被害の特徴。介護保険サポーターズ国分寺。2014.02.21, 国分寺
- 83) 千葉剛：サプリメント・健康食品などの摂取に関する注意点。栃木県佐野地区薬剤師会。2014.02.22, 栃木県佐野市
- 84) 梅垣敬三：健康食品の実態と安全性・有効性。「健康食品」に関するリスクコミュニケーション、消費者庁・厚生労働省主催。2014.02.24, 名古屋市
- 85) 梅垣敬三：健康食品の実態と安全性・有効性。「健康食品」に関するリスクコミュニケーション、消費者庁・厚生労働省主催。2014.02.27, 阿倍野区
- 86) 梅垣敬三：健康食品の実態と利用を考える。第12回食と農の安全・倫理シンポジウム。2014.03.01, 京都市
- 87) 梅垣敬三：健康食品をめぐる諸問題 Ó安全性と有効性を見分ける。だまされない消費者塾、土別地区広域消費生活センター。2014.03.04, 土別市
- 88) 梅垣敬三：健康食品との適切なつきあい方。平成25年度第7回東近江市消費者セミナー。2014.03.10, 東近江市
- 89) 千葉剛：健康食品・サプリメントの真実。鷹栖町消費者行政活性化（食の安全安心）事業。2014.03.13, 鷹栖町
- 90) 千葉剛：特定保健用食品の正しい利用方法。アドバイザーリースタッフ研究会。2014.03.30, 名古屋市
- 91) 西信雄：健康日本21（第2次）における栄養・食生活分野の取り組み～管理栄養士・栄養士が知っておきたい基本戦略～。新潟県栄養士会定時総会特別講演。2013.06.11
- セミナー 健康・栄養調査技術研修セミナー。2013.09.19, 兵庫県
- 5) 瀧本秀美：（講義1）栄養摂取状況調査の進め方。独立行政法人国立健康・栄養研究所 公開セミナー 健康・栄養調査技術研修セミナー。2013.09.20, 東京
- 6) 瀧本秀美：（講義2）食品番号表の使用法（食品の選択と番号化について）。独立行政法人国立健康・栄養研究所 公開セミナー 健康・栄養調査技術研修セミナー。2013.09.20, 東京
- 7) 瀧本秀美：（演習）食事調査聞き取りのポイント。独立行政法人国立健康・栄養研究所 公開セミナー 健康・栄養調査技術研修セミナー。2013.09.20, 東京
- 8) 瀧本秀美：（講義1）栄養摂取状況調査の進め方。独立行政法人国立健康・栄養研究所 公開セミナー 健康・栄養調査技術研修セミナー。2013.09.24, 福岡県
- 9) 瀧本秀美：（講義2）食品番号表の使用法（食品の選択と番号化について）。独立行政法人国立健康・栄養研究所 公開セミナー 健康・栄養調査技術研修セミナー。2013.09.24, 福岡県
- 10) 瀧本秀美：（演習）食事調査聞き取りのポイント。独立行政法人国立健康・栄養研究所 公開セミナー 健康・栄養調査技術研修セミナー。2013.09.24, 福岡県
- 11) 笠岡(坪山)宣代：人間栄養学。NRサプリメントアドバイザー講座、日本臨床栄養協会。2013.04.22
- 12) 澤田亨：身体活動と健康に関する疫学研究。平成25年度アドバイザーリースタッフ研修会。2013.11.10, 名古屋
- 13) 高田和子：食事から健康長寿を考える。平成25年度アドバイザーリースタッフ研修会。2013.10.26, 大坂
- 14) 石見佳子：栄養・健康表示の現状と課題。平成25年度アドバイザーリースタッフ研修会。2013.12.01, 福岡
- 15) 梅垣敬三：健康食品による有害事象と安全性確保。平成25年度アドバイザーリースタッフ研修会。2013.11.02 岡山
- 16) 西信雄：栄養・食生活に関する「健康日本21（第2次）」の方向性。平成25年度アドバイザーリースタッフ研修会。2013.11.11 仙台
- 【研究所が主催・共催するセミナー等】**
- 1) 古野純典：食物・栄養とがん予防。平成25年度アドバイザーリースタッフ研修会。2013.10.06, 東京
- 2) 瀧本秀美：（講義1）栄養摂取状況調査の進め方。独立行政法人国立健康・栄養研究所 公開セミナー 健康・栄養調査技術研修セミナー。2013.09.19, 兵庫県
- 3) 瀧本秀美：（講義2）食品番号表の使用法（食品の選択と番号化について）。独立行政法人国立健康・栄養研究所 公開セミナー 健康・栄養調査技術研修セミナー。2013.09.19, 兵庫県
- 4) 瀧本秀美：（演習）食事調査聞き取りのポイント。独立行政法人国立健康・栄養研究所 公開
- 【その他の講演会等】**
- 1) 丸山浩：現在の医療とその周辺について。医療機器総括製造販売責任者講習会。2013.04.11, 大田区産業プラザ 東京都
- 2) 丸山浩：現在の医療とその周辺について。医療機器修理業責任技術者基礎講習会。2013.05.30, 大田区
- 3) 丸山浩：現在の医療とその周辺について。高度管理医療機器・特定管理医療機器販売及び賃貸

- 営業管理者講習会. 2013.06.25, 大田区
- 4) 丸山浩: 現在の医療とその周辺について. 医療機器修理業責任技術者基礎講習会. 2013.06.27, 大田区
 - 5) 丸山浩: 現在の医療とその周辺について. 医療機器製造業責任技術者講習会. 2013.07.04, 大田区
 - 6) 中出麻紀子: 食事摂取基準の概念と給食施設での活用の仕方. 板橋区栄養管理講習会. 2013.05.23
 - 7) 中出麻紀子: 子どもから成人までの朝食欠食の現状と対策. 第2回栄養職員研修会. 2013.08.07
 - 8) 中出麻紀子: 健康教育の理念と方法. 全日本病院協会 特定保健指導専門研修. 2013.09.29
 - 9) 瀧本秀美: 妊産婦や乳幼児への栄養指導. 公益財団法人母子衛生研究会. 2013.11.29, 大阪
 - 10) 瀧本秀美: 妊娠中からの母子の食生活支援. 国立保健医療科学院 平成25年度専門課程養成訓練. 2013.12.
 - 11) 瀧本秀美: 平成24年国民健康・栄養調査における都道府県の状況について. 国立保健医療科学院 健康・栄養調査の企画・運営・評価に関する研修. 2014.01.29, 埼玉
 - 12) 奥田奈賀子: 生活習慣病の予防法. 行動変容実践のための保健指導者養成セミナー (一般社団法人日本家族計画協会). 2014.02.19, 東京
 - 13) 奥田奈賀子: 生活習慣病の疫学. 行動変容実践のための保健指導者養成セミナー (一般社団法人日本家族計画協会). 2014.02.19, 東京
 - 14) 瀧本秀美: 妊産婦や乳幼児への栄養指導. 公益社団法人母子衛生研究会. 2014.02.25, 東京
 - 15) 宮地元彦: 身体活動基準及び身体活動指針. 健康運動指導士登録更新登録会「基礎講座」. 2013.05.12, TKP博多駅前シティーセンター (福岡)
 - 16) 宮地元彦: 健康日本21と新しいしんた活動基準・指針. 第11回世田谷ENDOフォーラム. 2013.05.16, 国立成育医療研究センター (東京)
 - 17) 宮地元彦: 身体活動基準及び身体活動指針. 健康運動指導士登録更新登録会「基礎講座」. 2013.05.19, TKP神田ビジネスセンター (東京)
 - 18) 宮地元彦: 健康日本21(2013)と新しい身体活動基準・指針. 一般財団法人 EDG研究会 創立記念講演会. 2013.05.25, 女子栄養大学 (東京)
 - 19) 宮地元彦: 第21回人間ドック健診情報管理指導士研修会. 公益財団法人 日本人間ドック学会. 2013.06.14, 日本病院会 セミナーホール (東京)
 - 20) 宮地元彦: 身体活動基準及び身体活動指針. 健康運動指導士登録更新登録会「基礎講座」. 2013.06.21, KTP神田ビジネスセンター (東京)
 - 21) 宮地元彦: 平成25年度健康運動指導者研究交流会 愛知大会. NPO法人 日本健康運動指導士会 愛知県支部. 2013.06.22, 愛知県産業労働センター (愛知)
 - 22) 宮地元彦: 身体活動基準及び身体活動指針. 健康運動指導士登録更新登録会「基礎講座」. 2013.07.07, TKP大阪梅田ビジネスセンター (大阪)
 - 23) 宮地元彦: 「健康日本21(第二次)における運動指導者の役割と新エクササイズガイドについて」. 登録更新講習会. 2013.07.27, 芝浦サービスセンター(東京)
 - 24) 宮地元彦: 身体活動基準及び身体活動指針. 健康運動指導士登録更新登録会「基礎講座」. 2013.08.24, TKP博多駅前シティーセンター(福岡)
 - 25) 宮地元彦: 第25回人間ドック健診情報管理指導士プッシュアップ研修会. 公益財団法人 日本人間ドック学会. 2013.09.08, AP大阪駅前梅田一丁目 APホール (大阪)
 - 26) 宮地元彦: 健康運動指導士・健康運動実践指導者養成25周年記念事業. 公益財団法人 健康・体力づくり事業財団. 2013.09.24, 国立オリンピック記念青年総合センター (東京)
 - 27) 宮地元彦: 健康づくりにおける運動の役割—科学的エビデンスから実践へ—. 第15回ダノン健康栄養フォーラム「これからの健康づくりをどう支えるか」. 2013.09.28, 有楽町マリオン (東京)
 - 28) 宮地元彦: 身体活動基準及び身体活動指針. 健康運動指導士登録更新登録会「基礎講座」. 2013.09.29, TKP博多駅前シティーセンター(福岡)
 - 29) 宮地元彦: 長寿たすけ愛講演会2013 in 東松山. 公益財団法人 長寿科学振興財団. 2013.10.02, 松山市民活動センター (埼玉)
 - 30) 宮地元彦: 平成25年度第1回NPO法人日本健康運動指導士会 大阪府支部研修会. NPO法人 日本健康運動指導士会. 2013.10.06, YMCA国際文化センター (大阪)
 - 31) 宮地元彦: 平成25年度健康運動指導士養成講習会. 公益財団法人 健康・体力づくり事業財団. 2013.10.13, TKP赤坂ツインタワーカンファレンスセンター (東京)
 - 32) 宮地元彦: 東京消防庁健康管理講演会. 東京消防庁. 2013.10.15, 東京消防庁消防学校 (東京)
 - 33) 宮地元彦: 身体活動基準及び身体活動指針. 運動指導士登録更新登録会「基礎講座」. 2013.10.20, TKP神田ビジネスセンター (東京)
 - 34) 宮地元彦: 健康長寿講座2013. MSD株式会社. 2013.10.20, ザ・プリンスパークタワー東京 (東京)
 - 35) 宮地元彦: 身体活動基準及び身体活動指針. 健康運動指導士登録更新登録会「基礎講座」. 2013.11.10, TKP博多駅前シティーセンター (福岡)
 - 36) 宮地元彦: 健康運動指導士養成講習会. 公益財団法人 健康・体力づくり事業財団. 2013.11.16, 梅田フォーラム (大阪)
 - 37) 宮地元彦: 身体活動基準及び身体活動指針. 健

- 康運動指導士登録更新登録会「基礎講座」.
2013. 11. 18, TKP神田ビジネスセンター (東京)
- 38) 宮地元彦: ヘルシーサロン～生活習慣病対策で健康長寿を伸ばそう!～. 毎日新聞社.
2013. 11. 24, 毎日新聞社内 (東京)
- 39) 宮地元彦: 第6回新潟心臓リハビリテーション研究会. トーアエイヨー株式会社. 2013. 11. 30, 朱鷺メッセ (新潟)
- 40) 宮地元彦: 身体活動基準及び身体活動指針. 健康運動指導士登録更新登録会「基礎講座」.
2013. 12. 15, TKP大阪梅田ビジネスセンター (大阪)
- 41) 宮地元彦: 平成25年度健康運動指導士養成講習会. 公益財団法人 健康・体力づくり事業財団.
2014. 01. 10, TKP赤坂ツインタワーカンパレンスセンター (東京)
- 42) 宮地元彦: 健康日本21推進協議会「運動・スポーツ分科会」. 健康日本21推進全国連絡協議会.
2014. 01. 16, 全国衛生会館 (東京)
- 43) 宮地元彦: 第19回日本医師会認定健康スポーツ医制度再研修会. 医師会. 2014. 01. 18, 日本医師会館 (東京)
- 44) 宮地元彦: 平成25年度健康運動指導士養成講習会. 公益財団法人 健康・体力づくり事業財団.
2014. 01. 21, 国立代々木競技場 (東京)
- 45) 宮地元彦: 第22回人間ドック検診情報管理指導士研修会. 公益財団法人 日本人間ドック学会.
2014. 01. 24, 東京ファッションタウンビル (東京)
- 46) 宮地元彦: 平成25年度 第2回 日本健康運動指導士会長崎県支部研修会. 日本健康運動指導士会長崎県支部. 2014. 02. 01, シーハおおむら (長崎)
- 47) 宮地元彦: 保健指導者のためのスキルアップ研修会. 県民健康プラザ健康増進センター.
2014. 02. 03, 鹿児島県庁 (鹿児島)
- 48) 村上晴香: 身体活動基準および身体活動指針の概要並びに生活習慣病等に関する知識. 更新必修講座プレ講習会, NPO法人日本健康運動指導士会. 2014. 02. 16, 沖縄
- 49) 村上晴香: ロコモ予防の運動と栄養. メディケアフーズ展2014. 2014. 02. 20, 東京
- 50) 澤田亨: アクティブガイド、運動と健康の最新情報. 三菱電機健康保険組合特定保健指導スタッフ研修会. 2014. 03. 07, 横浜市
- 51) 宮地元彦: 更新必修講座プレ講習. NPO法人 日本健康運動指導士会. 2014. 03. 16, KTP赤坂ツインタワー (東京)
- 52) 村上晴香: 身体活動基準および身体活動指針の概要並びに生活習慣病等に関する知識. 更新必修講座プレ講習会, NPO法人日本健康運動指導士会. 2014. 03. 16, 東京
- 53) 宮地元彦: 更新必修講座プレ講習会. NPO法人 日本健康運動指導士会. 2014. 03. 23, 福岡県中小企業振興センター
- 54) 窪田直人: 糖・脂質代謝調節におけるIRS-1/IRS-2の生理的役割と病態を考慮した糖尿病治療～臓器で異なるインスリン作用～. 糖尿病EXPERT MEETING. 2013. 04. 18, 東京
- 55) 窪田直人: one point lecture. インスリンアドバイザリー講演会. 2013. 05. 25, 東京
- 56) 窪田直人: 2型糖尿病の分子機構の解明. 第4回三宿DMセミナー. 2013. 05. 27, 東京
- 57) 窪田直人: 2型糖尿病の病態と薬物治療. テネリア講演会 in 立川. 2013. 06. 05, 東京
- 58) 窪田直人: 肝臓における糖・脂質代謝調節機構. 第2回宮崎糖・脂質異常と肝疾患を考える会. 2013. 06. 12, 宮崎
- 59) 窪田直人: 食後血糖是正の重要性. テネリア座談会. 2013. 06. 22, Chicago
- 60) 窪田直人: 2型糖尿病の病態と薬物治療. 第2回糖尿病先端フォーラムin東埼玉. 2013. 06. 28, 埼玉
- 61) 窪田直人: 2型糖尿病の病態と薬物治療. 苫小牧糖尿病治療学術講演会. 2013. 07. 02, 北海道
- 62) 窪田直人: 合併症予防をみすえた2型糖尿病治療. Small Clinical Conference -脳卒中と糖尿病. 2013. 07. 17, 東京
- 63) 窪田直人: 2型糖尿病の治療戦略～インスリン療法を中心に～. Diabetes Conference. 2013. 07. 26, 千葉
- 64) 窪田直人: BOTによる治療の次の1手～基礎インスリン+GLP-1受容体作動薬への期待～. 糖尿病フォーラム パネルディスカッション「病態に合わせた治療の選択」. 2013. 08. 10, 横浜
- 65) 窪田直人: 2型糖尿病の病態と薬物治療～今後の展望も含めて～. 徳山医師会学術講演会. 2013. 08. 29, 徳山
- 66) 窪田直人: 2型糖尿病の病態と薬物治療. 上十三医師会学術講演会. 2013. 09. 17, 青森
- 67) 窪田直人: 2型糖尿病の病態と薬物治療. 古河市医師会講演会. 2013. 09. 20, 茨城
- 68) 窪田直人: 2型糖尿病の病態と薬物治療～今後の展望も含めて～. 甲府市内科医会講演会. 2013. 09. 24, 山梨
- 69) 窪田直人: 2型糖尿病の病態と薬物治療. 安曇野市医師会学術講演会. 2013. 09. 30, 長野
- 70) 窪田直人: 2型糖尿病の病態と薬物治療. 糖尿病学術講演会. 2013. 10. 01, 高松
- 71) 窪田直人: 2型糖尿病の分子機構の解明. テネリア発売1周年記念講演会. 2013. 10. 03, 東京
- 72) 窪田直人: 2型糖尿病の病態と薬物治療. 糖尿病カンファレンス2013. 2013. 10. 16, 埼玉
- 73) 窪田直人: 2型糖尿病の治療戦略 ～基礎インスリンとインクレチン関連薬の併用療法を中心に～. 筑波女性医師の会. 2013. 10. 22, 茨城
- 74) 窪田直人: 2型糖尿病の治療戦略～基礎インスリンとインクレチン関連薬の併用療法を中心に～. 糖尿病治療座談会. 2013. 10. 29, 千葉
- 75) 窪田直人: 2型糖尿病の病態と薬物治療. 日生涯教育協力講座. 2013. 11. 02, 埼玉
- 76) 窪田直人: 2型糖尿病の病態と薬物治療. テネリア

- ア発売1周年講演会in奈良. 2013. 11. 09, 奈良
- 77) 窪田直人: 2型糖尿病の病態と薬物治療～アンメットニーズに対するテネリアへの期待～. テネリア発売1周年講演会～現代の糖尿病治療が抱える問題点とは～. 2013. 11. 14, 横浜
- 78) 窪田直人: GLP-1受容体作動薬の選択と治療を考える. Lixisenatide Expert Meeting. 2013. 11. 19, 東京
- 79) 窪田直人: 2型糖尿病の治療戦略～基礎インスリンとインクレチン関連薬の併用療法を中心に～. Yamanashi Lyxumia Round Table Discussion. 2013. 11. 20, 山梨
- 80) 窪田直人: 2型糖尿病の治療戦略～基礎インスリンとインクレチン関連薬の併用療法を中心に～. DM Expert Seminar. 2013. 11. 23, 名古屋
- 81) 窪田直人: 2型糖尿病の分子機構の解明. 糖尿病セミナー. 2013. 11. 27, 埼玉
- 82) 窪田直人: 2型糖尿病の治療戦略～基礎インスリンとインクレチン関連薬の併用療法を中心に～. Lixisenatide Expert Meeting. 2013. 12. 07, 福岡
- 83) 原口美貴子, 勝山修行, 窪田直人, 門脇孝: ヒトにおけるベラプロストナトリウム徐放錠のインスリン抵抗性改善作用を検討する無作為二重盲検クロスオーバー試験. Diabetes masters conference. 2013. 12. 14, 東京
- 84) 窪田直人: 2型糖尿病の分子機構の解明. Scientific Exchange Meeting in Fukushima 『血糖調節関連臓器 ～糖尿病治療のこれから～』. 2014. 02. 05, 福島
- 85) 高田和子: 高齢者の低栄養リスクの背景とその対応. シニア食育講座, すこやか食生活協会. 2013. 10. 30, 東京都, 港区
- 86) 高田和子: 高齢期の食事と健康長寿. 朝日健康・医療フォーラム2014, 朝日新聞社. 2014. 01. 28, 東京都, 新宿区
- 87) 田中茂穂: 代謝計算 (講義ならびに計算問題の練習&解説). 第27回ACSMヘルスフィットネススペシャリスト教習ワークショップ. 2013. 11. 13, 国立オリンピック記念青少年総合センター (東京)
- 88) 田中茂穂: 栄養摂取と運動「身体活動量の定量法とその実際 (1) (2)」。平成25年度健康運動指導士養成講習会. 2014. 02. 08, 東京
- 89) 石見佳子: 骨づくりとカルシウム. 日本スポーツ栄養研究会. 2013. 06. 15, 東京
- 90) 石見佳子: 食の選択と健康. 日本栄養・食糧学会栄養学若手研究者の集いサマースクール. 2013. 08. 25, 筑波研修センター
- 91) 石見佳子: 骨の健康と生活習慣. 日本メディカルハーブ協会 ブラッシュアップセミナー. 2013. 09. 08, 大阪
- 92) 石見佳子: 骨の健康と生活習慣. 日本メディカルハーブ協会 ブラッシュアップセミナー. 2013. 11. 24, 東京
- 93) 梅垣敬三: 健康を維持するための食のあり方. 消費科学センター. 2013. 04. 17, 渋谷
- 94) 梅垣敬三: 医療人として持ってほしい健康食品の知識. 一般社団法人日本食品安全協会. 2013. 05. 17
- 95) 梅垣敬三: 消費者問題対策委員会勉強会-健康食品の問題点と規制について. 日本弁護士連合会. 2013. 05. 28
- 96) 梅垣敬三: 健康被害情報の収集による安全性の確保. 健康食品フォーラム, 社福協. 2013. 06. 24
- 97) 梅垣敬三: THP25周年記念フォーラム基調講演-常識は変わる. 中央労働災害防止協会. 2013. 08. 31
- 98) 梅垣敬三: 健康食品について. 学習会「一般健康食品の機能表示の問題点と、私たち消費団体にできること」、全国消費者団体連絡会. 2013. 09. 19
- 99) 梅垣敬三: 第1回健康食品を正しく理解しよう～健康食品の実態と健康被害～. NACS講座. 2013. 10. 10
- 100) 梅垣敬三: 第2回健康食品を正しく理解しよう～健康食品に関連する法律～. NACS講座. 2013. 10. 23
- 101) 梅垣敬三: 健康食品に期待される情報. 第3回日本アントシアニン研究会. 2013. 11. 18
- 102) 梅垣敬三: 「健康食品について消費者として知っておきたいこと」-その実態と付き合い方-. NACS中国支部講演会. 2013. 11. 30
- 103) 梅垣敬三: 健康食品について. 2013年度第2回食品安全セミナー, 日本生協連. 2013. 12. 05
- 104) 梅垣敬三: 健康食品の正しい使い方. 第2回日本臨床栄養協会主催『市公開講座』. 2013. 12. 15
- 105) 梅垣敬三: 健康食品の安全性確保において必要な知識. 健康食品管理士会中部支部研修会・一般市民公開講座. 2014. 03. 09, 富士市

5. 政府関係機関審議会、委員会等

【厚生労働省等政府関連】

- 1) 古野純典: 国民健康・栄養調査企画解析検討会. 厚生労働省. 2013
- 2) 古野純典: 「日本人の食事摂取基準(2015年版)」策定検討会. 厚生労働省. 2013
- 3) 古野純典: 薬事・食品衛生審議会 臨時委員. 厚生労働省. 2013
- 4) 古野純典: 消費者委員会 臨時委員. 内閣府. 2013
- 5) 古野純典: 食育推進会議委員. 内閣府. 2013
- 6) 瀧本秀美: 「日本人の食事摂取基準(2015年版)」策定検討会ワーキンググループ委員. 2013
- 7) 瀧本秀美: 平成24年国民健康・栄養調査解析ワーキンググループ委員. 2013
- 8) 瀧本秀美: 平成24年国民健康・栄養調査企画解析検討会構成員. 2013
- 9) 笠岡(坪山)宜代: 管理栄養士国家試験委員. 厚生

- 労働省. 2013
- 10) 宮地元彦: 国民健康・栄養調査企画解析検討会. 厚生労働省. 2013
 - 11) 宮地元彦: 戦略研究企画調査専門検討会作業部会. 厚生労働省. 2013
 - 12) 宮地元彦: 日本学術会議連携会員. 内閣府. 2013
 - 13) 宮地元彦: 戦略研究企画・調査専門検討会作業部会委員会. 厚生労働省. 2013
 - 14) 宮地元彦: 経済産業省次世代ヘルスケア産業協議会品質評価WG委員. 経済産業省. 2014
 - 15) 高田和子: 日本人の長寿を支える「健康な食事」のあり方に関する検討会. 2013
 - 16) 田中茂穂: 異分野連携共同研究推進検討会「医学・栄養学との連携による日本食の評価」. 農林水産省. 2014
 - 17) 石見佳子: 食品衛生審議会食品衛生分科会新開発食品調査部会員. 厚生労働省薬事. 2013
 - 18) 石見佳子: 内閣府食品安全委員会新開発食品専門委員会専門委員. 2013
 - 19) 石見佳子: 内閣府消費者委員会専門委員. 2013
 - 20) 石見佳子: 文部科学省科学技術・学術審議会専門委員. 2013
 - 21) 梅垣敬三: 管理栄養士国家試験委員. 厚生労働省. 2013
 - 22) 梅垣敬三: 厚生労働省医薬品の成分本質に関するWG委員. 2013
 - 23) 梅垣敬三: 食品安全委員会専門委員. 2013
 - 24) 梅垣敬三: 薬事・食品衛生審議会臨時委員. 2013
 - 25) 梅垣敬三: 消費者委員会専門委員. 2013
 - 26) 梅垣敬三: 「食品の新たな機能性表示制度に関する検討会委員. 消費者庁. 2013
 - 27) 千葉剛: 消費者安全調査委員会専門委員. 消費者庁. 2013
 - 28) 西信雄: 薬事・食品衛生審議会専門委員. 2013
 - 29) 西信雄: 新開発食品評価調査委員. 2013

【地方自治体等】

- 1) 宮地元彦: 東京都健康増進プラン21(第二次)推進会議. 2013
- 2) 宮地元彦: 長野県版運動ガイドライン作成委員会のアドバイザー. 2013
- 3) Suwanai H: 3033生涯スポーツ推進会議委員. 2013
- 4) 高田和子: 静岡県健康長寿プログラム検討委員. 2013
- 5) 梅垣敬三: 東京都食品安全情報評価委員会委員. 2013

【その他】

- 1) 宮地元彦: 次世代ヘルスケア産業協議会品質評価WG. 2013
- 2) 石見佳子: 農研機構大課題310「食品機能性」外部評価委員. 2013
- 3) 梅垣敬三: 独立行政法人医薬品医療機器総合機

構専門委員. 2013

- 4) 梅垣敬三: 独立行政法人国民生活センター商品テスト・評価委員会委員. 2013
- 5) 梅垣敬三: 岩手生物工学研究センター特別参与・研究推進委員. 2013

6. 関連学術団体等への貢献

【理事等の役員】

- 1) 笠岡(坪山)宜代: 日本栄養士会 研究教育事業部 副会長. 2013
- 2) 笠岡(坪山)宜代: 日本栄養改善学会関東甲信越支部監事. 2013
- 3) 澤田亨: 日本運動疫学会 理事. 2013
- 4) 高田和子: 日本スポーツ栄養研究会 副会長. 2013
- 5) 石見佳子: 日本栄養改善学会理事. 2013
- 6) 石見佳子: 日本栄養・食糧学会理事. 2013
- 7) 石見佳子: 日本食物繊維学会常務理事. 2013
- 8) 石見佳子: 日本栄養・食糧学会関東支部会副支部長. 2013

【学会誌等の雑誌編集委員】

- 1) 坪田(宇津木)恵: Public Health Nutrition 編集委員. 2013
- 2) 野末みほ: 栄養学雑誌編集委員. 2013
- 3) 山崎聖美: 栄養学雑誌編集委員. 2013
- 4) Yamazaki T: Journal of Applied Toxicology, Editorial Board. 2013
- 5) 田中茂穂: 日本民族衛生学会・「民族衛生」編集委員. 2013
- 6) 石見佳子: 栄養学雑誌編集委員. 2013
- 7) 石見佳子: Journal of Bone and Mineral Metabolism, Editorial Board. 2013
- 8) 梅垣敬三: 日本栄養・食糧学会編集委員. 2013
- 9) 千葉剛: ファルマシアトピックス小委員. 公益社団法人 日本薬学会. 2013
- 10) 西信雄: 日本公衆衛生雑誌編集委員. 2013
- 11) 西信雄: 日本疫学会Journal of Epidemiology編集委員. 2013

【その他】

- 1) 坪田(宇津木)恵: 日本公衆衛生学学会 査読委員. 2013
- 2) 笠岡(坪山)宜代: 8th Asia Pacific Congress of Clinical Nutrition(APCCN2013) プログラム委員. 2013
- 3) 笠岡(坪山)宜代: 災害支援チームJDA-DATエビデンスチームリーダー. 2013
- 4) 村上晴香: 将来構想委員会委員. 2013
- 5) 澤田亨: 受賞: 功労賞(全国THP推進協議会). 2013
- 6) 宮地元彦: 「健康運動実施者指導者養成用テキスト」平成25年度版一部修正. 2013
- 7) 宮地元彦: 「健康づくりのための身体活動基準2013」及び「健康づくりのための身体活動指針(アクティブガイド)」にかかわる監修業務.

- 2013
- 8) 宮地元彦: 「健康日本21(第二次)」リーフレットに関する監修業務. 2013
 - 9) 宮地元彦: 「成人手帳(2013年版)」にかかわる総監修業務. 2013
 - 10) 山内淳: 日本栄養・食糧学会 代議員. 2013
 - 11) 山内淳: 日本ビタミン学会 代議員. 2013
 - 12) 山内淳: 脂溶性ビタミン総合研究委員会 委員. 2013
 - 13) 山内淳: 日本ビタミン学会 栄養機能食品制度検討タスクフォース 委員. 2014
 - 14) 梅垣敬三: 緩和医療学会 補完代替医療ガイドライン改訂WPG外部委員. 2013
 - 15) 梅垣敬三: 日本ビタミン学会学術・広報委員. 2013
 - 16) 三好美紀: 日本栄養士会. 国際交流委員. 2013
 - 17) 西信雄: 一般財団法人医療経済研究・社会保険福祉協会医療経済研究機構アドバイザー. 2013
 - 18) 西信雄: 日本公衆衛生学会公衆衛生モニタリングレポート委員. 2013
 - 19) 西信雄: 日本疫学会日本医学会連絡委員、日本疫学会法人化準備委員、選挙規定検討委員、学術委員. 2013
 - 20) 西信雄: 公益財団法人放射線影響協会 放射線疫学調査解析検討委員、交絡因子調査専門委員. 2013
 - 21) 西信雄: 8th Asia Pacific Congress of Clinical Nutrition (APCCN2013)プログラム委員. 2013

7. 併任、非常勤講師等

【厚生労働省等との併任】

該当無し

【大学の客員教授・非常勤講師等】

- 1) 奥田奈賀子: 滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門客員准教授. 2013
- 2) 坪田(宇津木)恵: 管理栄養士基礎セミナー非常勤講師「国立健康・栄養研究所の役割、および研究者の仕事」. 2013
- 3) 澤田亨: 獨協医科大学 非常勤講師. 2013
- 4) 澤田亨: 順天堂大学 スポーツ健康科学部 客員准教授. 2013
- 5) 宮地元彦: 国立大学法人 鹿屋体育大学非常勤講師. 2013
- 6) 窪田直人: 東京大学大学院医学系研究科特任准教授. 2013
- 7) 田中茂穂: お茶の水女子大学大学院・人間文化創成科学研究科 客員准教授および非常勤講師. 2013
- 8) 田中茂穂: 公立大学法人首都大学東京人間健康科学副専攻コース 非常勤講師. 2013
- 9) 田中茂穂: 早稲田大学スポーツ科学学術院 客員教授. 2013
- 10) 山崎聖美: 人間総合科学大学大学院 非常勤講師 科目名: 分子栄養学. 2013

- 11) 中江悟司: 東京学芸大学非常勤講師. 2013
- 12) 石見佳子: 国立大学法人東京農工大学客員教授. 2013
- 13) 石見佳子: 東京理科大学客員教授. 2013
- 14) 石見佳子: 早稲田大学スポーツ科学部客員教授. 2013
- 15) 梅垣敬三: 慶応大学薬学部非常勤講師. 2013
- 16) 梅垣敬三: 十文字学園女子大学非常勤講師. 2013
- 17) 梅垣敬三: 日本薬科大学非常勤講師. 2013
- 18) 梅垣敬三: 茨城大学農学部非常勤講師. 2013
- 19) 三好美紀: 県立広島大学大学院. 非常勤講師. 2013
- 20) 西信雄: 国立大学法人東京大学医学部非常勤講師. 2013
- 21) 西信雄: 国立大学法人愛媛大学医学部非常勤講師. 2013
- 22) 西信雄: 国立大学法人筑波大学大学院非常勤講師. 2014

【その他】

- 1) 中出麻紀子: 日本ウェルネス歯科衛生専門学校. 2013
- 2) 宮地元彦: 一般財団法人 日本企画協会健康マネジメントスキーム委員会委員. 2013
- 3) 田中茂穂: すかいらくフードサイエンス研究所 専門委員. 2013年4月1日. 2013
- 4) 田中茂穂: 東京都統一体力テスト分析委員(東京都教育庁指導部). 2013
- 5) 田中茂穂: 平成25年度スポーツ医・科学専門委員会「社会心理的側面の強化を意図した運動・スポーツ遊びプログラムの開発および普及啓発」研究班. 2013
- 6) 石見佳子, 山内淳: 消費者庁食品表示企画課業務協力. 2013
- 7) 山内淳, 松本輝樹: 内閣府消費者委員会受託事業. 2013
- 8) 西信雄: 独立行政法人国立国際医療研究センター客員研究員. 2013
- 9) 三好美紀: 独立行政法人国立国際医療研究センター客員研究員. 2013

8. 国際貢献

【海外への派遣による科学・技術協力】

該当無し

【海外からの研究者の受け入れ・指導】

- 1) 梅垣敬三: 健康・栄養の効果的な情報提供に関する研究. 若手外国人研究者招へい事業. 2013
- 2) 瀧本秀美: マレーシアあるいは日本の国民栄養調査の特徴についての検討. 若手外国人研究者招へい事業. 2013

【国際会議への対応】

- 1) 石見佳子: 栄養・特殊用途食品部会. FAO/WHO合同食品規格計画 (コーデックス委員会). 2013, ドイツ
- 2) Nishi N, Miyoshi M: WHO Regional Workshop on Strengthening Leadership and Advocacy for the Prevention and Control of Noncommunicable Diseases. WHO西太平洋事務局と国立保健医療科学院共催. 2013, 埼玉県和光市

【その他】

- 1) Miyoshi M: 講義“Nutritional Management in developing countries”. JICA地域別研修「アジア・太平洋地域問題解決型の保健専門職人材育成」. 2013, 鹿児島県奄美市
- 2) Miyoshi M: 講義“Role of dietitian in Japan”、“Nutritional assessment in the field: Dietary Surveys”. JICA (地域別) 「アフリカ地域 女性指導者のための健康と栄養改善」コース. 2014, 独立行政法人国際協力機構 北海道国際センター (帯広). 帯広市

9. 知的財産権等

該当無し

IV 資 料

1. 独立行政法人国立健康・栄養研究所中期目標

独立行政法人通則法(平成 11 年法律第 103 号)第 29 条第 1 項の規定に基づき、独立行政法人国立健康・栄養研究所が達成すべき業務運営に関する目標(以下「中期目標」という。)を次のとおり定める。

平成 23 年 3 月 1 日

厚生労働大臣 細川律夫
内閣総理大臣 菅 直人

(前文)

独立行政法人国立健康・栄養研究所(以下「研究所」という。)は、人々の栄養・食生活、運動と健康との関わりについて、基礎から応用に至るまでの調査及び研究を包括的かつ国際的な水準で行い得る試験研究機関であることから、国民の健康・栄養状態及び QOL(生活の質)の向上に直接あるいは間接的に寄与することのできる調査及び研究を効率的に行い、国民の健康と福祉のために貢献することが重要である。

そのため、特にヒトを対象とした研究に関して、わが国の大学・研究機関の中心的存在として、総合的・統合的な研究を推進するとともに、研究者を育成する役割を果たすことを求める。

また、厚生労働行政上の重要な健康・栄養施策を推進する上で不可欠な科学的根拠を質の高い研究によって示し、それらを専門的立場から要約して発信するとともに、健康科学・栄養学領域において、アジア地域への貢献を含め、国際的なリーダーシップを担うことを期待する。

第 1 中期目標の期間

独立行政法人通則法(以下「通則法」という。)第 29 条第 2 項第 1 号の中期目標の期間は、平成 23 年 4 月 1 日から平成 28 年 3 月 31 日までの 5 年間とする。

第 2 国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する事項

通則法第 29 条第 2 項第 3 号の国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する事項は、次のとおりとする。

1. 研究に関する事項

(1) 国の生活習慣病対策等の施策としてより効果的な反映が見込まれる研究に関する事項

研究所の独自性を発揮するとともに、厚生労働省及び地方自治体等における健康づくり施策に必要不可欠な科学的知見を集積し、発信することを目的として、以下の分野に特化・重点化して研究を行うこと。

- ア 生活習慣病予防のための運動と食事の併用効果に関する研究
- イ 日本人の食生活の多様化と健康への影響、及び食

生活の改善施策に関する栄養疫学的研究

ウ 「健康食品」を対象とした食品成分の有効性評価及び健康影響評価に関する調査研究

エ 科学技術基本計画に沿って、研究機関として独自性の高い基礎的・応用的研究を行うこと。

オ 研究の成果をより広く社会に還元するために、食育推進基本計画に資する調査研究を推進し、専門家(管理栄養士等)への情報提供を行うこと。

(2) 研究水準及び研究成果等に関する事項

ア 健康・栄養に関する施策、ガイドライン等の科学的根拠につながる質の高い研究を行い、研究成果を論文等を通じて社会に発信・還元を行うこと。

イ 健康・栄養関連の専門家を対象としたセミナー、一般向けの講演会等を開催すること。

ウ 研究所の一般公開を実施するとともに、中学校・高等学校等からの見学にも積極的に応じること。

(3) 研究実施体制等の整備に関する事項

ア 独立行政法人という組織形態の利点を最大限活かした研究資金等の運用及び人的資源の配置により、研究・業務の効率化を図ること。

イ 国内外の産業界を含む健康・栄養・食品関係の機関との共同研究の拡充等を目的として、研究所研究員の派遣及び他機関等の研究員の受入れをより積極的に行うこと。

ウ 大学及び民間企業等との連携・協力により、研究者の交流を進め、人材の養成と資質の向上を図ること。

エ 調査及び研究の円滑な実施が図られるよう、適切な措置を講ずるとともに、他機関との共同研究及び受託研究において、双方の研究施設及び研究設備の稼働状況に応じた共同利用を図ること。

2. 法律に基づく業務、社会的・行政ニーズ、国際協力等に関する事項

(1) 健康増進法に基づく業務に関する事項

ア 国民健康・栄養調査の実施に関する事務のうち、集計事務については、「健康日本 21」、都道府県健康増進計画等の政策ニーズに適時対応して、迅速かつ効率的に集計を行うこと。

また、外部委託のより積極的な活用、高度集計・解析システムの活用等により効率化を図る。

イ 健康増進法第27条第5項(同法第29条第2項、第32条第3項及び第32条の3第3項において準用する場合を含む)の規定により収去した食品の試験業務を的確に実施すること。対応可能な試験(収去試験を含む。)について積極的に民間の登録試験機関の活用が図られるよう、検査方法の標準化、検査精度の維持・管理に一層重点的に取り組むこと。

(2) 社会的・行政ニーズへの対応に関する事項

ア 関連機関等と定期的な情報交換の場を設け、社会的・行政ニーズを把握すること。

イ ホームページ等を通じて国民からのニーズを把握すること。

(3) 国際協力、産学連携等対外的な業務に関する事項

ア 国際協力の対外的な業務については、政府関係部局との連携を強め、国際栄養協力体制を充実強化し、特にWHO研究協力センターとして指定を受けて、アジア地域における国際貢献と学術的ネットワークの構築を行うことにより、国際社会における役割を果たすこと。

イ 産学連携の対外的な業務については、政府関係部局との連携を強め、産学連携推進機能の強化により、産学連携をより一層進め、研究成果の社会への還元と知的財産の獲得を目指すこと。

(4) 栄養情報担当者(NR)制度に関する事項

栄養情報担当者(以下「NR」という。)認定制度については、既存の資格取得者の取扱い等について検討の上、第三者機関への業務移管を行うこと。

3. 情報発信の推進に関する事項

- (1) 研究所として総合的な情報発信を行うための体制を強化し、対外的な業務の推進を図ること。
- (2) 研究所の活動状況に関する情報をホームページを介して広く公開すること。
- (3) 研究所の諸活動及び研究業績については、研究所報告やニュースレターの刊行及び電子メディアでの配信により公開すること。
- (4) 研究所の諸規程、職員の公募等、必要な情報の提供は、ホームページ等を活用し積極的に行うことにより、その充実を図ること。

第3 業務運営の改善及び効率化に関する事項

通則法第29条第2項第2号の業務運営の効率化に関する事項は次のとおりとする。

1. 運営体制の改善に関する事項

- (1) 研究所の意思決定と運営を機動的かつ効率的に行うことができるよう、役員組織と研究部門及び事務部門との間の連絡を密にし、内部統制を強化すること。
- (2) 研究企画及び評価に関わる機能及び体制の強化を図り、研究業務の包括的、計画的な実施を進めること。
- (3) 業務の確実な実施のため、各研究・業務に関する内部進行管理及び評価を行うこと。
- (4) 法人運営に関して透明性を確保するとともに、国

民に向けての説明責任を全うするため、広報体制を強化し、迅速な情報公開に努めること。

- (5) 外部資金の獲得に積極的に取り組むとともに、経費節減や現況資源の有効利用を進めること。

2. 研究・業務組織の最適化に関する事項

- (1) 業務効率化の観点から、研究部組織体制の見直しを行い、その最適化を図ること。
- (2) 民間団体、大学、地方公共団体、他府省等における調査研究との相互補完を図る観点から、重複・類似する研究を排除して研究の効率化を目指すとともに、他の研究機関との連携のあり方について検討を行い、連携・交流を強化することにより組織・研究の活性化を図ること。

3. 職員の人事の適正化に関する事項

- (1) 重点的に行う研究及び法律に基づく業務に対して適切に職員を配置し、効率的に研究業務を行うこと。なお、収去食品の試験業務における民間登録試験機関での試験導入に伴う要員の見直し及び、研究所におけるNR認定制度業務の廃止に伴う要員の合理化を図ること。
- (2) 研究職員の個人評価の結果を昇給・昇任等、給与面に反映させること。
- (3) 研究職員の流動化計画に沿って原則公募制・任期制により採用を行い、研究者層の向上を図ること。
- (4) 事務職員についても適切に評価を行い、資質の向上と業務の効率化を図ること。

4. 事務等の効率化・合理化に関する事項

- (1) 業務の効率化を図るため、事務書類の簡素化、電子化、事務作業の迅速化を進めるとともに、定型的な業務でアウトソーシング可能なものについては外部委託を行うこと。
- (2) 事務職員については、研修会やマネジメントセミナー等を通じ、研究所経営への参加意識を高めるとともに、業務意識の高揚を図ること。
- (3) 業務の効率化を図るため、業務・システムの最適化を図ること。

5. 評価の充実に関する事項

- (1) 毎年度内部評価委員会において、主要な研究業務に関して内部評価を実施すること。
- (2) 第三者による外部評価委員会により、年度計画の事前及び事後評価を行うこと。
- (3) 評価に関する結果は、ホームページで公開すること。
- (4) 研究職員について自己点検・評価を行うとともに、できるだけ客観的な指標に基づく評価を毎年実施すること。

6. 業務運営全体での効率化

- (1) 一般管理費(運営費交付金を充当して行う事業に係るもの。人件費は除く。)については、中期目標期間の最終年度までに、平成22年度を基準として10%以上の削減を達成すること。
- (2) 人件費については、「簡素で効率的な政府を実現するための行政改革の推進に関する法律」(平成18年法律第47号)、「経済財政運営と構造改革に関する基本

方針 2006」(平成 18 年 7 月 7 日)に基づき平成 18 年度からの 5 年間で平成 17 年度を基準として 5%以上削減するとした人件費改革の取組を平成 23 年度まで継続すること。また、総人件費についても、政府における総人件費削減の取組を踏まえ、厳しく見直すこと。

併せて、研究所の給与水準については、国家公務員の給与水準も十分考慮し、手当を含め役職員給与の在り方について厳しく検証した上で、目標水準・目標期限を設定してその適正化に計画的に取り組むとともに、その検証結果や取組状況を公表すること。

(3) 業務経費(運営費交付金を充当して行う事業に係るもの。)については、中期目標期間の最終年度までに、平成 22 年度を基準として 5%以上の削減を達成すること。

(4) 契約については、「独立行政法人の契約状況の点検・見直しについて」(平成 21 年 11 月 17 日閣議決定)に基づく取組を着実に実施すること。

なお、研究事業に係る調達については、透明性が高く効果的な契約の在り方を追求すること。

第 4 財務内容の改善に関する事項

通則法第 29 条第 2 項第 4 号の財務内容の改善に関する事項は、次のとおりとする。

1. 外部研究資金その他の自己収入の増加に関する事項

- (1) 運営費交付金以外の競争的研究資金については、中期目標期間の最終年度までに研究資金の 50%以上の獲得を達成すること。
- (2) 各種研究から生じる知的財産(特許権等)の有効活用及び研究成果等の社会への還元を目的とした出版等を行うことにより、自己収入の増加を図ること。

2. 経費の抑制に関する事項

- (1) 各部門において、常勤職員の人件費も含めたコスト管理を四半期毎に行い、効率的な資金の運用とコスト意識の向上を図ること。
- (2) 研究業務の集約化、アウトソーシング等により人的資源の有効活用並びに経費の節減を図るとともに、業務運営に係る経常的経費の削減を図ること。

第 5 その他の業務運営に関する重要事項

通則法第 29 条第 2 項第 5 号のその他の業務運営に関する重要事項は、次のとおりとする。

(1) セキュリティの確保

「第 2 次情報セキュリティ基本計画」等の政府の方針を踏まえ、適切な情報セキュリティ対策を推進すること。

2. 独立行政法人国立健康・栄養研究所中期計画

独立行政法人通則法(平成11年法律第103号)第29条第1項の規定に基づき、平成23年3月1日付けをもって厚生労働大臣及び内閣総理大臣から指示のあった独立行政法人国立健康・栄養研究所中期目標を達成するため、同法第30条の規定に基づき、次のとおり、独立行政法人国立健康・栄養研究所中期計画を作成する。

平成23年3月31日

独立行政法人国立健康・栄養研究所
理事長 徳留 信寛

(前文)

独立行政法人国立健康・栄養研究所(以下「研究所」という。)は、人々の健康・栄養状態及びQOL(生活の質)の向上への貢献という目的を踏まえ、短期的・中期的・長期的な視点から重点的に行う研究課題を選択するとともに、研究所の社会的役割を踏まえつつ、独自性の高い研究や将来に向けて発展が期待される萌芽的・創造的な研究の推進に努める。

特に、生活習慣病予防対策等、国民の健康づくり施策に科学的根拠を提供するための調査・研究を重点的に行うとともに、アジア諸国における健康科学・栄養学の発展に貢献すべく中心的役割を果たすよう努める。

第1 国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する事項を達成するための措置

1. 研究に関する事項を達成するための措置

(1) 国の生活習慣病対策等の施策としてより効果的な反映が見込まれる研究に関する事項を達成するための措置

研究所の独自性を発揮するとともに、厚生労働省及び地方自治体等における健康づくり施策に必要な不可欠な科学的知見を集積し、発信することを目的として、以下の分野に特化・重点化して研究を行う。

ア 生活習慣病予防のための運動と食事の併用効果に関する研究

運動・身体活動や適切な食事による生活習慣病の一次予防、身体活動や食事といった環境因子と遺伝的因子の相互作用の解明、並びに運動と食事とによるテーラーメイド予防法に関して、ヒトを対象とした試験、動物や細胞等を用いた実験を行う。特に安全で効果的かつ実効性のある一次予防策開発に資する調査及び研究に特化・重点化する。

- a 運動・身体活動や適切な食事による生活習慣病予防、運動と食事指導の併用効果等について、実験的、疫学的、文献的な調査及び研究を行う。これにより食事摂取基準、運動基準等を策定するための科学的根拠を提示する。
- b ヒトを対象として、遺伝因子と各栄養素摂取量、身体活動量、エネルギー代謝等との関係を明らかにし、生活習慣病発症の遺伝、環境リスクの相互作用を解明する。
- c 遺伝子改変動物を用いて、運動や食事指導によ

ってメタボリックシンドローム及び生活習慣病がいかにより予防されるのかを、遺伝子解析等による分子レベルでの機序解明を試み、運動と食事指導による生活習慣病のテーラーメイド予防法の開発に資する科学的根拠を提示する。

イ 日本人の食生活の多様化と健康への影響、及び食生活の改善施策に関する栄養疫学的研究

日本人の食生活の多様性を科学的に評価するための指標及び調査手法を開発し、それが健康に及ぼす影響について疫学的な調査及び研究を行う。また、それらに基づく食生活改善法の開発と施策への提言を行う。特に日本人の食事摂取基準等の科学的根拠となるデータの蓄積と「健康日本21」の評価及び次期「健康づくり運動」策定への応用を目指す。

a 栄養に関する実践において最も基本的かつ重要な指針である「食事摂取基準」について、平成25年度に予定される改定作業開始に向け、系統的レビューを平成24年度まで重点的に行う。また、今後の改定に向けて、ヒトを対象とした疫学的研究及び基本的情報の収集等を継続的に行う。

b 「健康日本21」の最終評価及び次期「健康づくり運動」の策定に向けた、効果的で実効性のある運動・食事指導プログラムの開発と普及、国及び地方自治体等の施策の推進に資する研究を行うことが重要であることから、これらの手法の開発、国民健康・栄養調査の機能強化及びデータ活用に資する検討を行う。

ウ 「健康食品」を対象とした食品成分の有効性評価及び健康影響評価に関する調査研究

「健康食品」に含まれる食品成分の有効性及び健康影響に関して、実社会における使用実態等を把握するとともに、ヒトに対する影響を評価する手法を開発する。その結果を幅広く公開し、「健康食品」に関わるリスクコミュニケーションに資するデータベースの更新及び充実に継続して行う。

- a 「健康食品」等の健康志向に基づく食品の使用実態等の情報を収集・把握し、食品表示並びに食品成分の健康影響に関する調査研究を実施する。
また、「健康食品」摂取の安全性に関しては、動物実験及び細胞実験等による健康影響評価研究を実施し、これらに関する情報発信を行う。
- b 「健康食品」に関する正しい知識の普及と健康被害の未然防止並びに拡大防止を目的に、公正で科学的な健康食品の情報を継続的に収集・蓄積し、それらの情報を効果的に国民に提供する。また、

「健康食品」の利用実態や有害事例に関連した調査研究を行う。

- エ 研究所の研究能力を向上させ、将来、その応用・発展的な展開を可能とするために、関連研究領域における基礎的・独創的・萌芽的研究を行う。
- オ 小児から高齢者までの生涯にわたるライフステージに応じた間断ない食育をより効果的に推進するための調査研究を行い、その成果を専門家（管理栄養士等）のみならず広く国民に情報提供し、行政機関等と協調して食育を推進する。

(2) 研究水準及び研究成果等に関する事項を達成するための措置

ア 論文、学会発表等の促進

調査及び研究の成果の普及を図るため、学術誌への学術論文の投稿、シンポジウム、学会等での口頭発表を行う。

これらについては、中期目標期間内に、学術論文の掲載を 400 報以上、口頭発表を 1,000 回以上行う。

なお、口頭発表は、海外においても積極的にを行う。

イ 講演会等の開催

健康・栄養関連の専門家向けのセミナー、幅広い人々を対象とした講演会等をそれぞれ年 1 回以上開催し、調査及び研究の成果を社会に還元する。

また、関係団体が実施する教育・研修プログラムへの職員の派遣を積極的に推進する。

一般及び専門家からの電話、メール等による照会等に対し、適切に対応する。

ウ 開かれた研究所への対応

幅広い人々に研究所の業務について理解を深めてもらうことを目的に、年 1 回オープンハウスとして研究所を公開する。

また、健康と栄養に興味を抱かせ、将来、栄養学研究を担う人材の育成に資するよう、「総合的な学習の時間」による中学・高校生等の見学を積極的に受け入れる。

(3) 研究実施体制等の整備に関する事項を達成するための措置

- ア 研究・業務の効率的な実施という観点から、研究員、研究補助員の配置を戦略的に行うとともに、重点化する調査研究及び法定業務に研究業務費を適切に配分し、確実な業務の執行に努める。

- イ 民間企業、大学、他の研究機関等との間で従前から実施している共同研究に加え、新たな共同研究等を積極的に推進するため、民間企業、大学等へ研究所研究員を派遣するとともに、資質の高い研究員を受け入れる。

また、非公務員化の利点を活用し、研究所が所有する知的財産の活用、又は所有する情報等を用いた共同研究を民間企業及び大学等と積極的に行うこととし、中期目標期間内に 60 件以上を目標とする。

- ウ 連携大学院、民間企業及び各種研究機関等から研究員を年間 100 名以上受け入れ、研究所が所有する情報・技術等を提供するとともに、研究員を広く大学院や関係機関等に年間 100 名以上派遣し、研究所の持つ情報・技術等を社会に還元する。

また、国内外の若手研究員等の育成に貢献するため、博士課程修了者、大学院生、他機関に属する研究員等を継続的に受け入れるための体制の充実を図る。また、連携大学を増やし、兼任教授の派遣を行うとともに、若手研究員の指導・育成を行うため、求めに応じ、研究所研究員を他機関へ派遣する。

- エ 施設・設備について、自らの研究実施のために実効的に活用するとともに、「独立行政法人国立健康・栄養研究所設備等利用規程」に基づき、大学、他研究機関との共同研究等での外部研究者等の利用に供する。

2. 法律に基づく業務、社会的・行政ニーズ、国際協力等に関する事項を達成するための措置

(1) 健康増進法に基づく業務に関する事項を達成するための措置

- ア 国民健康・栄養調査の集計事務については、政策ニーズに対応した迅速かつ効率的な集計を行う。具体的には、当該年度の集計事務を調査票のすべてを受理してから 7 ヶ月を目途（ただし、調査項目に大幅な変更が生じない場合に限る。）に行う。

また、外部委託、高度集計・解析システムの活用等により、効率的な集計を行うことにより、経費の削減を図る。

さらに、都道府県等が行う健康・栄養調査に対する支援を含めて関連する技術的な事項について、研究所がより積極的に対応する。

- イ 健康増進法第 27 条第 5 項（同法第 29 条第 2 項、第 32 条第 3 項及び第 32 条の 3 第 3 項において準用する場合を含む。）の規定により収去した食品の試験業務を的確かつ迅速に実施する。

上記の試験並びに特別用途食品の許可に係る試験業務について、分析技術の確立した試験については、登録試験機関間における検査の精度管理に努める。

また、分析技術の確立していない特定保健用食品の関与成分等の新たな食品成分への技術的対応については、他登録試験機関での応用も可能な分析技術の規格化及び当該食品成分の標準品の開発の実現を図る。さらに栄養表示基準における栄養成分について、分析方法の改良を行う。

(2) 社会的・行政ニーズへの対応に関する事項を達成するための措置

- ア 健康・栄養に関連する団体、大学、民間企業等から直接的に研究所に対する要望等を伺う機会を年 6 回程度設け、社会的ニーズを把握する。さらに、業務関連行政部局との間で、定期的な情報及び意見等を交換する場を設け、行政ニーズを把握する。

また、国、地方自治体、国際機関等より、専門的な立場からの技術的な協力、指導等の求めには積極的に応じて研究員を派遣し、研究所における調査及び研究の成果が適切に施策等に反映できるよう努める。

- イ 研究所に対する意見、要望等をホームページやセミナー等の参加者を通じて把握し、その内容を検討し、可能な限り業務に反映させる。

(3) 国際協力、産学連携等対外的な業務に関する事項を達成するための措置

ア アジア諸国との間で、栄養調査、栄養改善及び健康づくり等に関する共同研究において中心的な役割を果たすとともに、国際協力の対外的業務について政府関係部局との連携を強め、国際栄養協力体制を充実強化する。特に WHO 研究協力センター（現在申請中）の機能として、WHO 西太平洋地域における栄養調査の実施ならびに食事摂取基準や運動ガイドラインの策定等の技術支援を行う。

また、研究者養成及び共同研究の促進を図るため、「国際栄養協力若手外国人研究者招へい事業」により、年間 2 名程度の若手研究者に研究所での研修機会を提供するとともに、アジア地域の研究者を交えたシンポジウムの開催等を行い、アジア地域における栄養学研究基盤の強化に寄与する。

イ 政府関係部局との連携を強め、民間企業、大学等の複合的な連携を強化する。

これにより、研究所の研究成果と社会ニーズの橋渡し、新たな展開・応用を図るとともに、知的財産の獲得を積極的に行う。

また、調査及び研究の成果については、それらが知的財産につながるかどうかのスクリーニングを行い、中期目標期間内に 20 件以上の特許等の出願を行う。

取得した特許権の実施を図るため、特許権情報のデータベースをホームページ上に公開する。

(4) 栄養情報担当者(NR)制度に関する事項を達成するための措置

栄養情報担当者(以下「NR」という。)認定制度については、既存の資格取得者、資格取得を目指している者及び栄養情報担当者養成講座の取扱い並びに移管に伴う経過措置等について検討し、第三者機関へ業務を移管する。

3. 情報発信の推進に関する事項を達成するための措置

(1) 総合的な情報発信を効果的に実施するための内部組織の連携を充実させ、対外的な業務の推進を図るための組織整備を行う。

(2) ホームページによって研究所の活動状況を積極的に発信し、利用対象者を考慮した掲載内容の充実に努める。ホームページアクセス件数は、中期目標期間中、毎年 300 万件程度を維持させる。

(3) 研究所の諸活動及び研究業績については、毎年度 1 回研究報告としてとりまとめるとともに、最新の研究成果やトピックス等を紹介したニュースレターを年 4 回刊行する。

また、これらについては、ホームページ上で公開するとともに、電子メディアでの配信も行う。

(4) 研究所の諸規程、職員の公募等、必要な情報の提供は、ホームページ等の充実を図り、積極的に行う。

第 2 業務運営の改善及び効率化に関する事項を達成するための措置

1. 運営体制の改善に関する事項を達成するための措置

(1) 研究所の意思決定と運営を機動的かつ効率的に行うことができるよう、役員組織と研究部門及び事務部門との間の連絡調整を密にし、内部統制を強化する。

また、研究所運営に対する研究所職員の意識を高めるため、研究所運営に関する必要な情報の共有化を図る。

(2) 研究部門間での連携を強め、異なる研究分野からの情報や研究手法を積極的に利用して戦略的な事業の立案・実施を図る。

(3) 調査及び研究業務の効率的かつ確実な推進を図るため、所内報告会等により各業務の進捗状況を把握し、適切な評価を行い、その結果を計画的・効率的な業務の遂行に反映させる。

また、所内イントラネットを活用し、業務の進捗状況管理等の効率化を図る。

(4) 独立行政法人等の保有する情報の公開に関する法律(平成 13 年法律第 140 号)に則り、積極的な情報公開を行う。

(5) 研究所の経営基盤の安定化のため、外部資金の獲得に積極的に取り組むとともに、経費の節減や研究所の所有する設備等の有効利用を進める。

2. 研究・業務組織の最適化に関する事項を達成するための措置

(1) 重点化する調査研究及び法定業務に関して、業務量や集中的に遂行すべき時期等を勘案しながら研究及び業務チームを組織する。

非公務員型の利点を生かして柔軟に組織の見直し・改編を行うこととし、研究所の組織や研究内容を国民により分かりやすくするため、従来のプログラム、プロジェクト体制を研究部、研究室に改組する。

また、組織の見直し・改編後、毎年、その効果を検証するとともに検証結果を公表する。

(2) 民間団体、大学、地方公共団体、他府省等における調査研究との相互補完を図る観点から、重複・類似する研究を排除して研究の効率化を図る。他の研究機関との連携のあり方について検討を行い、研究員の連携・交流を進め、人材の養成と資質の向上に努めることにより、組織・研究の活性化を図る。

3. 職員の人事の適正化に関する事項を達成するための措置

(1) 重点化する調査研究及び法定業務に対して適切に職員を配置し、効率的に研究業務を行う。

なお、収去食品の試験業務における民間登録試験機関での試験導入及び NR 認定制度業務の廃止に伴う要員の見直しや合理化を図る。

(2) 非公務員型のメリットを最大限に活かした柔軟な人事システムを構築し、研究職員の個人評価の結果を昇給・昇任等の処遇及び給与面に反映させる。

- (3) 研究員の採用に当たっては、「独立行政法人国立健康・栄養研究所における研究者の流動化計画」に沿って、原則として公募制、任期付の採用を行う。

研究所が重点的に推進する調査及び研究業務が着実に成果が挙げられるよう、資質の高い人材を広く求める。また、資質の高い人材については、任期中の実績評価に基づき、任期を付さない形で採用を行う。

さらに、外国人及び女性研究者が業務に従事しやすい環境づくりを推進し、外国人及び女性研究者の採用も可能な限り行う。

- (4) 事務職員の質の向上を図るため、研究員と同様に評価を行うこととし、その評価システムとして研究所の人事評価制度に基づく総合的評価を行い、その結果を昇給・昇任等に反映する。

※人事に関する指標

期末の常勤職員数は、期初の 100% を上限とする。

(参考 1) 期初の常勤職員数 45 名

期末の常勤職員数 45 名 (以内)

(参考 2) 中期目標期間中の人件費総額

2,139 百万円 (見込)

ただし、上記の額は、役員報酬並びに職員基本給、職員諸手当、超過勤務手当、休職者給与及び国際派遣職員給与に相当する範囲の費用である。

4. 事務等の効率化・合理化に関する事項を達成するための措置

- (1) 業務効率化の観点から、事務の迅速化、簡素化、電子化等を推進する。さらに、定型的な業務で外部委託が可能なものについては積極的に進める。
- (2) 事務職員については、研究所で働く者として必要な法令・知識を習得するための各種研修会やセミナー等への参加を充実させ、職員が働きやすく自己能力を最大限発揮できるような職場環境の整備を推進する。

これにより、研究所経営への参加意識を高め、職員の資質の向上及び業務効率化の一層の推進を図る。

- (3) 業務の効率化を図るため、業務・システムの最適化を図る。

5. 評価の充実に関する事項を達成するための措置

- (1) 毎年度内部評価委員会を開催し、主要な研究業務に関して、内部評価を実施し、研究業務の確実な実施及び効率化に資する。
- (2) 柔軟かつ競争的で開かれた調査及び研究環境の実現や経営資源の重点的・効率的配分に資するため、外部の専門家等の評価者による外部評価を毎年度 2 回程度実施する。
- (3) 内部及び外部評価結果は、ホームページ上で公表するとともに、組織や施設・設備の改廃等を含めた予算・人材等の資源配分に反映させる等、調査及び研究活動の活性化・効率化に積極的に活用する。
- (4) 研究員については、自己点検・評価を行うとともに、可能な限り客観的な指標に基づき評価を行う。また、理事長は自ら全研究員との面談を行い、

適切かつ公平な評価を行う。

さらに、評価の結果は各職員にフィードバックするとともに、所内イントラネットを活用して、各研究の研究業績を公開し、評価の透明性の確保に努める。

6. 業務運営全体での効率化を達成するための措置

- (1) 一般管理費(運営費交付金を充当して行う事業に係るもの。人件費を除く。)については、中期目標期間中、毎年度、2%以上削減し、中期目標期間の最終年度までに、平成 22 年度を基準として 10%以上の削減を達成する。

- (2) 人件費については、「簡素で効率的な政府を実現するための行政改革の推進に関する法律」(平成 18 年法律第 47 号)、「経済財政運営と構造改革に関する基本方針 2006」(平成 18 年 7 月 7 日)に基づき平成 18 年度からの 5 年間で平成 17 年度を基準として 5%以上削減するとした人件費改革の取組を平成 23 年度まで継続する。また、平成 24 年度以降の総人件費についても、政府における総人件費削減の取組を踏まえ、厳しく見直すとともに、毎年度 1%以上の削減を行う。ただし、以下の人員に係る人件費は、上述の人件費改革における削減対象から除外する。

① 国からの委託費及び補助金により雇用される任期付研究者

② 運営費交付金により雇用される任期付研究者のうち、国策上重要な研究課題(第三期科学技術基本計画(平成 18 年 3 月 28 日閣議決定)において指定されている戦略重点科学技術をいう。)に従事する者及び若手研究者(平成 17 年度末において 37 歳以下の研究者をいう。)

さらに、給与水準については、国家公務員の給与水準も十分考慮し、手当を含め役職員給与の在り方について厳しく検証した上で、その適正化に計画的に取り組む。なお、職員の給与水準については、21 年度の対国家公務員指数が 97.4 であることを踏まえ、この水準を引き続き維持することとして、その検証結果や取組状況を公表する。

- (3) 業務経費(運営費交付金を充当して行う事業に係るもの。)については、中期目標期間中、毎年度、1%以上削減し、中期目標期間の最終年度までに、平成 22 年度を基準として 5%以上の削減を達成する。
- (4) 契約については、以下の取り組みによりその適正化を推進する。

ア 契約は、原則として一般競争入札等によることとする。

イ 「随意契約等見直し計画」に基づく取組を着実に実施し、その取組状況を公表する。

ウ 一般競争入札等により契約を行う場合であっても、特に企画競争や公募を行う場合には、競争性、透明性が十分確保される方法により実施する。

エ 会計監事による定期的な監査により、入

- 札・契約の適正な実施について点検を受ける。
オ 契約監視委員会において、契約方式の妥当性及び競争性確保のための改善方策の妥当性等を事前審査する。

第3 財務内容の改善に関する事項を達成するための措置

1. 外部研究資金その他の自己収入の増加に関する事項を達成するための措置

- (1) 運営費交付金以外の競争的研究資金については、中期目標期間中、研究資金の50%以上を目標に積極的な獲得を図り、外部研究資金、その他の競争的資金の募集等に積極的に参加し、その増加に努める。
- (2) 各種研究から生じる知的財産(特許権等)の有効活用並びに研究成果、さらには国民健康・栄養調査結果等の社会への還元を目的とした出版等を行うことにより、自己収入の増加を図る。

また、「独立行政法人国立健康・栄養研究所施設・設備等利用規程」に基づき、地域住民等への施設開放を行い、研究所の設備等の効率的な利用に努め、併せて自己収入の増加に寄与する。

2. 経費の抑制に関する事項を達成するための措置

- (1) 各部門において、常勤職員の人件費を含めたコスト管理を四半期毎に行い、効率的な資金の運用とコスト意識の向上を図る。
- (2) 研究業務の集約化、アウトソーシング等により人的資源の有効活用並びに経費の削減を図るとともに、業務運営に係る経常的経費の削減を図る。

第4 予算(人件費の見積りを含む。)、収支計画及び資金計画

1. 予算

別紙1のとおり。

2. 収支計画

別紙2のとおり。

3. 資金計画

別紙3のとおり。

第5 短期借入金の限度額

1. 限度額

100,000,000円

2. 想定される理由

- ア 運営費交付金等の受入れの遅延等による資金の不足
- イ 予定外の退職者の発生に伴う退職手当の支給
- ウ その他不測の事態により生じた資金の不足

第6 重要な資産を譲渡、又は担保に供するときは、その計画

該当なし。

第7 剰余金の使途

- ア 研究環境の整備に係る経費
- イ 職員の資質向上に係る経費
- ウ 知的財産管理、技術移転に係る経費 等

第8 その他の業務運営に関する重要事項を達成するための措置

(1) セキュリティの確保

情報システムに係る情報のセキュリティの確保に努める。

(2) 施設及び設備に関する計画

該当なし。

(3) 積立金処分に関する事項

該当なし。

(別紙 1)

中期計画 (平成 23 年度～平成 27 年度) の予算

(単位: 百万円)

区 別	金 額
収入	
運営費交付金	3,446
手数料収入	26
受託収入	316
栄養情報担当者事業収入	32
寄附金収入	42
雑収入	24
計	3,886
支出	
人件費	2,520
うち 基本給等	2,413
退職手当	107
一般管理費 (光熱水料、図書館関係経費等)	397
業務経費	553
国民健康・栄養調査に関連するサーベイランスプログラム	50
食品収去試験等業務	19
栄養疫学プログラム	69
健康増進プログラム	68
臨床栄養プログラム	31
基礎栄養プログラム	50
食品保健機能プログラム	40
国際栄養協力事業	37
健康食品安全情報ネットワーク事業	102
健康栄養情報事業	87
受託経費	416
特別用途食品表示許可試験費	26
受託経費	316
栄養情報担当者事業経費	32
寄附研究事業費	42
計	3,886

[人件費の見積り] 期間中総額 2,139 百万円を支出する。

ただし、上記の額は、役員報酬並びに職員基本給、職員諸手当、超過勤務手当、退職者給与及び国際派遣職員給与に相当する範囲の費用である。

[運営費交付金の算定ルール] : 別紙 1-1

(注) 単位未満四捨五入処理のため、計において一致しないことがある。

(別紙 1-1)

運営費交付金の算定ルール

平成 23 年度以降、次の算定式による。

$\text{運営費交付金} = \text{人件費} + \text{一般管理費} + \text{業務経費} + \text{特殊要因} - \text{自己収入}$

- 人件費 = 1 人当たりの基本給等 (A) + 任期付若手研究者に係る人件費 (A') + 退職手当 (S)
 A : 基本給、諸手当、共済組合負担金等の人件費 (退職手当及び任期付若手研究者に係る人件費を除く) をいい、次の式により算出する。

$$A = \{[(P1 \times \alpha \times \beta) + (P2 \times \beta) + P3] \times \gamma 1\}$$

A : 当該年度基本給等

P1 : 前年度の基本給中昇給及び給与改定の影響を受けるもの

P2 : 前年度の基本給中給与改定の影響を受けるもの

P3 : 前年度の基本給中昇給及び給与改定の影響を受けないもの

 α : 運営状況等を勘案した昇給原資率 β : 運営状況等を勘案した給与改定率 $\gamma 1$: 効率化係数 (人件費) 0.9898

A' = 任期付若手研究者に係る人件費

S = 当年度の退職予定者及び前年度以前の予定外退職者に応じた当年度分退職手当額

- 一般管理費 = (一般管理費 (B) $\times \gamma 2 \times \delta$)

B : 前年度一般管理費

 $\gamma 2$: 効率化係数 (一般管理費) 0.979 δ : 消費者物価指数

- 業務経費 = (業務経費 (C) $\times \gamma 3 \times \delta$)

C : 前年度業務経費

 $\gamma 3$: 効率化係数 (業務経費) 0.9898 δ : 消費者物価指数

- 特殊要因 = 法令等の改正等に伴い必要となる措置又は現時点で予測不可能な事由により発生する資金需要であって、毎年度の予算編成過程において決定する。

- 自己収入 = 設備使用料収入、印税収入等の直接事業を実施しない収入について、過去の実績を勘案し決定する。

〔注記〕

1. α 、 β 、 δ については、各年度の予算編成過程において、当該年度における計数値を決める。
2. 中期計画全般にわたる予算の見積りに際しては、
 - ① α 、 β 、 δ については、伸び率を 0 と仮定した。
 - ② $\gamma 1$ (人件費の効率化係数) については、節減額 5% 分を 0.9898% と仮定した。
 - ③ $\gamma 2$ (一般管理費の効率化係数) については、節減額 10% 分を 0.979% と仮定した。
 - ④ $\gamma 3$ (業務経費の効率化係数) については、節減額 5% 分を 0.9898% と仮定した。

(別紙 2)

平成 23～27 年度収支計画

(単位：百万円)

区 別	金 額
費用の部	3,910
経常費用	3,910
人件費	2,520
うち 基本給等	2,413
退職手当	107
一般管理費（光熱水料、図書館関係経費等）	397
業務経費	553
国民健康・栄養調査に関連するサーベイランスプログラム	50
食品収去試験等業務	19
栄養疫学プログラム	69
健康増進プログラム	68
臨床栄養プログラム	31
基礎栄養プログラム	50
食品保健機能プログラム	40
国際栄養協力事業	37
健康食品安全情報ネットワーク事業	102
健康栄養情報事業	87
受託経費	416
特別用途食品表示許可試験費	26
受託経費	316
栄養情報担当者事業経費	32
寄附研究事業費	42
減価償却費	24
収益の部	3,910
運営費交付金収益	3,446
手数料収入	26
受託収入	316
栄養情報担当者事業経費	32
寄附研究事業費	42
雑収入	24
資産見返物品受贈額戻入	6
資産見返運営費交付金戻入	18
純利益	—
目的積立金取崩額	—
総利益	—

[注記] 当法人における退職手当については、役員退職手当支給基準及び国家公務員退職手当法（昭和 28 年法律第 182 号）に準じて支給することとなるが、その全額について運営費交付金を財源とするものと想定している。

(注) 単位未満四捨五入処理のため、計において一致しないことがある。

(別紙3)

平成23～27年度資金計画

(単位：百万円)

区 別	金 額
資金支出	3,886
業務活動による支出	3,886
投資活動による支出	0
資金収入	3,886
業務活動による収入	3,886
運営費交付金による収入	3,446
手数料収入	26
受託収入	316
栄養情報担当者事業経費	32
寄附研究事業費	42
雑収入	24
前期中期目標の期間よりの繰越金	0

(注) 単位未満四捨五入処理のため、計において一致しないことがある。

3. 独立行政法人国立健康・栄養研究所年度計画

平成 25 年度の業務運営について、独立行政法人通則法(平成 11 年法律第 103 号)第 31 条第 1 項の規定に基づき、独立行政法人国立健康・栄養研究所年度計画を次のとおり定める。

平成 25 年 3 月 29 日

独立行政法人国立健康・栄養研究所
理事長 徳留信寛

第 1 国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する事項を達成するための措置

1. 研究に関する事項を達成するための措置

(1) 国の生活習慣病対策等の施策としてより効果的な反映が見込まれる研究に関する事項を達成するための措置

ア 生活習慣病予防のための運動と食事の併用効果に関する研究

a 運動基準、食事摂取基準等の改定のための科学的根拠の提示

①「健康づくりのための身体活動基準 2013」で示された身体活動量、運動量、体力の基準の妥当性について検討するための、大規模無作為割り付け介入研究を実施する。また、平成 26 年 4 月に公表される見込みの食事摂取基準策定に向けて、エビデンス収集、データベース更新、取りまとめ等の作業を行う。

②国民健康・栄養調査の身体活動に関する質問・歩数計の評価法の高度化に関する研究を実施する。

③身体活動疫学研究を実施し、将来の身体活動基準・指針改定のためのエビデンスを蓄積する。

④有疾患者やライフステージに特有なエネルギーの必要量設定のための根拠となるデータを蓄積する。また、日本人の知見が不足している高齢者および小児を主な対象として、二重標識水法を用いて、1 日当たりの身体活動レベルおよび総エネルギー消費量のデータを蓄積する。さらに、活動量計などを用いて、成人の身体活動の特性(強度や時間帯、活動内容など)を明らかにする。それにより、食事摂取基準における推定エネルギー必要量の改定に資する資料を提供する。

⑤ヒューマンカロリメーターを用いて、食事のタイミングがエネルギー基質に与える影響を検討することにより、肥満の予防や解消に寄与する知見を獲得する。

⑥人間ドック受診者を対象とした大規模コホート研究を継続し、食事・身体活動・食行動意識、心理的要因・遺伝的要因等と生活習慣病発症との関連性や、運動と食事の保健指導効果について引き続き検討する。

b 生活習慣病発症における遺伝、環境リスクの相互作用の解明

①罹患同胞対法を用いた全ゲノム解析で 2 型糖尿病感受性領域としてマップされ、遺伝子の同定に至っていない染色体領域の解析や次世代シーケンスによる高密度多型情報と imputation による全ゲノム関連解析により新たな 2 型糖尿病感受性遺伝子を同定する。

②複数のコホート研究において、これまでに明らかになった肥満や糖尿病関連遺伝子の生活習慣病発症への寄与や、栄養・運動や食習慣との相互作用について明らかにする。

c 遺伝子改変運動等を用いたテーラーメイド予防法開発にむけた科学的根拠の提示

①遺伝子操作動物を用いて、我々が同定した日本人の 2 型糖尿病感受性遺伝子の機能について解明する。高脂肪食が、糖尿病・メタボリックシンドロームを発症する分子メカニズムを解明するために、既に作製した遺伝子操作動物あるいは脂質過剰摂取生活習慣病モデル動物を用いてインスリン抵抗性メカニズムについて検討する。さらに運動におけるインスリン抵抗性改善メカニズムについて検討し、糖尿病・メタボリックシンドロームの改善や予防法の開発につなげる。

②たんぱく質、脂質、炭水化物等の主要栄養素の過剰、過少摂取で生じる肥満、生活習慣病に関して、脂肪食摂取後に血中脂質濃度が増加するマウスや培養細胞を用いて発症機序解明を行う。さらに、予防・治療法に関する研究を行う。

イ 日本人の食生活の多様化と健康への影響、及び食生活の改善施策に関する栄養疫学的研究

a 食事摂取基準策定のための栄養疫学研究及び基本的情報の収集

①2015 年版食事摂取基準の策定に際し、小児や高齢者などエビデンスが不足している対象集団について、国民健康・栄養調査データを用いて、栄養素等摂取量と生体指標の関連について検討を実施する。

②小児や高齢者のエネルギー摂取量の基準値策定のため、基礎代謝基準値の妥当性の検討を実施する。また、食事調査におけるエネルギー摂取量の過小評価の問題について、調査研究を実施する。

③平成 24 年度までの研究から得られた知見を活かし、活用の障害となっている事項を整理・分類し、これらを取り除くための方策について調査研究を実施する。

b 国民健康・栄養調査の機能強化及びデータ活用に関する検討

①血圧測定方法の検討、過去データの解析により世帯按分法による栄養調査の特徴について検討する。

②国民健康・栄養調査及び特定健診等のデータを活用して、日本人の健康・栄養状態をモニタリングする手法を確立するための検討を行う。また、国民健康・栄養調査等のデータをもとに生活習慣病による死亡等の

将来予測を行うシミュレーションモデルを構築するための検討を行う。

ウ 「健康食品」を対象とした食品成分の有効性評価及び健康影響評価に関する調査研究

a 「健康食品」等の素材成分に関する情報収集及び健康影響に関する調査研究

①抗酸化物質摂取の健康影響を明らかにするための疫学研究の基礎データとするため、種々の食品の抗酸化能を測定し、データを蓄積する。

②測定成分の曖昧さにより分析法が確立されていない栄養成分に関して検討を行う。また、カラムスイッチング HPLC を用いたビタミン D 分析法の開発を行う。

③食品に含まれる微量栄養素の生理機能の評価

・市販のものよりも高い力価を持った RBP4 抗体を作成する。また RBP4 が新規のサイトカインであるか否か調べる。

・引き続き β カロテン-ビタミン A 転換酵素の遺伝子発現制御機構を分子レベルで明らかにする。特に RAR/RXR の結合状態と転写制御の関連について調べる。

④疾病モデル動物における「健康食品」素材の健康影響評価を行う。特に、エストロゲン様作用をもつ「健康食品」素材の健康影響評価及び有効性の評価を行う。また、これらの素材と医薬品の併用摂取による相互作用に関する研究を行う。

⑤「健康食品」の原材料の安全性評価として、ミネラル酵母に関する試験を実施する。

⑥コレウス・フォルスコリ抽出物による薬物代謝酵素の誘導および脂肪肝誘発の原因物質の検索を行う。また、コレウス・フォルスコリ以外のハーブで、薬物代謝酵素への影響を検討する。

⑦肝細胞を用いた検討により抗炎症作用を示した素材のなかで、クルクミンについて、肝臓における抗炎症作用の有無を動物モデルで検討する。

b 「健康食品」に関する公正な情報の提供

①『「健康食品」の安全性・有効性情報 (hfnet)』サイトに関して、厚生労働省等と連携して継続的な掲載情報の更新をするとともに、それらの情報の効果的な発信等に関連した調査研究を行う。また、消費者が必要な情報を得られやすい様にサイトの改修を行う。

②『特別用途食品・栄養療法エビデンス情報(fosdu)』のサイトに関して、継続的な掲載情報の更新に努める。

③24年度に配布・収集した高齢者や病者に着目した健康食品の利用実態アンケートの結果を精査・解析し、問題点を明らかにした上で、適切な情報提供に活用する。

④厚生労働省、国民生活センター、企業で収集されている健康食品との因果関係が疑われる健康被害情報(苦情を含む)の特徴を精査し、それぞれの情報が集約しやすい方法の考案、ならびに健康被害との因果関係を調べるアルゴリズムの開発をさらに進める。

エ 研究能力の向上のための措置

・他の研究機関における研究者との共同研究及び若手研究者の責任ある立場での研究への参画を積極的に促すことにより、若手育成型の科学研究費補助金を年間10件、助成事業における外部資金を年間5件以上の獲

得を目指す。また、それらの研究成果について評価を行い、研究所の研究能力を向上させ、その応用・発展的な展開を図る。

オ 効果的な栄養教育手法の開発

①効果的な栄養教育手法の改訂

・介護保険における効果的な栄養改善を行うための課題の検討、及び効果的な介入方法に関する調査研究を実施する。

・栄養改善の介入方法に関する文献検索及び環境等の影響要因などの基礎的な研究を開始する。

・被災地で実施した事調査及び被災地の栄養士を対象とした調査のフォローを行う。

②食育推進全国大会を通じた一般国民編情報提供、ならびに参加者の意識調査実施

・広島で6月に実施される大会参加に向けて、ポスターやパネル作成を行う。

・研究所ブースの来場者に対し、食育に関するアンケート調査を実施する。

③食育と健康状態に関する文献レビューの実施

・欠食と健康状態に関する国内外の論文を収集し、系統的レビューを行う。

・栄養教育を用いた効果的な介入手法についての文献レビューを行う。

(2) 研究水準及び研究成果等に関する事項を達成するための措置

ア 論文、学会発表等の促進

①研究成果については、できるだけ国際的な場での発表を目指し、査読付き学術論文80報以上、口頭発表200回以上を行う。

その際、原著論文については、インパクトファクターが2.0以上の学術誌に、30報以上掲載されることを目指す。

②研究成果に係る著書・総説・解説を年間150報以上行う。

③国民の健康増進に寄与するため、調査研究の成果を発表するための講演を150回以上行うほか、マスメディアによる報道が、50件以上となるよう報道情報の収集に努める。

イ 講演会等の開催

①研究で得られた成果を社会に還元するため、一般向けの公開セミナー(第15回)を東京で開催する。専門家向けのセミナーを他機関との連携による開催を含め2回程度行う。

②管理栄養士・栄養士等の研修や生涯教育のプログラムに対し、職員を積極的に派遣するとともに、連携も含めそれらのプログラムの企画等への支援を3回程度行う。

③外部からの電話やメールを介した問い合わせについて適切に対応するとともに、問い合わせの多い事項についてはホームページ上のFAQに反映させ、効率的な対応ができる体制の整備をさらに進める。

ウ 開かれた研究所への対応

・オープンハウス(研究所公開)を実施し、運動実験施設等における体験コーナーや食事・体力診断等を含めて、当研究所の研究・業務内容をより多くの人々に身近に知ってもらえるよう努める。また、所内見学等

に積極的に対応し、小学生や中高生が健康や栄養に関して高い関心を持ち、正しい知識が普及出来る取り組みを行う。

(3) 研究実施体制等の整備に関する事項を達成するための措置

ア 研究業務を効率的に実施するための効果的な人員・予算の調整・確保

①法律に基づく業務及び重点調査研究の担当部門に対して、効率的に特別研究員や研究補助員を配置するとともに的確な予算配賦を実施し、戦略的かつ効率的な研究に取り組み着実な研究成果を求める。

②調査研究業務に付随する事務的作業の効率化を促進するために事務部内の研究支援体制の充実を図る。

③運営費交付金をはじめ競争的資金などの予算について、各研究業務の進捗状況及び費用並びに新たな課題を勘案しながら柔軟に配賦を行うなど効果的な取り組みを行う。

イ 産学連携の推進

①共同研究等を積極的に推進するため、民間企業、大学等へ研究所研究員を派遣するとともに、資質の高い研究員を受け入れる。

②研究所が所有する知的財産の活用、又は所有する情報等を用いた共同研究を民間企業及び大学等と積極的に行うこととし、年間に12件以上を目標とする。

ウ 将来の研究人材の育成

①連携大学院、民間企業及び各種研究機関等から研究員等を年間100名程度受け入れるとともに、当研究所の研究員を大学院や関係機関等に年間100名程度派遣し、研究所の持つ情報・技術等を社会に還元する。

②連携大学院について、引き続き拡大を図るとともに兼任教員を派遣し、互いの強みを活かした研究協力を行う。

③流動研究員制度や連携大学院制度を活用し、博士課程修了者等の若手研究者や大学院生を積極的に受け入れることにより、将来の研究人材の育成に資するとともに、研究所の研究機能の強化を図る。

エ 施設・設備の有効活用

①測定室、RI室、動物飼育室、運動トレーニング室等の各プログラムで共同で使用する施設・設備については、効果的に研究ができるよう環境を確保する。

②「独立行政法人国立健康・栄養研究所設備等利用規程」に従い、当研究所の施設・設備を利用して、他研究機関の研究者・運動指導者と共同して運動による健康増進効果に関する共同研究を実施する。

2. 法律に基づく業務、社会的・行政ニーズ、国際協力等に関する事項を達成するための措置

(1) 健康増進法に基づく業務に関する事項を達成するための措置

ア 健康・栄養調査の効率的実施

国民健康・栄養調査の集計業務については、引き続き、正確かつ効率的な集計を通して、結果発表までの期間の迅速化を図る。また、データ収集に携わる行政の担当者等に対して、技術講習、情報提供、研修教材等の提供、標準的な調査ツールの提供などを通じて、積極的な技術支援を行う。さらに、健康・栄養調査の

効率化を目指した専用ソフト（名称：食事しらべ）をアップデートして自治体へ配布し、調査の全体の効率化も目指す。

イ 特別用途食品及び収去食品等の分析

①消費者庁の特別用途表示の許可等に関わる申請に基づく試験業務を期間内に実施するとともに、そのヒアリングに適切に対応する。

②健康増進法第27条第5項の規定により収去した特別用途食品及び栄養表示がなされた食品の分析業務を、期間内に実施する。

③栄養表示基準における栄養成分の分析法について、より適切な分析手法の検討を行う。また、試験検査機器の有効利用及び整備の充実を図る。

④試験機関間の協力体制を維持し、分析精度管理試験を実施し、分析精度の維持・向上に努める。

⑤分析の難易度が高い微量栄養成分（ビタミン・ミネラル）または分析頻度の高い特定保健用食品の関与成分について、標準品の開発を検討する。

(2) 社会的・行政ニーズへの対応に関する事項を達成するための措置

ア 社会的・行政ニーズの把握

①社会的ニーズを把握するため、健康・栄養に関連する団体、大学、民間企業等との意見交換会を年6回程度実施し、連携を強化する。とくに、当研究所は国民生活に密着した分野を対象としており、国民に研究成果を還元することが重要であることから、第一線で活躍している管理栄養士等から、具体的なニーズ等の把握に努める。

②行政ニーズを適時把握するために、厚生労働省がん対策健康増進課・食品安全部、消費者庁食品表示課、内閣府食育推進担当等と情報・意見交換を1回以上行い、研究・業務等に公正中立な立場で適正に反映させる。

③国、地方自治体、国際機関等からの技術的な協力依頼に応えるとともに、行政ニーズを把握するため、各種審議会、検討会の専門委員等として職員を積極的に派遣する。

イ ホームページを活用した国民ニーズの把握

・国民、栄養専門職等からの意見、要望等を広く効率的に把握するため、インターネット上のさまざまな仕組みを活用した取り組みを行う。

(3) 国際協力、産学連携等対外的な業務に関する事項を達成するための措置

ア アジア地域における学術的ネットワークの構築

①WHO研究協力センター（申請中）としての体制を整え、アジア・太平洋諸国における栄養、身体活動分野での調査・研究ニーズの把握に努める。その一環として、WHO等との協力関係を強化し、関連する国際会議に研究員を派遣する。

②アジア諸国との間で、栄養学研究の発展につながる共同研究及び人材育成を積極的に行う。研究交流を推進する観点から、国際栄養協力若手外国人研究者招へい事業を活用し、年間2名（ベトナム1名、マレーシア1名を予定）の若手研究者を受け入れる。また、フォローアップ共同研究助成事業（1件を採択）により、これまで受け入れた研修生との共同研究や情報提供な

どを引き続き推進する。

③第6回アジア栄養ネットワークシンポジウムを開催し、アジア諸国の研究機関との学術交流を通じたネットワークづくりを進める。

④WHOのGEMS/Foodプログラム協力機関として、国民健康・栄養調査の結果等をもとにした集計結果について、わが国の食事調査データの発信に努める。

⑤アジア諸国における栄養士制度・栄養士養成の現状について調査・検討を行う。

⑥当研究所の研究成果、わが国の栄養、運動施策上の重要なガイドライン（食事摂取基準、エクササイズガイド等）について、英語版ホームページ上で情報発信するとともに、データ提供等の支援を行い、海外からのニーズに的確かつタイムリーに応える。

イ 産学連携等による研究成果等の社会還元

・研究所内関連部署との協力を図りつつ産学連携を推進し、生物統計の手法を用いた研究成果等の社会還元に貢献する。具体的には、健康・栄養や食品開発等に関連する研究機関、民間企業等との共同研究や受託研究、特許等の実用化等により、当研究所の研究成果やノウハウを具体的な商品開発やサービスを通じて、社会に還元できるよう努める。

・知的財産権取得に適した研究について、その成果の学会及び論文発表の前に掘り起こしを行い、戦略性を持って年間4件程度の特許等の出願を行う。また、当研究所の特許等に関する情報を、ホームページ上に公開し、民間企業等へ積極的に技術の紹介を行う。

(4) 栄養情報担当者（NR）制度に関する事項を達成するための措置

①栄養情報担当者（以下「NR」という。）認定制度については、NRの移籍手続を順次実施する。

②また、第三者機関に移管を行うまでの間、有資格者の不利益とならないよう、NRのアドバイザースタッフとしての質を維持向上させるための研修会を実施するとともに、移管に係る情報提供を適切に行う。

3. 情報発信の推進に関する事項を達成するための措置

(1) 総合的な情報発信及び対外的な業務の推進

・外部に発信している情報について、その受け側の状況も考慮した対応に努める。

(2) ホームページによる活動状況の配信

・当研究所の活動内容・成果等をホームページやメールニュースを介して引き続き積極的に配信する。ホームページ上の情報については、重要性や緊急性、ならびに新規性を考慮した掲載ができるように努める。

(3) 研究・業務実績の情報提供

・研究所の活動及び研究業績については、ホームページを介して迅速に情報提供するとともに、年1回の研究報告にまとめて刊行する。トピック的な内容については『健康・栄養ニュース』を年4回(季刊)刊行し、電子媒体による配信も行う。

(4) ホームページ等を活用した積極的な情報開示

・ホームページ等を活用して、研究所の諸規程、その他の必要な情報開示を積極的に行う。

第2 業務運営の改善及び効率化に関する事項を達成するための措置

1. 運営体制の改善に関する事項を達成するための措置

(1) 効率的な組織運営のための内部統制の強化

①研究所の意思決定と運営を機動的にかつ効率的に行うことができるよう、以下の常設の会議及び委員会を定期的にまたは必要に応じて開催し、研究業務の円滑な推進を図る。

- ・幹部会議
- ・運営会議
- ・研究企画委員会
- ・研究倫理審査委員会
- ・利益相反（COI）委員会
- ・所内セミナー

②研究業務遂行における内部統制の強化を図るため、会計監査役員による定期的監査及び理事長による各研究部・研究室、センターに所属する研究員に対する研究状況に関するヒアリングを行う。

③研究所内の情報共有と伝達を強化するため、上記会議・委員会の内容及び必要な情報等につき速やかに所内LANにより研究所各員に周知を図る。

④研究所における危機管理体制の強化を図るため、理事長より各研究員に至る緊急の連絡体制を整え、年1回以上、訓練を行いその機動の確認を行う。

(2) 研究の企画及び評価機能の強化

①研究部門間での連携を強め、戦略的な事業の立案・実施に役立てるとともに国内外の最新の研究成果を知ることができるよう、研究所セミナーを毎月1回以上開催する。

②研究企画委員会を開催し、研究部門間の相互の意思疎通を図るとともに戦略的な事業の立案、推進に役立てる。

(3) 円滑な組織運営のための業務の進捗管理及び評価

①各研究室における研究及び業務については、各研究部長及びセンター長が研究企画委員会或いは運営会議で必要な報告を行う。

②各研究部、センター及び研究室の研究・業務の進行状況等については年1回または2回、所内公開の報告会を行いその成果について評価を行う。

③各研究・業務に関する内部進行管理を強化するため、理事長による各研究部・センター及び研究室の研究員に対するヒアリングを年1回以上行う。

④所内LANの活用により、業務の進捗状況管理を行うとともに、各研究部・センター間、事務部門との情報の共有を促進する。

(4) 情報公開による透明性の確保

・独立行政法人等の保有する情報の公開に関する法律（平成13年法律第140号）に則り、文書を適正に管理するとともに、適正な情報公開を行う。

(5) 積極的な外部資金の獲得及び資源の有効活用

・競争的研究資金や受託研究など外部資金の積極的獲得に取り組むとともに経費の節減や研究所が所有する設備等の有効利用を推進する。

2. 研究・業務組織の最適化に関する事項を達成するための措置

(1) 効率的な調査研究業務を実施するための組織の最適化

- ① 研究業務を円滑に進め、第 3 期中期計画をより確実に遂行するため、研究室の再構成を検討する。
 - ② 健康食品の安全性・有効性情報データベース、特別用途食品・栄養療法エビデンス情報の 2 つのデータベースの維持管理と内容の充実を図るため、関連機関との連携をさらに強める取組を行う。
 - ③ 組織の改組後はその効果の検証を行い、その検証結果を公開する。
- (2) 民間団体、大学、地方公共団体、他府省等における調査研究との相互補完を図る観点から、重複・類似する研究を排除するとともに、当研究所の特長を生かした研究を推進することにより、研究の効率化を図る。他の研究機関との連携のあり方について検討を行い、研究員の連携・交流を進め、人材の養成と資質の向上に努めることにより、組織・研究の活性化を図る。

3. 職員の人事の適正化に関する事項を達成するための措置

(1) 重点化する調査研究及び法定業務に対応するための適正な人員配置

- ① 重点化する調査研究及び法律に基づき着実に実施すべき業務については、研究補助員等を適切に配置するなど効果的な運用を行い、研究・業務の推進を図る。特に東日本大震災の被災者支援を推進する。
- ② 一部の職員への過重な負担とならないよう、研究・業務等の適正配分に努めるとともに、必要に応じて見直しを行い、職員の健康の維持・増進につながる職場環境づくりを目指す。

また、収去食品の試験業務における民間登録試験機関での試験導入及び N R 認定制度業務の廃止に伴う要員の見直しや合理化については、検討状況の推移を踏まえつつ対応する。

(2) 研究員の業務の適正な評価

- ① 大学、民間企業等との多様な形態の連携が可能となるよう、起業を含め、民間企業、団体等との兼業についても、当研究所の目的、理念に合致したものについては積極的にを行い、成果の社会還元を促進する。
- ② 各研究員の個人業績及び各研究室の研究実績を適正に評価し、昇給・昇任等に反映させる。

(3) 有能な研究員の登用

- ① 「独立行政法人国立健康・栄養研究所における研究者の流動化計画」に沿って、研究員の採用にあたっては、引き続き原則公募制、任期付の採用を行う。
- ② 任期付研究員については、任期中の実績評価を適正に行い、任期を付さない職員としての採用を検討する。任期付研究員の採用にあたっては、流動化計画に則る一方、当研究所の長期的な展望との均衡を図りつつ、研究や業務の性質、行政及び社会的ニーズに応じて、柔軟な運用を行う。
- ③ 外国人研究者や女性研究者の採用を積極的に行うとともに、研究業務に従事しやすい環境づくりとして、引き続きフレックスタイム制の活用をはじめ、産休や

育児休業等の各種制度の活用を進める。

(4) 事務職員の適正な評価

・事務職員についても、あらかじめ自己の達成目標を設定させるとともに、達成目標を含む業務全般に対しての自己評価を含む総合的な人事評価制度に基づき、個人面接を行い、直属上司及び総括上司の二段階評価を実施する。評価の結果は、昇給・昇任等に反映させる。

4. 事務等の効率化・合理化に関する事項を達成するための措置

(1) 事務業務の効率化

・業務の効率化を図るため、各種事務手続きの簡素化、迅速化、電子化を図るとともに、業務内容を見直し、外部委託が可能な業務については、費用対効果を勘案しつつ積極的に推進する。

(2) 事務職員の資質向上

・事務職員の資質向上を図るため、業務上必要とされる知識（知的財産、安全管理、会計・契約等）の技術取得ができるよう、自己啓発や能力開発のための研修に積極的に参加させる。また、職員が働きやすく自己能力が最大限発揮できるよう、職場環境の整備を引き続き図る。

(3) 業務システムの効率化

・業務の効率化を推進するため情報総括責任者（CIO）を中心に業務・システムの最適化・効率化を図る。

5. 評価の充実に関する事項を達成するための措置

(1) 内部評価の実施

・各研究部、センター及び研究室の研究・業務については年 1 回または 2 回、報告会とともに評価を行う。評価結果については、毎年度内部評価委員会を開催してその結果についての総括を行い、研究業務の確実な実施と効率化を期する。

(2) 外部評価の実施

・外部の専門家等の評価者による外部評価について、毎年度 2 回程度実施する。

(3) 評価結果の公表

- ① 内部及び外部評価の結果はホームページ上で公表するほか、評価結果の内容については部や室の範囲にとどまらず、非常勤職員を含めた全員に結果を伝え、研究所に求められている方向性や課題等の共通理解を促し、研究及び業務の内容改善等につなげる。
- ② 理事長等役員及び管理職は、これらの評価結果を踏まえ、予算や人材等の研究資源の配分等に反映させ、調査・研究活動を効率・活性化させる。

(4) 研究業績等の自己点検及び評価

- ① 各研究員においては、社会及び当研究所で求められている自らの役割を充分認識した上で、当該年度における自らの調査研究及び業務の成果について、点検を行う。その際、成果を客観的に整理・分析するために、所内 LAN による「業績等登録システム」を活用する。
- ② 各研究員の評価は、人事評価マニュアルに基づき、主に研究部内での貢献及び十分な成果の達成という視点から各研究部長／センター長、研究企画評価主幹及び理事長が行う。なお、任期付研究員については、任

期中の実績評価を行い、その結果をその後の採用等に反映させる。

6. 業務運営全体での効率化を達成するための措置

・一般管理費（運営費交付金を充当して行う事業に係るもの。人件費は除く。）については、複写機台数見直しなどにより削減に努め、平成22年度実績に比べ6%以上の削減を図る。

・人件費（退職手当及び法定福利費等を除く。）については、適正な人事配置に努め、平成22年度実績に比べ3%以上の削減を図る。

また、給与水準についても平成21年度のラスパイレ指数（地域・学歴勘案）が97.4であることを踏まえ、この水準を引き続き維持するとともにその結果を公表する。

・業務経費（運営費交付金を充当して行う事業に係るもの）については、業務の効率化、コストの削減に努め平成22年度実績に比べ3%以上の削減を図る。

・契約については、以下の取り組みによりその適正化を推進する

ア 原則一般競争入札を行い、随意契約を行う場合は真にやむを得ない場合とする。

イ 「随意契約等見直し計画」に基づく取組を着実に実施し、その取組状況を公表する。

ウ 一般競争入札により契約を行う場合であっても、競争性、透明性が十分確保される方法により実施する。

エ 会計監事による定期的な監査により、入札・契約の適正な実施について点検を受ける。

オ 契約監視委員会において、契約方式の妥当性及び競争性確保のための改善方策の妥当性等を事前審査する。

第3 財務内容の改善に関する事項を達成するための措置

1. 外部研究資金その他の自己収入の増加に関する事項を達成するための措置

(1) 外部研究資金の獲得

①厚生労働省、文部科学省等の各府省や科学技術振興機構等の機関が実施する公募型研究への課題の応募を積極的に行う。その際、当研究所の目的等を勘案して、競争力の高い研究課題であるか、また、他の研究機関等との共同研究の中核であるかを重視する。

②健康・栄養に関する調査・研究及び国や民間企業等からの受託研究や共同研究、その他の業務については、当研究所の目的やその後の発展性及び交付金事業として行う研究を勘案しながら、それらに合致するものについては積極的に受け入れ、自己収入の増加を図る。

なお、外部研究資金の獲得にあたっては、過去2カ年平均の80%以上の件数の確保を目標とする。

(2) 知的財産の活用等による自己収入の確保

①知的財産については、その出願や維持に係る費用を勘案しながら、実施につながる可能性の高いものについて必要な維持を行い自己収入につなげる努力を行う。

②研究成果及び国民健康・栄養調査結果および食事摂

取基準等の社会還元を目的に出版（研究所監修による書籍、マニュアル、テキスト等）を行うことにより、自己収入の確保につなげる。

③施設の開放にあたっては、ヒトを対象とした研究への参加、地域住民の健康づくりという視点を踏まえて研究所設備の効率的利用を推進する。

2. 経費の抑制に関する事項を達成するための措置

(1) 効率的な資金の運用・管理

・「無駄削減取組目標」のうち、特に無駄削減に向けた職員の意識改革、行政コストの節減・効率化に掲げる事項に係る取り組みを積極的に実施し、予算執行状況の把握とともに、これら取り組み状況について、運営会議で評価を行う。

(2) 研究業務の集約化

・各研究部にまたがる研究の実施や、施設整備、スペース等の共同利用により、人的資源、コスト削減につなげる。

・データ入力、検体の定期検査などの人的コスト削減につながるものについてはアウトソーシングを推進する。また契約にあたっては原則一般競争入札を行う。

第4 予算（人件費の見積りを含む）、収支計画及び資金計画

1. 予算

別紙2のとおり

2. 収支計画

別紙3のとおり

3. 資金計画

別紙4のとおり

第5 その他の業務運営に関する重要事項を達成するための措置

(1) セキュリティの確保

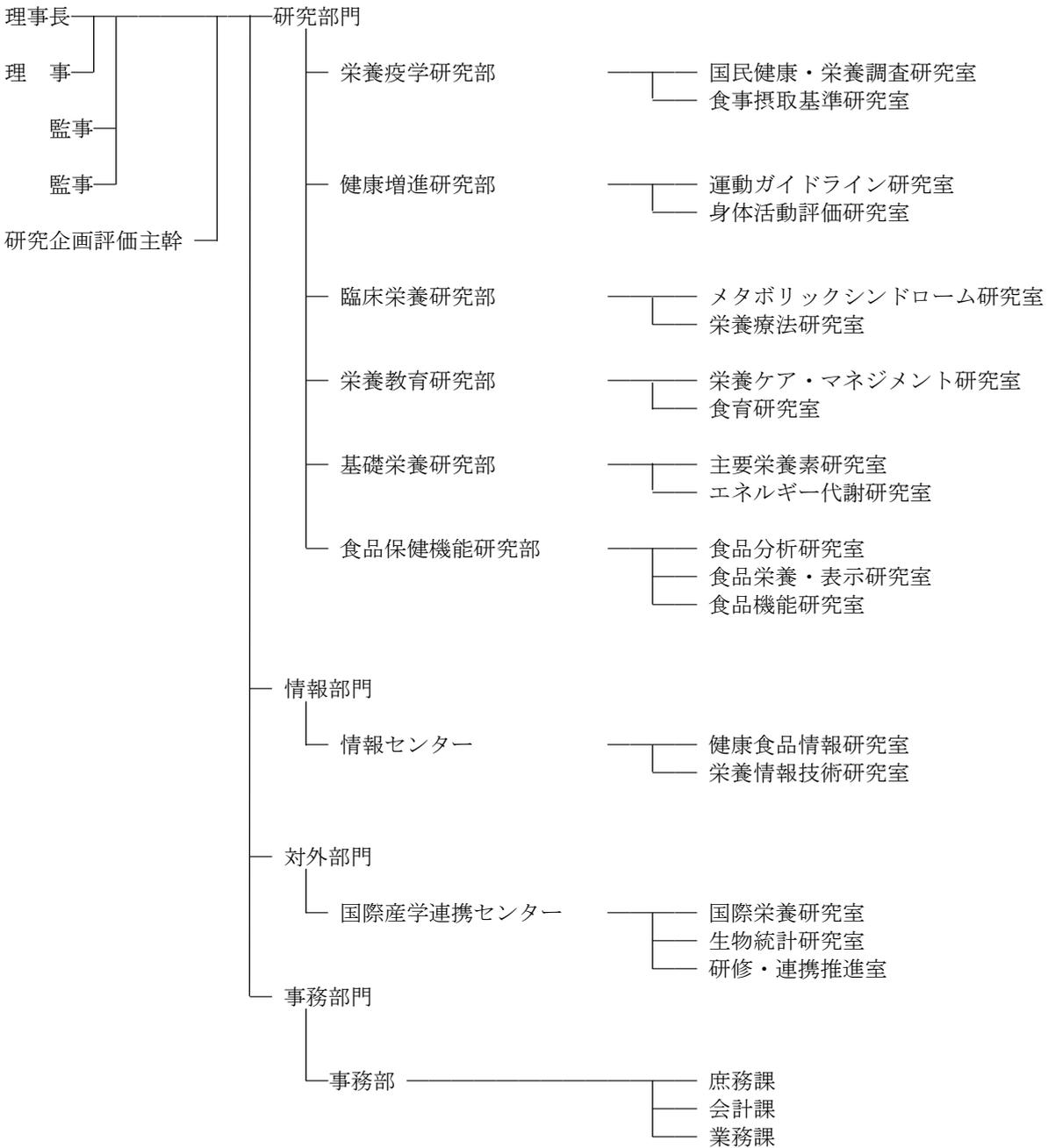
・政府の方針を踏まえ、適切な情報セキュリティ対策を推進し、セキュリティの確保に努める。

第6 平成25年度独立行政法人国立健康・栄養研究所行事等予定表

別紙5のとおり

(別紙 1)

研究所組織



(別紙2)

年度計画（平成25年度）の予算

(単位：百万円)

区 別	金 額
収入	
運営費交付金	659
手数料収入	5
受託収入	63
寄附金収入	8
雑収入	4
計	739
支出	
人件費	495
うち 基本給等	440
退職手当	56
一般管理費（光熱水料、図書館関係経費等）	75
業務経費	93
国民健康・栄養調査に関連する サーベイランスプログラム	10
食品収去試験等業務	4
栄養疫学プログラム	13
健康増進プログラム	12
臨床栄養プログラム	5
基礎栄養プログラム	9
食品保健機能プログラム	7
国際栄養協力事業	6
健康食品安全情報ネットワーク事業	10
健康栄養情報事業	16
受託経費	76
特別用途食品表示許可試験費	5
受託経費	63
寄附研究事業費	8
計	739

(注) 単位未満四捨五入処理のため、計において一致しないことがある。

(別紙 3)

平成 25 年度収支計画

(単位：百万円)

区 別	金 額
費用の部	
経常費用	749
人件費	495
うち 基本給等	440
退職手当	56
一般管理費（光熱水料、図書館関係経費等）	75
業務経費	93
国民健康・栄養調査に関連する サーベイランスプログラム	10
食品収去試験等業務	4
栄養疫学プログラム	13
健康増進プログラム	12
臨床栄養プログラム	5
基礎栄養プログラム	9
食品保健機能プログラム	7
国際栄養協力事業	6
健康食品安全情報ネットワーク事業	10
健康栄養情報事業	16
受託経費	88
特別用途食品表示許可試験費	4
受託経費	63
栄養情報担当者事業経費	12
寄附研究事業費	8
減価償却費	10
収益の部	749
運営費交付金収益	659
手数料収入	5
受託収入	63
寄附研究事業費	8
雑収入	4
資産見返運営費交付金戻入	10
純利益	—
目的積立金取崩額	—
総利益	—

(注) 単位未満四捨五入処理のため、計において一致しないことがある。

(別紙 4)

平成 2 5 年度資金計画

(単位：百万円)

区 別	金 額
資金支出	739
業務活動による支出	739
投資活動による支出	0
資金収入	739
業務活動による収入	739
運営費交付金による収入	659
手数料収入	5
受託収入	63
寄附研究事業費	8
雑収入	4
前期中期目標の期間よりの繰越金	0
	0

(注) 単位未満四捨五入処理のため、計において一致しないことがある。

(別紙 5)

平成 25 年度独立行政法人国立健康・栄養研究所行事等予定表

平成 25 年 4 月	
5 月	
6 月 22 日 (土) ~23 日 (日) —	<ul style="list-style-type: none"> ○ 第 8 回食育推進全国大会 (広島市) ○ 「平成 24 年度業務実績報告」を厚生労働省独立行政法人評価委員会に、「平成 24 年度財務諸表等」を厚生労働大臣にそれぞれ提出。 ○ 「健康・栄養ニュース」(第 44 号) の発行
7 月	
8 月	
9 月 —	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「健康・栄養ニュース」(第 45 号) の発行
10 月 — —	<ul style="list-style-type: none"> ○ 研究所一般公開 (オープンハウス) ○ アドバイザリースタッフ研修会
11 月 —	<ul style="list-style-type: none"> ○ アドバイザリースタッフ研修会
12 月 — —	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「健康・栄養ニュース」(第 46 号) の発行 ○ アドバイザリースタッフ研修会
平成 26 年 1 月	
2 月 —	<ul style="list-style-type: none"> ○ 第 15 回研究所主催一般公開セミナー・研究所公開業務報告会 (東京)
3 月 — — —	<ul style="list-style-type: none"> ○ 外部評価委員会 ○ 平成 26 年度計画を厚生労働大臣へ提出 ○ 「健康・栄養ニュース」(第 47 号) の発行

- ◎ 運営会議は 8 月を除く毎月第 2 木曜日に開催する。
- ◎ 健栄研セミナーは原則、毎月第 3 木曜日に開催する。
- ◎ 専門家向けセミナーを東京にて開催する。
- ※ 実施日については、諸般の都合により変動があり得る。

4. 平成25年度予算額

(単位：千円)

事 項	平成 24 年度 予 算 額	平成 25 年度 予 算 額	増△減額
人件費	489,150	495,088	5,938
基本給・諸手当	429,544	424,783	▲4,761
共済組合負担金	46,650	46,140	▲510
児童手当拠出金	553	547	▲6
労働保険料	4,894	4,840	▲54
退職手当	7,509	55,548	48,039
給与特例法影響額	-	▲36,770	▲36,770
一般管理費	74,738	70,788	▲3,950
業務経費	103,228	92,971	▲10,257
栄養疫学研究	18,810	20,488	1,678
健康増進研究	5,246	4,884	▲362
臨床栄養研究	7,654	6,506	▲1,148
栄養教育研究	2,940	1,476	▲1,464
基礎栄養研究	13,042	10,775	▲2,267
食品保健機能研究	14,620	8,858	▲5,762
情報センター	22,466	19,096	▲3,370
国際産学連携センター	8,270	11,194	2,924
大震災健康・栄養調査	2,311	1,000	▲1,311
調査研究調整	7,869	3,884	▲3,985
プール管理・動物飼育等経費	-	1,840	1,840
実験動物運営費	-	1,810	1,810
共同機器修繕費	-	1,160	1,160
受託経費	93,074	80,549	▲12,525
特別用途食品表示許可試験費	4,300	5,160	860
受託経費	63,156	63,156	0
栄養情報担当者事業経費	12,086	0	▲12,086
寄附金研究事業費	8,367	8,367	0
形態計測講習会	392	392	0
その他	4,773	3,474	▲1,299
支出計	723,420	739,396	▲20,794

* 平成 24 年度は当初予算である。

事 項	平成 24 年度 予 算 額	平成 25 年度 予 算 額	増△減額
運営費交付金	630,346	658,847	▲8,269
手数料収入	4,300	5,160	860
受託収入	63,156	63,156	0
栄養情報担当者事業収入	12,086	0	▲12,086
寄附金収入	8,367	8,367	0
講習会収入	392	392	0
その他の収入	4,773	3,474	▲1,299
収入計	723,420	739,396	▲20,794

5. 平成 25 年度所内研究セミナー

期日	演 題	所 属
2013/4/18	肝臓に対するクルクミンの作用	千葉 剛 (情報センター)
	パプアニューギニアにおける母子の栄養問題の地域的特徴	三好 美紀 (国際産学連携センター)
5/23	推定エネルギー必要量の改定に資する最近の知見	田中 茂穂 (基礎栄養研究部)
	人間栄養学と科学的根拠について	廣田 晃一 (情報センター)
	Functional foods for health including bioactives for bone	Marlena C. Kruger (Institute of Food, Nutrition and Human Health, Massey University, NZ)
6/14	Future directions for clinical nutrition in the asia and pacific region	Mark L. Wahlqvist (National Health Research Institutes, Taiwan)
6/21	東日本大震災被災者の食事パターンに関連する要因	西 信雄 (国際産学連携センター)
	低炭水化物食摂取に関する研究	山崎 聖美 (基礎栄養研究部)
7/18	エネルギー代謝の脳による調節機構 研究の背景を中心として	大坂 寿雅 (基礎栄養研究部)
	いわゆる健康食品による有害事象の収集・評価とその活用	梅垣 敬三 (情報センター)
	Active screen time to promote physical activity in sedentary Japanese adults	Julien Triplette (健康増進研究部)
8/30	Functional Foods and Supplement for Health Promotion: Opportunities and Challenges	John Milner (Beltsville Human Nutrition Research Center, USDA/ARS)
9/26	アジア太平洋閉経学会会員医師における生活習慣病患者への対応	瀧本 秀美 (栄養教育研究部)
	身体活動増大を目的とした介入による身体活動量の変化とドーパミン受容体遺伝子多型との関連	村上 晴香 (健康増進研究部)
10/10	転写調節分子 CITED2 による代謝制御機構	松本 道宏 (国立国際医療研究センター研究所 糖尿病研究センター 分子代謝制御研究部)

10/17	血中ビタミンA輸送タンパク質 (RBP) 遺伝子のインスリン抵抗性依存的転写	山内 淳 (食品保健機能研究部)
	我が国のサルコペニア診断基準とそのスクリーニング法に関する研究	宮地 元彦 (健康増進研究部)
11/21	これからの減塩のために	奥田 奈賀子 (栄養疫学研究部)
	骨粗鬆症モデルラットにおけるスタチンとレスベラトロール併用摂取の健康影響評価	東泉 裕子 (食品保健機能研究部)
12/19	高齢者と子どもを対象とした食生活実態調査	野末 みほ (国際産学連携センター)
	東日本大震災の後、食・栄養改善には何が重要だったのか?	笠岡(坪山) 宜代 (栄養疫学研究部)
2014/1/14	佐久コホートに於ける生活習慣病関連遺伝子の多型解析について	山田 晃一 (健康増進研究部)
	国際食品規格策定に係る効果的なプロセスの開発に関する研究 -コーデックス栄養・特殊用途食品部会における検討-	石見 佳子 (食品保健機能研究部)
2/20	栄養表示のためのビタミン K 分析法の標準化及び妥当性の検証について	松本 輝樹 (食品保健機能研究部)
	東日本大震災被災者における震災の記憶が生活行動に変化を及ぼす影響	坪田 恵 (栄養疫学研究部)
	運動器の痛みと身体活動:佐久コホート研究と NEXIS	宮地 元彦 (健康増進研究部)
3/14	幼児のサプリメント利用に関する調査	佐藤 陽子 (情報センター)
	栄養表示値の信頼性確保に関する取り組み -登録検査機関の栄養成分分析に係る実態調査-	竹林 純 (食品保健機能研究部)

6. 食品分析リスト（特別用途食品の分析）

平成 24 年度において、特別用途食品の許可表示取得のために提出されたものについて分析した結果は次のとおりである。分析方法等は健康増進法に記載されている。

特別用途食品	申請者	商品名
なし		計 0 品目
特定保健用食品	申請者	商品名
特定保健用食品	持田製薬株式会社	グルコリーナ（プレーン）
特定保健用食品	持田製薬株式会社	グルコリーナ（烏龍茶味）
特定保健用食品	持田製薬株式会社	グルコリーナ（紅茶味）
特定保健用食品	大正製薬株式会社	コレスサポート
特定保健用食品	大正製薬株式会社	コレスマネージ
特定保健用食品	イオントップバリュ株式会社	大豆ココア
特定保健用食品	大正製薬株式会社	グルコケア（粉末スティック）
特定保健用食品	日本ケフィア株式会社	カルシウム入りケフィアクッキー
特定保健用食品	株式会社東洋新薬	食物繊維入り芋葉青汁
		計 9 品目

分析担当者：石見佳子、松本輝樹、竹林 純、津田治敏、山内 淳、梅垣敬三、市田尚子

7. 海外出張

出張者氏名	所 属	出 張 国	出 張 期 間	渡 航 内 容
宮地 元彦	健康増進研究部	モナコ・モンテカルノ	H25. 4. 2-4. 6	第11回国際抗加齢医学会参加のため
笠岡 宣代	栄養疫学研究部	中国・杭州市	H25. 5. 14-5. 17	11th China Nutrition Science Conference & International DRIs Summit にて講演のため
石見 佳子	食品保健機能研究部	中国・杭州市	H25. 5. 16-5. 17	第11回 中国栄養学会並びに国際DRIsサミットへの参加・講演
坪田 恵	国際産学連携センター	韓国・ソウル	H25. 5. 22-5. 23	二国間交流事業共同研究「成人の肥満予防としての共食の健康厚料と社会文化的ドメインの日韓比較」遂行のための研究打合せ及び研究実施
宮地 元彦	健康増進研究部	アメリカ・インディアナ州	H25. 5. 27-6. 1	第60回米国スポーツ医学会にて、運動基準改定のための大規模介入研究の成果の発表および情報収集
村上 晴香	健康増進研究部	アメリカ・インディアナ州	H25. 5. 27-6. 2	ACSM's 60th Annual Meeting and 4th World Congress on Exercise is medicine
澤田 亨	健康増進研究部	アメリカ・インディアナ州	H25. 5. 27-6. 3	第60回米国スポーツ医学会 (ACSM) への参加・発表
鎌田 真光	健康増進研究部	アメリカ・ボストン、マサチューセッツ	H25. 6. 13-6. 20	3rd International Conference on Ambulatory Monitoring of Physical Activity and Movement (ICAMPAM 2013)参加及び研究打合せのため
高田 和子	栄養教育研究部	韓国・カンヌン	H25. 6. 14-6. 18	韓国人成人エネルギー消費量測定研究の技術指導
田中 茂穂	基礎栄養研究部	アメリカ・ボストン	H25. 6. 15-6. 21	ICAMPAM 2013 AMHERST への参加・発表
安藤 貴史	基礎栄養研究部	アメリカ・ボストン	H25. 6. 15-6. 22	ICAMPAM 2013 AMHERST への参加・発表

宮地 元彦	健康増進研究部	イギリス・ロンドン、スペイン・バルセロナ	H25. 6. 26-6. 30	国際遺伝研究チームとの研究打合せ、第 18 回ヨーロッパスポーツ科学会にて研究の成果発表および情報収集
千葉 剛	情報センター	オランダ・アムステルダム	H25. 6. 30-7. 6	第 24 回国際血栓止血学会での発表のため
西 信雄	国際産学連携センター	アメリカ・ボストン	H25. 7. 21-7. 27	第 31 回システム・ダイナミクス学会国際会議
高田 和子	栄養教育研究部	アメリカ・マディソン	H25. 9. 11-9. 18	Dr Dale scholler の退官記念シンポジウムへの出席および情報収集
坪田 恵	国際産学連携センター	スペイン・グラナダ	H25. 9. 13-9. 22	IUNS 20th International Congress of Nutrition 学会参加及び発表のため
三好 美紀	国際産学連携センター	スペイン・グラナダ	H25. 9. 15-9. 21	IUNS 20th International Congress of Nutrition 学会参加及び発表のため
野末 みほ	国際産学連携センター	スペイン・グラナダ	H25. 9. 15-9. 21	IUNS 20th International Congress of Nutrition 学会参加のため
只石 幹	食品保健機能研究部	スペイン・グラナダ	H25. 9. 15-9. 21	IUNS 20th International Congress of Nutrition 学会参加及び発表のため
東泉 裕子	食品保健機能研究部	スペイン・グラナダ	H25. 9. 15-9. 21	IUNS 20th International Congress of Nutrition 学会参加及び発表のため
中出 麻紀子	栄養疫学研究部	スペイン・グラナダ	H25. 9. 14-9. 22	IUNS 20th International Congress of Nutrition 学会参加のため
竹林 純	食品保健機能研究部	スペイン・グラナダ	H25. 9. 15-9. 21	IUNS 20th International Congress of Nutrition 学会参加及び発表のため
三好 美紀	国際産学連携センター	ラオス・ビエンチャン	H25. 10. 13-10. 19	平成 25 年度国際医療研究開発費「NCGM の海外連携施設の活用と研究能力強化に関する研究」に関わる研究業務のため

石見 佳子	食品保健機能研究部	ドイツ・フランクフルト	H25. 11. 1-11. 9	第 35 回 CODEX 会議 栄養・特殊用途食品部会および事前のワーキンググループに出席のため
只石 幹	食品保健機能研究部	ニュージーランド・パーマーストノース	H25. 11. 23-11. 27	戦略的国際科学技術協力推進事業「日本-ニュージーランド研究交流」のため
三好 美紀	国際産学連携センター	マレーシア・クアラルンプール	H25. 12. 18-12. 21	平成 25 年度国際医療研究開発費「途上国における国レベルの栄養調査を用いた非感染性疾病(NCDs)のモニタリング手法の検討」に係るヒアリング及び共同研究打合せのため
田中 茂穂	基礎栄養研究部	マレーシア・クアラルンプール	H25. 12. 18-12. 21	平成 25 年度若手外国人研究者招へい事業フォローアップ共同研究事業「マレーシアにおける身体活動量調査法の確立」に係る研究打合せのため
三好 美紀	国際産学連携センター	ベトナム・ハノイ	H25. 12. 25-12. 30	平成 25 年度国際医療研究開発費「途上国における国レベルの栄養調査を用いた非感染性疾病(NCDs)のモニタリング手法の検討」に係る打合せのため
笠岡 宣代	栄養疫学研究部	アメリカ・メリーランド州	H26. 1. 11-1. 21	「災害時における食・栄養の改善に関する研究」に係る打合せのため
奥田 奈賀子	栄養疫学研究部	フィリピン・セブ	H26. 2. 11-2. 15	10th Asia Pacific Congress of Hypertension 参加・発表のため
池田 奈由	国際産学連携センター	アメリカ・メリーランド州	H26. 2. 23-2. 27	学術シンポジウム「健康格差と公衆衛生の複雑な体系-その架け橋-」への出席のため
三好 美紀	国際産学連携センター	ラオス・ビエンチャン	H26. 3. 16-3. 19	平成 25 年度国際医療研究開発費「NCGM の海外連携施設の活用と研究能力強化に関する研究」に関わる研究業務のため

笠岡 宣代	栄養疫学研究部	マレーシア・クアラルンプール	H26. 3. 14-3. 21	「災害時における食・栄養の改善に関する研究」に係る打合せ及び第 12 回国際肥満学会への参加のため
田中 茂穂	基礎栄養研究部	マレーシア・クアラルンプール	H26. 3. 15-3. 22	第 12 回国際肥満学会、サテライト会議への参加・発表及びマラ工科大学との提携に関する会合のため
山崎 聖美	基礎栄養研究部	マレーシア・クアラルンプール	H26. 3. 16-3. 21	第 12 回国際肥満学会における発表のため
奥田 奈賀子	栄養疫学研究部	アメリカ・カルフォルニア	H26. 3. 18-3. 23	国際学会 Epidemiology and prevention, nutrition, physical activity and metabolism 2014 scientific sessions
三好 美紀	国際産学連携センター	ベトナム・ハノイ	H26. 3. 23-3. 26	平成 25 年度国際医療研究開発費「途上国における国レベルの栄養調査を用いた非感染性疾患(NCDs)のモニタリング手法の検討」の報告書作成に係る打合せのため

8. 人事異動

発令年月日	異動内容	氏 名	所属名（転入、転出先）
H25.4.1	採用 (転入)	丸山 浩	理事
H25.4.1	配置換 併任 併任解除	瀧本秀美	栄養疫学研究部長、栄養教育研究部長併任、栄養教育研究部長併任解除
H25.4.1	併任	石見佳子	研究企画評価主幹併任
H25.4.1	併任解除	田中茂穂	基礎栄養研究部主要栄養素研究室長併任解除
H25.4.1	併任	窪田直人	臨床栄養研究部栄養療法研究室長併任
H25.4.1	昇任	山崎智美	基礎栄養研究部主要栄養素研究室長に昇任
H25.4.1	昇任	藤村陽一	事務部長に昇任
H25.4.1	採用 (転入)	須藤浩克	事務部庶務課長
H25.4.1	採用 (転入)	森竹康治	事務部会計課契約管理係長
H25.4.1	採用 (転入)	内田信也	事務部業務課調整係長
H25.4.1	採用 (転入)	横川靖雄	事務部庶務課主任
H25.4.1	採用 (転入)	高橋智明	事務部会計課主事
H25.8.1	昇任	井上真理子	臨床栄養研究部栄養療法研究室長に昇任
H25.8.1	併任解除	窪田直人	臨床栄養研究部栄養療法研究室長併任解除
H25.8.1	併任	高田和子	栄養教育研究部食育研究室長併任
H25.8.1	併任解除	瀧本秀美	栄養教育研究部食育研究室長併任解除
H25.12.1	採用	池田奈由	国際産学連携センター生物統計研究室研究員
H26.1.1	採用	今井絵理	栄養疫学研究部国民健康・栄養調査研究室研究員
H26.1.1	併任	横山光幸	事務部会計課併任
H26.3.31	辞職	奥田奈賀子	栄養疫学研究部国民健康・栄養調査研究室長
H26.3.31	退職 (転出)	大津知彦	事務部庶務課庶務係長、事務部庶務課人事厚生係長併任
H26.3.31	退職 (転出)	横山光幸	事務部業務課NR担当係長、事務部業務課産学担当係長併任、事務部会計課併任
H26.3.31	退職 (転出)	森竹康治	事務部会計課契約管理係長

9. 特別研究員

氏 名	所 属 部	期 間
吉澤 剛士	栄養疫学研究部	H25. 4.1～26.3.31
今井 絵理	栄養疫学研究部	H25. 4.1～25.12.31
中江 悟司	基礎栄養研究部	H25. 4.1～26.3.31
安藤 貴史	栄養教育研究部	H25. 4.1～26.3.31
只石 幹	食品保健機能研究部	H25. 4.1～26.3.31

10. 名誉所員

氏名	授与年月日	在職当時の職名
印南 敏	H 10.4.1	食品科学部長
宮崎 基嘉	H 10.4.1	基礎栄養部長
宇津木良夫	H 10.4.1	病態栄養部長
山口 迪夫	H 10.4.1	食品科学部長
市川 富夫	H 10.4.1	応用食品部長
伊東 蘆一	H 10.4.1	老人健康・栄養部長
板倉 弘重	H 10.4.1	臨床栄養部長
池上 幸江	H 11.4.1	食品科学部長
小林 修平	H 11.7.1	所長
江指 隆年	H 12.4.1	応用食品部長
澤 宏紀	H 13.4.1	所長
戸谷 誠之	H 13.4.1	母子健康・栄養部長
樋口 満	H 15.4.1	健康増進研究部長
岡 純	H 16.4.1	応用栄養学研究部長
増田 和茂	H 16.8.1	理事
田中 平三	H 17.4.1	理事長

11. 客員研究員

氏 名	所 属 部	期 間	研 究 内 容
佐々木 敏	栄養疫学研究部	H25.4.1～26.3.31	栄養疫学研究
徳留 信寛	栄養疫学研究部	H25.4.1～26.3.31	国民健康・栄養調査の活用と食事摂取基準の策定の研究
矢島 鉄也	栄養疫学研究部	H26.2.1～26.3.31	メタボリックシンドロームの克服に向けた効果的な食事摂取のあり方に関する疫学研究
家光 素行	健康増進研究部	H25.4.1～26.3.31	生活習慣病一次予防に必要な身体活動量・体力基準値策定を目的とした大規模介入研究
真田 樹義	健康増進研究部	H25.4.1～26.3.31	生活習慣病一次予防に必要な身体活動量・体力基準値策定を目的とした大規模介入研究
田畑 泉	健康増進研究部	H25.4.1～26.3.31	身体活動・運動と健康増進について
大森 豊緑	健康増進研究部	H25.4.1～26.3.31	効果的な健康づくり手法の研究開発
山元 健太	健康増進研究部	H25.4.1～26.3.31	生活習慣病一次予防に必要な身体的活動量・体力基準値策定を目的とした大規模介入研究
吉武 裕	健康増進研究部	H25.4.1～26.3.31	高齢者の身体的自立に必要な体力および身体活動水準に関する研究
福 典之	健康増進研究部	H25.4.1～26.3.31	生活習慣病一次予防に必要な身体的活動量・体力基準値策定を目的とした大規模介入研究
森田 明美	健康増進研究部	H25.4.1～26.3.31	地域在住コホートをを用いた、生活習慣病に関する予防対策立案のための栄養疫学研究

塚本 浩二	健康増進研究部	H25.4.1～26.3.31	労働者を対象とした、身体活動量および体力と生命予後および生活習慣病罹患に関する運動疫学研究
岡本 隆史	健康増進研究部	H25.4.1～26.3.31	労働者を対象とした、身体活動量および体力と生活習慣病罹患に関する運動疫学研究
井上 茂	健康増進研究部	H25.4.1～26.3.31	身体活動と健康づくりに関する運動疫学研究
中田 由夫	健康増進研究部	H25.4.1～26.3.31	身体活動量および体力と生活習慣病罹患に関する運動疫学研究
熊江 隆	健康増進研究部	H25.4.1～26.3.31	独自に開発した血清及び唾液の総抗酸化能の測定法を用い、身体疲労の発生が十分に疑われる状況にある競技選手等を被験者とし、休養の新しい客観的指標としての総抗酸化能の有効性を検討する
岡 浩一郎	健康増進研究部	H25.4.1～26.3.31	身体活動と健康づくりに関する行動疫学研究
安藤 大輔	健康増進研究部	H25.4.1～26.3.31	身体活動および体力と生活習慣病罹患や生命予後に関する運動疫学研究
加藤 公則	健康増進研究部	H25.4.1～26.3.31	体力および身体活動と健康に関する疫学研究
山本 直史	健康増進研究部	H25.7.1～26.3.31	身体活動と健康づくりに関する運動疫学研究
田村 好史	健康増進研究部	H25.7.1～26.3.31	身体活動と健康づくりに関する運動疫学研究
門脇 孝	臨床栄養研究部	H25.4.1～26.3.31	各栄養素摂取量と遺伝子多型の相互作用の検討・基礎代謝に影響を与える遺伝素因の研究

門脇 弘子	臨床栄養研究部	H25.4.1～26.3.31	肥満、糖尿病予防と治療のために食後高血糖の改善を得る食事内容の確立
野田 光彦	臨床栄養研究部	H25.4.1～26.3.31	メタボリックシンドロームにおける栄養摂取と膵島の代謝・インスリン分泌の関連に関する研究
メリッサ・メルビー	栄養教育研究部	H25.4.1～26.3.31	
吉村 英一	栄養教育研究部	H25.4.1～26.3.31	2型糖尿病患者を対象とした、エネルギー代謝に関する研究
朴 鍾薫	栄養教育研究部	H25.4.1～26.3.31	肥満とエネルギー消費量について
江崎 治	基礎栄養研究部	H25.4.1～26.3.31	糖尿病患者の身体活動量に影響を与える因子に関する研究
田中 千晶	基礎栄養研究部	H25.4.1～26.3.31	子どもおよび成人における身体活動量
大島 秀武	基礎栄養研究部	H25.4.1～26.3.31	加速度計を用いた身体活動量の評価に関する研究
緑川 泰史	基礎栄養研究部	H25.4.1～26.3.31	エネルギー消費量の変動要因に関する基礎的研究
稲山 貴代	基礎栄養研究部	H25.4.1～26.3.31	車椅子利用者の身体活動量評価手法の開発に関する基礎的検討
西牟田 守	基礎栄養研究部	H25.4.1～26.3.31	ヒトを対象とした栄養学的研究
古泉 佳代	基礎栄養研究部	H25.4.1～26.3.31	小中学生の日常生活における身体活動量に関する研究
二見 順	基礎栄養研究部	H25.4.1～26.3.31	ヒューマンカロリメーターによるエネルギー消費量測定に関する研究
狩野 理延	基礎栄養研究部	H25.4.1～26.3.31	骨格筋の遺伝子発現調節に焦点をおいた生活習慣病の分子機構解明

大河原 一憲	基礎栄養研究部	H25.4.1～26.3.31	身体活動とエネルギーバランス
矢野 友啓	基礎栄養研究部	H25.4.1～26.3.31	女子長距離選手の体調管理のための栄養学的アプローチ
引原 有輝	基礎栄養研究部	H25.4.1～26.3.31	二重標識水法を用いた子どものエネルギー消費量測定
太田 昌子	基礎栄養研究部	H25.4.1～26.3.31	
Razalee bin Sedek	基礎栄養研究部	H25.8.31～25.11.8	Physical activity evaluated using triaxial accerelometry in japanese adults
太田 篤胤	食品保健機能研究部	H25.4.1～26.3.31	食品中の保健機能成分の探索と有用性評価
呉 堅	食品保健機能研究部	H25.4.1～26.3.31	食品機能性成分が骨代謝、脂質代謝に与える影響に関する研究
山田 和彦	食品保健機能研究部	H25.4.1～26.3.31	食品の栄養表示・健康表示に関する調査研究
亀井 康富	食品保健機能研究部	H25.4.1～26.3.31	骨格筋の遺伝子発現調節に焦点をおいた生活習慣病の分子機構解明
高橋真由美	食品保健機能研究部	H25.4.1～26.3.31	日本人糖尿病患者に於ける食事、運動量の評価のための予備的研究
山本 祐司	食品保健機能研究部	H25.4.1～26.3.31	生活習慣病におけるレチノール結合タンパク質の動態解析
王 新祥	食品保健機能研究部	H25.4.1～26.3.31	骨粗鬆症の予防・治療を目的とした天然素材の検索に関する研究
梅國 智子	情報センター	H25.4.1～26.3.31	Web上の栄養情報教育に関する研究
橋本 洋子	情報センター	H25.4.1～26.3.31	子どものサプリメントの利用に関する調査研究

三浦 進司	情報センター	H25.4.1～26.3.31	運動による生活習慣病予防効果に関する調査・研究
溝上 哲也	国際産学連携センター	H25.4.1～26.3.31	アジア諸国における栄養疫学の推進
中谷 友樹	国際産学連携センター	H25.4.1～26.3.31	アジア・太平洋諸国における栄養、身体活動の評価におけるサンプル代表性
水野 正一	国際産学連携センター	H25.4.1～26.3.31	生物統計的側面からの栄養疫学的研究

12. 協力研究員

氏 名	所 属 部	期 間	研 究 内 容
細川 裕子	栄養疫学研究部	H25.4.1～26.3.31	メタボリックシンドロームを対象とした実食型フードモデルの有効性の検討
菊池 有利子	栄養疫学研究部	H25.4.1～26.3.31	食事摂取基準に関する研究
片山 利恵	健康増進研究部	H25.4.1～26.3.31	生活習慣病一次予防に必要な身体活動量・体力基準値策定を目的とした大規模介入研究
河野 寛	健康増進研究部	H25.4.1～26.3.31	生活習慣病一次予防に必要な身体活動量・体力基準値策定を目的とした大規模介入研究
大森 由実	健康増進研究部	H25.4.1～26.3.31	生活習慣病一次予防に必要な身体活動量・体力基準値策定を目的とした大規模介入研究
安田 剛	健康増進研究部	H25.4.1～26.3.31	フィットネスクラブにおけるサービス・プログラム開発における指導・研究
島田 美恵子	健康増進研究部	H25.4.1～26.3.31	生活習慣病一次予防に必要な身体活動量・体力基準値策定を目的とした大規模介入研究
荒尾 裕子	健康増進研究部	H25.4.1～26.3.31	生活習慣病予防に対する保健指導（特に運動・身体活動増加）の効果に関する研究
高山 光尚	健康増進研究部	H25.4.1～26.3.31	生活習慣病一次予防に必要な身体活動量・体力基準値策定を目的とした大規模介入研究
高崎 尚樹	健康増進研究部	H25.4.1～26.3.31	生活習慣病改善のための保健指導（特に運動に主眼を置く）に関する、実施方法・事業推進手法に関する調査・研究
森本 友紀恵	健康増進研究部	H25.4.1～26.3.31	特定健診・保健指導に関する研究
田中 憲子	健康増進研究部	H25.4.1～26.3.31	身体組成および身体活動量が健康寿命の延伸に果たす役割
塙 智史	健康増進研究部	H25.4.1～26.3.31	農作業を活用した新たな健康づくり教育の効果検証～アグリエクスサイズの可能性～
丸藤 祐子	健康増進研究部	H25.4.1～26.3.31	生活習慣病一次予防に必要な身体活動量・体力基準値策定を目的とした大規模介入研究
小柳 えり	健康増進研究部	H25.4.1～26.3.31	基盤研究A「日本人の身体活動量に関する環境・遺伝要因とその相互作用に関する網羅的研究」（代表者：宮地元彦）に関する連携研究（免疫・疲労検討班：矢野・家光）の免疫・疲労マーカー探索

竹澤 純	健康増進研究部	H25.4.1～26.3.31	生活習慣病と遺伝性素因の相互作用に関する研究
岡田 真平	健康増進研究部	H25.4.1～26.3.31	身体活動と健康に関する疫学研究
菊賀 信雅	健康増進研究部	H26.2.1～26.3.31	身体活動と健康に関する疫学研究
難波 秀行	健康増進研究部	H25.6.1～26.3.31	身体活動の評価法の開発
松下 由実	臨床栄養研究部	H25.4.1～26.3.31	各栄養素摂取量と遺伝子多型の相互作用の検討・基礎代謝に影響を与える遺伝素因の研究
眞鍋 一郎	臨床栄養研究部	H25.4.1～26.3.31	エネルギー代謝の分子機構
窪田 哲也	臨床栄養研究部	H25.4.1～26.3.31	インスリン抵抗性を中心としたメタボリックシンドロームの研究
上野 優子	栄養教育研究部	H25.4.1～26.3.31	エネルギー消費量の評価について
別所 京子	栄養教育研究部	H25.4.1～26.3.31	エネルギー消費量に関する研究
白井 怜子	栄養教育研究部	H25.4.1～26.3.31	良好な妊娠転帰を目指した妊婦への食生活指導介入研究
長谷川 祐子	栄養教育研究部	H25.4.1～26.3.31	東日本大震災健康調査
鈴木 洋子	基礎栄養研究部	H25.4.1～26.3.31	視床下部性肥満動物の病態に関する研究
角田 伸代	基礎栄養研究部	H25.4.1～26.3.31	脊髄損傷者の体組成把握に関する研究
三宅 理江子	基礎栄養研究部	H25.4.1～26.3.31	成人におけるエネルギー必要量の推定法
笠原 知美	基礎栄養研究部	H25.4.1～26.3.31	骨格筋の遺伝子発現調節に焦点をおいた生活習慣病の分子機構解明
田村 江梨奈	基礎栄養研究部	H25.4.1～26.3.31	骨格筋の遺伝子発現調節に焦点をおいた生活習慣病の分子機構解明
畑澤 幸乃	基礎栄養研究部	H25.4.1～26.3.31	生活習慣病改善に寄与する食品の探索を目的とする代謝制御機構の解析
千葉 大成	食品保健機能研究部	H25.4.1～26.3.31	柑橘系フラボノイドに着目した骨粗鬆症予防に関する研究
永田 純一	食品保健機能研究部	H25.4.1～26.3.31	健康食品素材の有効性・安全に関する調査研究
小坂谷 典子	食品保健機能研究部	H25.4.1～26.3.31	閉経期女性における骨粗鬆症の予防に関する研究

谷中 かおる	食品保健機能研究部	H25.4.1～26.3.31	アスリート女性の骨粗鬆症予防のための栄養生理学的研究
千葉 一敏	情報センター	H25.4.1～26.3.31	消費者に健康食品・サプリメントの正しい情報提供を行うために必要なアドバイザースタッフのスキルアップの研究
武田 和歌子	国際産学連携センター	H25.4.1～26.3.31	成人病の肥満予防として「共食」の健康効果とその社会文化的ドメインの日韓比較
南里 明子	国際産学連携センター	H25.4.1～26.3.31	ビタミン D と慢性疾患に関する疫学研究
黒谷 佳代	国際産学連携センター	H25.4.1～26.3.31	糖尿病と食生活要因の関連の検討
杉山 雄大	国際産学連携センター	H26.1.1～26.3.31	疾患別人口推移等のシュミレーションに関する研究
Leng Huat Foo	国際産学連携センター	H26.3.1～26.3.31	Regional differences in factors related to non-communicable diseases: Comparison between Malaysia and Japan